

あ　は　ご　ん　ふ　る　じ　ま
阿波根古島遺跡

(—那覇・糸満線道路改良工事に伴う
緊急発掘調査報告—)

1990年 3月

沖縄県教育委員会

序

本報告書は、那覇・糸満線道路建設工事に伴う埋蔵文化財「阿波根古島遺跡」の緊急発掘調査の内容を収録したものであります。

近年の諸開発、とりわけ道路関係の工事は急速に増加してきており、これに伴い埋蔵文化財に関する協議、調整も多くなってきております。阿波根古島遺跡は、那覇・糸満間を結ぶ幹線として新しく計画された道路にあり、県土木建築部の分任により沖縄県教育委員会が発掘調査を実施したものです。

阿波根古島遺跡はグスク時代から近世までの複合遺跡であります。東南には小河川、西に東支那海を前面にひかえています。遺跡から出土した遺物として土器、輸入陶磁等があります。グスク時代から近世の時期までの社会と文化の様相をよく伝えております。また、東南側にある石灰岩丘陵上には高麗瓦が発見された阿波根グスクがありグスクと集落の関係を知る上で、この阿波根古島遺跡は関心がもたれています。

当委員会としても、このような文化遺産を可能な限り、歴史的環境のひとつとして現地に保存すべく検討したのであります。道路構造と地形の関係上その調整がきわめて困難であり協議・調整の結果やむを得ず記録保存の措置をとることとなった次第であります。

本報告書が多方面に活用され、学術研究および文化財愛護思想の高揚ならびに近隣における諸開発計画の協議調整等に資することを期待いたします。

平成2年3月

沖縄県教育委員会

教育長 高 良 清 敏

例　　言

- この調査報告書は、昭和63年度から平成元年度に実施した阿波根古島遺跡の緊急発掘調査の内容を記録したものである。
- 調査は、「那覇・糸満線道路建設工事」に伴うもので、沖縄県土木建築部南部土木事務所からの受託事業として沖縄県教育委員会が実施した。
- 発掘調査地点は、糸満市阿波根小字前原989番地ほか3筆地内である。阿波根古島遺跡は新発見の遺跡で、工事中に発見された遺跡である。近接遺跡として阿波根グスクがあり、グスクと密接な関係にあった集落であった。近世に於いては現集落の古島として存在していた集落であったことが判明したので、「阿波根古島遺跡」として命名した。
- 地形図は国土地理院発行の1/25,000や1/5,000、糸満市役所発行の1/2,500・1/1,000を使用し、必要に応じて、地形図に加筆したものである。
- 調査の実施および資料整理にあたっては、次の方々の御協力、御教示を賜った。銘記して謝意を表する次第である。

発掘調査協力、教示

池田 荣史 (琉球大学法文学部助教授)
島袋 良徳 (糸満市文化財保護審議委員会委員長)
金城 善 (糸満市史編纂係)
湖城 清 (糸満市教育委員会)
新垣 清和 (糸満市企画開発課)

陶・磁器の同定

手塚 直樹 (鎌倉考古学研究所々長)
大橋 康二 (九州陶磁文化館)

石質の同定

神谷 厚昭 (県立那覇高等学校教諭)

鳥・獣・魚骨の同定

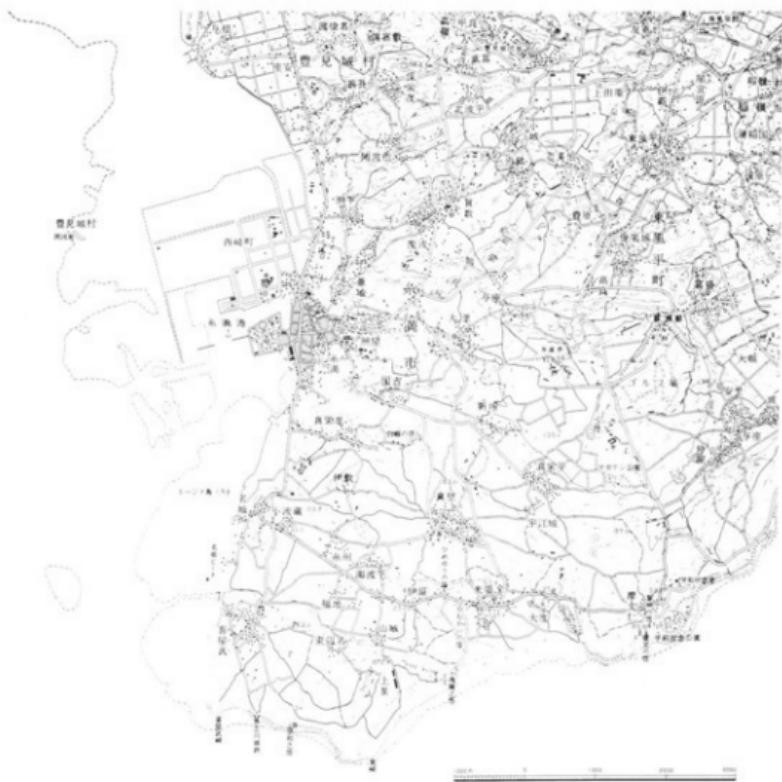
金子 浩昌 (早稲田大学文学部講師)

- 本書の執筆および編集は、金城亀信が中心となって照屋孝、長嶺均、島袋洋が行った。写真の撮影は金城が行なった。
- 題字は書家の与那嶺見世（春子）氏に御願いした銘記して謝を表する次第である。
- 発掘調査で得られた資料は、すべて沖縄県教育庁文化課資料室に保管されている。

目 次

序	
例 言	2
序 言	2
第Ⅰ章 調査に至る経緯	2
第1節 調査に至る経緯	2
第2節 調査体制	3
第Ⅱ章 位置と環境	6
第Ⅲ章 調査経過	9
第Ⅳ章 遺跡	9
第1節 層序	9
第2節 遺構	15
第V章 人工遺物	17
(1) 土 器 (後期土器・グスク土器)	17
(2) 青 磁	31
(3) 白 磁	54
(4) 褐 紗 陶 器	62
(5) 須 恵 器	67
(6) タイ 陶 器	70
(7) 緑 紗 水 注	71
(8) 三 彩 水 注	75
(9) 瑞 玻 紗	76
(10) 染 付	77
(11) 陶 質 土 器 (近世)	83
(12) 瓦 質 土 器	89
(13) 本土産陶磁器 (近世)	91
(14) 捣 鉢	95
(15) 土 製 品	100
(16) 石 器	101
(17) 骨 製 品	105
(18) 鉄 製 品	106
(19) 鉄 淚	108
(20) 羽 口	108
(21) 瓦	109

(22) キセル (煙管)	111
(23) カンザシ (簪)	116
(24) 小玉	118
(25) 瓦	118
(26) 錢貨	119
(27) 円盤状製品	121
第VI章 自然遺物	123
(1) 貝類 (軟体動物)	123
(2) 阿波根古島遺跡出土の脊椎動物	130
第VII章 調査の成果	155
付録 人工遺物集計表	156
図版	165



第1図 糸満市の位置図

序　　言

本報告書は、那覇・糸満線道路改良工事に伴う「阿波根古島遺跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。調査の結果、本遺跡は13世紀後半～18世紀頃まで続いた集落跡であることが確認された。グスク時代には近接する阿波根グスクの集落として活況を呈していたことが伺える。

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第1節　調査に至る経緯

糸満市は、沖縄本島の最南端に位置する街である。市の総面積は45.76km²である。総人口は50,099人、世帯数が14,180世帯（平成2年1月1日現在）である。字阿波根の北側は豊見城村の保栄茂・翁長に接する。豊見城村に隣接する為、近世の文献資料からは阿波根が豊見城間切に属していたことが、『絵図郷村帳』^(註1)（1649年頃）などから読み取れる。阿波根が兼城間切に合併された時期は、1713年（琉球国由来記）前後として考えられる。

糸満市では、1981年に市内の遺跡分布調査^(註2)を行っているが、当時、遺跡の一帯はさとうキビ畑で表面踏査も困難な状態であった。

沖縄本島南部の交通渋滞を緩和する為に1987年9月より主要地方道那覇糸満線道路建設工事が開始された。本遺跡は、この様な状況の中で1987年11月に道路工事で破壊されているところを市民が発見し、糸満市教育委員会に連絡があった。これを受けた調査を行った結果、遺跡の中心は破壊されていた。現場に残った残土から遺物回収を行ったところ中世・近世の土器や陶磁器等が回収された。また、工事法面部分の丘陵でもグスク土器等が集中して散布していることが確認出来た。これらの状況を踏まえて、県教育庁文化課と事業者である県土木建築部の間で調整が行われた。その結果、発掘に伴う経費は原因者である県土木建築部が負担し、発掘調査は県教育庁文化課が、記録保存のための調査を1989年2月13日から実施した。（島袋洋）

註

- 註1. 金城 善「糸満市域の村落変遷(9)」市史だより24 広報いとまん 1983年10月1日。
註2. 湖城 清ほか「糸満市の遺跡」糸満市教育委員会 1981年。

第2節 調査体制

この事業は、次の体制により実施された。

事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 高良 清敏

事業所管 沖縄県教育庁文化課 課長 宜保栄治郎

事業総括 同 上 課長補佐 平田 與進（昭和63年度）

同 上 同 上 同 上 上江洲 均（平成元年度）

同 上 同 上 埋蔵文化財係主幹兼係長 安里嗣淳

事業事務 同 上 文化振興係 係長 小橋川順市（昭和63年度）

係長 仲里 哲雄（平成元年度）

主事 波平 淳

発掘調査 調査員 金城 亀信（沖縄県教育庁文化課 専門員）

照屋 孝（ 同 上 専門員）

（現具志川市教育委員会 社会教育課専門員）

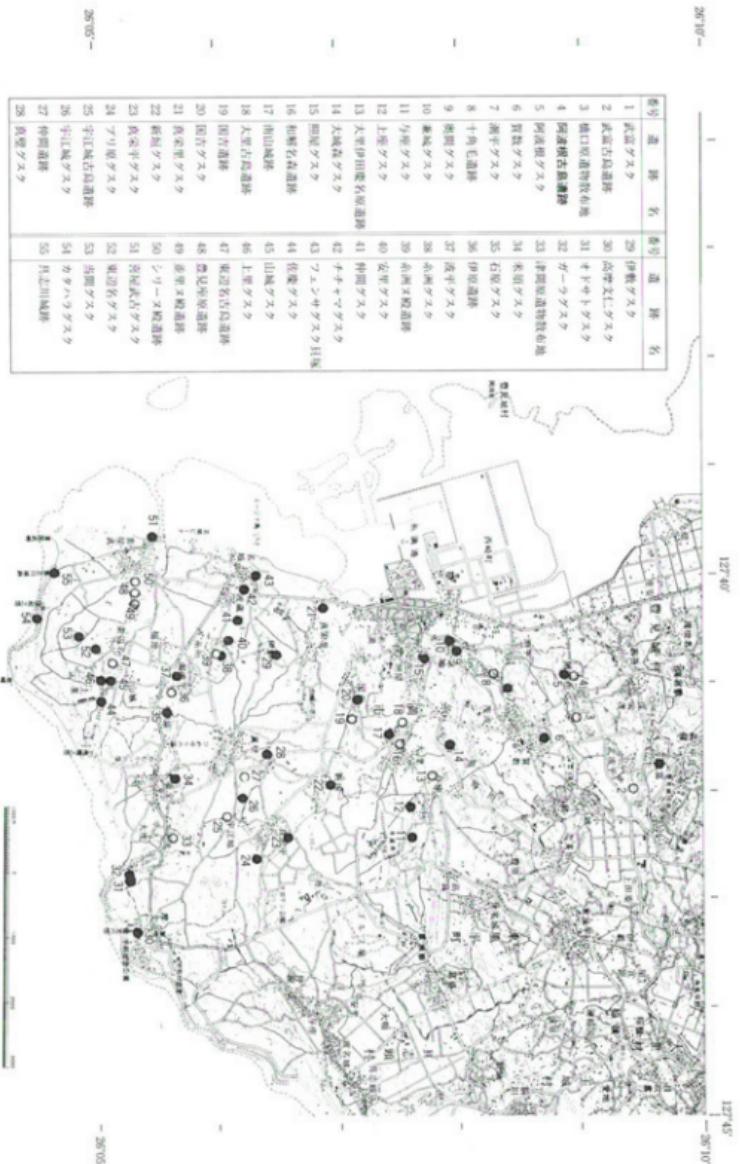
長嶺 均（沖縄県教育庁文化課 専門員）

上地千賀子（ 同 上 ）

島袋 洋（沖縄県教育庁文化課嘱託）

発掘調査 作業員 桑江常文、玉城孝、神谷サエ子、金城初子、當山トモ子、大城静子、川平由美子、赤嶺幸子、玉城カズ、金城安子、吉里真弘、金城正敏、大城正智、玉城利孝、山城ヨシ、与那覇岳、具志堅修、比嘉靖子、玉城尚男、屋良朝義、平安正人、上良武之、当銘ツエ、加島シゲ、加島健、与那嶺勢津子、中塚末子、比嘉まり子、当間ハツ、比嘉菊江、波平多美子、宮国恵子、大城香代子、大城ひとみ、上原康嗣、金城忠、大城すみ子、平田邦夫、比嘉栄仁、玉城賢、豊増典子、大城崇、中田邦子、新垣直美、大城敏康、外間宏明、松川忠、上原亘、玉城聰、野原祥克。

資料整理作業員
及び資料整理協力 新城礼子、請盛智秋、安次富智子、新垣澄子、玉寄智恵子、仲元智枝、中村美江子、浜元春江、上原園子、我那覇悠子、平田幸子、川上益子、宮城サダ子、安慶田和美、西銘バトロシニア、金城敬子、大村由美子、上原美智子、奥原弘子、崎原美智子、手嶋水子、与義恵子、玉城初子、比嘉まり子、城間勝美、金城啓子、池田悦子、大城勝江、照屋利子、長嶺初子、外間瞳、岸本ひろみ、鳩間利恵子、小嶺禮子、平良貴子、我部良枝、池原直美、城間千栄子、高良三千代、瑞慶覧尚美



第2図 糸満市のグスクとグスク相当期の集落(黒丸はグスク、白丸はグスク相当期の集落)

第3図 糸満市の地形図(大正8～10年)



第Ⅱ章 位置と環境

本遺跡は、沖縄本島最南端にある糸満市の字阿波根小字前原に位置する（第1～4図）。糸満市は、北緯 26° 東経 127° に位置しており1町31字からなる。字阿波根は、その北側の豊見城村と接する位置にある。

糸満市域は、古くは「島尻兼城」「喜屋武」「摩文仁」の3間切に分かれており、当時阿波根は今の豊見城村にあたる豊見城間切に含まれた。^(註1)その後、「兼城」「高嶺」「真壁」「喜屋武」「摩文仁」の5間切となり、阿波根は兼城間切に含まれている。^(註2)そして、1908（明治41）年の町村制施行により兼城間切は兼城村となり、第二次大戦後の1961（昭和36）年に糸満町に合併、1971（昭和46）年に糸満市となり現在^(註3)に至る。

本遺跡一帯の地質は、新第三紀～第四紀早期に形成された島尻層群と称される泥岩（シルト岩）を基盤に、第四紀更新世に形成された琉球石灰岩とその風化土である島尻マージが不整合に覆っており、本遺跡は基盤である泥岩の風化土（ジャーガル）の上に立地している。^(註4)

本遺跡の西側眼下には東シナ海が広がり、東南側に隣接する丘陵上（標高57m）には阿波根グスクがある。そのふもとに赤瓦屋根の拝所があり、更にその西南方には野面積みの石垣開いのある石組みの拝所がある。又、東にムラガー、南にヒーヤーガーと呼ばれる井泉がある。本遺跡と阿波根グスクをとり囲む様に東側から南側にかけて小河川が流れている。川を挟んで南側一帯の近接する地域には賀数グスク・座波遺跡・潮平グスク・潮平遺跡などが、北側の少し離れた地域には保栄茂グスク・保栄茂古島遺跡・武富グスク・武富古島遺跡などがある。いずれも本遺跡及び阿波根グスクと同時期のグスク時代あるいはグスク時代～近世の遺跡^(註5)である。

参考までに、『おもうさうし』の中から当時の阿波根に関する語を紹介^(註6)する。

「一 阿波根の大親 按司付きの大親 海 風らちへ 我が浦 寄せられ 又赤子旅
遣たる さるこ旅 遣たる 又 座良間旅 遣たる 物 座間味旅 遣たる 物 又 十尋家が
欲しやす 八尋家が 欲しやす」（『おもうさうし』第13「船あとのおもう御さうし）。

（島袋 洋）

註1 「絵図郷村帳」（1649年頃）。

註2 「琉球国由来記」（1713年）。

註3 「統計いとまん」昭和61年版糸満市役所。

註4 木崎甲子郎編「琉球弧の地質誌」沖縄タイムス社 1985年9月。

註5 •岸本義彦・湖城清・金城亀信「糸満市の遺跡」糸満市教育委員会 1981年3月。

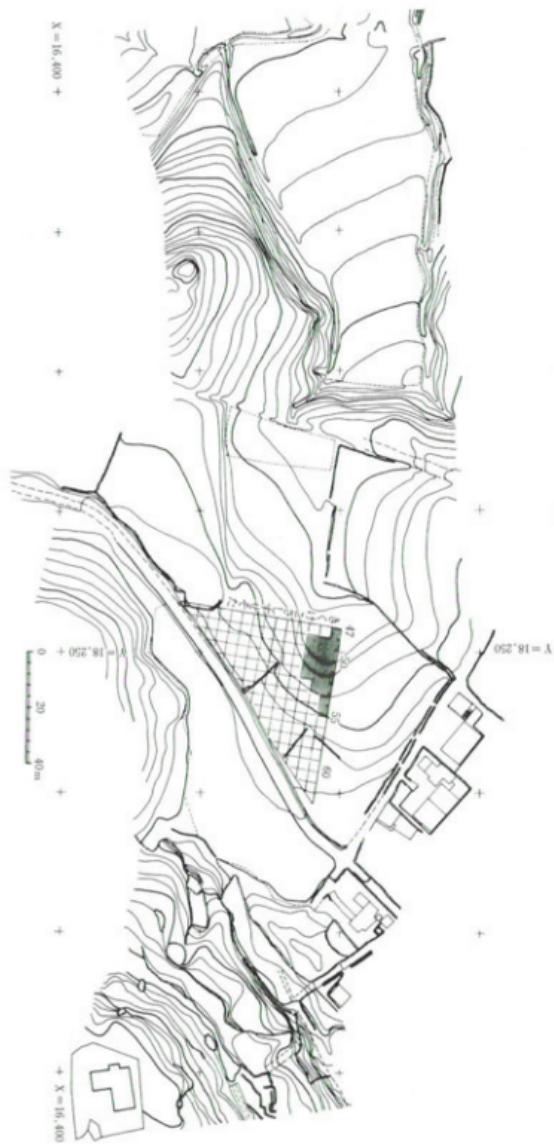
•湖城清「糸満市の文化財」糸満市教育委員会 1989年。

註6 外間守善・西郷信綱「日本思想大系」第18巻、「おもうさうし」岩波書店 1972年。



第4図 阿波根古島道路の位置図

第5図 阿波根古島遺跡の発掘調査地区(点描の範囲)とグリッド設定図



第Ⅲ章 調査経過

発掘調査は1989年2月13日から同年5月2日までの約2.5ヶ月間にわたって行なわれた。調査地区は東側にある阿波根グスクから西側にかけての傾斜地に位置しており、そこは砂糖キビ畑として使用された後に原野として放置されていた所と、今まで砂糖キビ畑として使用されている所とを含めた1,760m²が対象であった。

調査は以前に文化課の専門員が試掘した時に、第Ⅰ層（耕作土）の下に赤土（マージ）や石灰岩が露出したとの助言から、早めに基本的な堆積層を確認しなければならなかつたので試掘と草刈を同時進行で開始した。その結果、調査対象地区の北西隅に包含層が約432m²の範囲で堆積していることが判明した。

グリッド設定は、調査のため工事の中止している道路のセンター軸を基準に4m四方の方眼で調査区全体を覆い、西から東へ、1、2、3と算用数字で、北から南はひらがなを付した。各グリッド名は、これらの数字とひらがなを組み合わせて北東隅の交点で示した（第5図）。

調査の大部分は、第3層、第4層の発掘と検出された遺構の実測で費やした。また、擾乱部分の除去や土砂の移動のため調査途中に何回か、機械（バック・ホー）を使用したこともあった。そして、調査期間中は悪天候と傾斜地のために泥水などが現場に溜ったり、また隔日給水のために水が掛けずに写真撮影が行なえないなどの不便なこともあったが無事、5月2日に埋め戻しを行って調査を終了した。（照屋 孝）

第Ⅳ章 遺跡

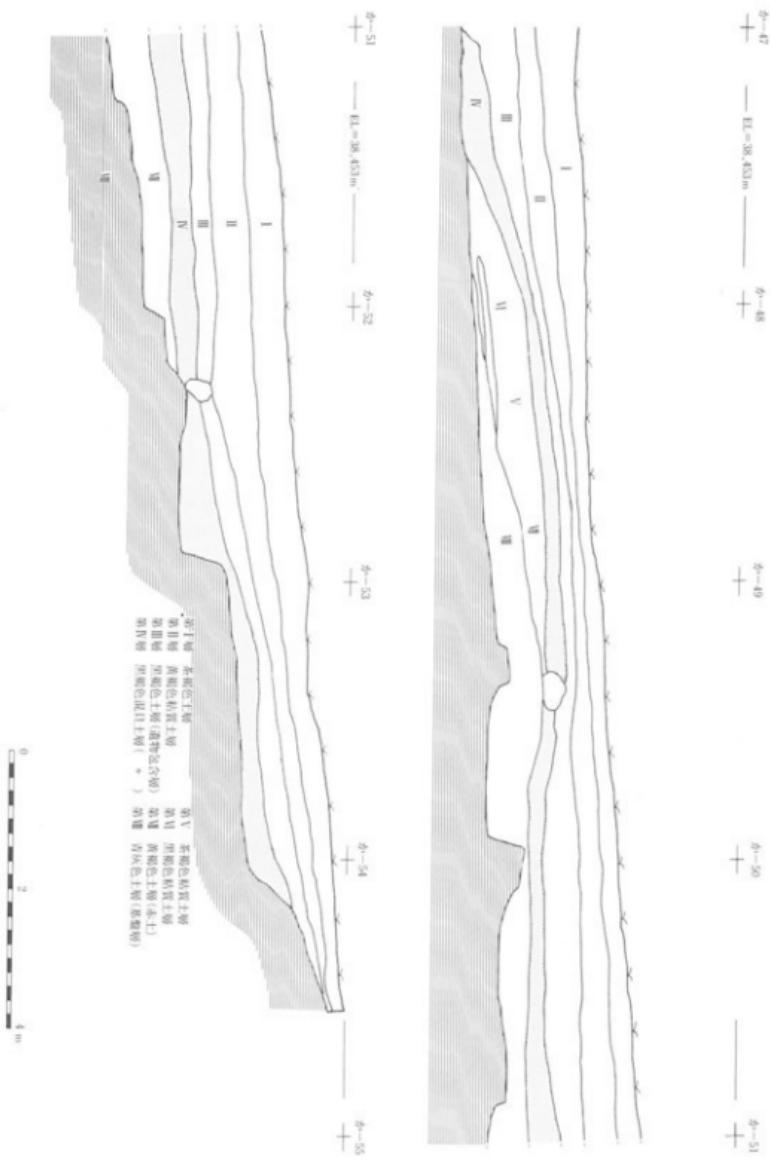
第1節 層序

本遺跡は、東から西へかけて傾斜している所に位置しているために層の堆積も東から西へと流れ込みの様子を示している。

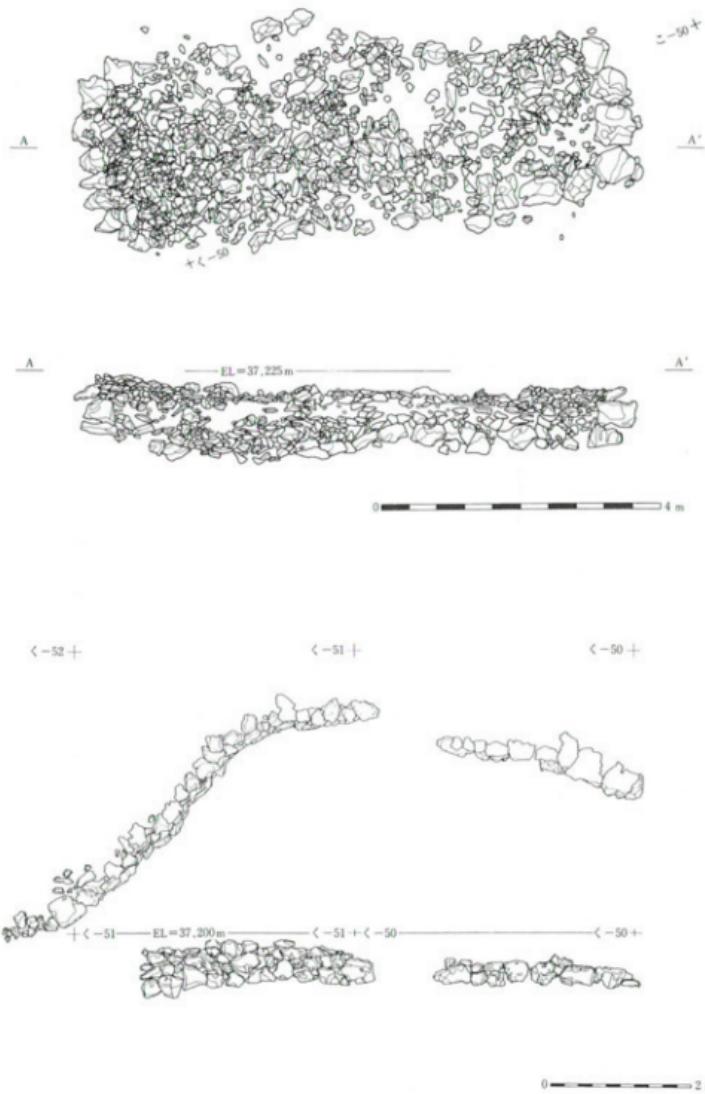
層序は、基盤の青灰色土層（鳥尻層群）を含めて8枚確認されており、ここでは基本的な堆積状況がはっきりする北壁（第6図）について説明する。

第Ⅰ層 茶褐色土層で耕作によって擾乱されている。鉄釘、洋服のボタン、プラスチック、沖縄産陶磁器、青磁などが出土している。層厚は10~50cmである。

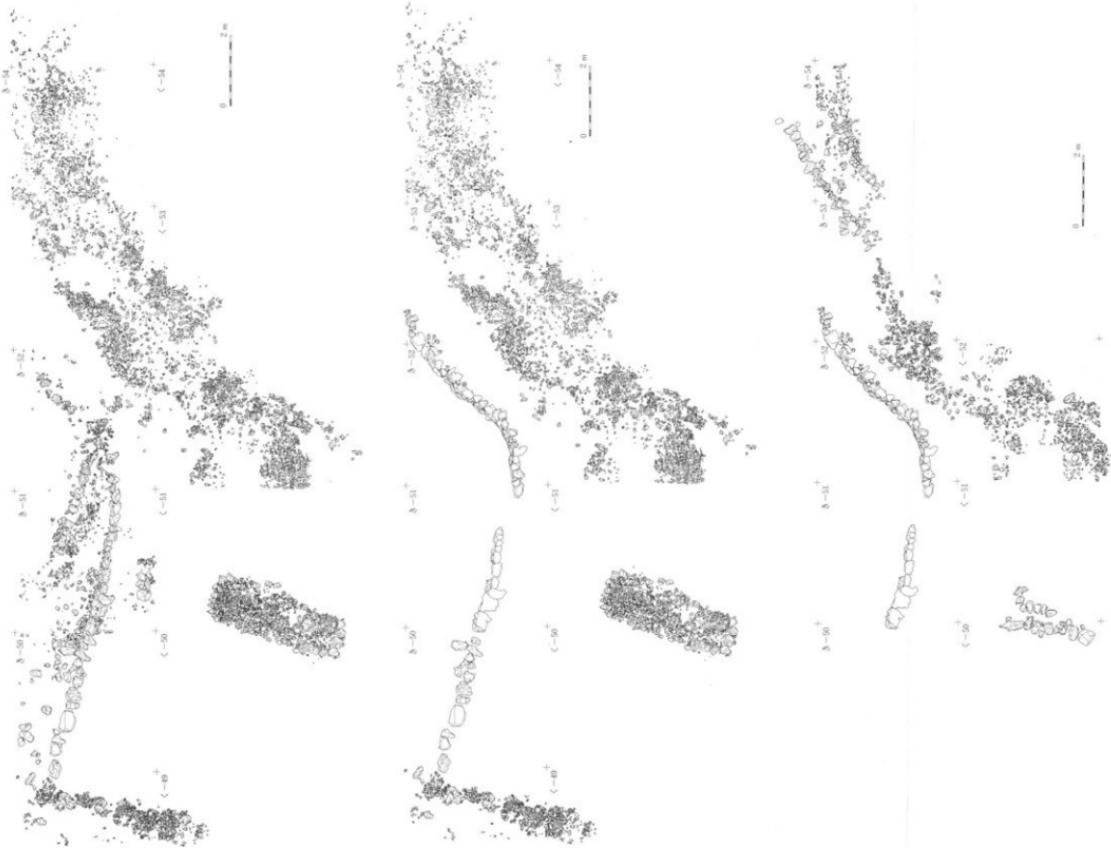
- 第Ⅱ層** 黄褐色粘質土層。アラスジケマンガイを中心とした貝が多く、他に獸骨、赤瓦、沖縄産陶磁器、青磁、などが出土している。出土遺物の中でアラスジケマンガイを中心とした貝類が多いことは、後述の第Ⅲ層、第Ⅳ層と共通の特徴である。層厚は10~60cmである。
- 第Ⅲ層** 黒褐色土層、遺物包含層である。アラスジケマンガイを中心とした貝類の出土が多く、獸骨、青磁、白磁、染付、沖縄産陶磁器、石器、赤瓦なども多数出土している。他に、本遺跡では数少ない石斧もこの層の出土である。また、上面には径2cm前後から拳大の石灰岩が集中した集石遺構が検出されている。層厚は10~50cmである。
- 第Ⅳ層** 黒褐色混貝土層である。混貝土層というように他の層よりもさらに、アラスジケマンガイを中心とした貝類が多く、出土遺物の7割程をしめる。他には、獸骨、青磁、白磁、南島須恵器、グスク土器などがある。この時期の早い頃に石列が造られた。石列内には明確な第Ⅳ層は確認できない。層厚は10~40cmである。
- 第Ⅴ層** 茶褐色粘質土層。上層に比べて粘質が強くなり、出土遺物の量も少ない。貝類、獸骨が少量、青磁、白磁、グスク土器が数点である。東から西側へ行くにしたがって層厚が厚くなっている。一部レンズ状に厚さ約10cmの貝層が見られる。層厚は10~50cmである。
- 第VI層** 黒褐色粘質土層。出土遺物は数点得られている。層厚10~70cmである。
- 第VII層** 黄褐色土層。赤土（マージ）である。
- 第VIII層** 青灰色土層（鳥尻層群）で、本調査区の基盤層である。（照屋 孝）



第6図 阿波根古鳥遺跡 層序か-47~54北壁側面図



第7図 上：方形状石敷 平面図及び断面図
下：石列 平面図及び断面図



第8図 石群と石列の検出状況 上段：第Ⅱ層下部
中段：第Ⅲ層上部
下段：第Ⅳ層上部

第2節 遺構

今回の調査において検出された遺構は、集石群、長方形状石敷、石列の3基認められた。以下それぞれについて説明する。

(イ) 集石群

調査区全体の第Ⅲ層上面に見られるもので、径2~3cmの小石状のものから拳大の石灰岩を使用している。集石の範囲などの規則性はなく、また敷かれたという感じでもないことや、後述する方形状石敷、石列の南東側に広く分布することから、斜面上からの流れ込みが考えられるが、はっきりしない。集石の中から出土する遺物は青磁、沖縄産陶磁器、石斧、獸骨などがある。第8図に示す。

(ロ) 方形状石敷

長さ8.2m、幅3mの大きさで、縁石に人頭大の石灰岩を使用しており、その中を径3~10cmの石灰礫で埋めてある。石灰礫の間には茶褐色土が入り込んでいるが、隙間が多いために短期間で形成されたものと思われる。また第7図に示す中央部断面の厚さは約1mを測り、下位にも大きめの石灰岩を使用している。性格については近くにある石列からも約3mと離れており、周りに他の遺構が見られないことから、これが単独で存在するものなのか、何か別のものと関連するものなのか今のところははっきりとしない。第7・8図に示す。

(ハ) 石列

き-50~51地区にかけて検出された遺構である(第7・8)。東西に長く弧状になっておりさらに南側へとふくらんでおり、調査外となつた北側の砂糖きび畑へと入り込んでいる。確認できる石列は人頭大から長さ50cmぐらいまでの大きめの石灰岩を使用していて、高い所で4段(約1m)、低いところでも2段(約50cm)積まれている。長さは約8mである。斜面地に形成されていて石列の上場がほぼ水平になっており、流れ込んで堆積したと考えられる集石群が石列内に見られることなどから土留め石積みということが考えられるが、詳細については不明である。造られた時期は第Ⅳ層の早い時期だと考えられる。

(照屋 孝)

第V章 人工遺物

(1) 土 器

土器は沖縄貝塚時代後期の土器とグスク系土器（移入土器を含む）の二時期のものが得られている。前者は底部のみ1点得られた。後者の資料が圧倒的に多く出土した。

(イ) 後期系土器

第9図1に図化したもので、底径5.5cmを測る。底部のくびれは弱く、目立たない。また、底部から胴部へは垂直に近い状態で、外面に徐々に開く。器面調整は両面・底面ともナデ仕上げである。器色は外面が淡橙色、内面は灰褐色を呈する。胎土は細かく、泥質である。黒色鉱物を少量混入させる。（-51、第3層出土）。

(ロ) グスク系土器

グスク系土器と称したものは、フェンサ上層式土器^(註1)の範疇にその大部分が含まれるものである。移入土器もこのグスク系土器と共にすることが佐敷グスク^(註2)・勝連城跡^(註3)などで確認されているので、この項で取り扱った。

グスク系土器は、復元できる資料が得られなかったので、我謝遺跡^(註4)・稻福遺跡^(註5)などから出土した土器を参考にして分類を試みることにした。その結果、鍋形土器・壺形土器・鉢形土器・瓶形土器・碗形土器の5器種が確認できた。また、小破片の為、器種が特定できない資料については、不明土器として取り扱って壺形か鉢形、壺形か鉢形などという方法で、可能性が高いものを前者に、低いものを後者に位置づけて分類した。それでも分類が出来ない資料は省略した。個々の觀察は一覧表にまとめた。表中の胎土・混入物については、混入物は多い順に書き入れた。（器面調整の方法によっては量的に変化する）。胎土については、泥質粘土でスベスベする手ざわりのものは、「泥質」とし、アバタ状に混入物が欠落するものは「アバタ状」と記した。胎土の粘着性が弱く、手ざわりがザラザラするものは、「砂質」と記述した。

以下、鍋形土器・壺形土器等の順に記述するが、必要に応じて細分した。

a 鍋形土器

鍋形土器は最も多く出土した器種で、31点が数えられた。鍋形土器は口縁形態等を基本として、I・II類に大別した後、細分した。

I) 鍋形I類

鍋形I類は口唇の成形・口縁形態等を考慮して、a～e類の5類に大別した。この鍋

形Ⅰ類はコブ状の突起を口縁に貼付けるものを含み、器形としては内側に内湾させる例が多いものである。以下、a～e類について記述する。

鍋形Ⅰa類；口唇の内端を削り出して突出させる。また、外端は丸味を持たせる。

口唇は幅広となる。口縁は内湾気味である。胎土に滑石の屑片を混入させる。(第9図2)

鍋形Ⅰb類；口縁の縦断面は「T」の字状となる為、口唇が幅広となる。口縁は内湾気味である。(第9図3)

鍋形Ⅰc類；平坦口縁である。口縁は内側に内湾する。口縁にコブ状の突起を貼付けるが、仕上げは雑であり、定形化したものはない。器面調整はナデ、箆削りが認められる。箆削り後にナデを施す例が多く、ナデも徹底していない。胎土は砂質のものが6点、泥質のものは5点得られている。(第9図4～12)

鍋形Ⅰd類；口唇は丸味を持たせて仕上げる。口縁は内側に内傾する。口縁に不定形なコブ状の突起を貼付ける為、仕上げは雑である。器面調整は、鍋形Ⅰc類と同様な手法で施される。胎土は砂質のものが3点、泥質は1点である。(第9図13～15)

鍋形Ⅰe類；口唇は尖状または尖状に尖らした後に先端を箆状工具で削り落すもので、内湾気味の口縁である。器面調整は前記、Ⅰc類と同様な手法で調整される。胎土は泥質のものが4点、砂質のものは2点得られる。(第9図16・17)

II) 鍋形Ⅱ類

鍋形Ⅱ類もⅠ類に準じた。この鍋形Ⅱ類の中には、我謝遺跡^(註6)で初めて得られた資料で、一見、八重山の14～18世紀に多く見られる外耳土器に近い器形もあるが、耳状の把手は得られていない。胎土に貝殻を混入させる点や器面調整の手法なども八重山出土の土器と類似する。このタイプに滑石の屑片を混入させる例が一点認められた。胎土はすべて泥質であった。以下、a～c類に細分した。

鍋形Ⅱa類；薄手の平坦口縁。口縁内面で、僅かに窪む。全体的に外側に開く、口唇内端は僅かに突出する。胎土に滑石の屑片を混入させる。器面調整は外面が箆削り、内面は刷毛目で調整する。(第9図18)

鍋形Ⅱb類；薄手の平坦口縁。口縁で僅かに外反し、外側に開く。胎土に貝殻片を混入させる。器面調整は外面に箆削りを施す点が特徴である。(第10図19)

鍋形Ⅱc類；厚手の口縁で口唇の幅も8mm前後と出土土器中最大である。口縁は直線的で、逆「ハ」の字状に外側に開く。口唇を平坦に成形するものと尖らすものがある。胎土に貝殻片を混入させる点や調整方法はⅡb類と

同じである。個数は3点確認されていて、底部片も2点ある。(第10図20・21)

iii) 壺形土器

壺形土器の口縁は外反口縁と短頭の壺の2点のみ得られた。前者をa類、後者はb類に分けた。頸部・底部の資料に朱塗りのものがある。朱塗りのものはこれまで報告例がなかった。胎土は砂質のものが6点、泥質のものが3点得られた。器面調整はナデを主体とする。範削りを施してもナデ消すが徹底していない。(第10図22~25)。

iv) 鉢形土器

壺形土器も口縁が2点のみ得られた。a・bの2種類に分類した。a類は口唇内端が尖り、口縁内面が窪む。胎土は砂質のものである。b類は口縁が「く」の字状に折れ、頸部に指圧を加える。胎土は泥質のものである。(第10図26・27)

v) 瓶形土器

小振りの瓶形土器の破片が1点得られた。口縁はゆるく外反する。輸入陶磁の瓶を模した例である。この様な例は我謝遺跡^(註7)でも確認されている。(第10図28)

vi) 碗形土器

碗形土器の小破片が1点のみ出土している。口縁は内側に内湾し、口唇が丸味を帯びる。稻福遺跡^(註8)で手捏土器として報告したものに類似する。(第10図29)

vii) 不明土器

不明土器は小破片の為、器形がはっきりしない資料であるが、あえて器種、器形別に分類した。予測や推定がまったく出来ない破片は分類から除外した。

鍋形土器Ⅱc類か鍋形Ⅰc類の資料は3点得られた。泥質2点、砂質1点であった。(第10図30)。壺形か鉢形のもの4点を確認できた。泥質2点、砂質2点である。(第10図31)。鉢形か壺形土器の資料は3点得られた。泥質2点、砂質1点であった。(第10図32)。甕形か壺形の資料は1点のみ得られた。砂質である。(第10図33)。

今回の資料では甕形として明確なものはないが、伊良波東遺跡^(註9)・真久原遺跡^(註10)などの例から確実にこの時期に登場する資料である。

viii) 移入系土器

移入系土器としたものは、外面に叩きを施すもので、素地や焼成などもグスク土器とは異なる。佐敷グスク^(註11)・我謝遺跡^(註12)などで出土例がある。また、同様な素地で蓋を造ることが今帰仁城跡^(註13)などで報告されている。今回の資料には外面に朱を塗

付している例が確認されている。(第10図34~37)。

ix) 底部資料

底部破片は総数で○点が出土した。底部の立ち上がりなどを基にI~V類までに分類し、必要に応じて細分を行なった。以下、I~V類まで述べる。

I類はa・bの2種類に細分した。

a類；底面からの立ち上がりは外側に大きく開いた状態で直線的に胴体へ移行するものである。点数は6点得られている。(第11図38~40)。

b類；底面からの立ち上がりは内側にとじた状態で、ほぼ直線的に胴部へ移行するものである。1点のみ得られた。(第11図41)。

II類もa・bの2種類に分けた。

a類；立ち上がりは、ほぼIa類と同様に開くが、丸味を帯びた状態で胴部へ移行する。5点得られている。(第11図42・43)。

b類；立ち上がりは、ほぼIb類と同じであるが、丸味を帯びた状態で胴部へ移行するものである。最も多い資料で13点が得られている。(第11図44~46)。

III類も2種類に細分した。

a類；底面からの立ち上がりで、一端くびれ、直線的に外側に開くものである。1点のみ得られた。(第11図47)。

b類；a類同様にくびれるが、内側に締まる状態で直線的に胴部へ移行する。2点得られた。(第11図48)。

IV類はIIIb類と同様にくびれるが、丸味を保存した状態で内側に締り、胴部へ移行するものである。3点が得られている。(第11図49)

V類はペタ底の高台を造るもので、碗か皿形の底部とみられるものである。1点のみ得られている。(第11図50)。

その他に底部の底面に植物の葉痕が認められる資料が2点得られているので、これを図化した。(第11図51・52)。

以上が土器の報告である。特に鍋形土器IIc類の資料は、器形的には我謝遺跡出土のものと差はないが、素地・混入物・調整方法は八重山のカンドウ原遺跡出土^(註14)の土器と共通するところがある。これが即、八重山の土器の影響や移入品として判断するには時間的な差や地域的な文化の進行状態などから現在のところ無理な面がある。これを素地の面から考えると貝殻は、どこでも拾え、胎土に混和させることができる点で可能である。八重山の土器で、ここで言う黒色鉱物やガラス質の鉱物などを混入させる例は今のところ確認されていない。この種の鍋形土器の祖型は、砂川元島遺跡^(註11)で出土した鉄鍋を模倣したものであろう。この鉄鍋の登場時期が、14世紀前後まで遡るばかりが今後の課題とするところである。その他に瓶形土器や碗形土器の資料が得られているが、今のところ輸入陶磁器の瓶や碗の模倣または影響を受けて登場した可能性は高い。

例えば稻福遺跡^(註15)で出土した白磁玉縁碗の模倣土器や高台を貼付ける土器などから類推しても理解できる所である。もしくは、土師器の碗や木器の碗の影響も考慮できるところであるが、県内では出土していないので、この影響については今のところ発見例はなく、判然としないところである。(金城亀信)

註

- 註1. 友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサ城貝塚調査概報」琉球大学文学部紀要 社会篇13号 1969年3月。
- 註2. 当真嗣一・岸本義彦・宮里末廣『佐敷グスク』佐敷町教育委員会 1980年。
- 註3. 高宮廣衛・新田重清・嵩元政秀・玉城盛勝『勝連城跡第2次発掘調査報告書』琉球政府文化財調査報告書 1966年。
- 註4. 大城慧『我謝遺跡』西原町教育委員会 西原町文化財調査報告書第4集 1982年。
- 註5. 当真嗣一・大城慧・比嘉春美ほか『福福遺跡発掘調査報告書(上御願地区)』沖縄県教育委員会 1983年。
- 註6. 大城慧・島袋洋・金城亀信ほか『我謝遺跡』西原町教育委員会 西原町文化財調査報告書第5集 1983年。
- 註7. 註6に同じ。
- 註8. 註5に同じ。
- 註9. 安里嗣淳・島 弘・大田宏好ほか『伊良波東遺跡』豊見城村教育委員会 1987年。
- 註10. 大城慧・金城亀信『牧港貝塚・真久原遺跡』沖縄県教育委員会 1985年。
- 註11. 註2に同じ。
- 註12. 註6に同じ。
- 註13. 金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会 1983年。
- 註14. 大城慧・比嘉春美・金城亀信『カンドウ原遺跡』沖縄県教育委員会 1982年。
- 註15. 註6に同じ。

第1表 土器観察一覧表

挿図番号 団版番号 遺物番号	口 径 器種 (cm)	形態上の特徴・ そ の 他	胎 土 ・ 混 入 物	器面調整	器 色	焼 成	出土地点 , 出土層位
第9図 PL.18 2	鍋形 I a類	— — — 口唇は幅広で丸味を 帯びる。口唇内端を 削り出し、突出させ る。内湾気味。	細かい。滑石の 屑片(1~2mm) を多量に混入。 泥質。	外面はナデ。 内面は施削り 後にナデ。	両面とも 茶褐色。	脆弱	く-64 第2層

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器底径 (cm)	形態上の特徴・ その他の こと	胎土・ 混入物	器面調整	器色	焼成	出土地点 ・ 出土層位
第9図 PL.18 3	鍋形 I b類	— — —	口縁の縱断面が「T」の字状に口唇を成形する。	細かい。黒色鉱物。ガラス質の鉱物を少量混入。泥質。	外面は箝削り後にナデを施すが消え切っていない。内面はナデ。	外面淡黄色。 内面淡茶色。	良好	き-50 第1層
タ タ 4	鍋形 I c類	— — —	平坦口縁。内湾気味。	精選。異色鉱物。ガラス質の鉱物を多量に混入。砂質。	外面は箝削りとナデ併用。内面はナデ。	両面とも淡橙色。	堅微	き-53 第3層
タ タ 5	タ タ	— — —	タ。タ。	タ。 砂質。	タ。 内面は刷毛目とナデ併用。	外面は淡橙色。 内面灰白色。	タ	き-51 第4層
タ タ 6	タ タ	— — —	口縁近くの破片。コブ状の突起を縱位に貼付ける。	細かい。石灰質の微砂粒・赤色物質を少量混入。泥質(アバタ状)。	両面ともナデ仕上げ。	両面とも淡茶色。	脆弱	く-51 第3層 (石敷)
タ タ 7	タ タ	— — —	平坦口縁。タ。	タ。ガラス質の鉱物・有色物質を少量混入。砂質。	タ。	両面とも淡橙色。	良好	表採
タ タ 8	タ タ	— — —	タ。コブ状の突起を半円状に貼付ける。	タ。石灰質の微砂粒。黒色鉱物等を少量混入。泥質。	外面は箝削り後にナデ。内面ナデ。	タ。	タ	き-49 第4層
タ タ 9	タ タ	— — —	平坦口縁。コブ状の突起を縦に貼付ける。内湾気味。	細かい。石灰質の細砂粒・ガラス質の鉱物を混入。泥質(アバタ状)。	外面は箝削り後にナデ。内面ナデ。	両面とも淡黄色。	良好	き-52 第4層
タ タ 10	タ タ	— — —	タ。コブ状の突起を縱方向に縦に貼付ける。内湾気味。	タ。タ。	外面縦位と横位の箝削りを施した後にナデを施す。内面ナデ。	タ。	タ	か-54 第3層

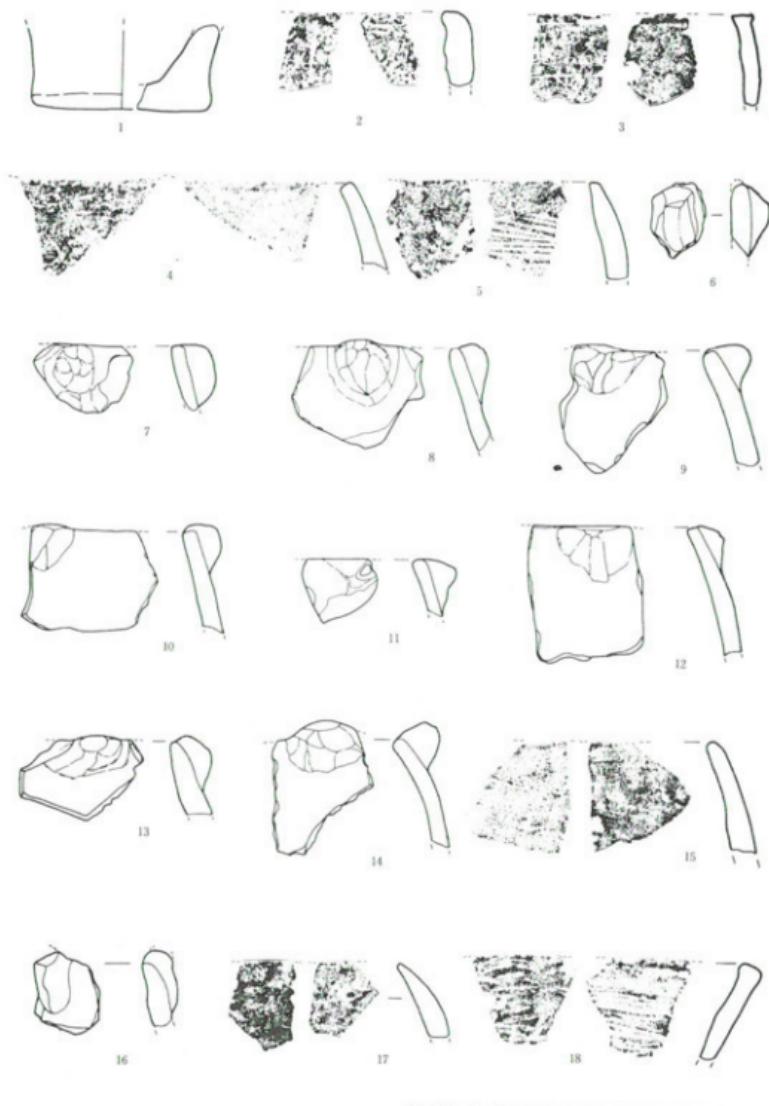
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	形態上の特徴・ その他の 特徴	胎土・ 混入物	器面調整	器色	焼成	出土地点 ・ 出土層位
第9図 PL.18 11	鍋形 I c類	— — —	平坦口縁。コブ状の突起を雜に貼付ける。	精選。黒色鉱物・ガラス質の鉱物が多量に混入。砂質。	外面ナデ仕上げ。	外面橙白色。内面淡橙色。	堅緻	け-50 第4層
タ タ 12	タ タ	— — —	タ。コブ状の突起を貼付ける。	細かい。有色物質・ガラス質の鉱物を微量に混入。泥質。	外面範削り後 にナデを施す。	外面淡橙色。内面橙白色。	良好	か-53 第3層
タ タ 13	鍋形 I d類	— — —	口唇は丸味を持たせて成形。コブ状の突起を貼付け、半円形状に成形する。	精選。黒色鉱物・ガラス質の鉱物を多量に混入。砂質。	両面ナデ仕上げ。	両面とも 橙白色。	堅緻	く-50 第4層
タ タ 14	タ タ	— — —	タ。コブ状の突起を横位方向に貼付ける。	粗い。石灰質の細砂粒・有色物質を多量に混入。泥質(アバタ状)。	外面範削り後 にナデを施す。	両面とも 茶褐色。	良好	き-52 石列遺構北側。
タ タ 15	タ タ	— — —	タ。内湾汽味?。	精選。黒色鉱物・ガラス質の鉱物を多量に混入。	タ。 タ。	両面とも 橙白色。	堅緻	け-50 第2層
タ タ 16	鍋形 I e類	— — —	口唇を尖らす。コブ状の突起を口唇・口縁に貼付ける。	精選。黒色鉱物・ガラス質の鉱物を多量混入。砂質。	両面ナデ仕上げ。	外面橙白色。内面淡橙色。	堅緻	表採
タ タ 17	タ タ	— — —	口唇を尖らした後に範状工具で尖端を削り、平坦に成形。	細かい。有色物質を少量混入。泥質(アバタ状)。	タ。	外面淡茶色。内面淡橙色。	良好	タ
タ タ 18	鍋形 II a類	— — —	平坦口縁。口縁内面に浅い窪みを造る。外反する。口唇の幅は7mm前後で広い。	タ。滑石の屑片を多量に混入。泥質。	外面縦位・横位の範削り。	外面茶色。内面淡茶色。	タ	く-56 第1層
第10図 PL.19 19	タ II b類	— — —	薄手の外反口縁。口唇は平坦。口縁は微弱に折れる。	タ。石灰質の細砂粒を混入。泥質(アバタ状)。	外面横位の範削り。 併用。	外面茶褐色。内面淡茶色。	タ	く-55 第2層

掲図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	形態上の特徴・ その他の 他	胎土・ 混入物	器面調整	器色	焼成	出土地点 ・ 出土層位
第10図 PL.19 20	鍋形 IIc類	— — —	厚手の外反口縁。口 唇は平坦。直線的に 外側へ開く。器厚は 9 mm前後。	細かい。貝殻片 を多量に混入。削り。 泥質(アバタ状)併用。 内面ナデ。	外面横位の箝 削り。	外面茶褐色。 内面淡茶色。	良好	か-54 第3層
タ タ 21	タ	— — —	厚手の尖り気味の口 縁。	タ。 タ。	タ。 タ。	タ。 タ。	タ	く-50 第3層
タ タ 22	壺形 a類	— — —	厚手の外反口縁で、 器壁の厚さから大型 の壺が考えられる。	精選。黒色鉱物・ ガラス質の鉱物・ 赤色物質を多量 に混入。砂質。	両面とも磨滅 するがナデ仕 上げると考えら れる。	外面淡灰 色。	堅緻	く-54 第2層
タ タ 23	タ b類	— — —	短頸の壺で、口唇か ら頸部までの長さは 4 mm前後と短かい。 口頸部で「く」の字 状に折れる。口唇は 平坦。	細かい。石灰質 の微砂粒・有色 物質を多量に混 入する。泥質。	外面は器厚の 大半が欠落す る為、不明。 内面ナデ。	外面灰色。 内面淡黄色。	良好	表採
タ タ 24	壺形	— — —	壺の頸部破片。頸部 の状態から外反する 壺とみられる。	細かい。黒色鉱 物・ガラス質の 鉱物を少量混入。 砂質。	外面箝削り後 にナデ。	両面淡橙 色。	堅緻	く-51 第4層
タ タ 25	タ	—	タ。 外面は朱塗り。	精選。石灰質の 微砂粒を少量混 入。砂質。	タ。 内面刷毛目。 ナデ。	両面淡黃 色。	タ	表採
タ タ 26	鉢形 a	— — —	口縁の小破片。口唇 内端が尖り、口縁内 面が僅かに窪む。	精選。黒色鉱物・ ガラス質の鉱物・ を多量に含む。 砂質。	内面ナデ仕上 げ。	外面灰褐色。	堅緻	く-50 第3層
タ タ 27	鉢形 b		口縁が「く」の字状 に折れる。頭部に指 圧痕。	細かい。石灰質 の微砂粒。ガラ ス質の鉱物を少 量混入。泥質。	外面指圧とナ デ。	両面淡黃 色。	良好	く-59 第4層
タ タ 28	瓶形		外反口縁。	精選。貝殻片を 少量混入。砂質。	両面ナデ。	両面橙白色。	堅緻	き-48 第3層

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器底 (cm)	形態上の特徴・ その他の こと	胎土・ 混入物	器面調整	器色	焼成	出土地点 ・ 出土層位
第10図 PL.19 29	碗形		内湾口縁。口唇は若干、丸味を帯びる。	精選。黑色鉱物・ガラス質の鉱物を多量に混入。砂質。	外面範削り後 にナデ。	外面淡茶色。 内面淡黄色。	堅緻	く-53 第3層
タ タ 30	鍋形 IIc類 鍋形 Ic類	—	口唇は尖り気味。	細かい。ガラス質の鉱物・有色物質を微量混入。泥質。	タ。 内面範削り後 にナデ。	外面茶褐色。 内面淡茶色。	良好	く-50 第3層
タ タ 31	壺形 か 鉢形	—	外反口縁。	精選。黒色鉱物・ガラス質の鉱物を多量に混入。砂質。	タ。 内面ナデ。	両面黄白色。	堅緻	け-50 第2層
タ タ 32	鉢形 か 壺形	—	平坦口縁。口縁の仕上げは丁寧。	細かい。石灰質の微砂粒・ガラス質の鉱物を微量混入する。泥質。	両面ナデ。	外面淡茶色。 内面淡黄色。	良好	き-54 第3層
タ タ 33	壺形 か 壺形		口頭部でゆるくくびれ、微弱に外反する。	精選。黒色鉱物・ガラス質の鉱物を少量混入する。砂質。	タ。	両面黄白色。	堅緻	け-31 第2層
タ タ 34	移入 系土 器		胴部破片。外面に平行叩き。内面に当て具の痕が円形状に残る。	精選。有色鉱物・ガラス質の鉱物を多量に混入。砂質。	外面叩き。 内面當て具痕。	外面淡橙色。 内面黄白色。	堅緻	く-50 第3層
タ タ 35	タ		タ。	タ。	タ。	タ。	タ	け-50 第3層
タ タ 36	タ		タ。 朱塗りの痕跡あり。	タ。	タ。	タ。	タ	き-48 第3層
タ タ 37	タ		胴上部。外面に右斜に鋸歯状・二又沈線の叩き。内面に円形状の当て具痕。	タ。	タ。	タ。	タ	く-51 第4層

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 高径 底径 (cm)	形態上の特徴・ その他の	胎土・ 混入物	器面調整	器色	焼成	出土地点 ・ 出土層位
第11図 PL.20 38	底部 I a	— — —	底面からの立ち上がりは外側に大きく開いた状態で、ほぼ直線的に胴部へ移行。	精選。ガラス質の鉱物・黒色鉱物を少量混入。底面ナデ。砂質。	外面箝削り。内面ナデ。	外面・底面淡橙色。内面暗黄色。	良好	か-55 第2層
タ タ 39	タ I a	— — —	タ。 。	タ。 。	タ。 。	タ。 。	タ	く-51 第4層
タ タ 40	タ I a		タ。 薄手の底部(碗の底部?)。	タ。 。	内外面・底面ナデ仕上げ。	内外面・底面とも黄白色。	堅緻	表採
タ タ 41	タ I b		底面からの立ち上がりは内側にとじた状態で、ほぼ直線的に胴部へ移行する。	タ。ガラス質の鉱物・黒色鉱物・有色物質を多量に混入する。砂質。	外面箝削りとナデ併用。内面ナデ。底面ナデ。	外面・底面は橙色。内面黄白色。	タ	き-54 石敷直上
タ タ 42	タ II a	— — —	鍋形土器Ⅱc類の底部。 底面からの立ち上がりは丸味を帯びながら外側へ開く。	細かい貝殻片を多量に混入する。泥質(アバタ状)。	外面ナデ。内面刷毛目状。	外面暗褐色。内面淡褐色。	良好	か-54 第3層
タ タ 43	タ II a	— — —	底面からの立ち上がりは丸味を帯びながら外側へ開く。	精選。ガラス質の鉱物・黒色鉱物を微量混入。砂質。	内外面・底面とも丁寧なナデ。	外面淡橙色。内面暗褐色。底面橙色。	堅緻	く-52 第4層
タ タ 44	タ II b	— — —	壺形土器の底部。 底面からの立ち上がりは丸味を帯びながら内側へ繋りながら胴部へ移行する。朱塗り。	タ。黒色鉱物・有色物質を微量混入。砂質(アバタ状)。	外面・底面は外面箝削り後にナデ。	内外面・底面とも黄白色。	タ	か-54 第3層
タ タ 45	タ II b	— — —	鍋形土器Ⅱc類の底部。 タ。	細かい貝殻片を多量に混入する。泥質。	両面ともナデ。底面箝削り。	外面・底面とも煤で黒色となる。内面淡茶色。	良好	き-52 第4層

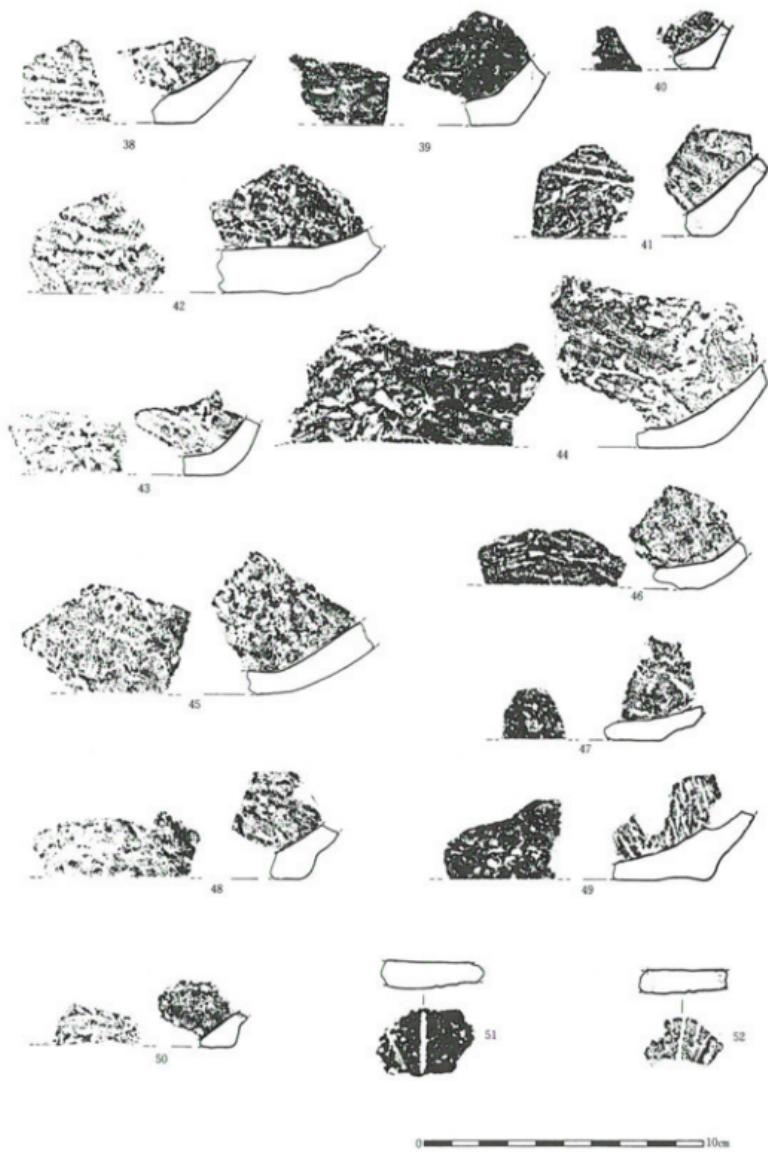
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器底 (cm)	形態上の特徴・ そ の 他	胎土・ 混入物	器面調整	器色	焼成	出土地点 ・ 出土層位
第11図 PL.20 46	底部 II b	—	壺形土器の底部。 底面からの立ち上がり りは丸味を帯びながら 内側へ繰りながら 胴部へ移行する。朱 塗り。 朱塗りの痕跡あり。	精選。ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物を微量に混入。 砂質。	外面範削りを ナデ消す。 内面ナデ。 底面欠落。	外面・底 面とも淡 橙色。 内面黄白色。	堅緻	き-53 第3層
タ タ 47	タ III a	—	底面からの立ち上がり りで一端くびれ、直 線的に外側へ開く。	細かい。石灰質 の微砂粒・ガラ ス質の鉱物を微 量混入。泥質(ア バタ状)。	両面・底面と もナデ。	外面・底 面とも淡 茶色。 内面淡黃 色。	良好	く-51 第4層
タ タ 48	タ III b	—	底面からの立ち上がり りで一端くびれ、内 側に繰りながら直線 的に胴部へ移行する。 仕上げは雑である。	精選。ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物・有色物質をナ デ消す。 少量混入。泥質。	外面・底面は 指圧痕?をナ デ消す。 内面ナデ。	外面・底 面とも橙 褐色。 内面暗褐色。	堅緻	け-50 第2層
タ タ 49	タ IV	—	底面からの立ち上がり りで一端くびれ、内 側に繰りながら丸味 を保持しながら胴部 へ移行する。 仕上げは雑である。	細かい。有色物 質・ガラス質の器面が剥れ落 ち判然とした 細砂粒などを少 量混入。泥質。	外面・底面の ち判然とした 内面・底 面淡黃色。	外面暗灰 色。	良好	き-54 第4層
タ タ 50	タ V	—	ベタ底で高台を造る。 碗形か皿形の底部。 成形は丁寧。	タ。有色物 質・石灰質の微 砂粒を微量混入。 泥質。	高台外面は範 内面ナデ。	外面・底 面とも淡 橙色。 内面淡黃 色。	タ	く-54 第2層
タ タ 51	底面 破片		底面に葉痕が認めら れる。	タ。	底面に葉痕。 内面にナデ。	底面茶褐 色。 内面淡茶 色。	タ	き-52 第2層
タ タ 52	タ		タ。	精選。ガラス質 の鉱物・黒色鉱 物・有色鉱物を 少量混入。砂質。	タ。	底面淡茶 色。 内面淡黃 色。	堅緻	く-53 第4層



第9図 土器（後期系土器1, グスク系土器, 鍋形I a類2, 鍋形I b類3,
鍋形I c類4~12, 鍋形I d類13~15, 鍋形I e類16・17, 鍋形II a類18）



第10図 土器（鍋形II b類19、鍋形II c類20・21、壺形a類22、壺形b類23、
壺形頭部破片24・25、鉢形a類26、鉢形b類27、瓶形28、碗形29、
鍋形II c類か鍋形I c類30、壺形か鉢形31、鉢形か壺形32、甕形か壺形33、
移入系土器34～37）



第11図 土器底部 (I a類38~40, I b類41, II a類42・43, II b類44~46, III a類47, III b類48, IV類49, V類50, 葉痕資料51・52)

(2) 青 磁

碗（口縁部）

碗は器形や文様等によって、次の10種に分類し、可能なものはさらに細分した。

I類（第12図1）

櫛描蓮弁文碗である。外体面に片切彫の蓮弁、内体面に櫛描文を描く。1片出土。

II類（同図2～5）

青磁劃花文碗である。内体面に蓮花などの刻花文を有するものである。

III類（同図6～10）

いわゆる鎬蓮弁文碗である。器形は直口状のもので、口唇が尖るものと丸っぽいものがある。鎬は全体的に雑に仕上げる。3片が得られた。

IV類（第13図11～15）

無鎬蓮弁の碗である。蓮弁は箠によって片切り彫りや丸彫りで描く。口縁は肥厚しない。器形は直口あるいは内湾気味のものである。文様などの特徴から次の二種に細分した。

IV a 蓮弁文を箠彫りで描き、弁先が尖る。12片が出土。

IV b 蓼弁文を片切り彫りや丸彫りで描き、弁先は尖らず丸味を持つ。12片出土。

V類（第13図16～20、第21～27）

無鎬蓮弁文のグループに属するもので、線刻細蓮弁文碗である。器形は直口または内湾気味のものである。文様などの特徴から次の三種に細分した。

V a 蓼弁の弁先はIV類に比して雑に描かれる。弁先は丸味を持つ。また蓮弁と弁先が一致しないものである。2片が出土。

V b 蓼弁の弁先を有しないものや口縁端部に一条の沈線を巡らし、弁先に代えているものを入れた。10片が出土。

V c V a、V bより蓮弁の幅が狭まり、蓮弁も雑に描かれる。弁先は平坦なものや丸味を持ったものがある。29片と多く得られた。

VI類（第14図28）

ラマ式蓮弁に類似する文様を施す碗で、外反の度合は他のグループに比してきつい。文様は片切り彫りで描く。1片が得られた。

VII類（同図29～35）

いわゆる雷文帶碗である。器形は胴上部までは丸味を持って立ち上がり、口縁部で直口となるものが多い。文様は片切り彫りで箠描きする。次の2種に細分した。

VII a 口縁部が直口状を呈するもの。35片が得られた。

VII b 口縁部が内湾状を呈するもの。7片が出土。

VIII類（第15図36～40）

最も多く出土したものである。この中には玉縁状に肥厚するものや内湾・外反・直口

タイプなどが得られた。これらは口縁の形状から次の四種に細分した。

- a 玉縁状を呈するもの。23片が出土。
- b 直口状を呈するもの。116片と最も多く出土した。
- c 内湾気味のもの。18片が出土した。
- d 外反するもの。95片が出土。

青磁碗（底部）（第15図41～51、第16図52～56）

底部は施釉・外底面の造り等の状況から、次の4タイプに分類された。

- A タイプ 高台内部の削りが浅いので、底部の器厚が厚くなる。高台の幅は広い。疊付の外端は小さく面取りをする。
- B タイプ 高台内部の削りが浅く高台幅も狭い。釉は高台内面まで雑にかける。
- C タイプ 施釉範囲は高台脇までが多いが、疊付まで施釉する例もある。疊付から内は露胎にする。A・B タイプに比して削り出しが深い。疊付の外端を小さく削り、面取りをする。
- D タイプ 高台外面中位までを施釉し、これより内を露胎にする。疊付外端を削り面取りをする。

青磁角杯（第16図57）

杯の出土は少なく口縁部1点のみである。破片が小さく全体形は判然としないが、口縁部の折れ曲がり具合からすると、概ね八角形の杯かとも思われる。釉色は青緑色。素地は淡灰白色で微細な黒色粒子を少量含む。14～15世紀に属する。き-49第3層の出土。

青磁皿

皿の器形の特徴で I～V類に分類した。

I 類（同図58・59）

いわゆる珠先青磁と呼ばれる中国同安窯系の青磁で、櫛状工具による施文を特徴とする櫛描文皿である。

II 類（同図60）

平底の口縁部資料である。

III 類（同図61）

口縁部が外側に折れて鉢縁状を造る口折皿である。外面に蓮弁文を描くもので1点が得られた。

IV 類（同図62）

内底面に双魚文を有するもので1点が出土した。

V 類

口縁部が外反する無文皿で1点が得られた。

VII類（第16図63・64）

いわゆる稜花皿と称されているものである。腰部で折れ曲がる皿で外反のきついタイプである。口唇部に刻み目を入れてラマ式蓮弁の弁先を表現する。

VIII類（同図65）

いわゆる碁筒皿と称されるものである。外底を深く削り出して疊付を表現する。

VIII類（第16図66～第17図70）

無文皿は口縁部の形状から次の3タイプに分類した。

VIIIa 直口タイプ（同図67）。

VIIIb 内湾タイプ（同図66・68）。

VIIIc 外反タイプ（同図69・第17図70）。

青磁皿（底部）（第17図71～77）

皿の底部破片資料である。器形や文様等から次のⅢ類に分類した。

I類 蓮弁文を描くもの（同図71～74）。

II類 腹部で屈曲し立ち上がるるもの（同図75・76）。

III類 無文皿（同図77）。

青磁盤（同図78～83）

盤は5点が得られた。その内訳は口縁部5点、底部1点である。口縁部4点は、いわゆる銚絵盤である。口縁部は次のI～Ⅲ類に分類された。

I類 銚が平坦で、銚縁が稜花のもの（同図78）。

II類 銚縁をつまみ上げるもの（同図79～81）。

III類 アサガオ状に大きく外反するもの（同図82）。

青磁瓶（同図84～86）

瓶は胴部資料が2点、底部資料が1点の計3点が得られた。外面に篦描きの蓮弁文や刻花文を描く。

青磁壺（同図87～88）

胴部破片が1点、蓋が1点の計2点が得られている。胴部破片には外面に篦描きの刻花文を描く。

青磁片の総数は1,643片であった。青磁碗は胴部・底部片を含めて、1,482片が得られた。その内、口縁では壺類（無文口縁碗）が252片と多く出土している。皿は胴部・底部を含めて、106片が得られていて、この中で、Ⅲ類（口折皿）とⅥ類（稜花皿）が多い。青磁口縁の壺類や皿のⅢ類（口折皿）・Ⅳ類（稜花皿）などからは、14世紀～16世紀の青磁が多く目立った。（長嶺 均）

第2表 青磁碗観察一覧表

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口径 器高台径 (cm)	素地	施釉	釉色	貫入文	様	器形・成形等の 特徴 出土地点・層位
第12図 PL.21 1	梯描蓮弁文碗	I	— — —	黄白色粗粒 子。	薄い透明釉。	淡茶 緑色	内外面に細かい貫入がある。	内外面に梯描文を描く。 見込みに雜な二条の圈線を巡らす。	胸部破片。 く-53 第3層
タ タ 3	劃	II	— — —	灰白色微粒 子。	薄い失透釉。	灰 緑色	なし。	口縁外面で釉だれが波状を呈して巡っている。口縁下部には一条の沈線を有す。内面の範彫りは蓮花文が鮮明である。	口縁の外反は微弱である。 く-51 第4層
			— — —	灰白色微粒 子。	薄い透明釉。	淡茶 緑色	なし。	なし。	口縁は内湧気味である。 き-53 第3層
			— — —	灰白色微粒 子。 見込みは釉を搔き取り露胎にする。	薄い透明釉。 見込みは釉を搔き取り露胎にする。	淡茶 緑色	内外面に細かい貫入がある。	内外面に片切彫りの蓮花文を描く。	胸部破片。 表採
タ タ 5	碗	II	— — 6.2	淡灰青色粗粒子。微細な黒色粒子を少量含む。	薄い失透釉。	淡 灰色 緑色	なし。	内底見込みを圈線で囲み、高台形は断面四角形を呈する。中央には「金玉満堂」が押印される。	底部資料。 外底面の削り出しは浅く、底部の器厚は厚くなる。釉は高台際まで施すが、一部は豊付、外底面まで釉だれが及んでいる。 表採

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口 径 器 高 台 径 (cm)	素 地	施 軸	軸 色	貫 入	文 標	器形・成形等の 特 微 出土地点・層位
第12図 PL.21 6	蓮弁	Ⅲ 鑄	—	灰白色微粒子。微細な黑色粒子を少量含む。	薄い透明釉。	淡 緑 色	なし。	片切彫の蓮弁文は幅広で盛り上がり、立体感を有する。中央を走る鑄の稜線も明瞭である。弁先は尖る。	口縁は直口状をなし、口唇部は尖り気味である。 き-51 第3層
タ タ 8			—	灰白色微粒子。	薄い失透釉。	灰 緑 色	なし。	蓮弁の鑄は比較的に雑である。弁花は丸味を持ち尖る。	口縁は直口する。 口唇は丸味を持つ。 き-48 第3層
タ タ 7			—	灰白色粗粒子。	薄い透明釉。	淡 茶 緑 色	内外面に細かい貫入がある。	片切彫で蓮弁を造る。弁全体が角ばっている。	口縁は内湾気味で、口唇は丸味を持つ。 く-53 第4層
タ タ 9	文	Ⅲ 文	— 5.6	灰白色微粒子。 を高台脇まで施釉するが、釉だれが高台内面まで及ぶ。	薄い失透釉 を高台脇まで施釉するが、釉だれが高台内面まで及ぶ。	淡 茶 緑 色	なし。	蓮弁が高台脇まで延びる。	底部資料。 見込みが圓線を境にわざかに盛り上がる。 外底面の削り出しは比較的浅い。 く-51 第4層
タ タ 10			— 5.2	淡橙色微粒子。半磁胎。	薄い透明釉。 高台脇まで施釉するが、一部疊付まで釉だれが及ぶ。	淡 茶 緑 色	内外面とも微細な貫入がある。	なし。	底部資料。見込みが圓線を境にわざかに盛り上がる。外底面の削り出しは浅く、底部の器厚は厚くなる。 く-55 第2層

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口 径 器 高 台 径 (cm)	素 地	施 軸	軸 色	貫 入	文 標	器形・成形等の 特 徴 出土地点・層位
第13図 PL.22 11	無	IVa	15.3 — 5.4	灰白色微粒子。微細な黑色粒子を混入する。	薄い失透釉。内外面とも全面施釉。	淡黄緑色	なし。	見込みに一条の圈線を有する。片切彫や丸彫で幅広の蓮弁を描く。弁先は尖る。	器形はやや内湾氣味である。口唇部は丸味を帯びる。 せ-50 第2層
タ タ 12	鑄 蓮	IVa	12.0 — —	灰白色粗粒子。微細な黑色粒子を混入する。一部底部のみ素地が淡橙色を呈し半磁胎。	薄い失透釉。内外面とも全面施釉。	淡綠色	内外面とも細かい貫入がある。	片切彫で幅広の蓮弁を描く。蓮弁は高台際まで延びる。弁先は尖る。	器形は直口状を呈する。口唇部は丸味を帯びる。 き-53 第4層
タ タ 13	弁	IVb	— — —	灰白色粗粒子。褐色微粒子を混入する。	薄い透明釉。	淡青緑色	なし。	片切彫で幅広の蓮弁を描くが、弁先は尖らず丸味を帯びる。	器形はやや内湾氣味である。口唇は丸味を帯びる。 き-54 第3層
タ タ 14	弁	IVb	— — —	灰白色微粒子。黒色微粒子を混入する。	薄い透明釉。	淡灰緑色	内面に微細な貫入がある。	片切彫で蓮弁文を雜に描くが、弁先と蓮弁の間に隙間があくこともある。	器形は直口タイプである。口唇は丸味を帯びる。 く-51 第4層
タ タ 15	文	IVb	— — —	灰白色粗粒子。	薄い透明釉。	灰緑色	内外面に粗い貫入がある。	片切彫で蓮弁文を雜に描く。弁先は丸味を帯びる。	器形は直口タイプ。口唇は丸味を帯びる。 き-62 第1層
タ タ 16	線 刻 細	Va	— — —	灰青色粗粒子。	薄い透明釉。	灰緑色	内外面に粗い貫入がある。	蓮弁の線と弁先は一致せず両者の間には隙間があく。弁先は丸味を帯びる。	器形はやや内湾氣味である。口唇は丸味を帯びる。 き-49 第6層

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口徑 器高台径 (cm)	素地	施釉	釉色	貫入文	様	器形・成形等の特徴 出土地点・層位
第13図 PL.22 17	蓮	V a	—	灰白色粗粒 子。	薄い透明釉。	灰 緑色	内外面に粗 い貫入があ る。	タ タ	タ き-48 第3層
第14図 PL.18		V b	13.8	灰青色粗粒 子。	薄い透明釉。	灰 緑色	外面口縁端 部に、わず かに粗い貫 入がある。	外面に線刻細 蓮弁文を描く。	タ タ き-54 第3層
タ タ 19		V b	—	灰白色微粒 子。	薄い透明釉。	淡 緑色	内外面に粗 い貫入があ る。	タ 口唇直下に一 条の沈線を巡 らし、弁先に 代える。	口縁は直口状を 呈する。口唇は 丸味を帯びる。 き-56 第4層
タ タ 20	弁	V b	—	灰白色粗粒 子。	薄い失透釉。	淡 高台内面中 途までであ るが、一部 外底面にも 釉だれあり。	内外面に粗 い貫入があ る。	内底面に印花 文を配する。 外面に線刻細 蓮弁文。	底部資料。 豊付外端を削り 取っている。 重ね焼きの際の 胎土が外底面に 溶着する。 き-49 第6層
第14図 PL.23 21		V b	—	灰青色粗粒 子。	薄い失透釉 を高台脇ま で施釉。 内底は搔き 取りによっ て露胎する。	淡 緑色	なし。	外面に線刻細 蓮弁文。	底部資料。 外底面を雑に削 り出しているた め、二段底とな っている。 き-55 第2層
タ タ 22		V c	—	灰白色微粒 子。	薄い失透釉。	淡 緑色	なし。	内面上位に片 切彫で花文を 描く。 外面に線刻細 蓮弁文。	口縁部は直口状 を呈する。 口唇部は丸味を 持つ。 く-51 第4層
タ タ 23	文	V c	—	灰白色微粒 子。	薄い透明釉。	淡 灰 緑色	なし。	外面に線刻細 蓮弁文。 蓮弁の線と弁 先は一致せず、 雑に描く。	口縁部は内湾氣 味である。 タ く-53 第1層

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口 径 器 高 台径 (cm)	素 地	施 軸	軸 色	貫 入	文 様	器形・成形等の 特 微 出土地点・層位
第14図 PL.23 24	Vc	—	灰青色微粒 子。	薄い透明軸	灰 綠 色	なし。	タ	口縁は直口状を呈する。	
		—					弁先は描かない。	タ	
		—						き-50 第3層	
タ タ 25	蓮	Vc	— — 6.7	灰白色微粒 子。微細な 黒色、褐色 粒子を混入 する。	厚い透明軸 を全面施軸 後、蛇ノ目 状に搔き取 る。	明 綠 色	なし。	見込みに圈線 を巡らせ、内 底面に印花文。 外面には片切 影による蓮弁 文を描く。	底部資料。 しほ丁寧で、中 央部を盛り上が って残す。 き-54 第4層
		—							
		—							
タ タ 26	弁	Vc	— — 5.8	タ 高台内面 中途まで施 軸する。外 底面は露胎。	厚い透明軸 を高台内面 中途まで施 軸する。外 底面は露胎。	明 青 綠 色	なし。	タ タ	底部資料。 脛付外端は細く 削り取っている。 き-52 第4層
		—							
		—							
タ タ 27	文	— — 5.0	灰青色粗粒 子。	薄い透明軸 を高台外面 中途まで施 軸する。	淡 青 綠 色	内外面に粗 い貫入あり。	見込みに圈線 を巡らす。 内底面に印花 文らしきもの が見えるが判 然としない。	タ	底部資料。 タ く-52 第4層
		—							
		—							
タ タ 28	碗	V	— — —	灰白色微粒 子。	薄い透明軸	淡 綠 色	内外面に粗 い貫入あり。	ラマ式蓮弁文 に類似する文 様を片切影で 描く。	口縁部の外反の 度合が極めてき つい。 き-55 第3層
		—							
		—							
タ タ 29	雷 文 帶 碗	Vla	— — —	灰白色粗粒 子。	厚い透明軸	明 青 綠 色	内外面に粗 い貫入あり。	口縁直下に片 切影で雷文帯 を描く。 雷文帯直下に 片切影で蓮弁 文を描く。	口縁部は直口状 を呈する。 口唇部は丸味を 帯びる。 き-53 第3層
		—							
		—							

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口徑 器高台径 (cm)	素地	施釉	釉色	貫入文	様	器形・成形等の 特徴 出土地点・層位
第14図 PL.23 30	雷	VIIa	— — —	灰青色微粒子。	厚い透明釉。	淡 緑 色	内外面に粗 い貫入あり。	口縁直下に片 切彫で雷文帯 を描く。	口縁部は直口状 を呈する。 口唇部は丸味を 帯びる。 き-55 第2層
		VIIa	14.7	灰青色微粒子。	薄い失透釉。	淡 茶 綠 色	なし。	タ	タ タ き-51 第3層
		VIIb	12.0	タ	タ	灰 綠 色	内外面に粗 い貫入あり。雷文帯直下に 蓮弁文を描く。 内面に刻花文。	タ	口縁部は内湾氣 味である。 タ く-52 第3層
タ タ 33	文	VIIb	— — —	灰白色微粒子。 黒色・褐色 微粒子を混 入する。	薄い透明釉。	淡 綠 色	タ タ タ	タ タ か-55 第3層	
		VIIb	— — —	灰白色微粒子。	厚い透明釉。	暗 綠 色	なし。	内外面の口縁 直下に片切彫 で雷文帯を描 く。 内面の雷文帯 直下に人物文 を描く。	タ タ き-49 第3層
		VIIb	— — —	灰白色微粒子。	薄い透明釉。	明 青 綠 色	なし。	内面に人物文 を描く。	胴部破片。 き-49 第3層
第15図 PL.24 36	無 文	VIIa	— — —	灰青色粗粒子。	薄い透明釉。	灰 綠 色	内外面に粗 い貫入があ る。	なし。	口縁部が玉縁状 を呈する。 く-51 第4層
		VIIb	— — —	灰白色粗粒子。	薄い透明釉。	淡 青 綠 色	タ	タ	口縁部が直口状 を呈する。 き-51 第3層
タ タ 37	碗								

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口 径 器 高 高台径 (cm)	素 地	施 軸	釉 色	貫 入 文	文 標	器形・成形等の 特 微 出土地点・層位
第15図 PL.24 38	無 文	皿c	15.2	灰白色微粒 子。	厚い透明釉。	暗 緑 色	なし。	口縁端部に一 条の沈線を巡 らす。	口縁が内湾状を 呈する。 か-55 第4層
			—						
			—						
タ タ 39	文	皿c	16.0	灰白色微粒 子。	厚い失透釉。	淡 綠 色	外面にわず かにある。	なし。	タ か-54 第4層
			—						
			—						
タ タ 40	碗	皿d	17.6	タ	タ	灰 綠 色	なし。	なし。	口縁が外反する タイプである。 く-54 第2層
			—						
			—	褐色微粒子 を少量混入 する。					
タ タ 41	無 文	A	—	灰白色微粒 子。	薄い透明釉 を全面施釉 後、外底面 を蛇ノ目状 に搔き取る。	淡 青 綠 色	なし。	見込みに一条 の圈線。 内底面に印花 文。	底部資料。高台 形は断面四角形 をなす。 外底面の削り出 しは浅く、底部 の器厚は厚い。 疊付端部をわず かに削り取る。 き-53 第4層
			—						
			5.1						
タ タ 42	碗	A	—	タ	タ	淡 綠 色	なし。	タ タ	底部資料。 外底面の削り出 しは浅く、底部 の器厚は厚い。 き-55 第4層
			—						
			6.7						
タ タ 43	底	B	—	灰白色微粒 子。	薄い透明釉 を高台内面 まで施釉す る。	灰 綠 色	内外面にわ ずかに貫入 がある。	内底面に印花 文。	底部資料。 疊付の内端部及 び外端部を削り 取り、疊付部が 狭くなる。 く-49 第3層
			—						
			6.7						
タ タ 44	部	B	—	灰白色粗粒 子。	薄い失透釉 を高台脇ま で施釉す る。 内底面の釉 を搔き取る。	暗 綠 色	内外面に粗 い貫入があ る。	なし。	底部資料。 疊付の外端部を 削り取る。 外底面の削り出 しは比較的浅い。 き-48 第3層
			—						
			5.8						

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口径 高台径 (cm)	素地	施釉	釉色	貫入	文様	器形・成形等の特徴 出土地点・層位
第15図 PL.24 45	無	B	— — 6.1	白色粗粒子。 厚い失透釉。 内底面の釉を搔き取る。 疊付までを施釉。	明 緑 色	内外面に細かい貫入がある。	なし。		底部資料。 外底面の削り出しは比較的浅い。 く-50 第4層
タ タ 46		C	— — 5.3	灰青色粗粒子。 高台外面中途まで施釉。	薄い透明釉。 明 綠 色	内外面に粗い貫入がある。	内底面に「大」の字のある捺じ花を配する。		底部資料。 外底面の削り出しは比較的深く雰である。 き-53 第4層
タ タ 47		C	— — 5.4	黄灰色微粒子。 薄い透明釉を高台外面中途まで施釉する。	淡 茶 綠 色	内外面に細かい貫入がある。	なし。		底部資料。 外底面の削り出しは比較的深い。 く-53 第2層
タ タ 50	底	C	— — 5.0	灰白色粗粒子。 薄い透明釉を疊付脇まで施釉する。	薄い透明釉。 淡 灰 綠 色	タ	見込みに三条の圈線を巡らせる。		底部資料。 タ 中央部を若干盛り上げて残す。 く-50 第4層
タ タ 49		C	— — 5.5	灰青色粗粒子。 薄い失透釉を高台内面中途まで施釉する。	薄い失透釉。 灰 綠 色	なし。	内底面に印花文を配す。		底部資料。 外底面を比較的深く削り出しが雰である。 く-50 第4層
タ タ 48	部	C	— — 7.1	灰青色微粒子。 薄い透明釉を高台脇まで施釉する。	薄い透明釉。 淡 灰 綠 色	内外面にわずかに粗い貫入がある。	タ		底部資料。 タ 疊付外端を大きく削り取って、疊付を狭く造る。 く-50 第3層

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口 径 高台 径 (cm)	素 地	施 釉	軸 色	貫 入	文 様	器形・成形等の 特 徴 出土地点・層位
第15図 PL.24 51	無	C	— — 4.8	淡黄白色粗 粒子。 半磁胎。	薄い失透釉 を高台外面 まで施釉す るが、一部 は豊付まで 釉だれとし て残る。	淡 黄 綠 色	外面に細か い貫入がわ ずかにある。	内底面に判続 不明の文字を 配する。	底部資料。 外底面を比較的 深く削り出し、 中央部を盛り上 がって残す。 く-51 第2層
第16図 PL.25 52	文	C	— —	淡白色粗粒 子。 半磁胎。	薄い失透釉 を内底と高 台際に施釉	淡 黄 綠 色	外面に細か い貫入がわ 見られる。	内底面にひま わり状の図と 文字?有り。	底部資料。外底 面の削りが粗い く-50 第4層
タ タ 53		C	— —	淡黄白色粗 粒子。 半磁胎。	薄い失透釉 を内底と高 台間に施す	淡 黄 綠 色	外面に微細 な貫入がわ ずかに有り	内底面中央部 判然としな い文字?有り	底部資料。外底 面の削りが深い く-51 第2層
タ タ 54	碗	C	— — 6.1	灰白色粗粒 子。	薄い失透釉 を高台脇ま で施釉する。 見込みの圓 線上は釉の かかりが悪 い。	淡 绿 色	外面に粗 い貫入がわ ずかにある。	見込みに一条 の圓線を有す。 内底面中央部 が周囲よりも わずかに盛り 上がる。	底部資料。 タ 豊付外端を小さ く削り取る。 く-52 第4層
タ タ 55	底	D	— — 7.0	黄褐色粗粒 子。	薄い失透釉 を高台外面 中途まで施 釉。 内底面を蛇 ノ目釉剥ぎ。	灰 绿 色	外面に細 かい貫入あ り。	なし。	底部資料。 タ タ く-50 第1層
タ タ 56	部	D	— — 7.8	灰青色粗粒 子。	薄い透明釉 を高台際ま で施釉。 内底面を蛇 ノ目釉剥ぎ。 見込みに重 ね焼きの跡 あり。	淡 灰 綠 色	外面に細 かい貫入が ある。	なし。	底部資料。 外底面を浅く丁 寧に削り出す。 中央部が若干く ぼむ。豊付外端 を小さく削り取 る。 き-51 第3層

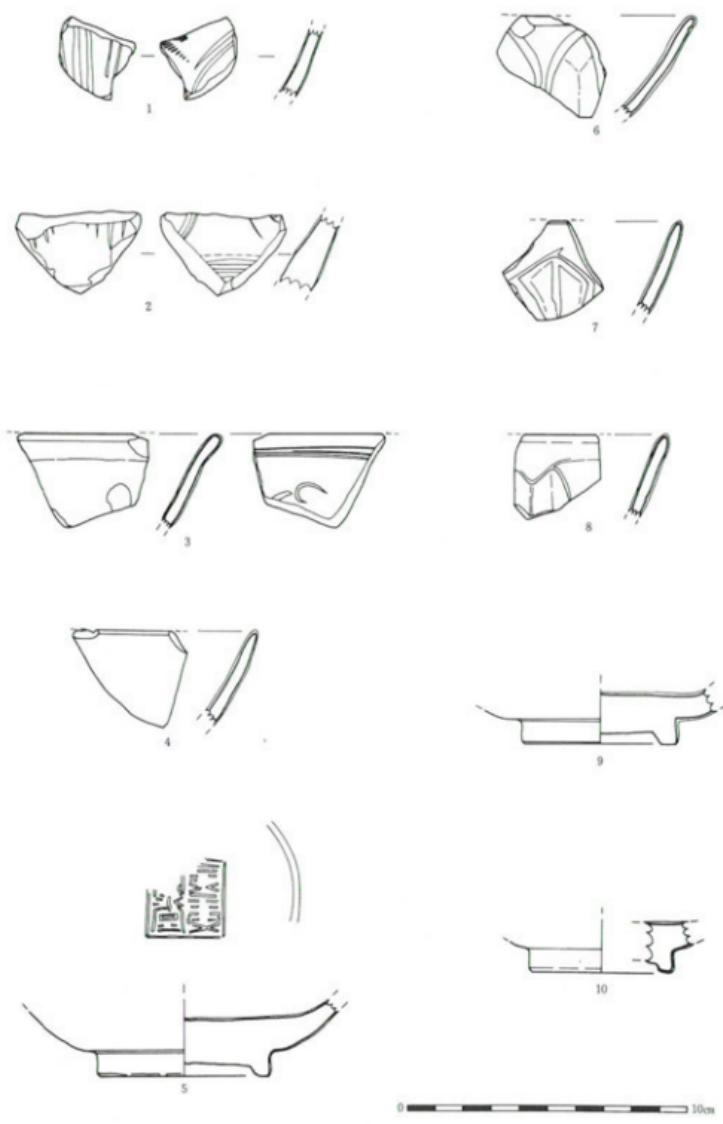
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口径 高台径 (cm)	素地	施釉	軸色	貫入	文様	器形・成形等の 特徴 出土地点・層位
第16図 PL.25 57	青磁角杯		— — —	灰白色微粒子。	薄い失透釉。	淡 緑色	なし。	内面口唇部直下に施影の沈線を有す。	口縁部はきつく外反する。 角杯が屈曲する 口唇部には一定の波状の突起を造る。 き-49 第3層
タ タ 58	櫛描	I	— — 5.0	灰白色微粒子。 を高台際まで施釉する。 外底面を露胎にする。	薄い透明釉。	淡 灰 緑色	なし。	内面に浅い片切影を二条とジグザグ状に櫛描文を描く。	底部資料。 外底面はあげ底状を呈する。 表採
タ タ 59		I	— — 5.4	タ	タ	淡 青 緑色	なし。	内底面に二本の櫛描文を有する。	底部資料。 外底面は疊付を表現する部分とより内側の上げ底状の部分から成る。 き-54 第4層
タ タ 60	蓮弁文	II	— — —	タ	薄い透明釉。	淡 灰 緑色	なし。	内面口縁部直下に施影と思われる沈線の一部が見えるが判然としない。	口縁部は直口状を呈する。 平坦な底部の凹になると推定される。 表採
タ PL.26 61		III	11.8 3.5 6.4	タ	薄い透明釉を全面に施釉し、外底面を蛇ノ目釉刺ぎ。	淡 灰 緑色	内外面に粗い貫入がある。	外面に幅広の蓮弁文の弁側を弧状に一本片切影で描く。	口縁部を水平方向に屈曲させ口縁を造る。 き-54 第2層
タ PL.26 タ 62	双魚文	IV	11.7 3.6 6.1	タ 微細な黒色粒子を混入する。	タ	淡 灰 緑色	なし。	内底面に双魚文を有するものである。	タ き-53 第3層

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口 径 器 高 高台径 (cm)	素 地	施 装	軸 色	貫 入	文 样	器形・成形等の 特 微 出土地点・層位
第16図 PL.25 63	稜花皿	VI	11.6 2.6 4.5	灰青色粒子。 多種の鉱物 を混入する。	薄い透明釉 を高台脇ま で施釉する。	暗 緑 色	内外面に粗 い貫入があ る。	口唇部はラマ 式蓮弁の弁先 形の稜花が刻 まれる腰折皿 である。 見込みに二条 の圈線。	口縁部は弱干外 反する。 く-52 第4層
タ タ 64			11.3 — —	タ	薄い透明釉。	淡 綠 色	タ	タ	タ き-54 第3層
タ タ 65	基筒皿	VI	— — 4.6	灰白色微粒 子。 黒色微粒子 を少量混入 する。	薄い透明釉。	淡 綠 色	タ	なし。	器形は基筒皿と 称されるもので 外底を深く削り 出して豊付を表 現するものであ る。 く-52 第4層
タ タ 66	無	VIIb	— — —	黄白色微粒 子。	薄い透明釉。	淡 茶 褐 色	内外面に細 かい貫入が ある。	内面に範影に よる蓮弁を表 現する。 外面に片切彫 で蓮弁を造る。	器形は内湾状を 呈する。 く-52 第4層
タ タ 67			11.4 — —	灰白色粗粒 子。 多種の有色 鉱物を混入 する。	薄い失透釉。	灰 綠 色	なし。	口縁外面に一 条の圈線を巡 らす。	口縁部は直口状 を呈する。 く-54 第2層
タ タ 68	文	VIIb	10.8 — —	灰白色微粒 子。	薄い透明釉。	淡 綠 色	なし。	内面に範影に よる縱位の線 刻を有する。 外面口縁下部 に範影で一条 の圈線を巡ら す。	器形は内湾状を 呈する。 く-53 第3層

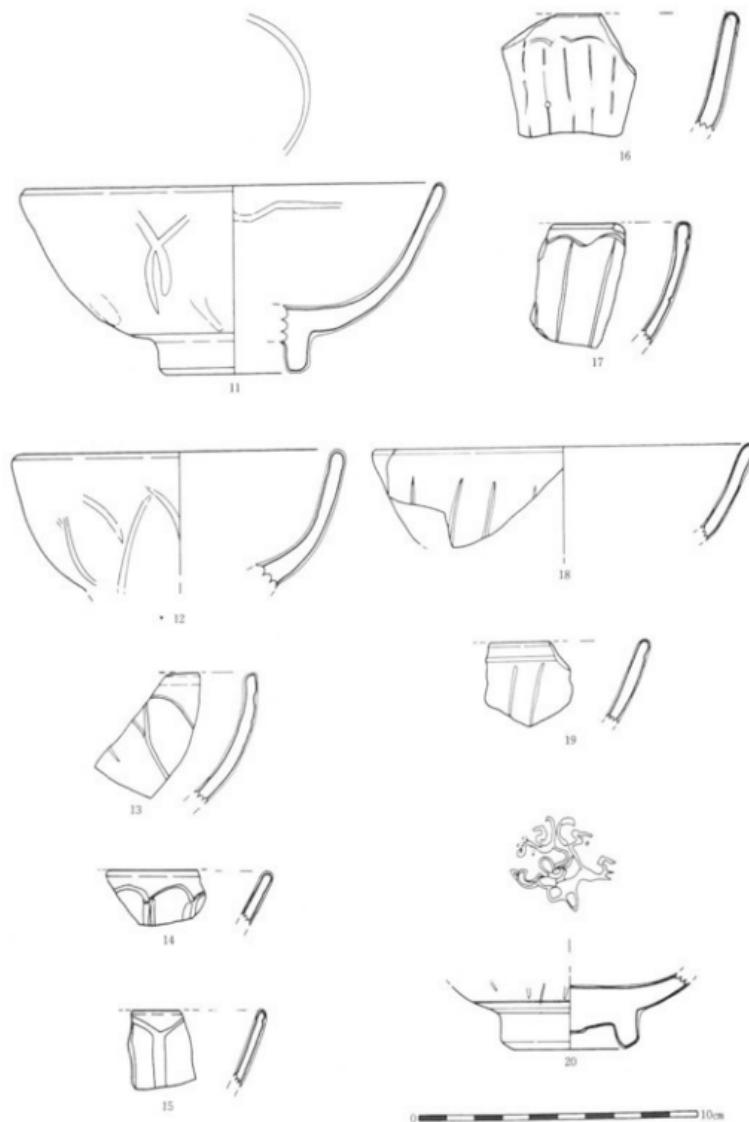
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口徑 器高台径 (cm)	素地	施釉色	釉貫入色	文様	器形・成形等の特徴 出土地点・層位
第16図 PL.25 69	皿 c	無文	11.6	灰白色微粒子。	厚い失透釉を全面施釉した後、内底面と外底面を搔き取る。	灰緑色	内外面に細かい貫入がある。	なし。口縁部は外反する。 き-54 第3層
			3.4					
第17図 PL.27 70	皿 c	青	—	タ 黒色微粒子を混入する。	厚い透明釉。	明緑色	内外面に粗い貫入がある。	口縁部は若干外反する。 き-54 第3層
			—					
タ タ 71	I	青	—	灰青色粗粒子。	薄い透明釉。置付までを施釉し、外底面は露胎にする。	淡青緑色	なし。	見込みに一条の園線を巡らす。内底面に印花花文を配する。外面上に範形で蓮弁を描く。 外底面の削り出しは比較的浅く丁寧で、中央部を盛り上げて残す。
			4.6					
タ タ 72	I	皿	—	タ	薄い失透釉を外底面の一部を除き施釉後、内底面を雜に搔き取る。見込みに重ね焼きの目跡を残す。	灰緑色	なし。	内底面に印花花文を配する。 外底面の削り出しは比較的浅く丁寧である。 く-50 第3層
			—					
タ タ 73	I	底	—	灰白色粗粒子。	薄い失透釉を高台内面まで施釉する。	淡緑色	内外面に粗い貫入がある。	内面に片切形で蓮弁を描く。 内底面には印花花文。 タ か-53 第3層
			—					
タ タ 74	I	部	—	黄白色微粒子。	薄い透明釉を全面施釉後、置付内端及び外底面中央付近を丁寧に搔き取る。	淡灰緑色	内外面に細かい貫入がある。	見込みに一条の園線を巡らす。 タ く-51 第4層
			—					

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口 径 器 高 高台径 (cm)	素 地	施 軸	釉 色	貫 入 文	文 様	器形・成形等の 特 微 出土地点・層位
第17図 PL.27 75	青 磁 盤 底	II	— — 5.3	灰白色微粒 子。 で全面に施 釉後、外底 面を蛇ノ目 状に搔き取 る。	薄い透明釉	淡 綠 色	内外面に粗 い貫入があ る。	内面に刻花文	腰部で屈曲して 立ち上がってい く器形である。 く-53 第2層
タ タ 76			— — 5.6	灰白色粗粒 子。 褐色微粒子 を少量混入 する。	薄い透明釉 で、高台内 面中途まで 施す。	淡 綠 色	タ	見込みに幅広 の圈線を巡ら す。 内底面に印花 花文を配す。	タ き-54 第2層
タ タ 77			— — 6.2	灰白色微粒 子。 を疊付まで 施すが、一 部は外底面 まで釉が残 る。	薄い透明釉 を疊付まで 施すが、一 部は外底面 まで釉が残 る。	淡 黃 綠 色	タ	なし。	外底面の削り出 しは、この器種 から見ると深く 底部器厚の約半 分に達する。 く-52 第2層
タ タ 78	青 磁 盤	I	— — —	灰白色微粒 子。	薄い透明釉	淡 綠 色	なし。	口唇直下及び 内体面に片切 彫で刻花文を 描く。	鍔が平坦をなし、 内体面に片切 彫で刻花文を 描く。 く-50 第4層
タ タ 79		II	— — —	タ	タ	淡 綠 色	なし。	内体面に蓮弁文を 描く。	鍔縁をつまみ上 げるタイプのもの である。 く-52 第4層
タ タ 80			— — —	灰白色粗粒 子。	タ	淡 綠 色	内外面に粗 い貫入があ る。	内体面に6本 櫛による蓮弁 文を描く。	タ く-52 第2層
タ タ 81	青 盤	II	— — —	灰白色微粒 子。	薄い失透釉	淡 綠 色	内外面に細 かい貫入が ある。	なし。	タ く-49 第4層

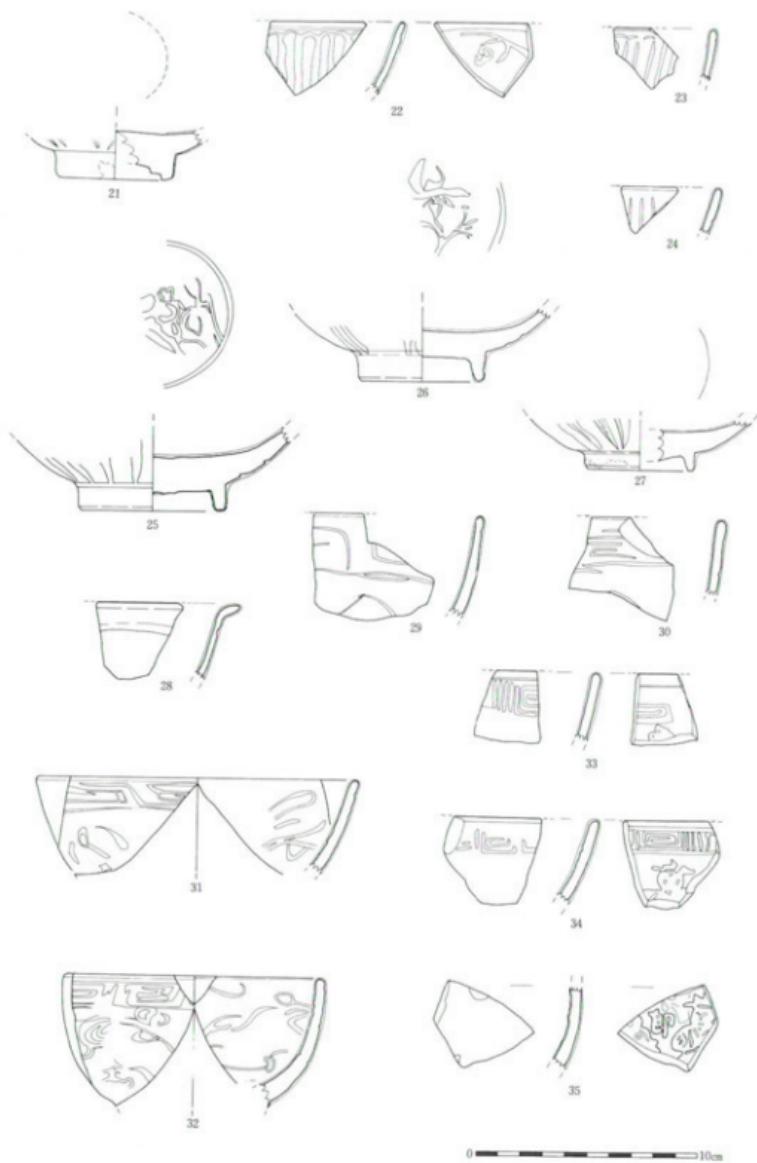
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称又は仮称	類	口径 器高 高台径 (cm)	素地	施釉	釉色	貫入文	様	器形・成形等の 特徴 出土地点・層位
第17図 PL.27 82	青	磁	— — 6.0	黄白色粗粒子。	タ	淡青緑色	タ	なし。	底部資料。 上げ底タイプである。 底部を研磨し、 疊付部を造り出 している。 き-53 第4層
タ タ 83	盤	Ⅲ	20.8 — —	灰白色微粒子。	タ	淡緑色	内外面に粗い貫入がある。	内面の口唇直下に雷文 帶を片切彫で描く。	口縁の形状は立ち上がり部から大きく外反する き-54 第4層
タ タ 84	青		— — —	灰白色微粒子。	薄い失透釉。暗 緑色	なし。	外面に継位に 範彫の蓮弁を 描く。	胸部資料。 瓶の首にあたる部分と考えられる。 く-52 第4層	
タ タ 85	磁		— — —	タ	タ	暗緑色	なし。	範彫によって 外面に三条の 曲線を巡らせ その直下には 刻花文を描く。	胸部資料。 タ く-51 第4層
タ タ 86	瓶		— — 5.7	薄い透明釉。淡 緑白色	タ	薄い透明釉。淡 緑白色	なし。	なし。	底部資料。 外底部の削り出しは比較的浅く、 丁寧である。 け-50 第4層
タ タ 87	青		— — —	灰白色微粒子。 黑色微粒子 を混入する。	薄い透明釉。明 緑色	なし。	外面に片切彫による刻花文 を描く。	胸部資料。 器形は壺形と推定される。 き-51 第4層	
タ タ 88	壺	磁	— — —	タ タ	タ	暗緑色	なし。	なし。	酒会壺の蓋と考えられる。 き-55 第4層



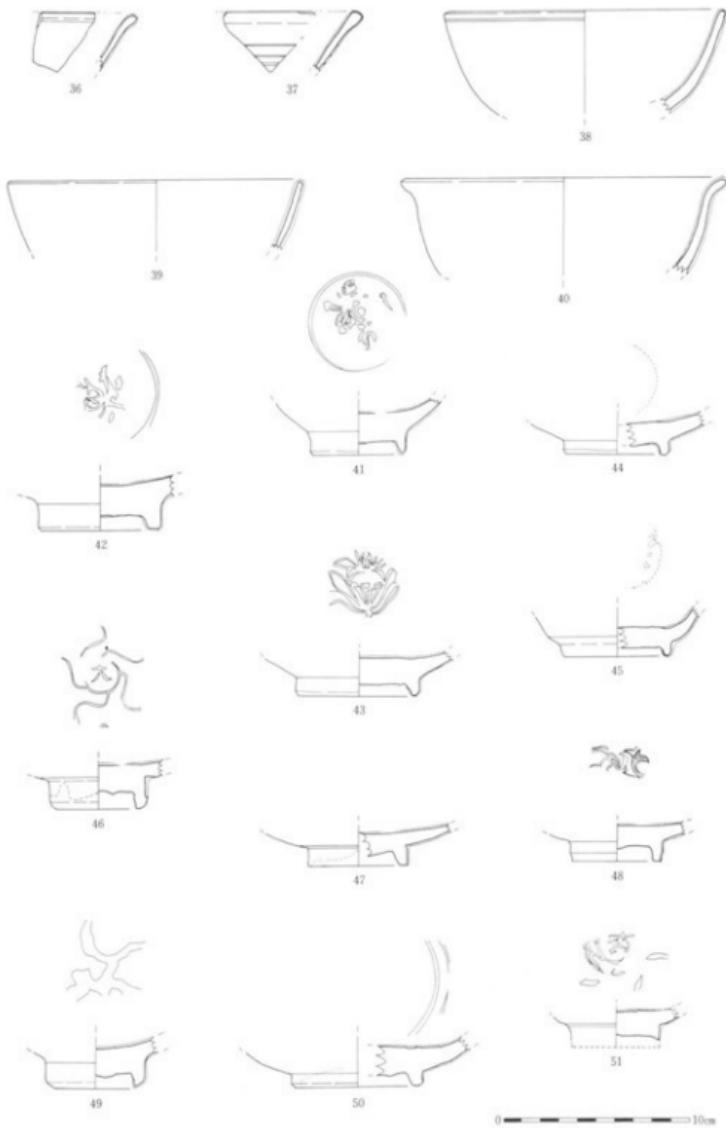
第12図 青磁碗 (I類1, II類2~5, III類6~10)



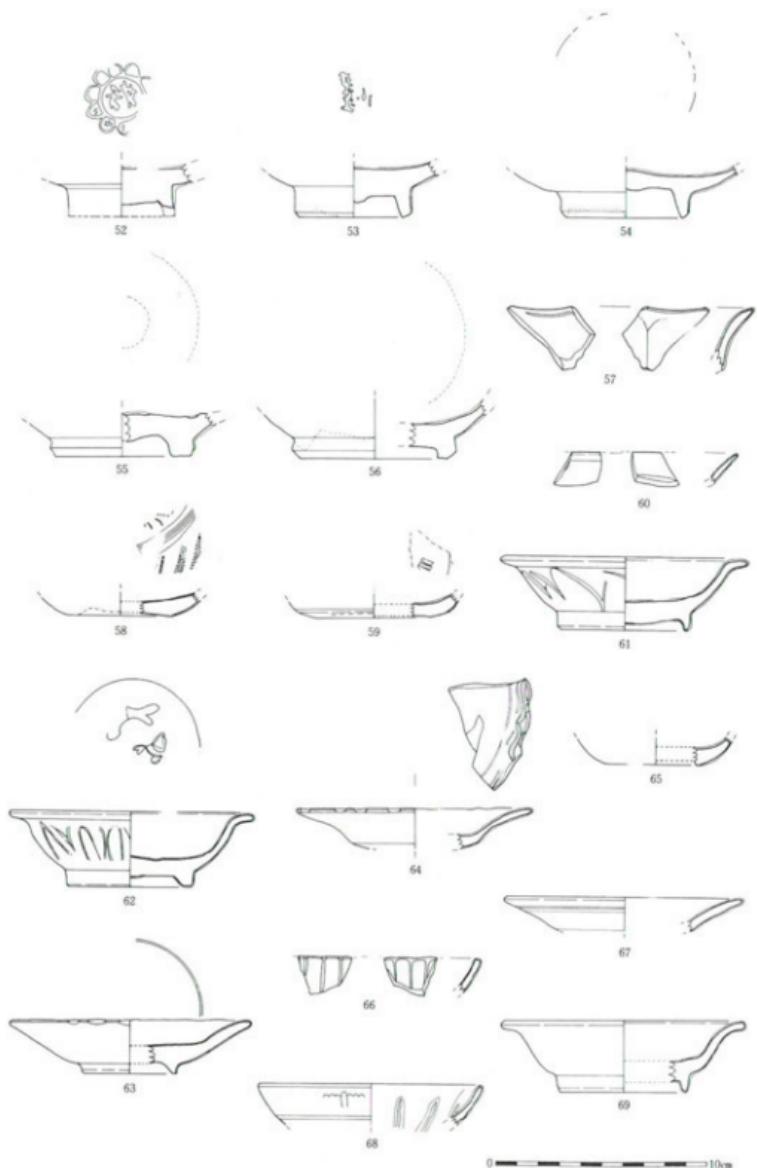
第13図 青磁碗 (IV a類11・12, IV b類13・15, V a類13～15, V a類16・17, V b類18～20)



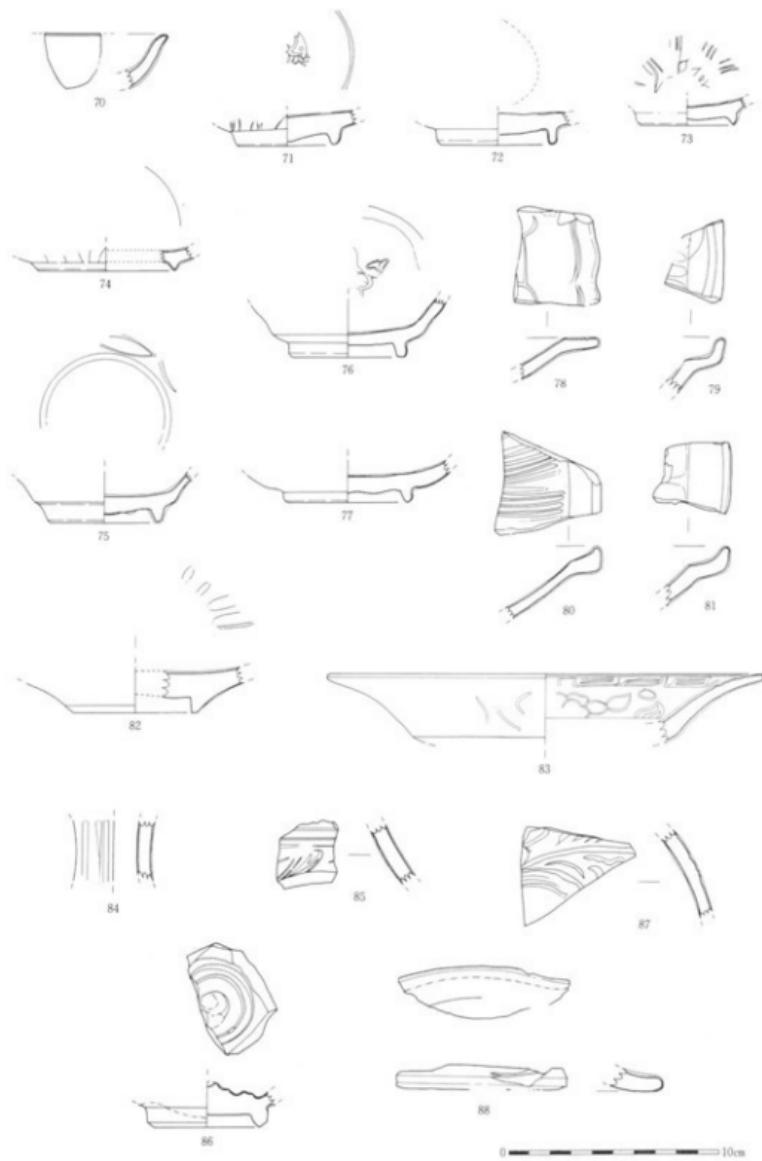
第14図 青磁碗 (V b類21, V c類22~24)、青磁碗底部 (25~27)、
青磁碗 (VI類28, VII a類29~31, VII b類32~34)、青磁碗胴部 (35)



第15図 青磁碗 (VII a類36, VII b類37, VII c類38・39, VII d類40)、
青磁碗底部 (A類41・42, B類43・45, C類46～51)



第16図 青磁碗底部 (C類52~54, D類55~56)、青磁角杯 (57)、青磁皿 (I類58・59, II類60, III類61, IV類62, VI類63・64, VII類65, VII b類66, VII a類67, VII c類69)



第17図 青磁血 (VII類70)、青磁皿底部 (I類71~74, II類75・76, III類77)、
青磁盤 (I類78, II類79~81, III類83)、青磁盤底部 (82)、青磁瓶 (84~86)、
青磁壺 (87・88)

(3) 白 磁

白磁片は総数で315が得られた。器種は碗、皿、壺、瓶の4種類が確認された。主体となるものは碗で、皿、壺、瓶の順に減少する傾向が覗えた。得られた資料には若干の時期幅が見られた。口縁部、底部の出土状況は第29表の通りである。尚、底部資料も各項目中で触れた。

白磁碗（口縁部）

ほとんどが破片資料で、全形の窺えるものは1点のみである。口縁部資料の形状から次のI～VI類まで分類された。以下に特徴を明記する。

I類 口縁部上端を外へ折り曲げるタイプ。（第18図1）

II類 玉縁状を呈するタイプ。（同図2～6）

III類 内面に櫛目文を有するタイプ。（同図7）

IV類 直口するタイプ。（同図8）

V類 やや内湾するタイプ。（同図9・10）

VI類 外反するタイプ。

a. 外面に稜があるもの。（同図11）

b. 内面に稜があるもの。（同図12）

c. 内外面とも稜のないもの。（同図13・14）

VII類 小碗タイプ。（同図15・16）

I類

第18図1は薄手の外反口縁碗で、口縁部が若干折り出し気味で、口唇は尖る。胴部下部で一端、器壁が薄くなる。釉は白色の失透釉、素地は灰白色の細粒子。推定口経は13.4cmを計る。13世紀に位置づけられる。き-53、第4層の出土である。伊原遺跡出土の白磁碗に成形方法及び素地、釉色が類似している。

II類

いわゆる白磁の玉縁口縁碗である。この手のものは3点が得られている。玉縁の造りは第18図3の資料のみ肥厚帯下端を範状工具で整形するため、抉れ気味となる。同図4は肥厚帯下端を範で軽く調整する。同図2は肥厚帯の整形はない。釉色は3が白色、4は乳白色、2は灰白色を呈する。素地は3、4は白色、2は灰白色。3点とも12～13世紀に属する資料である。出土グリッドは3がく-50第3層、4はく-52第4層、2は表探資料である。また、この類似資料が伊原遺跡、熱田貝塚に報告されている。

II類の底部破片資料は2点が得られた。第18図6は推算底径6.6cmで、外底面を浅く削り、高台付の幅を細く整形する。外面は露胎、内面全面を施釉する。釉色は灰白色。素地は白色で細粒子。き-48第4層出土。5は推定底径7.0cm。高台は「ハ」の字状に開く。外底面の削りは浅い。高台は幅広である。内外面の施釉の方法及び釉色、素地は

5と同じ。き-50第1層出土である。5・6とも12~13世紀に位置づけられる資料である。

III類

内面に櫛目文を有するタイプで、1点のみの出土である。

第18図7は脣部資料のため、口縁部の造りは定かでない。内面数ヶ所には櫛描文が施文され二条の圓線が、さらに外面には四条の圓線を有する。内外面とも施釉され、釉色は灰白色を呈する。素地は白色で微粒子。12~13世紀に属する資料である。け-50、第2層の出土。

IV類

直口口縁タイプの碗。第18図8に示す資料で、口唇部を箆状工具で平坦に調整した後、鉄釉を施釉したものである。釉色は灰緑色を呈し、素地は灰白色である。く-53第2層。17世紀以降に位置づけられる資料である。

V類

これに類するものは2点が得られている。第18図10は比較的厚手の資料で、いわゆるビロースクタイプと呼称されるものである。口唇先端部は内側から箆によって削り取られているため内面の口唇部の稜はシャープである。外面にも箆による調整痕があり、明瞭な稜線を巡らす。釉は灰白色的失透釉。素地は黒色微粒子を多く含み灰白色である。15世紀に属する資料。か-53、第3層より出土。

9は17世紀以降に属する資料で、比較的薄手のものである。口唇部は舌状を呈する。釉色は灰白色。素地は白色で微細な黒色粒子を含む。か-53、第3層。

VI類

外反タイプの碗である。このタイプをさらに次の3つに細分した。

VI類 a

第18図11に示すように外反し、口縁部下端に明瞭な稜線が観察されるもの。口唇部内面には二条の沈線が施文される。釉色は灰白色を呈し、素地は黒色微粒子を多く含む灰白色である。15~16世紀に属する。き-54、第3層出土。

VI類 b

第18図12に示したもので、口縁部内面にシャープな稜線を有する、比較的薄手の碗である。釉は透明度が高く光沢を有する灰白色を呈する。素地には黒色微粒子が少量混入する。17世紀以降に属する表採資料である。出土地点は、

VI類 c

第18図13、14に示した2点が属する資料で、内外面に稜線を有しないタイプである。14は口唇部が三角形状を呈する。2点とも素地は黒色微粒子をわずかに含む灰白色で、釉は若干緑色味を帯びた灰白色である。

15~16世紀に位置づけられる資料。14は、か-53、第3層出土。13は、き-48、第4層の出土である。

VII類

第18図15・16の2点の資料で、特に、15は当該遺跡出土の白磁碗中では唯一全形の窺えるものである。よって復元図を示した。

推算口径8.2cm、高台径3.4cm、高さ4.1cmである。器形は高台脇から腰部にかけて丸味を持ちながら立ち上がっていき、体部中位から口縁部にかけてはわずかな外反を示す。

口唇部は尖り気味である。釉は高台内・外底面を除く全面施釉で透明釉。素地は白色で微細な黒色粒子を少量混入する。堅緻である。17世紀以降に属する資料。く-54、第2層出土。16は口縁部が直口状をなす資料である。口唇部は平坦な造りとなる。釉は淡緑色の透明釉で、素地は灰白色で多量の微細な黒色微粒子を混入する。15~16世紀。き-50、第2層。

白磁碗（底部）

白磁碗の底部資料は29点の出土である。高台・外底面の形状・施釉の方法を見ると次のように分類できる。

第Ⅰ類

第18図17の資料で外底面を浅く削るため高台は低く、疊付の幅も狭い。釉は淡緑色を呈し外底面・高台・疊付を含め全面施釉。疊付には細砂粒が付着する。13~14世紀に属する。く-52、第4層の出土である。

第Ⅱ類

第18図18に示すもので高台が断面四角形を呈し、疊付の幅が広い。内底中央に印花文を配する。外底面の削り出しは中心部が盛り上がったまま残す。釉は失透釉。内底面を施釉、外底面は腰下部までを施釉し、外底面から高台脇までを露胎にする。素地は淡黄褐色である。半磁胎。15~16世紀に属する資料。け-50、第3層の出土。

第Ⅲ類

第18図19の資料で、高台形はⅡ類とほぼ同様であるが、疊付の幅はⅡ類に比較して若干狭くなっている。内底面に印花文を配す。釉は灰緑色を呈し、内底面に施釉、外底面は外底面より腰下部までを露胎にする。素地は灰白色を呈する。15~16世紀に属する。く-52、第4層出土。

第Ⅳ類

このタイプをさらに次の2つに細分した。

第Ⅳ類 a

高台形は概ね断面四角形を呈する。第18図20。高台内部の削りが浅いので、底部の器厚が厚くなる。本資料は疊付を二次的に研磨し、安定感を出すように平坦にしている。高台脇より内側と見込み部分を除いて、薄い失透釉を施す。素地は淡黄褐色粗粒子。半磁胎。15世紀。き-50、第4層。

第Ⅳ類 b

第18図21。高台形はaとほぼ同様である。内底面には卍文を配する。外底面の削りは深く、中央部が盛り上がるよう造る。見込み、高台際より内側を露胎にする。き-50 第4層出土。

第V類

第18図22に示した資料である。見込みを圓線で囲み、中央に印花文を配する。釉は高台内面及び外底面を除き、全面施釉。素地は黄白色で粗く、釉色は淡灰緑色を呈する。高台形は高台内が直に、高台際より疊付に向かって斜めに整形されている。疊付は研磨する。き-52、第4層出土。15~16世紀に属する。

第VI類

高台形が逆台形状を呈するもので、第18図23の資料がそれである。厚い失透釉を内面に施した後に見込み部分のみ釉を搔き取る。見込み部には重ね積みによる溶着痕も認められる。外底面、高台際をトピカンナ状に整形した痕跡がある。疊付に研摩痕有り。素地は灰白色を呈する。15~16世紀に位置づけられる。き-57第4層出土。

第VII類

高台部を有しない破片資料が、第18図24である。詳細な形態については判然としないが、内底面に卍文のスタンプが確認される。内底面、外底面とも露胎である。素地は淡い灰白色を呈する。き-50、第4層出土。

白磁皿（口縁部）

白磁皿の資料は57点が出土した。比較的小皿の破片が多く、大振りの皿は見られなかつた。全形の窺える資料は得られなかった。口縁の形状、文様等から次のI~IIIに分類できた。以下にそれぞれの特徴を明記する。

I類 口禿白磁皿（第19図25~28）。

II類 内湾タイプ（同図29~31）。

III類 外反タイプ（同図32~34）。

I類

口縁部を露胎にするいわゆる口禿皿である。特徴的なものを第19図25・26・27・28に示した。20・24・26は口縁部資料で3点とも内面の口縁端部から口唇部の釉をかき取っている。さらにa~cの三種に細分された。25は口縁部が直口状をなすもので口唇部中央付近より内面にかけて、箇による調整を行なっている。その結果内面に明瞭な稜を造る。口縁部下部には一条の沈線を巡らせている。釉色は薄い灰緑色で、素地は淡黄白色を呈する。15世紀。き-52、第3層出土。26は口縁部が内湾するものである。外面口縁端部に波状の隆線文を巡らす。釉色は白色で、素地は黄白色を呈する。17世紀以降に位置づけられる。か-62、第1層。27は外反するタイプである。口縁部外面端部に浅い沈線を巡らす。釉は灰緑色。素地は灰白色を呈する。13~14世紀に属し、こ-49、第2層出土である。28は口禿皿の底部と考えられる資料である。外底面を見ると平坦に仕上げ

られ、ベタ底状をなす。釉は灰緑色、素地は灰白色を呈する。13~14世紀に位置づけられる。き-48、第4層出土。

II類

口縁部が内湾するタイプで3点、これに接続すると思われる底部資料が1点得られている。第19図29は推算口径12.4cmを測る。器形は腰部から口縁部にかけて若干内湾気味に立ち上がっていく。外面にはロクロ痕を残し、断面はゆるやかな波状を呈する。口唇部内面は箒による調整によって平坦に仕上げられており、明瞭な稜線が観察される。釉は灰白色的透明釉、素地は黒色微粒子を多量に含み灰白色を呈する。15~16世紀。か-54、第3層。30は推算口径7.5cmを測り、口唇部が舌状を呈する資料である。29と同様、外面に明瞭なロクロ痕を有する。釉は灰白色、素地中に多量の黒色微粒子を含む。15世紀。く-50、第3層。31は挿入高台皿の底部資料で、高台径が4.1cmを測るものである。重ね焼きをするために、高台に4つの抉りを入れた皿で、切り高台や割れ高台と呼称される。見込み部分には同種の皿との重ね焼きを示す目跡が4ヶ所に観察され、そこだけが長方形状に無釉となっている。疊付には他の皿との溶着痕が認められる。外底面の削り出しが中心部が盛り上がったまま残す。釉は白色。素地には黒色微粒子を少量含み白色を呈する。き-50 第4層出土。

III類

口縁部がわずかに外反するタイプで3点が得られた。第19図32は口唇部が尖り気味のものである。薄い失透釉を施釉。素地は灰白色で黒色微粒子を少量含む。17世紀以降に位置づけられる。き-51、第3層。33も尖り気味の口唇部である。薄い透明釉を施釉する。15~16世紀。さ-58、第1層。34は口唇部が舌状を呈する資料である。腰下部を除き全面を失透釉で施釉し、腰部直上に釉溜りを有する。釉色は灰白色、素地は淡灰白色を呈する。表探資料。

白磁皿（底部）

第19図35、36、37の3点は白磁皿の底部資料である。35、36は疊付に砂目積みの跡を残し、いずれも釉は白色を呈する。また体部と外底部の器厚はほぼ同様で0.3cm~0.4cmを測り細い。15~16世紀に属する。35は、き-49第3層。36は、く-52第2層出土。37は外底部にスタンプ文を配し、釉及び素地は灰白色。く-51第4層の出土。

白磁壺

第19図38・39の2点は白磁壺の破片資料である。39は有文の胴部資料で、外面に文様を施すが細片のため判然としない。釉は灰緑色。素地は灰白色を呈し、黒色微粒子を少量含む。15世紀頃に属する。く-52第4層出土。38は底部破片で、推算口径9.0cmを測る資料である。内体面に灰黄色の釉を施釉。外底面から腰下部まで露胎にする。疊付は中央部より内側を平坦に仕上げ、外側を斜めに削り出している。断面部には黄白色・

灰白色の2種が観察され、焼成不良の状態を示している。半磁胎である。15~16世紀に属する。く-52第3層。

白磁瓶

瓶は口縁部破片1点（第19図40）と胴部破片2点（同41・42）が得られた。3点とも無文の資料である。40は推算口径3.8cmを測る。釉色・素地とも白色。き-50第1層の出土である。

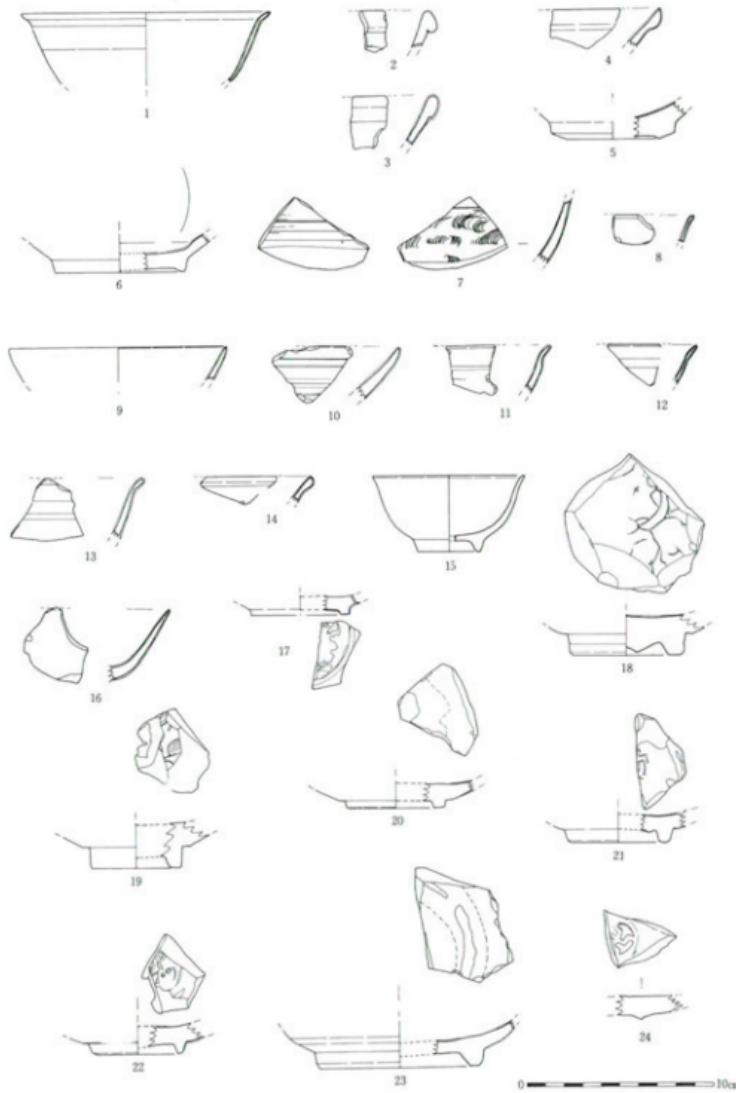
41・42は長頸瓶の破片と見られる。41は灰白色で素地は白色を呈する。表探資料である。42は灰緑色を呈し、素地が黄白色を帯びる。き-50第3層出土。3点とも17世紀以降に位置づけられる。

青白磁碗

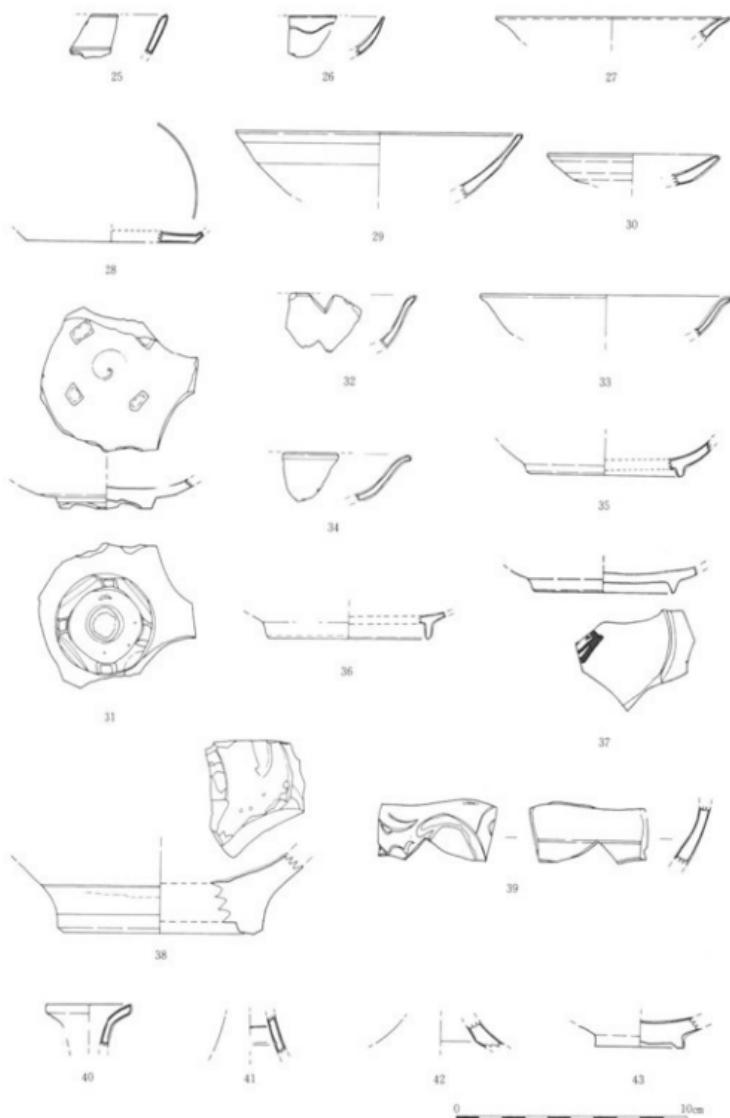
第19図43は青白磁碗の底部資料と考えられるものである。豊付より外底面までを露胎にし、それ以外を淡青緑色の釉薬で全面施釉とする。素地は淡黄褐色で、胎土に微細な黒色粒子を多量に含有する。13~14世紀に位置づけられる資料である。け-51第3層の出土。

小 結

以上、白磁について特徴的な資料を取り上げてきた。ここでは前述のまとめとして、本遺跡における白磁器の出土状況について若干ふれてみたい。本遺跡ではビロースクタイプの碗、口禿皿等の出土があったが、これらは大略して13~15世紀頃中国で製作されたものである。このように古手の資料を見た限りにおいては、白磁の出土ピークは13~15世紀となる。この事は本遺跡のすぐ横にグスク時代の遺跡である阿波根グスクが立地していることにも深く関連すると思われる。両遺跡の中心を線で結ぶと100メートルも離れていないという極めて近接した状況にある。出土ピークが示すことは、本遺跡が阿波根グスクのテリトリーの中にあったことを窺わせるものとなっている。阿波根古島遺跡の持つ意義を考える一つの材料となり得るであろう。（長嶺 均）



第18図 白磁碗（I類1, II類2～6, III類7, IV類8, V類9・10, VI類11～14, VII類15・16）、
白磁碗底部（I類17, II類18, III類19, IV類20・21, V類22, VI類23, VII類24）



第19図 白磁皿口縁部（I類25~28、II類29~31、III類32~34）、
白磁皿底部（35~37）、白磁壺（38・39）、白磁瓶（40~42）、青白磁碗（43）

(4) 褐釉陶器

褐釉陶器は14・15世紀～17世紀以降に位置付けられる資料で、判明した器種は壺・鉢・碗の三器種であった。壺の口縁形態は豊富であるが、出土量は極めて少ない。

イ) 壺 形

壺形は小破片が多く、口縁の形態も豊富であった。肥厚の大きさや口径等で、I～III類に分類した。(第20・21図)。

I 類 壺

I類壺は口径が7.5cm～10.5cmの範囲内に収まるものである。口縁形態では肥厚するものと肥厚しないものをA・Bの二者に大別し、必要に応じて細分した。

A. 肥厚するタイプ

このタイプは口縁の形態や成形からa～cの三種に分けられ、各1点ずつ得られた。

a種は口縁の縦断面を「フ」の字状に成形したものである。

第20図1は口径11.5cmを測る壺で、口縁が軽く内側へ倒れる。口縁の肥厚は三角形状となる。口唇は幅広に成形する。素地は灰白色の粗粒子、釉色は茶黒色。き-51第4層。

b種

b種は玉縁状に肥厚し、肥厚帯下から頸部の間を削り取るものである。

同図2に示す資料である。口径10.0cmを測る壺である。口唇は丸味を帯びる。

素地は淡灰色で、粗粒子。釉色は淡茶色。釉は大半が禿げ落ちる。く-51第4層。

c種

c種は長頸壺で、口縁が僅かに肥厚するものである。

同図3は口径7.5cmを測る資料で、口唇は平坦である。素地は淡橙色の細粒子。釉色は明茶色。釉は口唇を除く、両面に施す。く-50第4層。

B. 肥厚しないタイプ

このタイプも口縁の形態や成形からa・bの二種に分類した。各1点ずつ出土している。

a種

本種は直口に近い形態を有し、肥厚しないものである。

同図4の口径は7.0cmで、口唇は平坦に成形する。素地は灰白色で細粒子。釉色は茶褐色。釉は口唇下から下に施釉。表採。

b種

本種は口縁を内湾させ、口縁と頸部の距離が非常に短かいものである。

同図5の素地は淡橙色の細粒子。釉色は黄灰色。釉は両面に施釉。せ-50第3層。

II 類 壺

II類壺は口径が13.0cm～15.0cmの範囲に収まるもので、2点のみ得られた。口縁形態

や成形からA・Bに分類した。

A. 肥厚するタイプ

本タイプは頸部で軽く屈曲させ、口縁を肥厚させる。

同図6は口径10.7cmを測る資料で、肥厚帯下を軽く削る。口唇に胎土目の目痕が見られる。素地は灰白色の細粒子。釉色は灰褐色。釉は口唇の外端を除いて両面に施す。〈-51第4層。

B. 肥厚しないタイプ

このタイプは内側にきつく内傾するものである。

同図7は口唇から1cm下を削り、口縁を造る。口径は17.2cm、素地は淡橙色の細粒子、釉は口唇を除く、両面に記す。け-51第2層。

III 類 壺

III類壺は口径が16.0cm~22.0cmの範囲に収まるタイプであり、I類と同様に口縁形態は豊かである。口縁形態や成形等から細分を試みた結果、a~cの三種に分けられた。

a種

a種は口縁の縦断面が「フ」の字状に成形され、口唇が幅広となる。龍文の壺の口縁。第20図8は頸下部に縦位の耳を貼付ける。文様は陰團線を3本廻らす。釉色は黄緑色で、外面口縁から下に施す。口唇は露胎。内面に釉垂れ。素地は灰白色的粗粒子。か-54第4層。

b種

b種は口縁の縦断面が四角形状あるいはそれに近い肥厚を呈するものである。

同図9は口径16.0cmを測り、頸下部で折れる。口唇は幅広で、露胎する。釉色は茶黒色。釉は外面が肥厚帯下端から下に、内面は口唇から下に施す。素地は灰白色的粗粒子。

同図10は口径16.3cmを測った資料である。肥厚の形状は四角形状を呈する。釉色は濃茶色。口唇および両面に施釉、素地は淡黄色の細粒子。き-51第2層。

第21図11は上記10と同様のタイプである。釉は火を受け氣孔状となる。釉色は黒褐色で、口唇と両面に施す。素地は淡灰色の粗粒子。こ-49第2層。

c種

c種は口縁の外反がきついもので、口唇部を摘み出して肥厚させる。

同図12の素地は淡紫色の粗粒子。釉は黒色。頸下部から下に主に釉が施されている。内面は全釉。き-50第5層。

同図13は口唇の外端を下に強く摘み出して突出させる。口唇に沈線を2本廻らす。釉色と施釉の手法・素地などは上記12と一致する。き-53第3層。

口) 鉢 形

鉢形は1点のみ得られた。同図14は全体的に逆「ハ」の字状に聞く点などから浅鉢形に近い器形となっている。口縁内面を玉縁状に肥厚させる。素地は淡黄色で微粒子であ

る。釉色は茶褐色。口唇を除く、両面に施釉。く-51第3層。

八) 碗 形

碗形は底部を含めて3点が得られた。底部の2点は高台も有する資料であった。

同図15は口縁破片で、口径13.5cmを測る。口縁を僅かに外反させる。釉色は黄緑色で両面に施す。素地は灰白色の粗粒子、焼成は悪く、脆い。き-48第3層。

同図16は底部破片資料で高台径6.0cmを測った。全体的な成形は雑である。釉は黄緑色で内面に施す。素地は淡灰色の細粒子。く-51第4層。

二) その他の資料

同図17に示した胴部である。蓮弁と花の文様を浮文で表現する。素地は灰白色の微粒子。型物とみられる。釉は茶色や淡黄色を施す。施釉の面からは三彩の手法に近い為、検討をする。き-62第1層。

木) 底部資料

底部はI類壺に属すると考えられるものが3点、II・III類に属する資料が5点得られた。鉢形の出土はなかった。

I類壺底部は第21図18に示す例で、底径8.4cmを測った。素地は灰白色的粗粒子。釉は外面の胴下部まで施す。II・III類壺は同図19・20に示すものである。同図19は底径14.8cmを測った。底面からほぼ垂直に立ち上がり、途中で外側に開く。灰黒色の釉を両面に施す。底面のみ露胎。素地は灰白色的細粒子。く-50第4層。同図20は底径16.0cmを測る。淡茶色の釉を外面と底面に施す。底面の釉は薄い。底面に重ね焼きの際の粘土が付着する。素地は灰白色的粗粒子。き-53第3層。

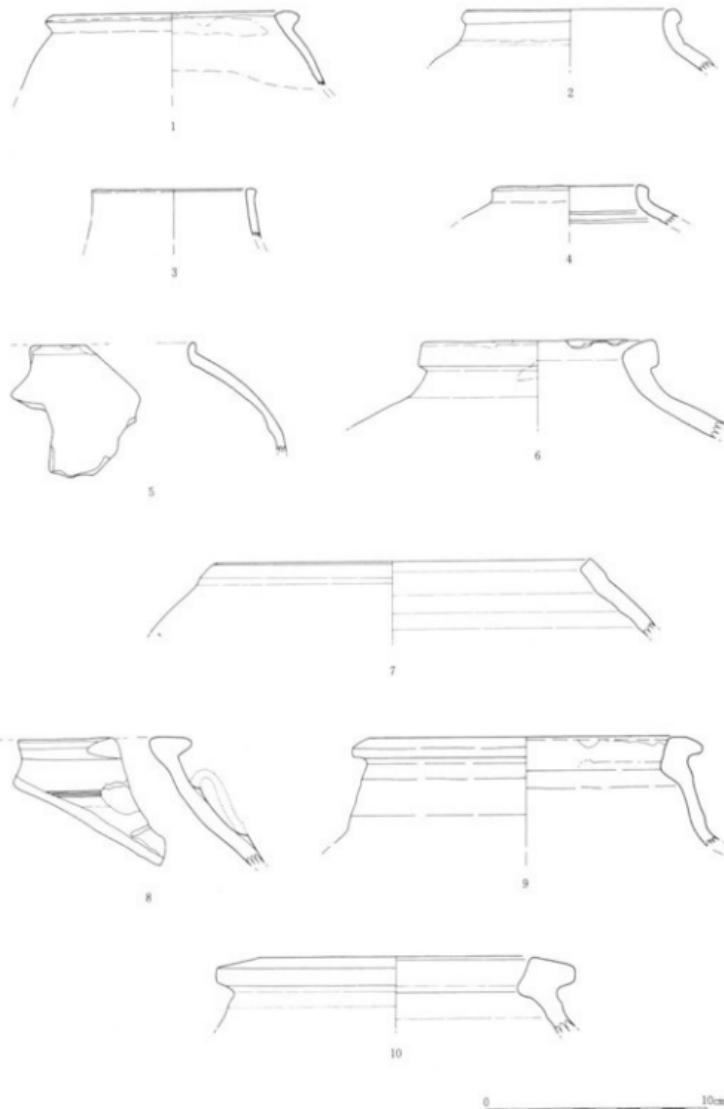
資料のIII類壺aは与那原遺跡^(註1)や新里村遺跡^(註2)で出土した龍文の壺の口縁と同一系統である。新里村^(註3)の例では14世紀前半まで遡ることが確認されている。碗形の例は県内で初めての資料であり、今後の資料に期待したいところである。(金城亀信)

註

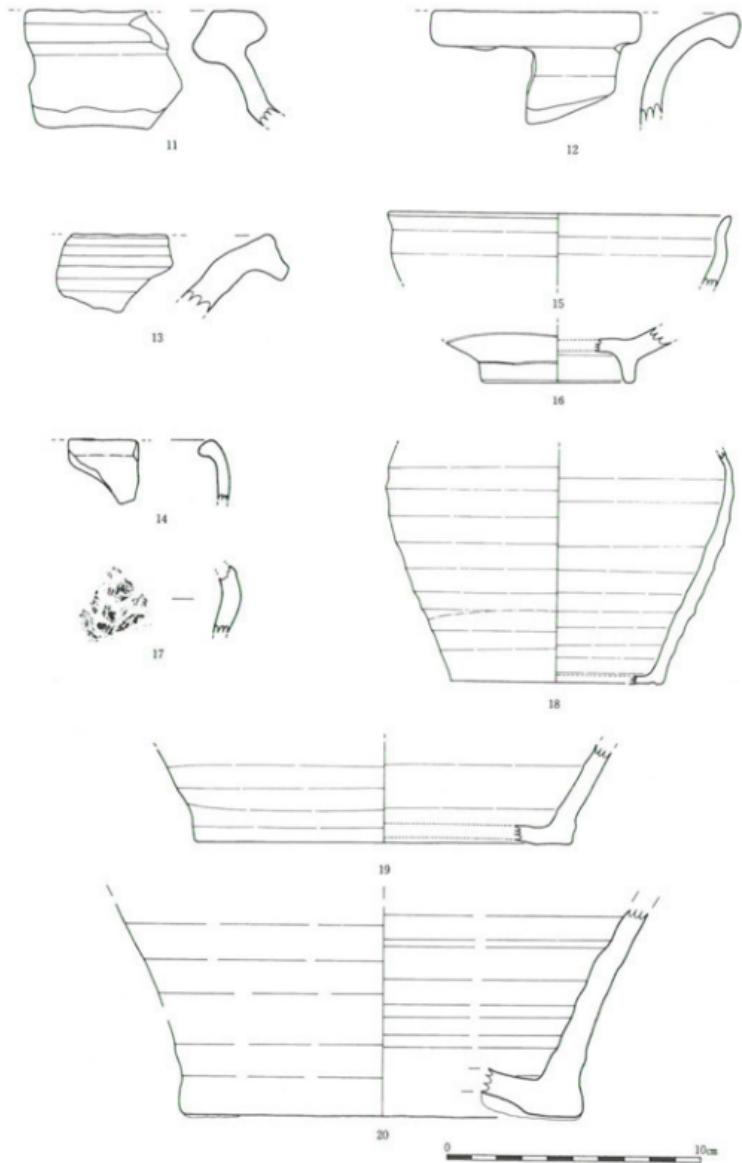
註1 金城亀信『与那原遺跡』与那国町教育委員会 1988年。

註2 新里村遺跡の資料整理で確認。

註3 註2と同じ。



第20図 褐釉陶器 (I類1~5, II類6・7, III類8~10)



第21図 楢釉陶器（Ⅲ類11～13、鉢形14、碗形15・16、その他17、I類底部18、II・Ⅲ類底部19・20）

(5) 須 惠 器

須恵器は全て破片資料で39点を数えた。口縁3点・底部2点であった。破片から推定された器種は壺形のみであった。

イ) 口縁資料

第22図1は外反口縁破片である。口縁内面が窪み、口唇は尖る。外面口縁は口唇から凸帯間を箆で成形する為、擬似肥厚となる。肥厚帯下と内面に回転擦痕が認められる。芯部は茶褐色。素地に石灰質の微砂粒が混入。け-51第2層。

同図2も外反する肥厚口縁である。口縁を玉縁状に肥厚させる。両面に回転擦痕がみられる。芯部は灰褐色。素地に石灰質の微砂粒が混入する。こ-49第2層。

同図3は比較的大きい口縁破片で、外反する。口縁端を摘み出して微弱な肥厚を造る。両面とも回転擦痕。芯部は茶褐色、素地に石灰質の微砂粒を混入。か-54第3層。

ロ) 頸・胴部の資料

頸・胴部の資料で、波状文の文様を施す例は8点得られた。調整には平行叩き、交差叩きが見られる。叩き目には平行線、格子目状が残存するが、大半は消されている。

同図4は頸・胴部の破片で、胴部の外面に格子目、内面は平行線の叩きを交差させている。叩きの大半は消されている。芯部は茶褐色、石灰質の微砂粒を混入。く-50第4層。

同図5も頸・胴部の資料である。外面は回転擦痕が主であり、叩きの痕跡が僅かに認められる。内面は平行叩きが交差し、格子目状となる叩きを消す。芯部は茶褐色・石灰質の微砂粒を混入。き-54第3層。

同図6は頸・胴部の破片である。外面は回転擦痕のみ認められる。内面は飛びカンナ状に回転削りと擦痕がみられる。芯部は茶褐色。素地に石灰質の微砂粒を混入。け-57第2層。

同図7は内面に平行叩きが交差し、これを消す。芯部は灰褐色。き-54、第3層出土。8は外面に茶褐色の釉を施す。内面にも釉垂れがある。内面は円形状の當て具痕が観察できる。芯部は灰褐色、く-49第4層出土。7・8は石灰質の微砂粒等を混入させる。

第22図9は外面に格子目叩きが顯著に残る資料である。内面を丁寧に仕上げる為、調整方法が判然としない。芯部および両面は灰白色、素地に黒色鉱物・ガラス質の鉱物を多く混入させる。焼成は資料中最も悪く、脆い。調整手法・素地などから九州を含めた以東地域から搬入された須恵器であろう。き-52第4層。

ハ) 有文胴部

有文胴部は7片得られた。文様は波状文のみ観察できる。第22図10~17に図化したも

のである。残存する波状文は2条～4条まである。

内面の器面調整をみると、回転擦痕のみのものは10・12・14・15である。格子目の叩きを擦痕で消す例は11・13・16・17がある。芯部が茶色系統が10・11・13・16、灰色系統が14・15・17である。素地に石灰質微砂粒を混入させる例は7点とも共通する。10はき-50第4層、11はき-52第4層。12はく-51第3層、13はく-50第3層、14はき-52第4層、15はき-50第3層、16のみ表採。17はき-51第3層。

二) 底部資料

底部は2点のみ得られた。18・19に示す資料である。18は底径8.9cmを測る資料で、外面を回転の遅い箇削りで仕上げる。内面も回転の遅い段階で、調整する為、部分的に飛びカンナ状の調整となる。僅かながら格子目叩きが認められる。底面は雑な削りで仕上げる。芯部は茶褐色。石灰質の微砂粒。石英を微量に混入させる点で他の資料と異なる。き-48第4層。19は外面と底面を箇削り後にナデ消す為、面が滑らかとなる。内面は回転擦状が認められる。芯部は茶褐色。素地に石灰質微砂粒等を多量に混和させる点が18と共通する。く-53第2層。

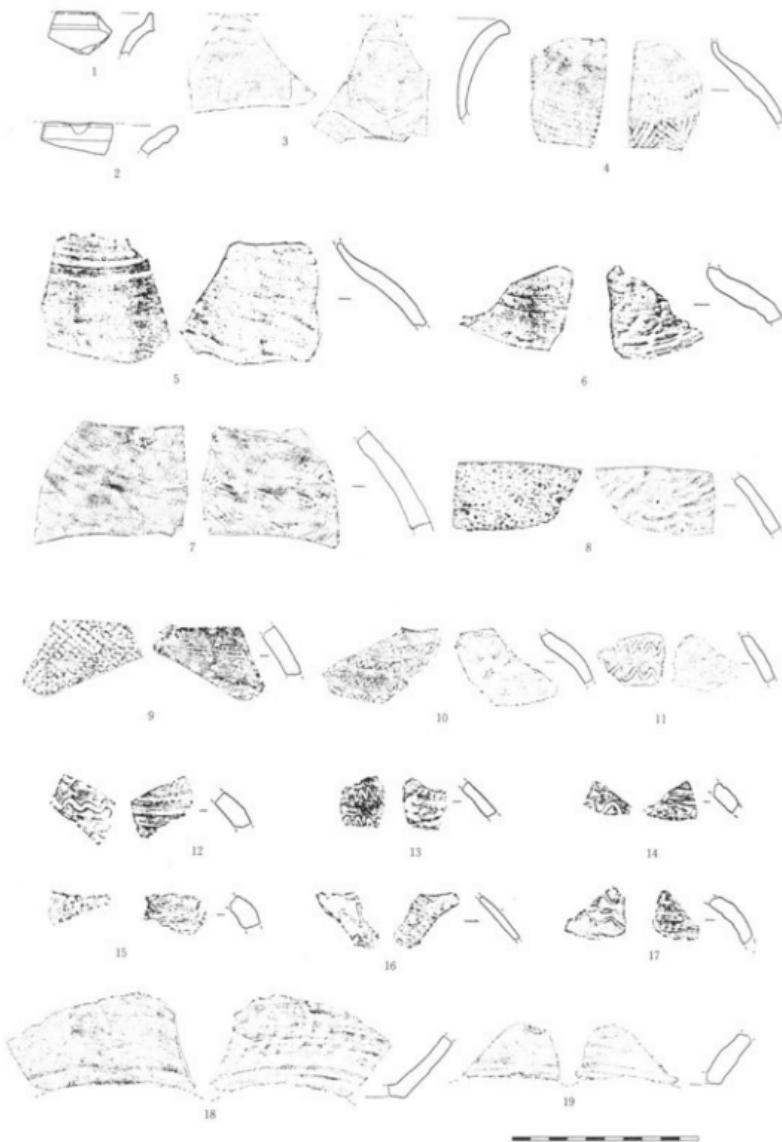
第22図1に図示した資料は伊原遺跡^(註1)などで出土し、口縁形態や器形が類似する。同図2の類例は稻福遺跡^(註2)などで出土例があり、器形や口縁形態で共通する。有文胴部の例はフェンサグスク貝塚^(註3)・大里伊田慶名原遺跡^(註4)などで出土例がある。胴部資料の9は素地や混入物からカムイヤキ古窯跡群以外の窯で焼かれた資料であり、九州を含めた以東の地域で製作された須恵器であろう。また、第22図8の資料は池田栄史氏の教示によれば、内地産であり、外面の軸は鉄軸に近い（ドロ軸）ものを施している。

この種のものは、これまでに報告例がないので、今後の資料の発見に期待したい。

（金城亀信）

註

- 註1 大城慧・島袋洋ほか『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986年。
- 註2 当真嗣一・大城慧ほか『稻福遺跡発掘調査報告書（上御願地区）』沖縄県教育委員会 1983年。
- 註3 友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサグスク貝塚調査報告」琉球大学法文学部紀要 社会篇 第13号 1969年。
- 註4 湖城 清『大里伊田慶名原遺跡』糸満市教育委員会 1983年。
- 註5 新東見一・青崎和憲『カムイヤキ古窯跡群 I』伊仙町教育委員会 1985年。



第22図 須恵器（口縁 1～3，頭・胸部 4～9，胸部10～17，底部18・19）

(6) タイ陶器

タイのサワンカローク窯系の袋物が出土している。破片は4点得られ、時期的には15・16世紀に位置づけられる資料である。

第23図1は袋物の蓋か身の部分か判らない資料である。外面に黒色の釉で文様を描いた後に薄い透明釉を施す。内面は露胎。素地は灰白色の粗粒子で、細かい黒色の鉱物片を多量に含む。文様の構図は判らない。き-51第3層出土。

同図2も袋物の破片である。復元直径10cm。文様や施釉の手法は1と同じである。内面は露胎。素地は淡い灰白色。細かい黒色鉱物を多量に含む。か-53第3層。

同図3も袋物の破片である。文様の構図は小破片の為不明。釉や器色は1・2と比べ悪い。素地は淡灰色の粗粒子。細かい黒色鉱物を多量に混入。き-52第3層。

同図4は袋物の底部である。外面に鉄釉を施す。内面には薄い透明釉（白色釉）が施され露胎面がみられる。高台内面と外底面は露胎する。素地は灰白色粗粒子で、比較的粗い黒色鉱物を多量に混入させる。く-50第3層出土。高台脇での復元直径は7.5cm。

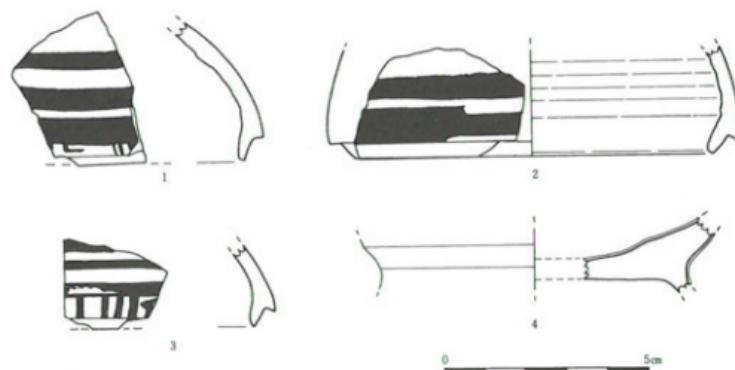
タイ陶器の出土例は伊原遺跡^(註1)や今帰仁城跡^(註2)で出土していて、特に底部資料は素地・施釉の方法が今帰仁城跡^(註3)出土の例に近い。（金城亀信）

註

註1 大城慧・島袋洋ほか『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986年。

註2 金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会 1985年。

註3 註2と同じ。



第23図 タイ陶器（袋物の蓋か身 1～3, 底部 4）

(7) 緑釉水注

緑釉水注は、すべて破片で総数17片を数えた。轆轤成形の水滴と型物の水注があった。形状には仙蓋瓶形・長胴丸壺形・鴨型・鶴型などの他に水注の蓋がある。なお、形状分類に際しては、亀井明徳氏の論文^(註1)を参考にして、便宜的に名称を設けた。

イ) 仙蓋瓶形水注

この種の破片とみられるものは4点が得られており、いずれも頸下部から胴上部に位置する破片で、圈線を廻らす。この種の完形品は、浜の館跡^(註2)・元仲筋古墓^(註3)などがある。

第24図1は頸・胴部の破片であり、注口が貼付けられている。頸部と胴上部を区別する為の圈線を廻らす。釉色は淡緑色を呈する。釉は外面のみ施す。轆轤成形で、内面に繰り目と回転擦痕が認められる。き-51第4層出土。

同図2の頸・胴部破片も注口の貼付け破片である。頸下部と胴上部の境いに圈線を廻らす。釉色は明緑色で、外面のみ施す。轆轤成形で、内面に回転擦痕が認められる。き-52第4層出土。

同図3も頸・胴部の破片である。頸下部と胴上部の境いに圈線を廻らす。釉色は明緑色。施釉は外面のみ。轆轤成形で、内面に回転擦痕。第4層出土。

ロ) 長胴丸壺形水注

この資料に属するとみられる破片は一点のみであった。同図4は口縁近くの破片で、線彫りの蓮弁文の弁先が残る。釉は淡緑色を帯びる。外面のみ施釉。轆轤成形で内面に回転擦痕が認められる。く-49第3層出土。

ハ) 鴨型水注

第24図5に図示した底部破片である。文様は底面の立ち上がりと胴下部に沈文が施されている。釉は淡緑色で、外面の底面近くまで施す。型物で、底面の内外面に指圧痕などが見られる。内面の成形は雑である。く-50第4層出土。

二) 鶴型水注

第24図6に図示した資料である。波状文と鶴の尻が残っている。釉は淡緑色。外面のみ施す。内面には指圧痕が観察される。型物。き-50第3層出土。

ホ) 蓋

蓋の資料は1点のみ得られた。同図7は塔型鉗付の蓋とみられる。轆轤成形である。鉗の部分を貼付た痕跡がある。文様は蓋中央付近に深い沈線を廻らす為、この箇所は段

状になる。釉色は明緑色の透明釉。内面は露胎土。き-48第4層出土。

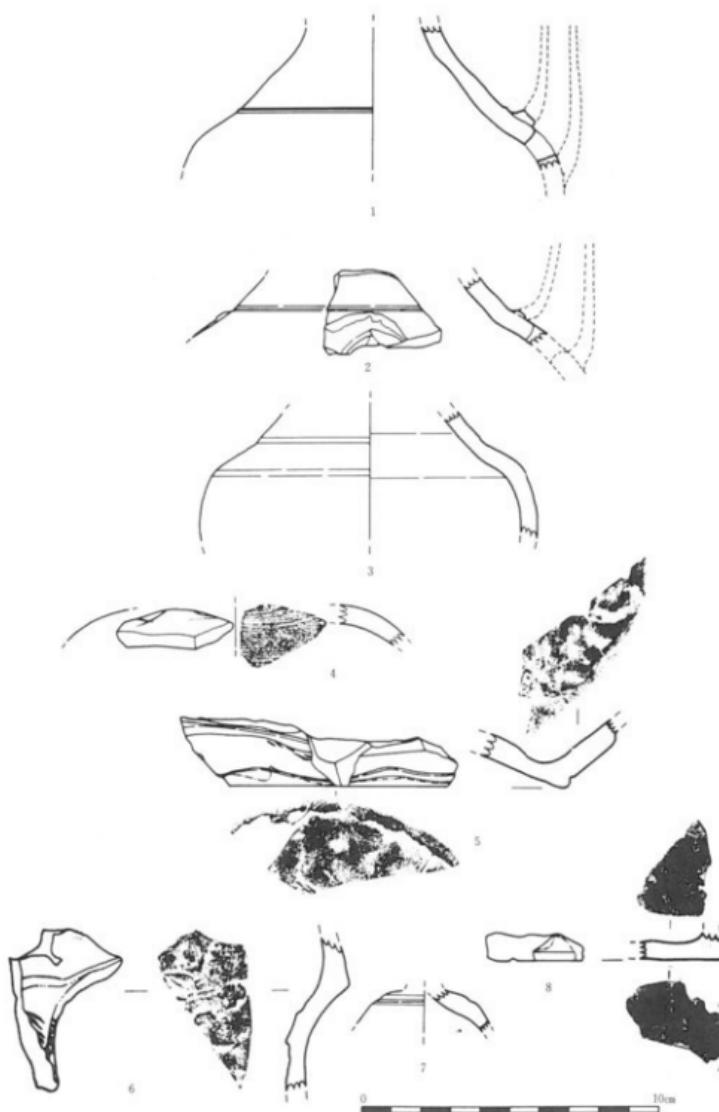
八) 底 部

同図8に示したもので、型物の底部である。鶴型か鶴型の底部が考慮される。釉は淡緑色で、底面近くまで施されている。指圧痕が両底面に認められる。く-53第2層。

緑釉水注の資料で、長胴丸壺形水注・鶴型水注・鶴型水注は県内で初めて得られたものである。今後の発見・出土に期待されるところである。蓋の例は首里城跡^(註4)で出土しているようである。時期的には16世紀に位置付けられる資料である。参考までに阿波根古島遺跡出土の緑釉陶器の残存部位と三彩鶴型水注を第25図に示す。(金城亀信)

註

- 註1 亀井明徳「明代華南彩陶をめぐる諸問題」三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁編
三上次男博士喜寿記念論文集編集委員会 1985年。
- 註2 桑原憲彰他『漬乃館—阿蘇大宮司居館跡一』 熊本県教育委員会 1977年。
- 註3 大浜永亘「石垣島・仲筋村の古墓出土の緑釉水注について」 Circum Pasific 第7号 1977年。
- 註4 鎌倉芳太郎『セレベス 沖縄 発掘古陶瓷』国書刊行会 1976年。



第24図 緑釉水注（仙蓋瓶形1～3、長胴丸壺形4、鴨形5、鶴形6、蓋7、底部8）



第25図 阿波根古島遺跡出土の綠釉陶器の残存部位と三彩鶴型水注。
1～3は『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館発行をトレース。

(8) 三彩水注

三彩水注の破片は4点得られた。従来、知られていた琴高仙人型・琴高乘鯉のような物とは異なるものである。これまでに県内では南山城跡の鶴型水注^(註1)・首里城跡の鶴型水注^(註2)などが出土している。伝世品では豊見城村にある鶴型水注^(註3)の大型破片がある。

第26図は人型水注の胸部破片である。人間の胸・腹・右腕の付根の部分である。胸には鬚と右乳房が見られる。腹の部分には虎と波状文のある腹巻様（武具）の帯が観察できる。釉色は淡緑色・淡黄色・白色で、外面にのみ施す。内面に指圧痕が認められることがから型物であることが推定される。く-52第4層出土。

人型水注は、全国的に見ても類例がなく、全国で初めての出土である。今後の発掘調査や類例資料の増加が期待される。（金城亀信）

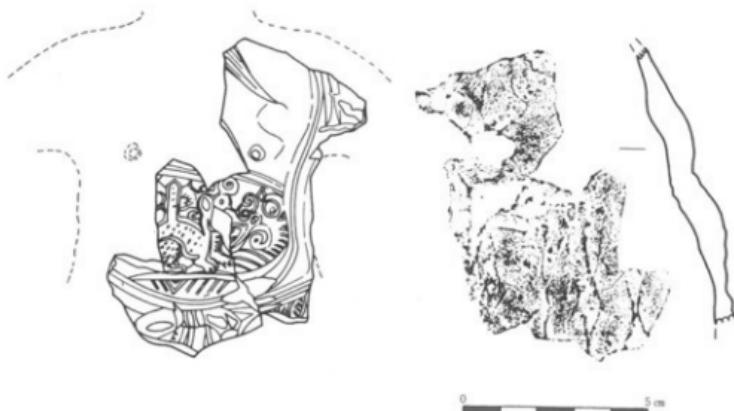
註

註1 亀井明徳「明代華南彩陶をめぐる諸問題」三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁編
三上次男博士喜寿記念論文集編集委員会 1985年。

・糸満市教育委員会の湖城清氏から御教示を戴いた。

註2 鎌倉芳太郎『セレベス・沖縄 発掘古陶瓷』国書刊行会 1976年。

註3 金城亀信・長嶺均ほか『豊見城村の遺跡』豊見城村教育委員会 1988年。



第26図 三彩水注（人型）

(9) 瑠璃釉

瑠璃釉は5点のみ出土した。いずれも小破片である。器種は壺と小杯であった。

第27図1は壺の胴部破片である。素地は灰白色で、粗粒子である。釉は外面が濃青色。内面は白色。内面は轆轤で削り出して段を造る点は壺特有の成形技法である。16世紀に位置づけられる。くー51第4層。

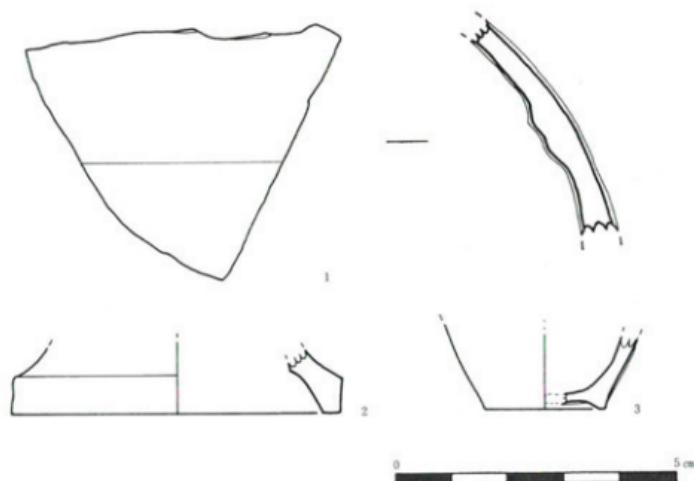
同図2は瓶などの高台破片で、高台径は5.8cmを測った。素地は白色で、細粒子である。釉は外面と疊付けのみに施す。釉色は濃青色。釉の大半は禿げ落ちる。16世紀。表採。

同図3は小杯の資料で高台径は2.1cmを測る。素地は白色で、微粒子である。釉は全面に施す。釉色は外面が濃青色、内面は淡青白色。疊付けの釉を若干、掻き取る。17世紀。表採。

瑠璃釉の出土では、本島南部地域では報告例がないので、将来に期待したい。県内では今帰仁城跡^[註1]などで出土している。(金城亀信)

註

註1 金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会 1983年。



第27図 瑠璃釉（壺胴部1, 高台片2, 小杯片3）

(10) 染付

染付は時代別に区分して記述する。時期的には15世紀後半～17世紀以降のものまで含まれているので、便宜的に以下の様に分類した。(第28～30図)。

- A群：15世紀後葉～16世紀中葉に多く出土する染付
- B群：16世紀中葉～16世紀末に多く出土する染付
- C群：16世紀後葉～17世紀中葉以降に多く出土する染付
- D群：A・B群の時期に位置付けられる染付

イ) A群染付

A群染付は碗・皿を中心とするもので、玉取獅子・芭蕉葉文・唐草文などを施す。この種のものには、15世紀後葉～16世紀中葉以外のもので、15世紀に位置づけられるものも含めてある。

碗

第28図1～3は芭蕉文を外面に施すものである。1は口径13.1cm、2は高台径4.5cm、3は高台径5.5cmを推算する資料である。いずれも第4層の出土である。

同図4は唐草の花部を口縁・胴部に描くものである。口径11.6cmを測る。第2層出土。

同図5・6は蓮子碗(レンツー碗)の底部で5点得られた。この中の2点を図示した。5は高台径5.4cmを測る資料である。釉は全面施釉後に疊付と疊付の内外下端のみ搔き取り露胎にする。6は5と同様な手法で疊付と内外下端を搔き取る。5は第3層出土。6は第4層の出土である。

同図7は外面に亀甲文とくずれた蓮弁文を施す碗の底部である。高台径4.8cm。第4層。

皿

同図8は見込みに玉取獅子の文様が見られる端反りの皿である。口径12.4cm、高さ2.6cm、高台径6.9cmを推算する。第3層出土。

同図9は見込みに十字花文(?)を描く資料である。第3層出土。

碁笥底皿

同図10・11は同一系統のもので、10の口縁に波濤文帯を外面に施す。口径4.0cm。11は芭蕉文を外面に描く、見込みにねじ花を描く。10は表採。11は第3層出土。

同図12は内面見込みに圓線と唐草文(?)を描く、高台径4.2cmを推算する。第3層出土。

ロ) B群染付

B群も碗・皿を主体とする。寿文字や梅・鳥の文様などを施す。この中には16世紀中葉以外のもので、16世紀代に位置づけられるものを含めた。

碗

第29図13は外面に寿字文を描く。口径の推算は12.4cmを測る。第2層出土。この種の破片は3点得られ、1点は第2層、他は第4層で出土している。

同図14は梅・鳥文を外面に描く。端反りの口縁碗で、他に2点得られている。1点は第3層出土で、本資料は第2層から出土している。

同図15は口縁近くの破片で、外面に花文を施す。第2層出土。

同図16は高台径5.3cmを測る。内面見込みに「火」の文様を描く。外底面を深く削る。釉は豊付から外底面は露胎する。素地は淡黄色粗粒子で、焼成は悪く、脆い。第3層出土。

同図17は底面の破片で、内面見込みに人物を描く。第4層出土。

皿

同図18は見込みに花樹（？）文を描く皿で、高台径6.4cmを測る資料である。第4層出土。

同図19は見込みに漫頭心文を描き、高台径5.5cmを測る。第3層出土。

同図20は稜花皿様に口唇を整形する。内外面に渦文と圈線を描き文様帶を造る。表採。

同図21は見込みに花文を描く、高台径4.6cm。第4層出土。

小杯か基筒皿

同図22は小杯か基筒皿の口縁である。外面に唐草文・内面にくずれた雷文を描く。第4層出土。

八) C群染付

c群の16世紀後葉から17世紀中葉以降に出土するグループで、碗・皿・小杯などの器種がある。碗については素地・釉色などからa～c類に分けた。

碗a類

碗a類は直口口縁を主体とする。成形が確で橈轆痕が顕著に認められる。

素地が白色で半磁胎傾向の強いものが多い。半磁胎の場合は微粒子のものが多く、そうでないものには微細な黒色の鉱物を含む。釉は内外面の高台際まで施す。内底面に重ね焼きの目痕がみられる。文様は渦文や唐草文を施す。呉須は淡青・淡黒色・淡茶色である。釉は淡黄色や淡青色の透明釉を施す。同図23～27。

碗b類

碗b類は素地が灰白色のものを主とし、焼成はa類よりも良く、硬い。素地は微粒子で、微細な黒色鉱物を含む。釉は高台の内外面の途中まで施す。外底面は全釉する。内底面は輪状に搔き取る。内底面に重ね焼きの目痕が観察できる。文様は唐草文を施す。呉須は青緑色。釉は灰青・灰白・淡青色の透明釉を施す。第30図28～30。

碗c類

碗c類は端反りの碗と内湾する碗・直口する碗があり、端反りの碗と直口する碗が各19点出土した。内湾のものは10点得られた。大半が小破片で、文様の構図が不明瞭であ

る。この中で構図の判明したものや大きい破片を図化した。素地は白色で、微粒子のものがほとんどである。呉須は濃淡のある青色を主体とする。釉は淡青色や青白色の透明釉を施す。

第30図31は唐草文（？）を描き、僅かに外反する碗である。口唇は面取りされ、稜が明瞭に残る。第1層出土。

同図32は雷文と唐草文を描く。端反りの碗である。Bトレンチ出土。

同図33は花文（？）を縦に並べた文様を描く。内面に草花文（？）を縦線で区切る。第3層出土。

同図34には内湾する碗で渦文唐草文（？）の一部が描かれている。内面口縁に圈線を一条。第3層出土。

同図35は直口する碗で内面に花樹文（？）を描く。第2層出土。

同図36・37・38は同一系統の小碗である。外面に茶色の釉を口縁から高台外面まで施す。内底面に花樹文、外底面に文字を描く。36第1層、37第2層、38石列遺構。

小杯

小杯は24片が得られた。

同図39は端反りの口禿げの小杯である。口径5.4cm、器高3.0cm、高台径2.5cmを測る資料である。簡素化した唐草文を描く、第4層出土。同図40も端反りの小杯で、外面に鳥と樹を描く。第4層出土。同図41は直口口縁の小杯。外面に唐草文を描く、第3層出土。

二) D群染付

D群染付は瓶・腰折皿・鉢で所属時期が特定出来ない資料である。

同図42は瓶の底部で外面に蓮弁文を描く。素地は灰白色の微粒子。第3層出土。

同図43は玉取獅子様の文様を施す。鉢である。外面は片彫りの蓮弁文を範彫りで施す。大振りの皿である。第4層出土。

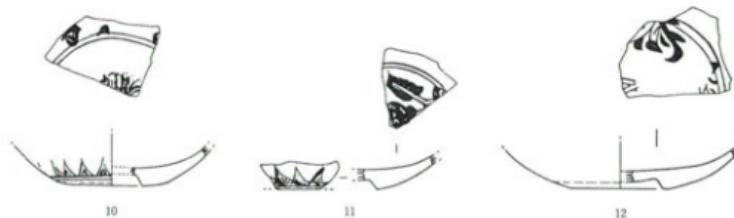
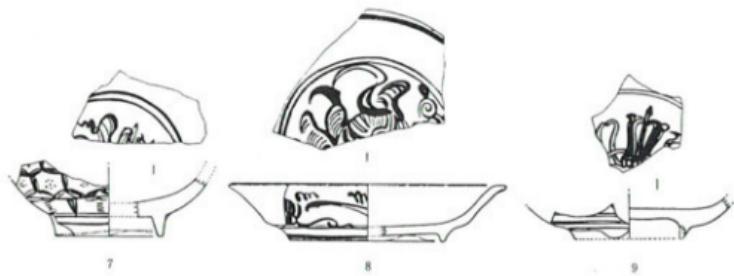
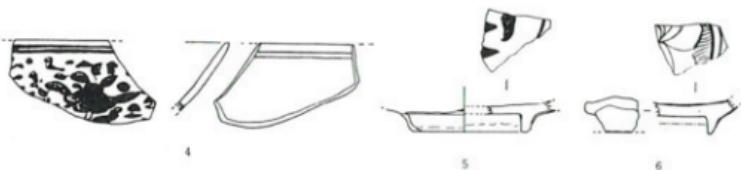
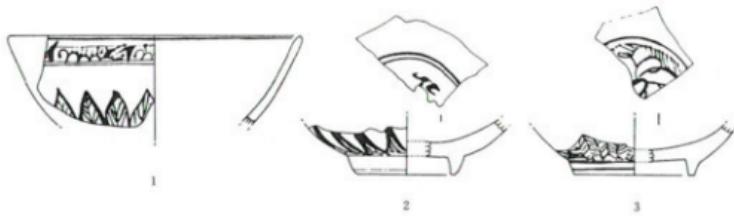
以上が染付の碗・皿類などである。A群皿の玉取獅子は県内では出土例が少なく、類例は湧田窯跡^(註1)で出土している。B群碗の寿字文を施す例は牧港貝塚^(註2)・渡名喜島^(註3)などで出土している。(金城亀信)

註

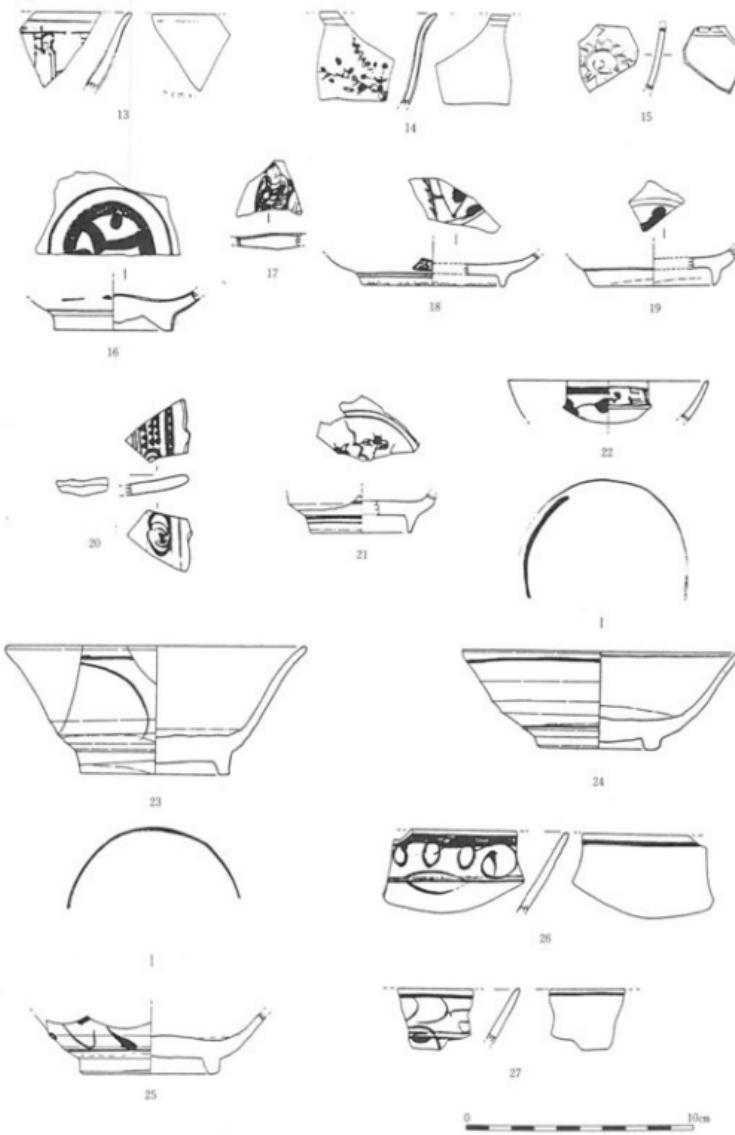
註1 湧田古窯の調査担当者のひとりである島袋洋氏の教示。

註2 大城慧ほか『牧港貝塚・真久原遺跡』沖縄県教育委員会 1985年。

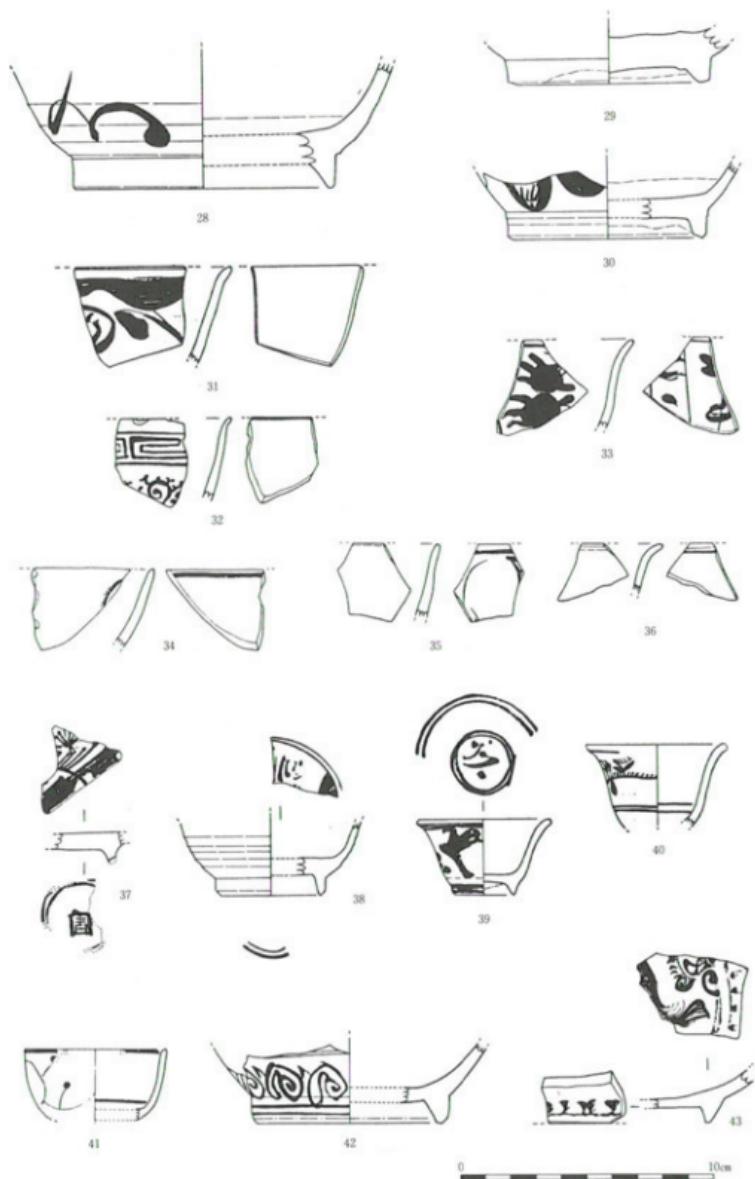
註3 沖縄学生文化協会『郷土(渡名喜島・与那城村伊計島)調査報告』第17号 沖縄大学 1979年。



第28図 染付 (A群 1~12)



第29図 染付 (B群13~22, C群碗a類23~27)



第30図 染付 (C群碗b 28~30, C群碗C類31~41, D群42・43)

(11) 陶質土器

陶質土器とは、辘轳成形によって仕上げられたもので、主に近世の集落跡（古島）などから多く出土するものである。窯業者あるいは窯業経験者が中心となって製作されたと考慮されるものである。この手の土器は伊良波西遺跡^(註1)・稻福遺跡^(註2)などで得られている。

出土した陶質土器の器種は、土鍋・火舎・急須・手水鉢の4種であった。以下、土鍋・火舎の順に記述する。（第31・32図）。

a) 土 鍋

土鍋は口頸部が「く」の字状に折れ、口縁に把手を貼付けるものである。この鍋には蓋が付属することが知られている^(註3)。壺屋で言う、「サークー」である。

第31図1は推算口径21.3cmを測るもので、口縁に把手が貼付けられた痕跡が認められる。口縁が若干、内側に曲り、蓋が受けられる様に成形されている。色調は両面とも淡黄色を呈する。口縁に煤が残存する。調整は器面が磨耗する為、特定できないが類例資料から回転擦痕が考えられる。胎土は細かく、焼成は良好。微細な雲母片・有色物質・石灰質微砂粒を混入させる。こ-49第2層出土。

同図2は推算口径17.1cmを測る資料である。口縁が「く」の字状に折り曲る。残存部分から器高はあまり高くない様である。調整は外面口縁が回転擦痕・頭下部から胴に回転箝削り？が施される。内面は回転擦痕で仕上げる。色調は外面淡黄色、内面淡灰色。胎土は細かく、焼成は良好である。微細な雲母片・石灰質の微砂粒を混入させる。く-49第3層。

同図3は口縁に把手を貼付けた資料である。器厚に比べて、異様な大きさの把手である。口縁は回転擦痕を内外に施す。色調は両面とも淡黄色を呈する。胎土は細かく、焼成は良く、硬い。微細な雲母片・石灰質の微砂粒を混入させる。こ-49第2層出土。

同図4は鍋の蓋とみられるもので、直径19.2cmを測る。外面は回転箝削り後に擦痕を施している様である。内面は回転擦痕のみ。色調は両面とも淡黄色。胎土は細かく、焼成は良好である。微細な雲母片・有色物質・石灰質の微砂粒を混入させる。く-39第1層。

同図5は蓋の把手として考えられる資料である。丁度、皿の高台を伏せた感じである。把手の直径は6.5cmを測る。把手の製法は皿を造る際の要領で製作されている。外面の把手は削りと切り離しの糸切りが残る。内面中央に「の」字様に指押さえの痕跡が残る。微細な雲母片・有色物質・石灰質微砂粒・石英が混入する。胎土は細かい。色調は淡黄色。こ-49第2層。

b) 火 舎

火舎は口縁の形態が他の器種より多く、目立つ。口縁が「フ」の字状に折れるものや口縁を内側に内湾させるものなどがある。基本的にはa～cの3形態に分類できる。胎土は精選され、焼成も非常に良く、硬質なものが多い。

イ) a類：口頸部を「フ」の字状に折曲させる。底部はベタ底である。

第31図6は口縁を「フ」の字状に折曲させ、肩部に沈縁を二本施す。口径11.1cm・器高11.0cm、底径9.2cmを測る。底部はベタ底である。口唇と口縁内面に煤が付着する。外面は磨耗する。内面に轆轤痕を主に回転擦痕を口縁に残す。器色は両面とも淡黄色。胎土は精選焼成は堅緻。細かい雲母・有色物質を混入させる。コグリッド第2層。

同図7は口径14.7cmを測る資料で、口縁を「フ」の字状に折り曲げる。同図6と文様や成形方法等が一致する。肩部に有孔の把手を貼付ける。煤が口唇と口縁内面に残る。器色は淡黄色。胎土に微細な雲母・有色物質・貝片を混入させる。焼成は堅緻。さ-54第1層。

ロ) b類：鉢形様の器形で、口縁を玉縁状に肥厚させる。

同図8に図化したもので、鉢形様の器形である。口縁を玉縁状に成形する。口縁内面に土鍋などを受ける為の突起を貼付ける。また、胴中央に有孔の把手を貼付けている。外面に施釉の痕跡あり、元来の色は不明。轆轤痕の目に釉が白く残る。口径13.5cmを測る。外面は箝削りで成形し、胴上部を若干、削り出して頸部と区別する。内面は回転擦痕のみ認められる。胎土は精選。焼成は堅緻。微細な雲母片・石灰質の微砂粒を混入。く-59第1層。

ハ) c類：内湾口縁で、高台を持つものである。

同図9は内湾口縁で、高台を削り出して製作する。口径13.7cm・器高10.3cm・底径8.4cm。口唇に煤が付着する。外面に釉を施した様である。釉色は元来の色は判らないが、白色となっている。胴上部に有孔の把手を貼付ける。外面は口縁から高台脇まで箝削り、内面は回転擦痕。胎土は精選。焼成は堅緻。き-49第3層石列遺構。

同図10も内湾口縁で、口縁内面に三角状の突起を貼付ける。突起の先端に煤が付着する。外面に轆轤を施した後擦痕で消す。内面は回転擦痕を主体に指圧痕を施す。器色は両面とも淡茶色。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。微細な雲母・石灰質の微砂粒等を混入する。表採資料。

c) 急 須

急須の注口・口縁（身）・把手・蓋・脚が得られている。硬質のものと軟質の胎土がある。硬質のものは火舎と同じ素材である。軟質のものは土鍋と同様な素材を用いている。

第32図11は注口である。注口の下部には煤が付着する。注口はナデ仕上げ、内面に轆轤痕が認められる。器色は両面とも淡黄色、胎土は細かい。微細な雲母片・石灰質の微

砂粒を混入させる。表採資料。

同図12は急須の身の部分で、器壁が3mm前後と薄い。口径は8cm。口縁端部を外反させる。両面とも轆轤痕を主に擦痕が見られる。焼成は堅緻。器色は外面が淡茶色、内面は明橙色。胎土は精選され、微細な雲母片と石灰質の微砂粒を混入させる。くー59第1層。

同図13は身に貼付ける把手資料で、孔が穿たれている。外面ナデ、内面は轆轤痕が認められる。器色は外面が淡黄色、内面は明橙色を帯びる。胎土は精選され、微細な雲母や石灰質の微砂粒を混入する。焼成は堅緻である。表採資料。

同図14は急須の蓋である。頂部に宝珠の把手を造る。頂部から端部へゆるく丸味を保持しながら移行する。内側には身受けの鈎がある。鈎の下端の復元直径は6cm。外面に削りと擦痕がある。内面は擦痕のみ施されている。器種は両面とも明橙色。胎土は良く、硬い。細かい雲母や有色物質・石灰質の微砂粒が混入する。こー49第2層。

同図15は急須の脚として考慮できた資料である。外面に円錐形の脚を貼付ける。内面に擦痕、外面はナデを施す。器色は外面は淡黄色、内面が明橙色。胎土は精選され、微細な雲母片や石灰質の微砂粒を混入させる。くー53第1層。

d) 手 水 鉢

手水鉢は1点のみ得られた。第32図16は口縁を内湾させる。器厚も口縁部で厚くなる。櫛描きの波状文と沈線文を施す。内外面とも回転擦痕が認められる。器色は外面が黄茶色。内面は淡橙色を帯びる。胎土は精選され、焼成も堅緻である。微細な雲母片や石灰質の細粒を混入させる。表採資料。

e) 器種不明

同図17は脚台などが考えられるが類例がない為、器種不明とした。底径10.7cmを測る。底部は深く削り込んで、掲げ底状に形成する。両面とも丁寧にナデを施す。器色は外面と底面が淡黄色。内面が明橙色を帯びる。胎土は精選され、焼成も堅緻である。微細な雲母片や石灰質の微砂粒を混入させる。くー49第3層出土。

同図18は底部破片で、底径8.7cmを測る。高台は内外面および外底面を削りで成形する。疊付けに糸切り痕が認められる。立ち上がりの部分から丸味を保存しながら胴部へ移行する。外面は釉を施した痕跡があり、白色となっている。外面箇所削り、内面擦痕。器色は淡黄色、胎土は細かい。微細な雲母片、石灰質の微砂粒・有色物質を混入させる。火舍c類の底部？。くー49第3層。

同図19は大振りの底部片で、底径11cmを測る。ベタ底で、底面に糸切り痕が残る。底面からの立ち上がりの箇所に箇所で削り出して、くびれさせている。胴部へは直線的に移行する。外面は箇所削り、内面が擦痕。器色は淡黄色。胎土は精選され、焼成も堅緻である。微細な雲母・有色物質・石灰質の微砂粒を混入する。表採資料。

同図20は底径7.9cmを測る資料で、底面から丸味を保持しながら内側へ縮る。ベタ底で、糸切りの痕跡が認められる。器面は全体的に摩滅する。内面に轆轤痕が観察できる。器色は両面とも淡黄色。胎土は細かく、微細な雲母・石灰質の微砂粒・有色物質を混入させる。焼成は良好。石敷遺構第3層。

同図21は底径10.4cmを測った資料である。底面から直線的に立ち上がり、内側に強く、閉じる。器面は外面が磨耗、内面は轆轤痕、底面に糸切り痕が観察できる。器色は淡黄色。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。微細な雲母片・有色物質・石灰質の微砂粒を混入させる。〈-49第3層（石列遺構）。

以上が陶質土器の報告である。火舎c類の中には釉を施した痕跡が認められている。この様に釉を施した例は我謝遺跡^(註4)、親富祖遺跡^(註5)などで知られているが、火舎の例は初めてであろう。火舎c類の出土例は、伊良波西遺跡^(註6)でも出土しており、今回の資料で火舎の器種が豊富に存在することが判明した。また、火舎の胎土は精選され、焼成も他の器種より良く、硬い点が注目された。これは火を良く使うために耐火も兼ねて、他器種より良質の素地で製作していた可能性が高くなった。（金城亀信）

註

註1 安里嗣淳・島 弘・大田宏好ほか『伊良波西遺跡』豊見城村教育委員会 1986年。

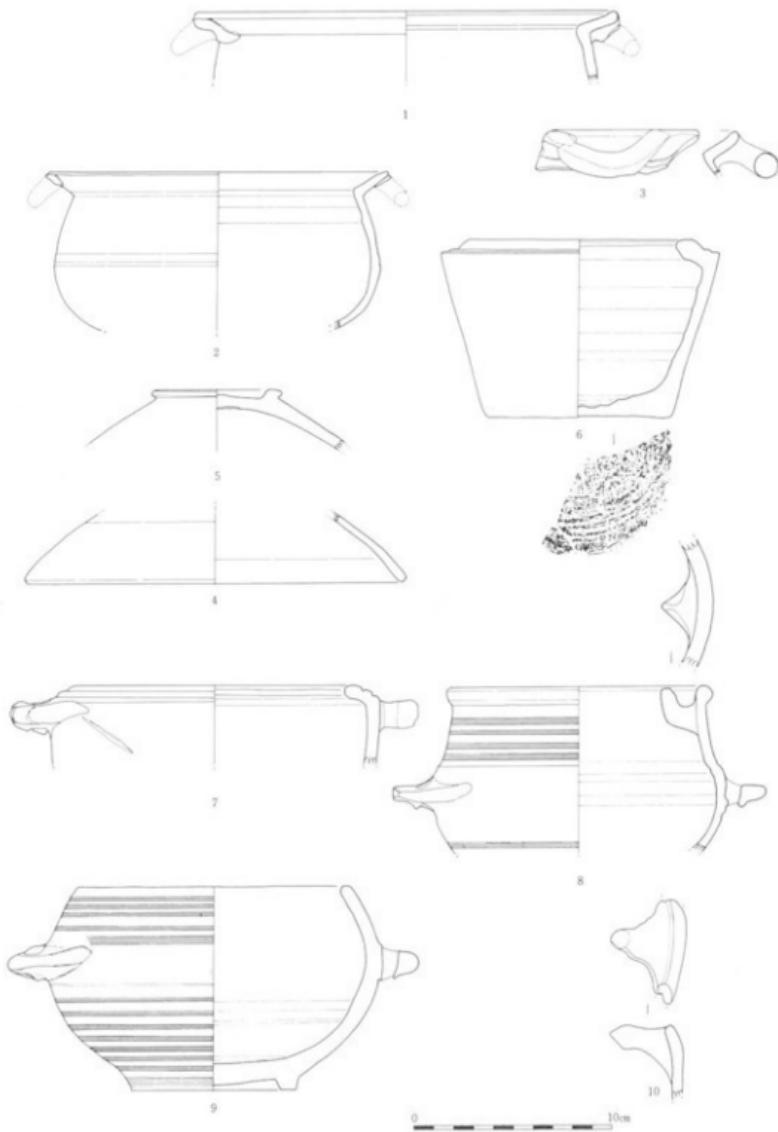
註2 安里進ほか『稻福遺跡』琉球考古学研究会 1974年。

註3 沖縄県教育委員会『県内漆器・陶器遺品調査報告書（歴史資料調査報告書Ⅲ）』 1980年。

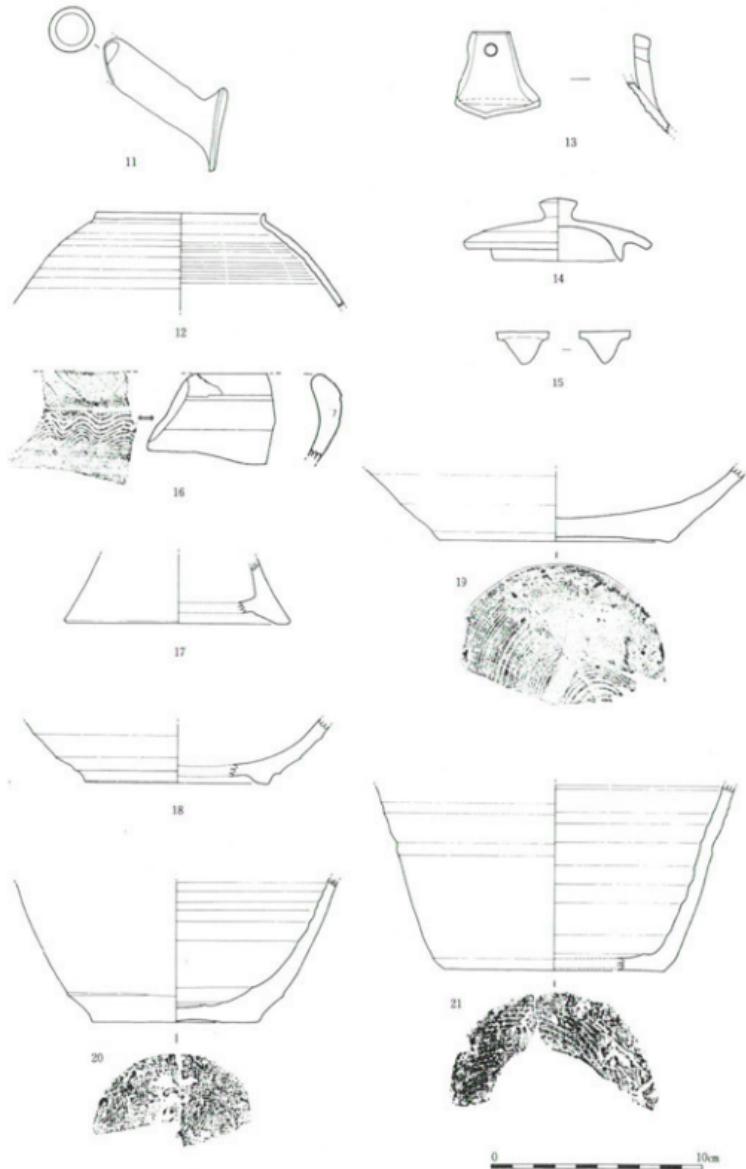
註4 大城慧ほか『我謝遺跡』西原町教育委員会 1983年。

註5 下地安広『親富祖遺跡』浦添市教育委員会 1983年。

註6 註1と同じ。



第31図 陶質土器（鍋形1～5, 火舍a類6・7, 火舍b類8, 火舍C類9・10）



第32図 陶質土器（急須11~15, 手水鉢16, 底部17~21）

(12) 瓦質土器

瓦質土器は37点得られた。器種としては壺形・鉢形・擂鉢などがある。いずれも小破片である。

第33図1は外反口縁の壺である。口唇外端は尖り、内端は若干、丸味を帯びる。器面の保持が悪く、調整方法が判らないが、外面はナデとみられる。器色は淡灰色。素地にガラス質の鉱物・黒色鉱物を微量混入させる。き-54第4層。

同図2は鉢形とみられる口縁破片で、ゆるく外反する。口唇は丸味を帯びる。口縁内面に沈線を施す。外面の口縁に擦痕、胴部に右から左方向に範削りの痕跡が認められる。これらの状況から回転台を使用して製作した可能性もある。器色は淡灰色。素地にガラス質の鉱物・有色物質を微量に混和させる。く-51第4層出土。

同図3は擂鉢の胴部片で、8条一組の縦沈線文が残存する。外面はナデとみられる。器色は両面とも淡黄色を帯びる。き-48第3層出土。

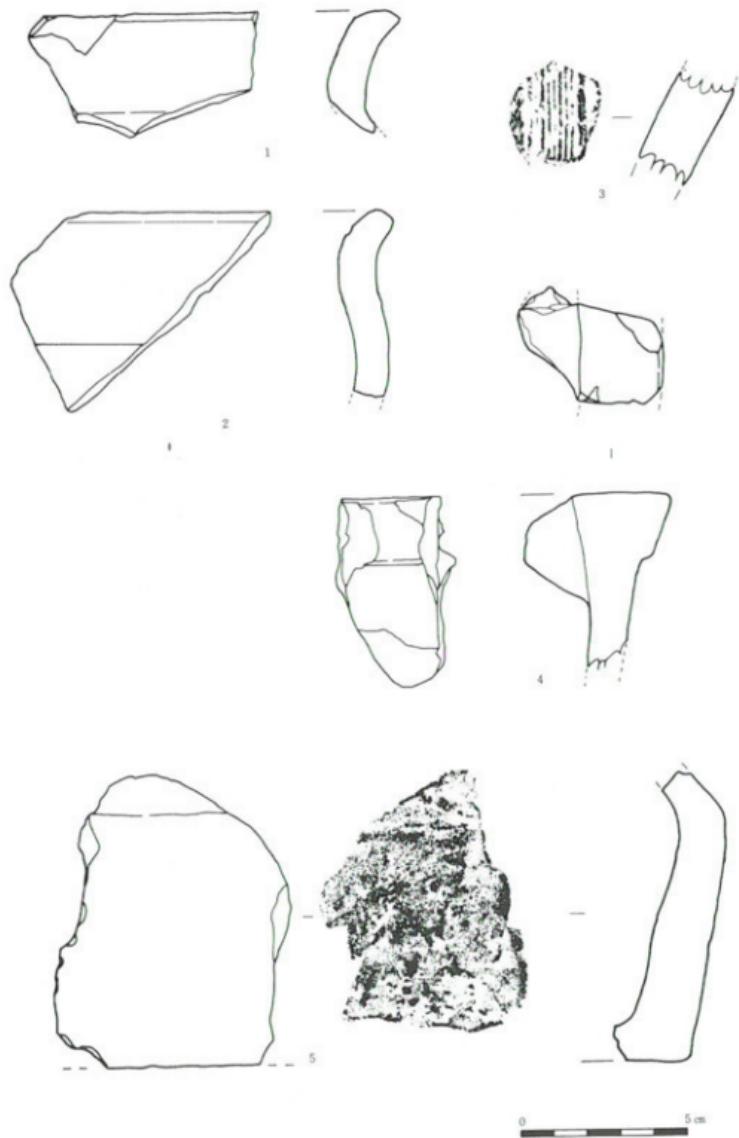
同図4は火鉢とみられる破片である。口縁を段状に肥厚させ、肥厚帯下は施状工具で丁寧に成形する。内面には突起状のコブが貼付けられている。内面は煤がコブの周辺に付着する。器色は外面が明橙色を帯びる。胎土にガラス質の鉱物・石灰質の砂粒・有色物質を混入させる。こ-42第2層出土。

同図5は底部破片である。胴上部で「く」の字状に内側に折れる。器形が推定できない資料でもある。器色は両面とも淡黄色。胎土にガラス質の鉱物・有色物質を少量混入させる。こ-50第1層出土。

この手のものはグスク時代から近世まで出土するようである。グスク出土のものには外面に菊花文を施す例があり、勝連城跡^(註1)、浦添城跡^(註2)などで得られている。我謝遺跡^(註3)の例では鍋形や器台(?)などがある。グスク期に登場する瓦器は鎌倉時代の遺跡からも出土している。例えば千葉地遺跡^(註4)が知られている。グスク期の瓦質土器は、本土の瓦器そのものが持ち込まれたかあるいは模倣して登場してきたものとして今のところ考えられる。湧田古窯^(註5)で、手水鉢が検出されている点などから、近世のものは県内で製作されたものと類推された。また、素地などの面からも裏付けられた。(金城亀信)

註

- 註1 安里嗣淳・大城秀子ほか『勝連城跡（－南貝塚および二の丸北地点の発掘調査－）』勝連町教育委員会 1984年。
- 註2 当真嗣一・上原 静・下地安広ほか『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市教育委員会 1985年。
- 註3 大城慧ほか『我謝遺跡』西原町教育委員会 1983年。
- 註4 千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』1982年。
- 註5 湧田窯発掘調査後の資料で、島袋洋氏らによって確認されている。1989年。



第33図 瓦質土器（壺形1，鉢形2，擂鉢3，火鉢4，底部5）

(13) 本土産陶磁器

磁器と陶器の2者が含まれる。陶磁器の総数は37点が得られている。この中から特徴的なものについて以下に記述する。

磁 器

九州・佐賀県の伊万里系の焼物である。碗、皿、瓶の10点を図化した。

第34図1は小振りの碗で、器外面に草花文を描く。2・3は小皿の資料である。2は推算口径8.0cm、底径3.3cmを測る。内面全体に草花文を描く。3は推算口径が13.0cmで内面に二条の線を斜めに交差させた文様を描く。素地は1・2・3共白色で、黒色の微細な粒子を少量含む。

第34図4・5は頸～肩部にかけての瓶の資料である。4は器外面に3条の圓線を境にして2列の網目文を描くものである。網目文は比較的幅が狭くその先端は尖る。5は肩部に2条の圓線を巡らし、その下部に文様を有するが、小片のため構図等については不明である。4の釉色は乳白色を呈する。頸内面上部までを施釉、下半は無釉で轆轤痕を顯著に残す。5は灰白色を呈する。素地は4が白色、5が灰白色。6は底部資料である。外面に文様の一部らしきものを残すが判然としない。高台外面に一条の圓線を巡らす。素地は灰白色。白色の釉を施した後、疊付を搔き取る。

第34図7・8も頸～肩部にかけての器外面に草花文を描いた瓶の破片資料である。7は器内面に明瞭な轆轤痕を有し、素地は白色で微細な黒色粒子を含む。9・10は碗の底部資料で、9の底径が5.8cm、10は4.7cmを測る。9は内底面に草花文、10は十字の崩れた文様を配する。素地は9・10共灰白色で、微細な黒色粒子を少量含む。

陶 器

唐津焼系

唐津系の焼物で碗・鉢・皿・瓶の資料計9点について略記する。

碗

灰釉碗と鉄釉碗の底部資料が各1点ずつである。

第34図11は釉を内面及び外面腰部まで施す。外底面の削りは浅く、疊付には糸切痕を残す。見込みには重ね焼きを示す目跡が3ヶ所確認され、若干窪んでいる。推定高台形が4.9cmを測る。素地は灰青色で粗粒子。4層出土。同図12は鉄釉碗の底部資料である。内底面は窪む。外体部中央までを施釉するが、高台際まで釉だれが残る。腰部を腰折状に箇調整する。素地は灰青色で粗粒子。これらは16世紀後半～17世紀初頭に位置づけられる。4層出土。

皿

3点の灰釉皿が得られている。第34図13は外底面を上げ底状に削り出すが、浅いため底部器厚は厚くなる。釉色は灰白色。素地は淡茶褐色。高台径は4.0cm。4層出土。14

は釉色が灰緑色は呈する。内底面は周囲に比べ一段窪んで造る。釉を腰部まで施すが、高台際まで釉だれを残す。高台径5.0cm。4層出土。15は釉色が灰青色を呈する。内底面が顯著に窪む。推算高台径が4.5cmを測る。4層の出土。これらの皿類は16世紀後半～17世紀初頭に属する。

鉢

鉢類には灰釉鉢と刷毛目の鉢がある。

第35図16は灰緑色を呈する灰釉鉢である。外面腰部には明瞭な轆轤痕を残す。外底面の削りは雑である。素地は灰白色で、黒色微粒子を多く含む。推定高台径5.0cmを測る。4層出土。17・18は胴部資料で刷毛目を有するものである。両者とも素地は褐色を呈する。17は表採、18は3層の出土である。

瓶

第35図19は灰釉の瓶で底部資料1点が得られている。唐津焼である。素地は灰褐色を呈し、有色鉱物が多数含まれる。内底面はU字状に窪み、中央部に釉だれを残す。外底面は平坦に仕上げられ糸切痕を残す。3層の出土。16世紀後半～17世紀初頭に属する。

内野山窯産（唐津焼系）

内野山窯産の陶器が得られた。その中から碗1点、皿2点、香炉1点について略記する。

碗

第35図20は青緑釉（胴緑釉）を施す碗の底部資料である。釉薬は高台外面中途より外底面までを除き施釉する。所々で青白色に発色する部分が見られる。疊付には砂目積みの跡が残る。素地は灰白色を呈する。4層出土。

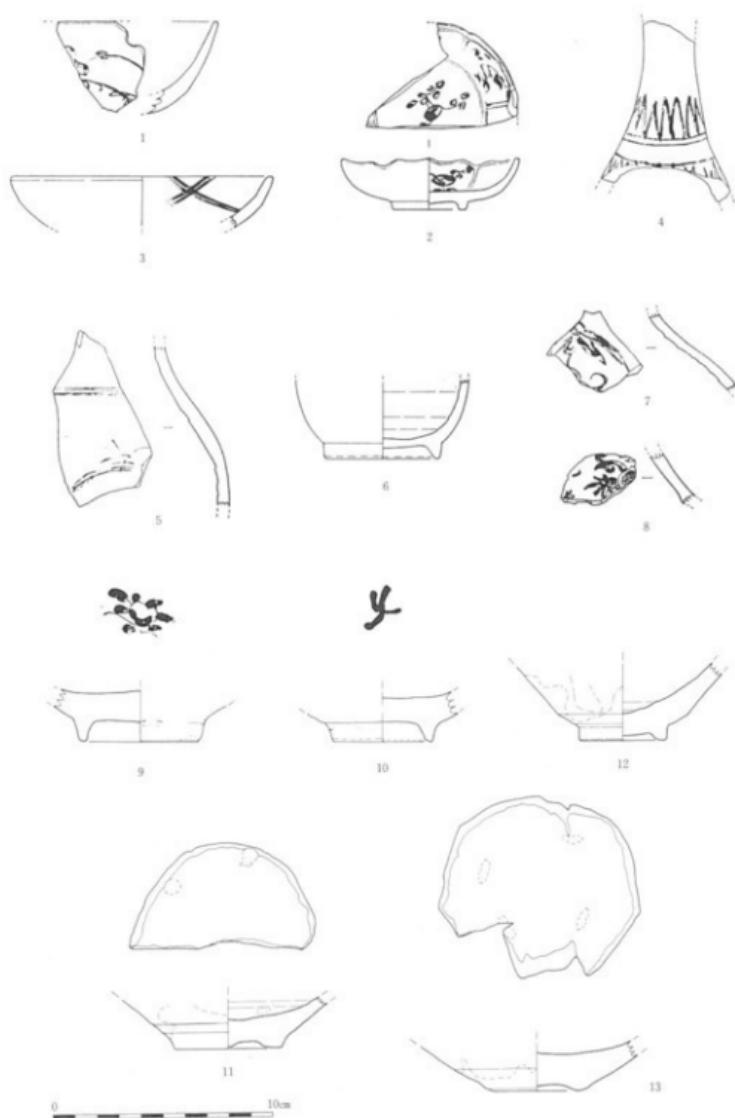
皿

第35図21は皿の口縁部資料である。全体的に灰緑色を呈するが、一部青白色に発色する。外面には轆轤痕が明瞭に残る。内底面は施釉後丁寧に搔き取り露胎にする。素地は灰白色。3層の出土である。22は推算高台径5.2cmを測る底部資料である。内面には青緑釉を施し、内底面を蛇ノ目状に搔き取っている。外面は透明釉で高台際まで施す。疊付外端を小さく面取りする。素地は淡黄白色を呈する。

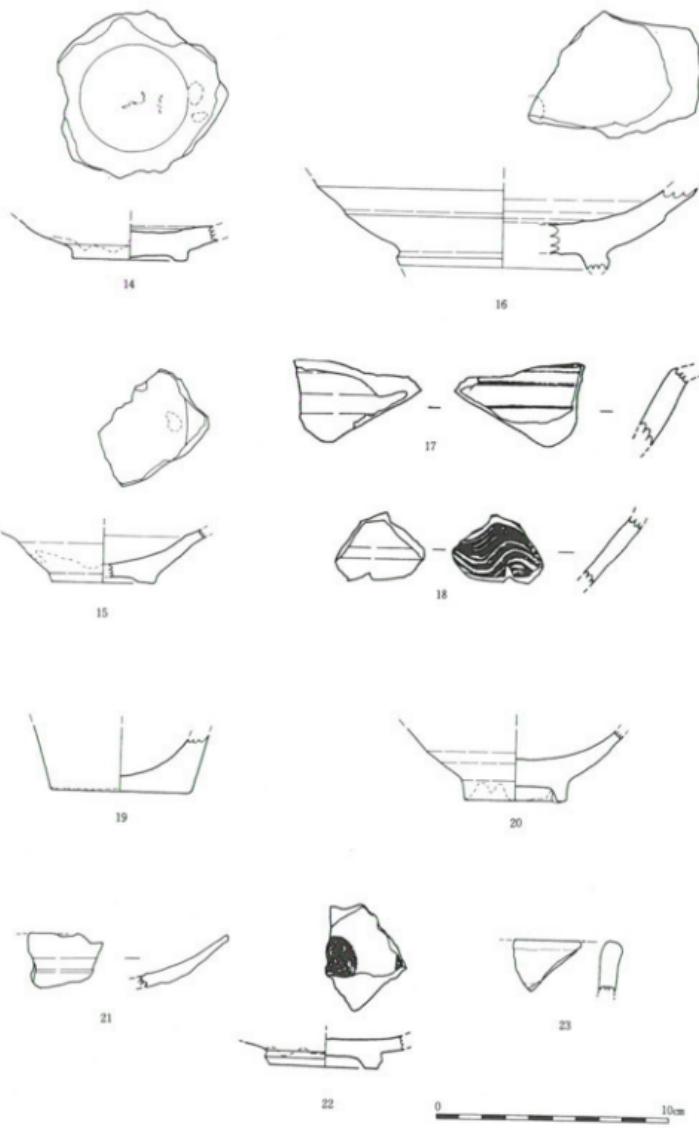
香炉？

第35図23に示した口縁部資料で、口縁部内面上部より外面に青緑釉を施す。香炉かと思われるが小破片のため器形は判然としない。口唇部は丸味を帯びる。素地は茶褐色粗粒子。

尚、九州陶磁文化館の大橋康二氏より、第35図20～23は17世紀後半～18世紀初頭に佐賀県嬉野町内野山窯で焼かれた製品であるとの御教示をいただいた。（長嶺 均）



第34図 伊万里焼系（1～10）、唐津焼系（11～13）



第35図 唐津焼系 (14~19)、内野山窯 (20~23)

(14) 撮 鉢

総数502点が出土した。口縁部が88点、底部が47点、胴部が367点である。そのほとんどが沖縄産陶器であるが、備前系も少量含まれる。口縁部は、その形態により5種に分類された。その内訳は、I類4点、II類50点、III類4点、IV類9点、V類1点、不明20点となる。以下、主なもの16点について、口縁部、底部の順に記述する。(第36・37図)。

口縁部 (第36図)

I類 (1~3)

備前系の擂鉢である。1は胴部より直線的に斜めに立ち上がり、口縁部直下でゆるやかに立ち上がる。口縁部下部はくの字状に肥厚する。器面には水引き轆轤目が残っている。内面には8本単位の櫛書きを下から上へ引き上げているが、摩滅が著しい。器面は茶褐色を呈している。又、口縁外部には薄く釉が施され暗茶褐色を呈する。素地は灰色を帯び、粗粒子で荒い砂粒が混入している。き-54、第3層出土。2は口縁直下での立ち上がりが直線的である。口縁部下部はくの字状に肥厚し、器面には水引き轆轤目が残る。外面に指痕が1ヶ所みられる。内面の櫛書きは破損のため4本しか確認出来ない。器面は茶褐色を呈する。素地は灰色を帯び、粗粒子で荒い砂粒が混入している。き-53、第3層出土。3も口縁直下での立ち上がりが直線的である。口縁部外面直下を幅約1.5cmのヘラ状工具で成形している。そのため、くの字状の肥厚が他のものに比べて顕著である。器面には水引き轆轤目が残る。内面の櫛書きは破損のため2本しか確認出来ない。焼成が不十分なため陶質土器質で、外面は淡橙色、内面は黄褐色を呈する。素地は荒い砂粒が混入している。き-52、第4層出土。

II類 (4~5)

胴部から直線的に斜めに立ち上がり、口縁部直下で内傾ぎみに立ち上がって外反するタイプである。4は小破片のため断言出来ないが、口唇部は水平、あるいはやや上がり気味になる。全体にナデを施しているが、水引き轆轤目が残っている。内面に7~8本単位の櫛書きを下から上へ引き上げ、口縁直下で余分な櫛目をナデ消して端をそろえている。全体的に橙色を呈する。か-53、第3層出土。5は口唇部が水平より下がり気味に成形されている。器面には水引き轆轤目を残す。内面の櫛書きは10本単位で施され、口縁直下でナデ消しにより端をそろえるが、徹底していない。口唇部から外面にかけて薄く釉がかかり灰黄色を呈する。素地は茶褐色を呈する。せ-50、第2層出土。

III類 (6~8)

胴部からほぼストレートに立ち上がり、口縁部で直角に折れ曲がり、ほぼ水平に外反するものである。又、口唇部外端寄りに一条の沈線をめぐらせている。6は口縁部は角ばっていて、口唇部外端はやや肥厚する。注口は沈線を施した後に成形されている。全体に水引き轆轤目を残す。内面の櫛書きは11本単位で施されている。色調は、口縁部外

面から器内面にかけて茶褐色、胴部外面は橙褐色を呈する。こ-49、第2層出土。7は口唇部外端が下がり氣味に成形されており、外面の口縁直下に凸線をめぐらす。内面の櫛描きは10本単位で施されている。外面は淡黄褐色、内面は茶褐色、素地は橙色を呈する。け-52、第2層出土。8は口縁直下でやや内傾氣味に立ち上がる。外反した口縁部に丸みをもたせてあり、上がり氣味に成形されている。外面の口縁直下にゆるやかな段差がみられる。内面の櫛描きは13~14本単位で施されている。全体的に橙色を呈する。推算口径27.4cm。こ-49、第2層出土。以上の3点は、II類同様いずれも下から上へ櫛描きを施し、口縁直下で余分な擗目をナデ消している。8はそれが撒底されていない。

IV類（9~10）

IV類は、II類とIII類の系統と思われるが少々趣を異にするものである。2タイプあるので④と⑥に分けて記述する。

④ (9)

胴部から直線的に斜めに立ち上がり、口縁部を外反させるタイプでIII類に近いが、口唇部の全ての角を取って丸みを持たせる。外面の口縁直下に幅約3mmの沈線をめぐらす。口唇部の沈線はない。内面の櫛描きは8本単位と思われ、口縁直下でナデ消しにより端をそろえる。全体的に橙色を呈する。か-53、第3層出土。

⑤ (10)

胴部から直線的に斜めに立ち上がり、口縁直下でやや内傾し、口縁部を外反させる。口唇部外端から口縁部下部にかけて肥厚している。内面の櫛描きは8本~9本単位で搔き上げており、口縁直下でナデ消しにより端をそろえている。しかし、撒底されておらず所々残っている。外面は茶褐色、内面は暗橙色を呈する。く-52、第2層出土。

V類（11）

胴部からゆるやかに立ち上がり、口縁部をわずかに外反させるタイプで、口縁部外部に約1.3~1.4cmの沈線を2本廻らせている。全体に水引き輪轍目を残す。内面の櫛描きは7本単位で搔き上げており、端はそろえずにそのままである。口唇部から外面にかけて薄く釉を施し、黒褐色を呈する。口縁部外部には緑色の釉垂れが認められる。内面は暗茶褐色を呈している。素地は灰褐色を帶びている。又、素地の中に大きな空洞を生じている。く-51、第4層出土。

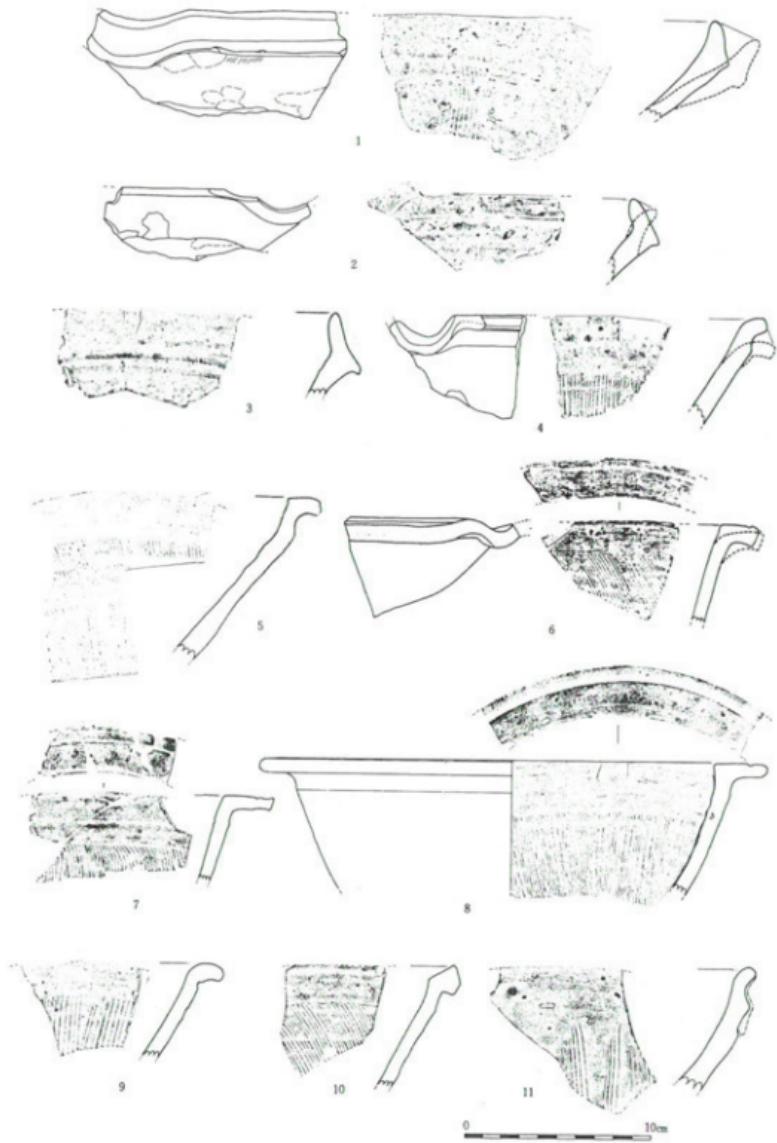
底部（第37図）

12と13の外底面は平らで、14~16のそれはやや上げ底氣味に成形されている。15がやや丸みをもって立ち上がる他は、全てほぼストレートに立ち上がる。12は12本単位の細かい櫛描きを密に施している。内底面の擗目は使用により摩滅している。全体的に茶褐色を呈する。推算口径12.5cm。き-48、第3層出土。13は11本~13本単位の太い櫛描きを密に施す。製品を時計回りに回転させながら下から上へ搔き上げている様である（この事は12~16の全ての製品に言える事である）。内底面は最後に一搔きしている。推算

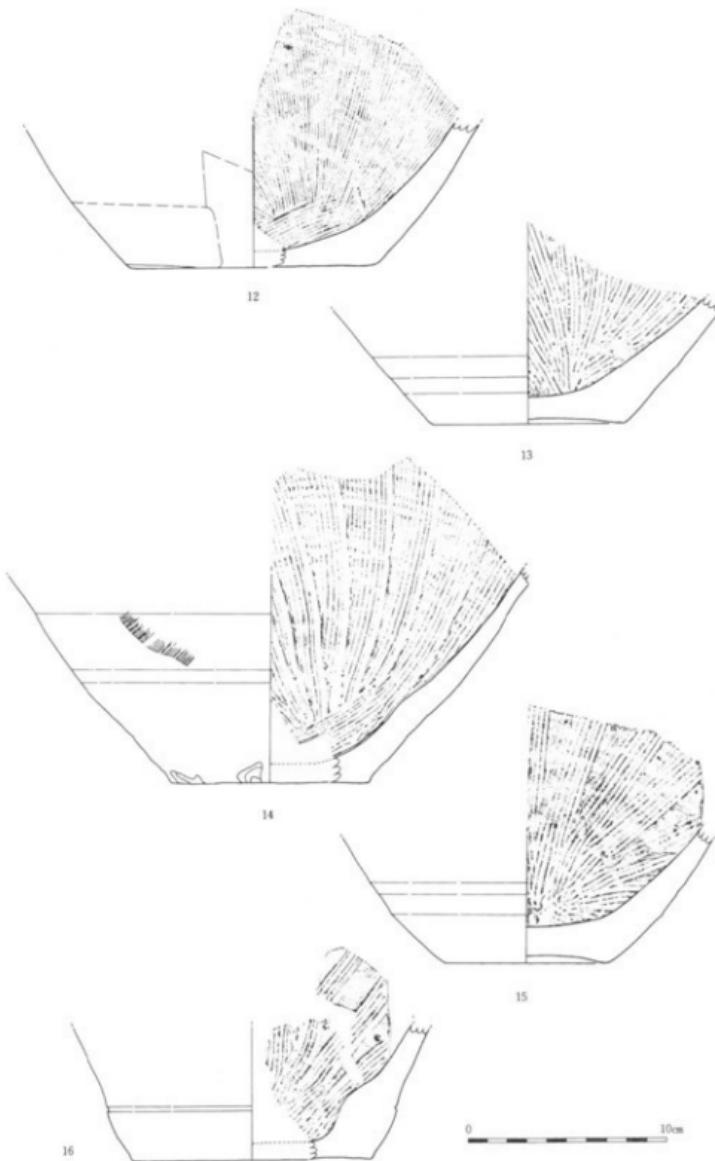
底径9.8cm。12も同じ状態である。14は6本～8本単位の太い櫛描きを雜に施す。全体的に茶褐色を呈する。推算底径10cm。き-51、第3層出土。15は8本単位の太い櫛描きを施す。口縁部に近づくにつれて櫛描きの間隔が開く。内底から立ち上がる側面は、使用による摩滅が著しい。全体的に橙色を呈する。推算底径8.3cm。き-53、第2層出土。16は5本単位の櫛描きを、間隔をあけて雜に施す。外底から立ち上がった側面に幅0.5～2mmの雜な沈線を一条施している。全体的に暗青灰色を呈する。素地の中に大きな空洞が生じている。推算底径12.1cm。き-52、第4層出土。(島袋 洋)

参考資料

- ・当真嗣一ほか『佐敷グスク発掘調査報告書』 佐敷村教育委員会 1980年3月。
- ・金武正紀ほか『今帰仁城跡発掘調査報告書』 今帰仁村教育委員会 1983年3月。
- ・当真嗣一ほか『首里城跡』～歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査～ 沖縄県教育委員会 1988年3月。
- ・『田治部氏屋敷址』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告67 岡山県教育委員会 1988年3月。
- ・盛本勲『松田遺跡』～一般国道329号改良工事に伴う緊急調査～ 沖縄県教育委員会 1986年3月。
- ・大城慧・金城亀信『牧港貝塚・真久原遺跡』～県道153号線バイパス工事に伴う発掘調査報告書～ 沖縄県教育委員会 1985年3月。



第36図 擂鉢 (I類1~3, II類4・5, III類6~8, IV類9・10, V類11)



第37図 掛鉢底部12~16

(15) 土 製 品

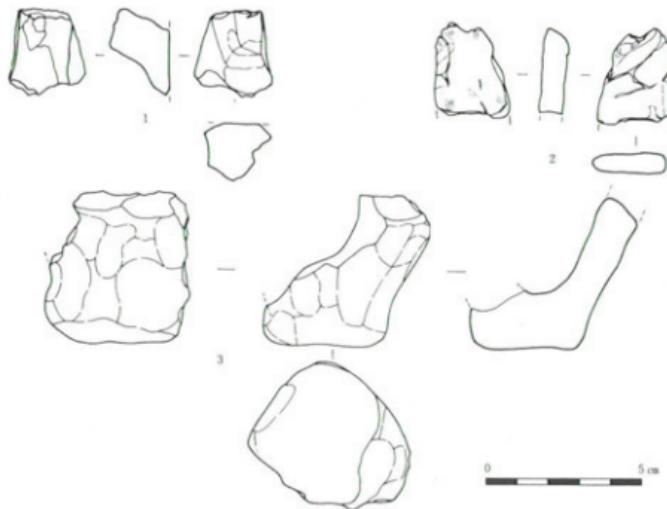
土製品は3点得られた。いずれもその用途は判然としない資料である。

第38図1は表面に方形状の突起を貼付ける。裏面の縁辺および縁端は面取りされて尖る。内側に明瞭な稜を残す。色調は灰褐色を主体とする。残存重量1.0g。き-63 第1層出土。

同図2は土器を造る際の細い粘土紐を潰して焼いたようなものである。色調は淡褐色を帯びる。土器を焼く前に試験的に焼いた粘土である可能性も高い。素地に黒色鉱物・ガラス質の鉱物が混入する。泥質の粘土である。残存重量0.8g。き-52 第4層。

同図3は鋳型様の土製品である。外面に指圧痕などが認められ雑である。内面には親指大の窪みが残る。色調は両面とも淡黄色。外面の一部は黒褐色を呈する。胎土に有色物質・石灰質砂粒などを多量に混入させる。泥質の粘土で製作する。残存重量69g。き-48 第3層。

これらの土製品は類例がない為、将来の発見に期待したいところである。同図2の資料が土器を焼く前のテスト・ピースであれば、非常におもしろい事で、グスク土器の焼成方法などを考える点で貴重とも言える資料となるであろう。(金城亀信)



第38図 土製品 1～3

(16) 石 器

石器片は総数で30点得られた。器種は石斧・磨石・石皿・砥石の4器種である。その他に用途不明のものやチャートの剥片が得られている。砥石の中には、具志頭グスク^(註1)・我謝遺跡^(註2)で出土している軽石製のものが出土していて、軽石利用の製品は県内でも少ないと、今のところグスク時代から登場しているようである。おそらく、鉄製品の刀の砥ぎ出しや磨きなどと関係の深いものであろう。以下、順に記述する。第39・40図)。

a. 石 斧

石斧は1点のみ得られた。第39図1に示した破片で、頭部と胴部を欠く。残存破片から推定して、平面観は短冊形であろう。刃は両刃で、刃縁の平面観は弧状となる。刃縁は潰れる。両面の研摩は自然面と剝離面を残す為、徹底していないことが判る。裏面の両端には剝離面を敲打で潰す。両側面は敲打で潰れる。胴部の折れ面(破損面)の一部が潰れている点や表面中央から右側面に溝状の傷が潰れた状態にある点などから破損後も石斧として再利用されていた可能性が高い。溝状の箇所は、石斧と柄を緊縛する際の繩のスベリを防止する為に施されたと考えられる。残存重量200g。き-53 第3層出土。石質は緑色片岩。

b. 磨 石

磨石片は5点得られた。その内の3点を図化した。

同図2は磨石の破片である。磨面は両面および両側に残り、敲打は下端に集中する。敲打は潰れ気味である。残存重量190g。け-50第2層。石質は砂質千枚岩。

同図3も破片である。両面と側面は研磨に近い砥面となっている。また、下端の敲打痕はかなり潰れていることなどから磨石として使い込んだ様である。残存重量89g。け-50 第3層。石質は緑色片岩。

同図4は横断面が隅丸三角形状を呈する資料である。各面に敲打痕がみられ、特に下面に集中する。両側に部分的な磨面が認められる。残存重量180g。け-50 第4層。石質は変輝綠岩。

c. 石 皿

石皿と判明したものは1点である。同図5は剝離面および破損面を除き、各面に磨面を残す。特に裏面の剝離面は溝遍無く使用され稜が潰れている。残存重量700g。か-54 第3層出土。石質は変輝綠岩。

d. 砥石

砥石片は6点得られている。その中で安里嗣淳氏のいう磨刀石^(註3)と称されるものが含まれているようである。

第40図6は薄手の砥石片で、磨刀石^(註4)として考えられた資料である。両面および側面は磨耗する。特に側面は研摩に近い磨面である。残存重量15g。き-50 第3層。石質は砂質千枚岩。

同図7は軽石製の砥石で、一面のみ使用されている。この面は、ほぼ平坦となり、中央および縁辺近くに鉄製品を磨く際に生じたとみられる使用痕が観察出来る。残存重量35g。き-51 第4層出土。

同図8は上下端を欠く。両面・両側面は砥面となっている。残存重量55g。き-55 第3層出土。石質はヒン岩である。

同図9～11は同一素材を用いた砥石である。9は上端に孔を表面から穿ち、砥石の破片を再利用した製品である。上下面・両面・両側面とも使用している。表裏面は特に使い込まれて凹面となっているが、これも広義の磨刀石といわれるものであろうか。残存重量39g。く-52 第4層。石質はヒン岩。

同図10は上面と一側面を除いて、使用による砥面となっている。残存重量50g。く-51 第4層出土。

同図11は両面のみ使用による砥面が形成されている。他は破損面である。残存重量19g。く-51 第4層出土。

e. 用途不明

用途不明の石器は2点出土している。

同図12は砥石か石皿が節理面から割れたものを利用したものであろう。平面觀は隅丸長方形形状を呈する。表面は節理面で、下端近くが摩滅する。裏面は剥離面で、これは下端に使用による細かい敲打で潰れている。一側面は研摩に近い磨面である。下端面は敲打で潰れている。これらの状況から叩き石などが考えられるところである。残存重量85g。く-51 第4層出土。石質は泥質千枚岩。

同図13はほぼ完形品である。磨石の破片を利用したものであろう。裏面のみ剥離面で加工や使用的痕跡はない。表面および縁辺部が使用によって摩滅する。磨石の再利用とも考えられる。残存重量105g。き-50 第3層出土。石質は砂質千枚岩。

以上が本遺跡で確認できた器種である。石斧はその当時の人々が近くにある兼城上原第1・2遺跡などから拾ってきて使用したものであろうか。興味深い資料である。この様に新しい時期の遺跡で、沖縄貝塚時代前・中期の遺物が1・2点出土する例は伊良波東遺跡^(註5)、伊原遺跡^(註6)などでも確認されている。砥石の中には携帯用の磨刀石が2点含まれている。軽石製の砥石の登場は鉄製品と密接な関係にあるものと考慮している。これは鏽落しや刀物類の研磨などからである。グスク時代の遺跡でチャート片を多量に

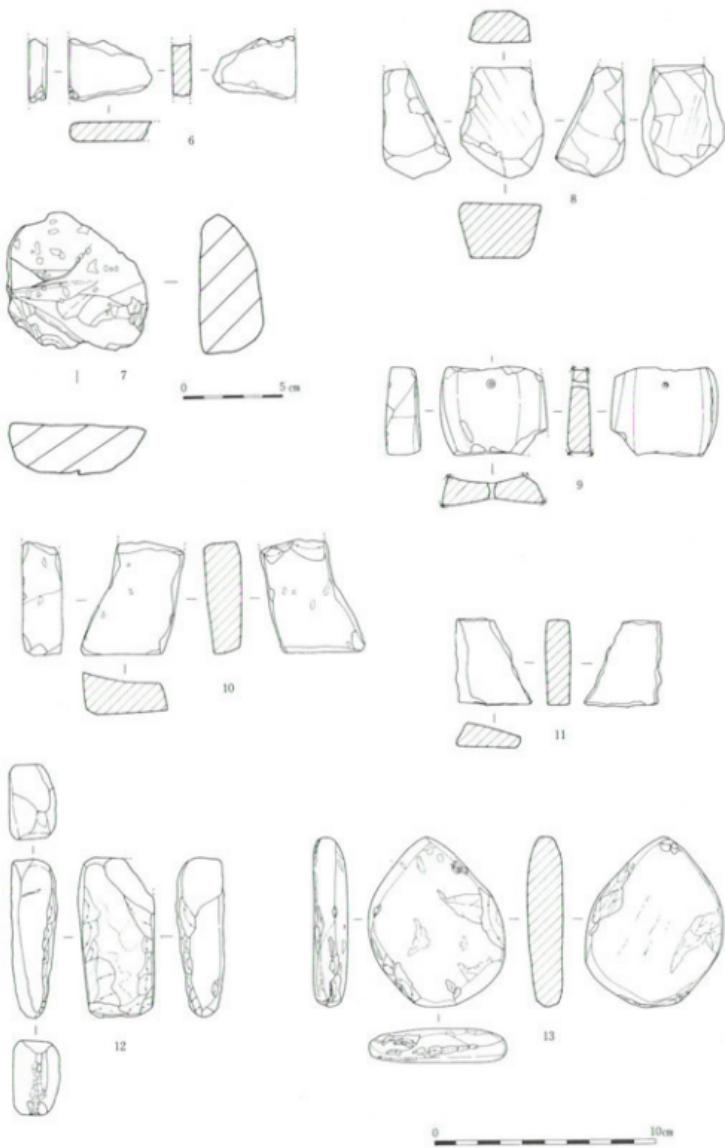
出土した遺跡は真久原遺跡^(註7)がある。本遺跡出土のものはこの時期のものであることは間違いないが、どの様な目的で使用されたかは今のところ判然としない。なお、石質(石材)の大部分は慶良間・渡名喜島からの搬入である。(金城亀信)

註

- 註 1 長嶺操・金城亀信ほか『具志頭村の遺跡』具志頭村教育委員会 1986年。
- 註 2 大城慧ほか『我謝遺跡』西原町教育委員会 1983年。
- 註 3 安里嗣淳「磨刀石」南島考古だより 沖縄県考古学会 第33号 1985年。
- 註 4 岸本義彦・湖城清・金城亀信『糸満市の遺跡』糸満市教育委員会 1981年。
- 註 5 安里嗣淳・島 弘・大田宏好ほか『伊良波東遺跡』豊見城村教育委員会 1987年。
- 註 6 大城慧・島袋洋ほか『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986年。
- 註 7 大城慧ほか『牧港貝塚・喜久原遺跡』沖縄県教育委員会 1985年。



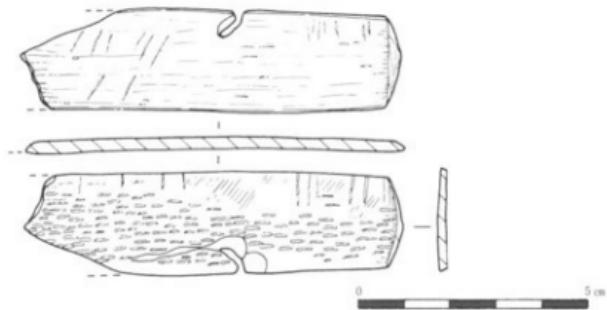
第39図 石器、石斧1、磨石2～4、石皿5



第40図 石器、砥石 6～11、用途不明12・13（砥石の7のみ縮尺が他と違う）

(17) 骨 製 品

ヘラ状の骨製品で、素材はウシの肋骨を用いている（第41図）。全体に良く研磨を施しているが、裏面にはまだ海綿質が残っている。表面には、成形時の削り痕と思われるものが、横位及び右下がりの斜位に認められる。上端部は、表面から先端へ向かって斜めに削り取ってあり、その断面は直角三角形状を呈する。表面上端部と右端部に、使用痕と思われる摩擦痕があり右側面に刃こぼれがみられることから、土器などの器面調製に使われた可能性も考えられる。裏面は、左端部に横位の削り痕が顕著に認められる。下部が欠損しているため、はたして完形品の長さがどれ位になるのかわからない。残存長8.3cm、最大幅2.3cm、上部幅2.0cm、厚さ0.2cm、重量5.3g、か-53、第3層出土。（鳥袋 洋）



第41図 骨製品実測図



PL. 1 骨製品

(18) 鉄 製 品

鉄製品は、全部で35点出土した。しかし、その内はっきり用途がわかるのは7点で、鎧の飾金具・鉛・釘・鉄鍋の4種であった。その他の28点については、用途不明品として一括して扱った。以下、主なもの10点について観察を述べる（第42図）。

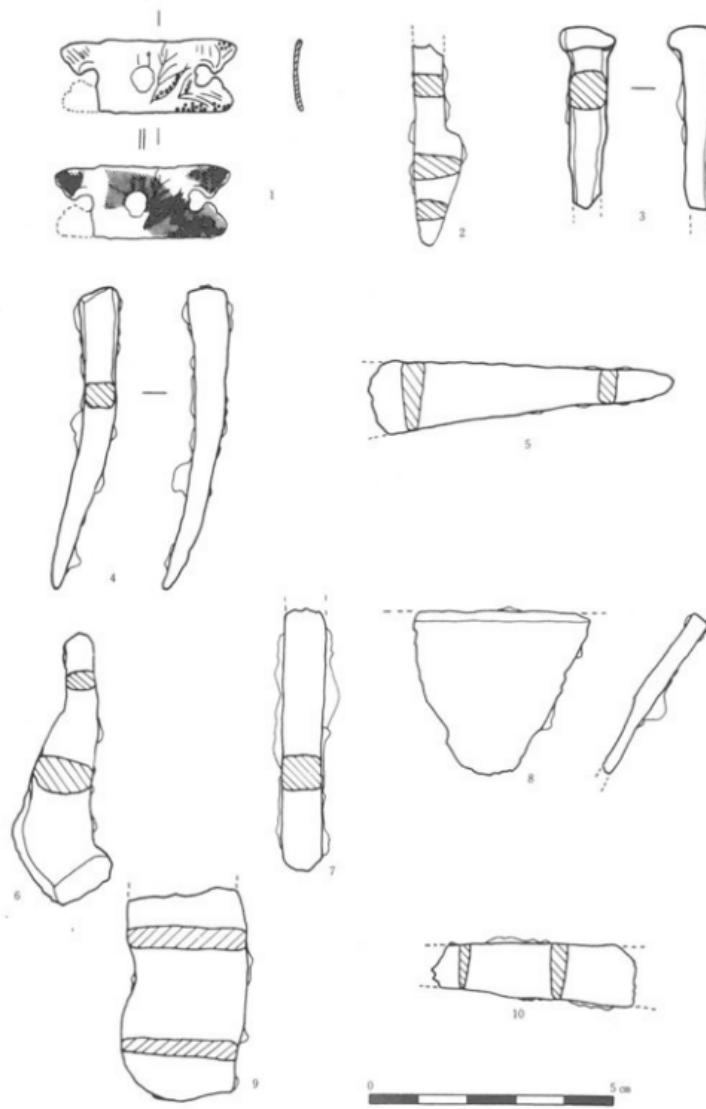
1は鎧の飾り金具である。一般に青銅製が知られるが、本資料は全体に赤鏽が発生している事から鉄製品と解釈した。長方形の板状を呈し、その縦断面は表を凸面としたゆるやかなカーブを描く。径約5mmの孔が3つ穿たれている。中央は円形で、一方の端は欠損していてわからないが、もう一方のそれはハート形をしている。表面全体に鍍金が施され、線と円による草木状模様が密に施される。この模様は、細かい工具で叩いてつけたものと思われる。長さ3.6cm、幅1.5cm、厚さ0.1cm、重量2.4g。く-57、第3層出土。

2は逆刺を有する鉛である。茎の一部は欠損しており、その断面は方形である。残存長4.1cm、先端から逆刺までの長さ2.2cm、重量5.0g。く-53、第2層出土。

3～4は角釘で、総数5点の出土である。3は頭部が折れるもので、身の断面は方形である。先端は欠損してなくなっている。残存長3.7cm、重量6.1g。け-50、第4層出土。4は頭部が斜めになるものである。これについては、使用する段階で頭部が折れるという見方がある。^(註1)身の断面は方形である。長さ6.3cm、重量6.8g。表採。

5～7・10は、その全体がはっきりとわかるものが無かったので用途不明品とした。5は刀子の茎にあたるものと思われる製品である。幅広の部分の断面は三角形を呈する。中心部の断面は長方形である。長さ6.3cm、最大幅1.5cm、最大厚0.5cm、重量10.4g。き-50、第4層出土。これが刀子の茎ならば、約12cmの刃部をもつものと思われる。6は鎌状の製品である。鎌の茎にあたる部分の断面は円形を呈する。他の部分に関しては、鏽化が著しく良くわからない。長さ5.6cm、最大幅2.2cm、茎部幅0.6cm、重量9.7g。き-48、第4層出土。7は棒状の製品で、5点出土した。大型の角釘の破損品とも考えられる製品が1点あったが、その法量は長さ5.3cm、最大幅0.9cm、最小幅0.6cm、最大厚0.8cm、最小厚0.6cm、重量14.2gである。き-52、第3層出土。8～10は板状の製品で、21点出土した。8と9はこれまでに鉄鍋の破片として指摘されているものである。8は直線的な境を持って曲がっている。最大厚0.3cm、最小厚0.2cm、重量16.5g。か-55第3層出土。9は厚さ0.4cmの板である。重量15.6g。き-52、第4層出土。10は厚さ0.2cmの薄く細長い板である。重量4.0g。き-52、第3層出土。（島袋 洋）

註1 当真嗣一、下地安広ほか『浦添城跡発掘調査報告書』沖縄県浦添市教育委員会 1985年3月。



第42図 鉄製品 鎏の飾り金具（点描は渡金の残存範囲）1、銛 2、
角釘 3・4、用途不明 5～7・10、鉄鍋 8・9

(19) 鉄 淚

鉄涙は61点出土した。化学的分析は行なっていないが、いずれも気泡による多数の孔がみられ、外観上は鍛治涙の特徴を呈する。又、全てに少量の赤鏽が生じている。炉床の形状を残す碗形涙が6点得られた。その内1点には、幅0.6cmの先の丸い棒状の削り痕が4本みられる。炉床に溜った鉄涙を、かき取ろうとした際に生じたものであろうか。

(島袋 洋)

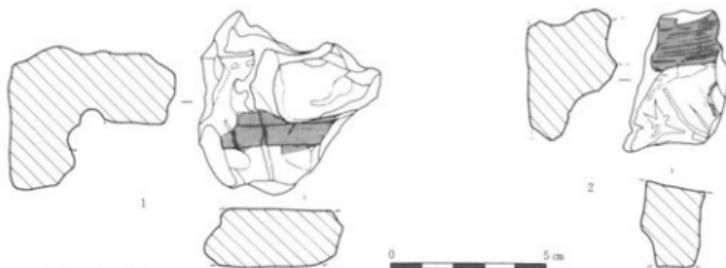


PL. 2 鉄涙外觀写真

(20) 羽 口

2点出土した（第43図1・2）。残念ながら全形をとどめるものは無い。いずれも土製である。植物性の混入物が表面に付着していたと思われ、不定形の沈線があちこちにみられる。類例も見当らず、破片なので断言出来ないが、面取り加工されている事から外形は四角形を呈していた事も考えられる。1は幅約0.7cmの工具による削り痕が孔の内面にみられる。全体に淡橙色を呈するが、割れた痕の所が一部赤く変色している。残存口径1.5cm、平坦面残存長5.5cm、残存高5.4cm、残存重量80g。か-54、第3層出土。2は孔の内面に縦位の線条痕がみられる。一部に溶滌が付着している。全体的に淡橙色を呈し、一部淡黒色を帯びる。残存径1.5cm、残存長4.3cm、残存重量30g。き-54、第3層出土。

(島袋 洋)



第43図 羽口1・2（点描は内面の気孔部分）

(21) 瓦

瓦は、一般に高麗系瓦と呼ばれるものが2点出土した（第44図）。2点とも平瓦であるが、小破片である。1は、凸面に格子目スタンプの一部がみられ、羽状の叩きを施すが、小破片のためその先後関係はわからない。凹面には布目と縫位の線条痕がみられる。一側面の内側半分に割り痕がみられる。これは高麗系瓦の中でも、羽状押型の中に格子状の枠があるものと思われる。^{註1)}色調は淡青灰色を呈する。き-53、第4層出土。2は凸面に羽状の叩きを施すが、磨耗が著しいためその先後関係はわからない。凹面も著しく磨耗している。色調は淡黄褐色であるが、胎土は青灰色を呈する。き-51、第3層出土。

以前、本遺跡に隣接する阿波根グスクにおいて多和田真淳氏が調査した際に、高麗系瓦が1点採集されている。点数が少ないため何とも言えないが、本遺跡において高麗系瓦が出土した事は、阿波根グスクとの関連が考えられる。

これまでに、首里城跡・浦添城跡・勝連城跡などで、^{註2)}最近では名護城跡^{註3)}で高麗系瓦が出土している。

ここでは割愛させてもらったが、今回の調査で出土した瓦の大部分は近世の赤瓦で、総数64点が出土した。その他に灰色無文瓦が3点出土している。その内一点の凹面には布目がみられる。

（島袋 洋）

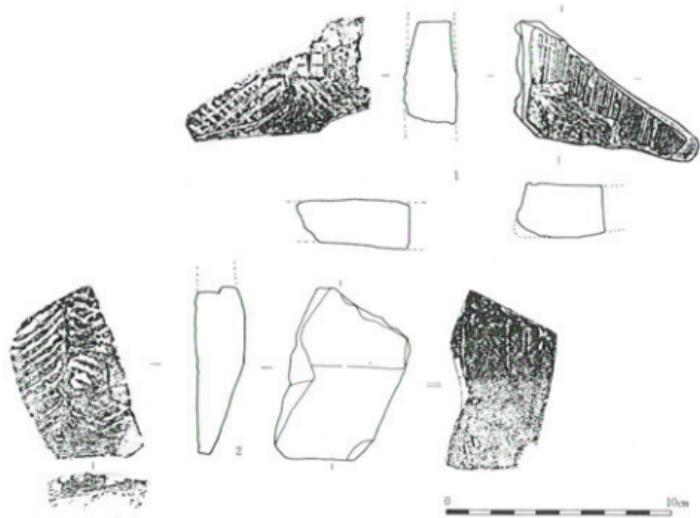
註1・当真嗣一、下地安広ほか『浦添城跡発堀調査報告書』沖縄県浦添市教育委員会 1985年3月。

・当真嗣一、上原静『首里城跡・歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県教育委員会 1988年3月。

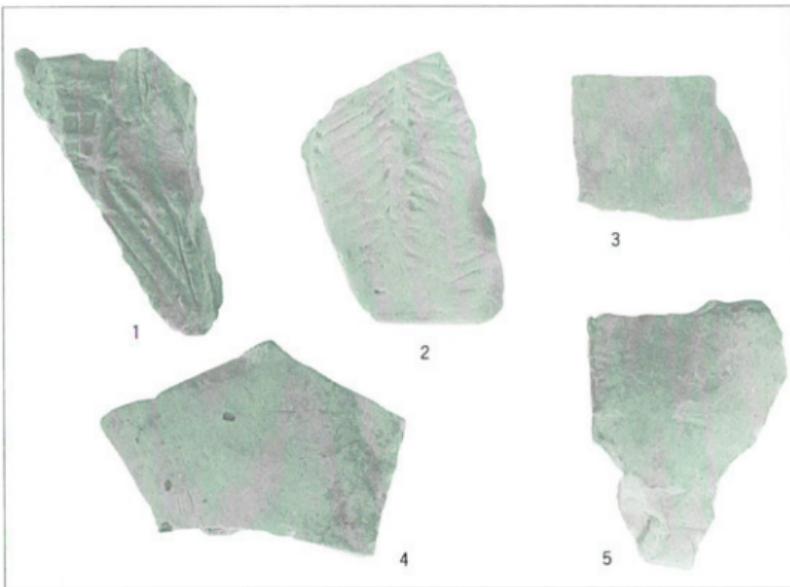
註2 註1と同じ。

・当真嗣一ほか『勝連城跡』昭和56年度本丸南側城壁修復に伴う遺構発堀調査報告。沖縄県勝連町教育委員会 1983年3月。

註3 琉球新報。1990年1月23日。



第44図 高麗系瓦 1・2



PL. 3 瓦(高麗系瓦 1・2、灰色無文瓦 3～5)

(22) キセル

キセルは、全部で18点得られた。

それらは素材により、石製・土製・陶質土器製・陶製・磁器製・青銅製の6種に分けられる。更にその形態により、釣鐘型・円柱型・パイプ型の3種に分類した。

そのほとんどが雁首部の出土であり、吸口部は青銅製のものがわずかに2点得られたのみである。以下、主なもの16点について観察を述べる（第45・46図）。

(1) 石製

釣鐘型（第5図1・2）

2点得られた。1は泥岩を釣鐘状に成形した製品である。火皿面は、円形を意識して作られているが成形が雑である。また、熱を受けて赤く変色している。羅字接続面は、平担に仕上げてある。これは一番最後に成形したものと思われる。その他の側面は丸みをもたせて成形しており、工具による削り痕が継に入っている。火皿面の反対側は、両端をL字状に削り取って中央部を帯状に残し、紐通しの孔を両方からあけている。これについては、石川市の古我知原内古墓で、釣下げ用の金具がついた資料が2点出土している。^(註1)火皿部には、煤が付着している。高さ2.5cm、最大幅2.2cm、重量12.5g、火皿部径1.5cm、羅字接続部径0.8cm。き-51 第3層出土。

2も泥岩を釣鐘状に成形した製品である。火皿面は円形を呈し、厚みも均一で丁寧な造りである。火皿部には、煤が付着している。羅字接続面及びその他の側面は、丸みをもたせて成形しており、良く研磨が施されている。工具による削り痕が、継方向に若干みられる。火皿面の反対側は、両端をL字状に削り取って中央部を帯状に残している。ただし、この帯状のものは羅字接続面に対し平行になっており、従来みられてきたこの種の雁首とは少々趣を異にする。また、紐通しの孔も無く、その痕跡も見当たらない。良く研磨が施されている事からすると、製作時からこの形なのか、あるいは使用中に孔の部分が折れてしまって、新たに研磨して今の状態になったのだろうか。高さ2.1cm、最大幅2.3cm、重量12.7g、火皿部径1.5cm、羅字接続部径1.1cm。き-53 第4層出土。

(2) 土製

パイプ型（3）

火皿部分は欠損しており、煙管部のみが残存している。外面は暗橙色を呈し、削りによって円筒状に成形している。内面は煤が著しく付着しているため、黒色になっている。羅字接続面から輪状に削り取って孔をあけているが、火皿部に近づくにつれて孔が小さくなっている。最大幅1.5cm、重量6.3g、羅字接続部径0.9cm。表採。

(3) 陶質土器製

円柱型（4～5）

円柱状を呈し、底面は平たくしてありそのまま置く事が出来る。全体に良く研磨が施され丁寧な造りである。4は側面に工具による削り痕が縦方向に入っている。淡青灰色を呈し、火皿部の内面及び外面上部には著しく煤が付着している。高さ2.1cm、最大幅1.5cm、重量5.2g、火皿部径1.1cm、羅字接続部径0.9cm。く-52、第4層出土。5は底面から火皿部にかけて徐々に拡がって成形されている。全体的に黒色を呈する。高さ2.2cm、残存最大幅2.1cm、重量0.8g、羅字接続部径0.8cm、き-52、第4層出土。

釣鐘型（6）

一部欠損しているが、おおよそ全体の形は窺える。火皿面・羅字接続面ともに半分は欠損しているが、厚みが均一で良く研磨が施されており丁寧な造りである。全体的に丸みをもたせて成形されている。内面には、縦方向に削り痕が入っており煤は付着していない。淡橙色を呈する。高さ2.2cm、最大幅1.9cm、重量4.0g、火皿部径1.2cm、羅字接続部径0.9cm。く-53、第1層出土。

(4) 陶製

パイプ型（第46図7～10）

本遺跡出土のキセルの内、最も多く得られた資料である。しかし、全形をとどめる資料は1点も無い。

7～9は、外面を八角形に成形した製品である。7は外面に黒褐色の釉を施している。羅字接続部径0.9cm、重量7.4g。き-52、第4層出土。8は丁寧に面取り加工された製品である。無釉で青灰色を帯びる。重量3.8g。か-54、第4層出土。9は無釉で暗橙色を呈し、一部窯変がみられる。羅字接続部径0.9cm、重量7.7g。き-48、第3層出土。

10は、外面に丸みをもたせて成形した製品である。この種では唯一火皿部の窺える資料である。全体に良く研磨されており、火皿部と煙管部の接点には段差がみられる。最大幅1.6cm、重量6.9g、火皿部径1.2cm。せ-54、第1層出土。

(5) 磁器製

パイプ型（11・12）

煙管部が短いが、火皿部と独立しているのでパイプ型に分類した。全形をとどめるものは無い。11は、外面に灰白色でガラス質の釉が薄くかかっている。素地は白色である。重量1.9g。く-53 第1層出土。12は、両面に灰白色的釉がかかっているが、羅字接続部は露胎である。火皿部から釉薬につけたものと思われる。素地は白色である。重量2.2g、羅字接続部径0.9cm。く-53、第1層出土。

(6) 青銅製

パイプ型 (13~16)

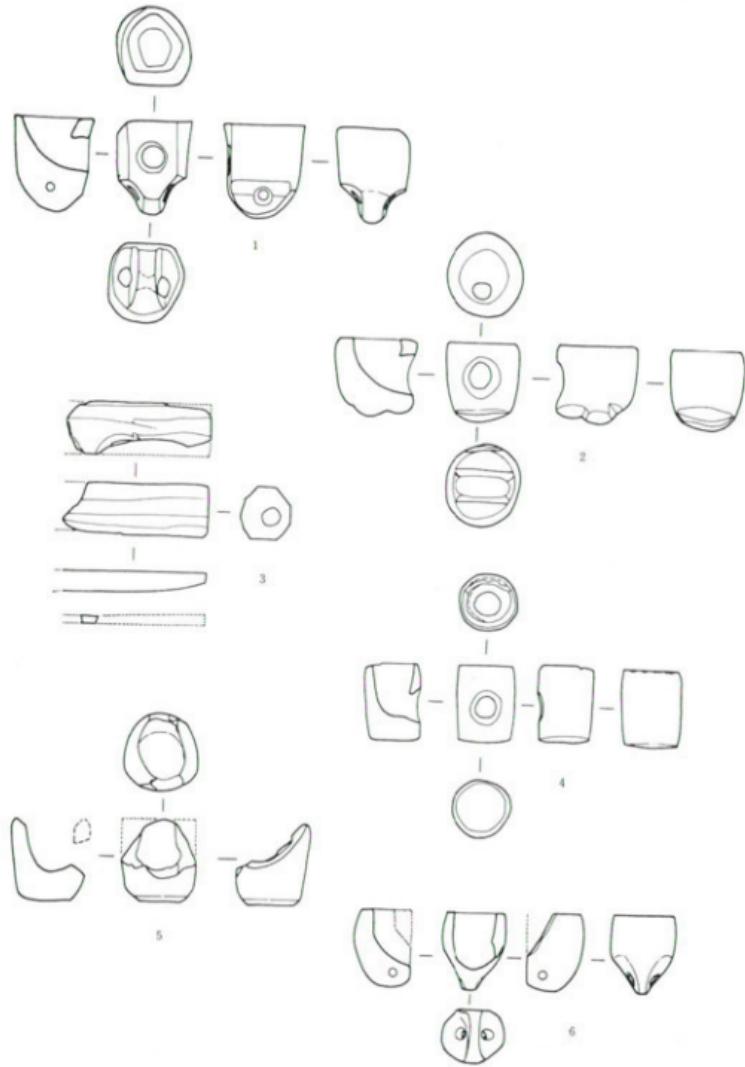
(雁首) 2点得られたが、いずれも火皿部が欠損している。板状の青銅を円筒状に丸めて製作されたものである。13は、煙管の合わせ目が火皿部に向かって中央にあり、棒状の青銅を合わせ目にそって接続している。長さ6.4cm、重量12.2g、羅字接続部径0.9cm。か-52、第1層出土。14は、煙管の合わせ目が火皿部に向かって左側面にあり、隙間があいている。長さ3.7cm、重量11.8g、羅字接続部径0.8cm。か-62、第1層出土。

(吸口) 2点得られたが、それぞれ形態が異なる。15は、羅字接続部から吸口にかけての中間までは同じ太さで移行し、そこから急に細くなり後はストレートにのびる。煙管の合わせ目に、別の金属を狭んで接合している。その素材が何かはわからないが、鏽が発生していない事から何らかの合金だと思われる。長さ3.3cm、重量3.5g、羅字接続部径0.8cm、吸口径0.3cm。き-53、第3層出土。16は、吸口の部分が欠けているが、羅字接続部から吸口にかけてゆるやかに細くなっている。煙管の合わせ目は、きれいにつながらずにずれている。長さ4.8cm、重量5.0g、羅字接続部径1.0cm。表採。

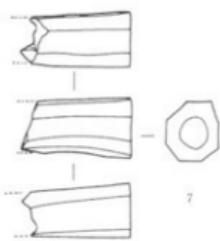
以上、本遺跡で出土したキセルについての観察を簡単に述べた。この様な資料は、同時代の遺跡において良くみられるものである。これまでの報告で主なものに、古我知原内古墓があげられる。^(註2) ちなみに今回、泥岩を使って実際に釣鐘型の雁首を製作したところ、僅か20分足らずで簡単に作事が出来た。その後これを乾燥させて、研磨を施せば完成ということになる。日々の生活の愛用品として、使用者自ら思い思いに製作する姿も想像できる。(島袋 洋)

註1 座間味政光・大田宏好ほか『古我知原内古墓』～沖縄自動車道（石川一那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)～ 沖縄県教育委員会 1987年12月。

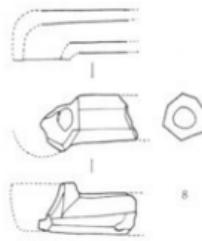
註2 島袋洋氏が実験的にシルト質泥岩で、釣鐘型の雁首を製作した。製品は金城らが実見し、確認した。また、素林もシルト質泥岩であることが判明した。



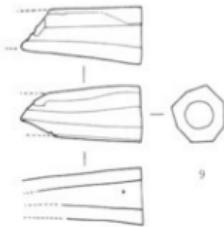
第45図 キセル雁首（石製1・2、土製3、陶質土製4～6）



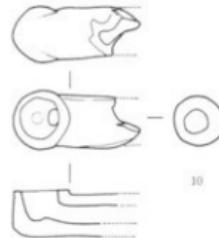
7



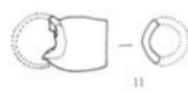
8



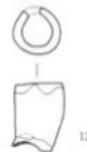
9



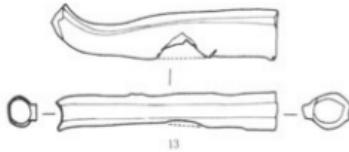
10



11



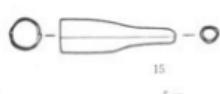
12



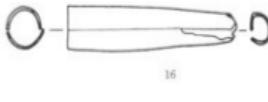
13



14



15



16

0 5 cm

第46図 キセル雁首・吸口（陶製7～10，磁器製11・12，青銅製13～16）

(23) カンザシ

本遺跡で得られた青銅製のカンザシは全部で11点を数えるが、その形態により3種に分けられる。(第47図1~11)

1は、頭部に花弁状の装飾をもつもので、6つの花弁をもち、その中央部には8つの円を組み合わせた装飾で花芯を表わしている。竿の部分は得られなかった。

2・3は、頭部が幅広のスプーン状を呈するものである。2は、首部も竿も6角形に面取りされているが、それぞれ位置をずらして装飾的効果を出している。先端に近づくにつれて太くなっている。先端は6角錐を作っているが、磨滅して角がとれている。

3は、首部が6角形で竿が4角形に面取りされている。

4~9は、頭部が細長の耳かき状を呈するものである。4~6は首部を円形に加工し、竿を6角形に面取りしてあり、先端へは直線的に細くなっていく。竿の部分が欠損しているが、7も同タイプのものと思われる。8は、首部と竿をそれぞれ位置をずらして6角形に面取りしたものである。9は、頭部の形態が他の物と比べて短くてごじんまりとしている。首部は円形を呈し、捩には帯状の装飾を施す。竿は6角形を呈し、先端にいくに従ってだんだんと細くなる。

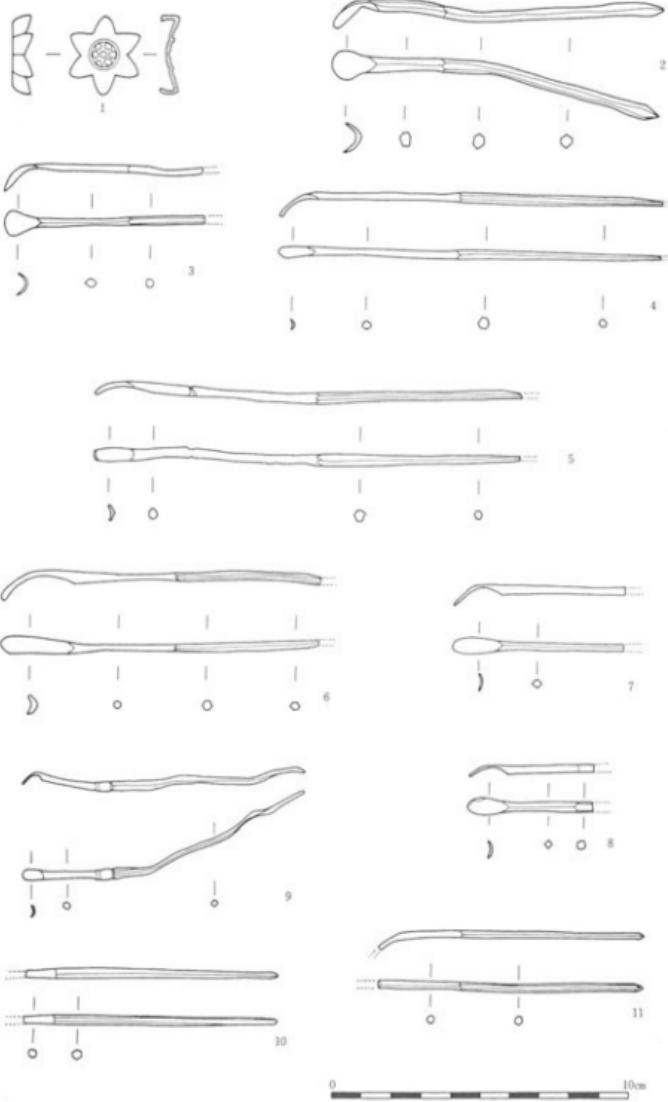
10~11は、頭部が欠損していて何とも言えないが、竿の形態からして、その頭部は耳かき状をしていたと思われる。共に、首部は円形で竿が6角形を呈するが、11は偏平な6角形である。また、10は先端にいくに従い細くなるが、11は先端で急にとがる。

(島袋 洋)

第3表 カンザシ計測一覧表

計測番 号	出土地区・層序	長さ(残存長)	重量(g)
①	く-52、第2層	2.6	3.1
②	き-49、第3層	11.3	10.5
③	く-53、第2層	(6.7)	2.3
④	き-52、第3層	12.8	4.1
⑤	く-50、第3層	14.8	6.9
⑥	く-52、第2層	(10.7)	4.0
⑦	Aトレンチ、表採	(5.8)	1.7
⑧	き-52、第4層	(4.2)	1.1
⑨	く-52、第3層	9.5	2.1
⑩	き-48、第3層	(8.5)	2.8
⑪	き-53、第3層	(8.9)	2.7

※ ①の長さは花弁の最大径を記す。



第47図 カンザシ 青銅製 1~11

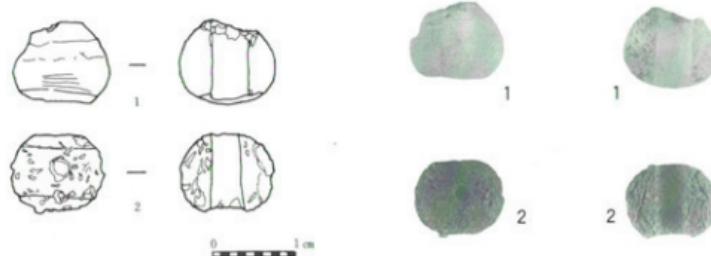
(24) 小玉

2点の出土である。いずれも人造ガラス製の小玉で、半分は欠損している。又、表面には螺旋状の筋が入っており、巻きつけ技法によるものと思われる。一方の孔の周りには、削り痕がみられる。これまでの報告に、2個の小玉が切り離される前の状態で出土した例がある。(註1)(第48図1~2)

1は、半透明の淡黄色を呈し、全体につやがある。長径9mm、高さ6.5mm、口径3mm、重量0.4g。き-50、第4層出土。

2は、コバルトブルーを呈する。全体的に目が粗く、気泡の様な細かい孔がみられる。長径8mm、高さ7mm、口径2.5mm、重量0.4g。く-57、第3層出土。(島袋 洋)

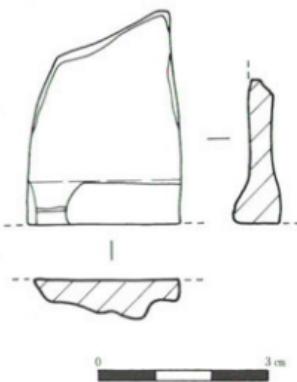
註1 金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』 沖縄県今帰仁村教育委員会
1983年。



第48図 小玉 1・2

(25) 琥珀

琥珀が1点出土した(第49図)。陸部の小破片である。縁の部分は、内側上部に削りによる凹みをつくる。琥珀面には、使用による線状痕がみられる。側面には、加工段階のものと思われる均一な線状痕がみられる。残存最大長3.7cm、重量5.6g、凝灰質頁岩製。き-50 第4層出土。素材は北九州から中国地方に分布する琥珀石層群あたりが考えられる。また、台湾の可能性もあるが判然としない。(島袋 洋)



第49図 琥珀

(26) 錢貨

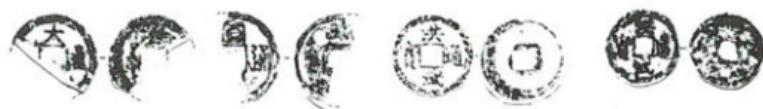
総数で20点が出土した(第50図)。寛永通宝が9点で、その約半数を占める。他には、中国銭や鷹目銭などが出土した。(同図15)の無文銭は、寛永通宝の出現によって日本から流入してきた京銭と呼ばれる銭と解釈した。又、寛永通宝の初鋳造年に関しては、幕府によって本格的に鋳造された1636年を記した。他に明治の一銭も出土した。全体のほとんどが原形を良くとどめている。欠損したもの、あるいは摩滅により判読不能なものに関しては、残っている他の字体などから判断した。(島袋洋)

第4表 錢貨出土表

挿図番号	銭貨名	初鋳造年	出土地点	書体	直径(cm)	重量(g)	備考
第50図 1	太□通□	976年(北宋)	く-52、第4層	行書	2.5	1.4	「平」と「宝」の所欠損する
タ 2	宣□通□	1119年(北宋)	き-52、第3層	篆書	2.6	1.5	「和」と「宝」の所欠損する
タ 3	洪武通宝	1368年(明)	き-52、第4層	楷書	2.3	2.7	
タ 4	洪武通宝	タ	き-52、第4層	タ	2.1	3.6	摩滅が著しい
タ 5	道光通宝	1820年(清)	し-48、第1層	隸書	2.1	3.25	裏に判読不能な文字あり。
タ 6	寛永通宝	1636年	き-50、第3層	楷書	2.4	3.2	
タ 7	寛永通宝	タ	き-49、第3層	タ	2.4	2.0	やや欠損する
タ 8	寛永通宝	タ	き-55、第3層	タ	2.5	3.0	
タ 9	寛永通宝	タ	く-50、第2層	タ	2.1	2.0	
タ 10	寛永通宝	タ	く-56、第1層	タ	2.3	2.5	
タ 11	寛永通宝	タ	く-54、第1層	タ	2.3	2.5	
タ 12	寛永通宝	タ	く-53、第2層	タ	2.3	2.25	
タ 13	寛永通宝	タ	き-50、第2層	タ	2.5	3.1	裏に「丈」の文字あり
タ 14	寛永通宝	タ	さ-57、第1層	タ	2.5	4.0	裏に「丈」の文字あり
タ 15	京銭	——	く-56、第1層	—	2.4	2.6	無文
タ 16	鷹目銭	——	き-49、第6層	—	1.9	0.8	無文
タ 17	鷹目銭	——	き-54、第4層	—	1.9	1.1	無文、半分に折れ曲る
タ 18	鷹目銭	——	く-53、第3層	—	1.4	0.35	無文
タ 19	鷹目銭	——	か-62、第1層	—	1.7	0.6	無文
タ 20	一銭	明治10年製	か-62、第1層	楷書	2.8	6.4	

参考資料 • 嵩元政秀 「沖縄県内出土の銭貨について」 南島考古第1号 沖縄考古学会
1970年。

- 『旧琉球藩貨幣考』 沖縄県史第21巻所収。
- 『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス。
- 『日本貨幣型録“84年版”』。



1 2 3 4



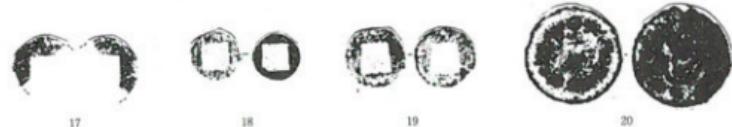
5 6 7 8



9 10 11 12



13 14 15 16



17 18 19 20

0 5 cm

第50図 錢貨 1～20

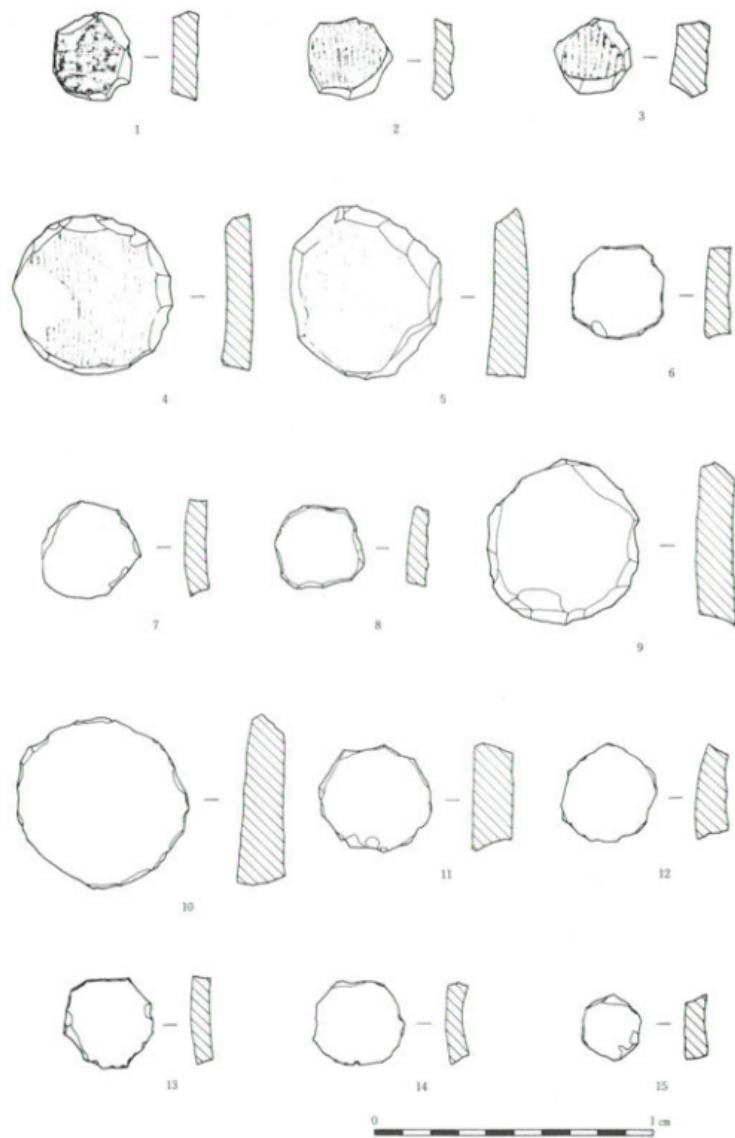
(27) 円盤状製品

陶器片を叩きにより打ちかいて円盤状に成形したもので、ほとんど器の外側より打ちかいている。丁寧なものは更に内側から軽く打ちかき、角をとる調整をしている。総数54点出土している。そのほとんどが1・2層よりの出土であった。その素材の内訳は、中世須恵器1点、擂鉢15点、褐釉陶器3点、沖縄産無釉陶器35点である。その性格はまだはっきりしていないが、一般的に遊戯具の一種とみられている。ここでは主なもの15点について第5表に示した。(島袋 洋)

- 参考資料
- 上原靜『グスク時代・近世出土の円盤状製品』読谷村立歴史民俗資料館紀要第10号 1986年。
 - 上原靜『円盤状製品その後の資料』読谷村立歴史民俗資料館紀要第13号 1989年。

第5表 円盤状製品計測一覧

番号	特徴	素 材	出土地点・層位	最大径 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	備 考
第51図1		中世須恵器	C トレンチ	3.2	0.8	14	両面とも青灰色、外側より打ちかく
タ 図2	擂 鉢	タ	く-51、第1層	3.1	0.6	15	一部内側より打ちかく
タ 図3	タ	タ	く-58、第1層	2.7	1.3	14	外側より打ちかく
タ 図4	タ	タ	B トレンチ	5.8	0.9	49	一部内側より打ちかく、失敗して、その調整のためと思われる
タ 図5	タ	タ	き-52、第3層	5.8	1.2	60	外側より打ちかく
タ 図6	褐 釉 陶 器	タ	く-52、第2層	3.4	0.8	15	両面施釉、外側より打ちかく
タ 図7	タ	タ	け-53、第2層	3.6	0.6	12	外面のみ施釉、一部内側より打ちかく
タ 図8	タ	タ	せ-54、第1層	3.2	0.6	10	外面のみ施釉、一部内側より打ちかく
タ 図9	沖 縄 産 無 釉 陶 器	タ	く-62、第1層	5.9	1.2	56	ほとんど内側から軽く打ちかき、調整している
タ 図10	タ	タ	く-52、第2層	6.2	1.4	71	外側より打ちかく
タ 図11	タ	タ	き-50、第1層	4.0	1.3	31	外側より打ちかく
タ 図12	タ	タ	く-57、第1層	3.2	0.6	10	外側より打ちかく
タ 図13	タ	タ	き-52、第3層	3.6	1.0	16	外側より打ちかく
タ 図14	タ	タ	く-51、第1層	3.3	0.6	10	外側より打ちかく
タ 図15	タ	表 採		3.2	0.7	5	一部内側より打ちかく



第51図 円盤状製品（須恵器 1, 沖縄産擂鉢 2～5, 褐釉陶器 6～8,
沖縄産無釉陶器 9～15）

第VI章 自然遺物

(1) 貝類（軟體動物）

本遺跡から出土した貝は、80種類がある。その中でもザルガイ科カワラガイ、ツキガイ科ツキガイ、マルスダレガイ科アラスジケマンガイ、ニッコウガイ科リュウキュウシラトリガイの4種類が主体貝であった。全体的に小振りの貝が多く、棲息地も浅海の砂泥底に棲息する点で共通する。イモガイ科のアイボンクロザメについては小・中型のものは少なく、大型のものが多い点が注目される。この貝の棲息地も浅海の砂泥底である。

本遺跡の時期はグスクから近世に比定され、県内でも特に近世遺跡の発掘例は二・三の遺跡しかない。この中で遺跡の立地条件等が類似する遺跡は伊良波西遺跡^(註1)が掲げられる。伊良波西遺跡の場合、脊椎動物では、ウシ、ウマ、ブタ、ヤギ、ネコ等が出土していて、本遺跡の近世相当期の出土例とほぼ共通するようである。

貝類の場合は、遺跡の西側にある国道331号から西は、その当時は遠浅の海であることが現地形からも読み取れる。^(註2)この遠浅（砂泥底）が、貝類の棲息場所であるとともに貝類採集の舞台であったことが主体貝であるカワラガイ、ツキガイ、アラスジケマンガイなどがあり、それを裏付けている。（金城亀信）

註1 安里嗣淳、島 弘ほか『伊良波西遺跡』豊見城村教育委員会 1986年。

註2 阿波根の地先は昭和55年6月から埋め立てが着工し、昭和59年6月に完了した。埋め立て後に西崎町が誕生している。

第6表 巻貝出土一覧

番 号	科 名	種 名	かー54				きー51					きー52						
			Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石列内括	I層	Ⅱ層	Ⅲ層	包含層	石列北側	IV層	石列内括	Ⅱ層	上表面石列層	Ⅲ層	石列北側	IV層
1		サラサバティ	2		1						4	3	—	1		9		
2	ニシキウズガイ	ギンタカハマ			1													
3		ニシキウズガイ			2													
4		チョウセンサザエ	6/0	20/7	6/2			1/2	7/8	3/0	14/5		1/1		8/1	0/(1)	26/6	1/0
5	リュウテン	カンギク	2/0	30/0	12/0			1/0	1/0		22/1				1/0		23/0	
6		ヤコウガイ										1/(2)	1/0				1/0	
7		リュウテン															2	
8	アマオブネガイ	アマオブネガイ				1						2						
9	ウミニナ	イボウミニナ																
10		センニンガイ								1								
11	オニノツノガイ	オニノツノガイ	8	5	5			1	2		11	1		2	25/21	20		
12	ソデガイ	マガキガイ	27	52	19			2	16	15		29			38		42	
13		クモガイ	5	2	4				1	1					1		2	
14		クモガイ(幼)	2	5					1									
15		イボソデガイ	1														1	
16		スイジガイ																
17		ゴホウラ(幼)												1		1		
18		ネジマガキガイ																
19		不明										1						
20	タマガイ	トミガイ												1				
21		リスガイ										4						
22		シロヘンサキトミガイ													2			
23		ロウイロトミガイ																
24		キハダトミガイ																
25	タカラガイ	ネコガイ										4			1			
26		ホシタカラガイ		6														
27		ハナマルユキガイ		1										1		2		
28		ホシキヌタガイ																
29		ホソヤクジマタカラガイ																
30		ハナビラタカラガイ									1					1		
31	フジツガイ	フジツガイ			1									1				
32		サツマボラ																
33		シノマキガイ		1														
34		ミツカドボラ	1									3						
35		ホラガイ																
36	オキニシ	オキニシ							1			4				1		
37	ヤツシロガイ	ウズラガイ																
38		スクミウズラガイ																
39	アツキガイ	ガンゼキボラ	1	4	4							1			3		5	
40		ツノレイシ	2	2						2		4				4		
41		シラクモガイ	1						1			2				1		
42		ツノテツレイシガイ										1			2		1	
43		アカイガレイシガイ								1		2				1		

きー53				きー54				くー51				くー52				最少個体数	（比率）	科別最少個体数	
II	III	IV	一	II	III 石 数 上 面	IV	I	II	III 長 石 数 上 面	IV	II	III 石 数 上 面	IV	I					
層	層	層	括	層	層	石	層	層	層	層	層	層	層	層	層				
3	6				2			7	34	4					15	91			
	1				1				2						1	6	110(3.69%)		
					1			3	6	1						13			
1/0	22/10	50/14		1/0	3/0	3/1		9/4	0/2	5/3	15/4	1/0	80/18	2/7	3/0	11/3	2/0	1/0	42/4
	5/0	11/0				4/0		3/0	19/0	288/1	6/0			15		37/0		44/0	(14.77%)
									0/11	1/0		1/0	0/11	1/0	1/0	1/0	6/4)		792(26.59%)
																2			
																5	5(0.17%)		
	1															2			
					1											2	4(0.13%)		
	13	14	1	1	3	2	4	11	82	3		15	1	14	219(7.35%) (1)	219(7.35%)			
9	86	80	6	5	14	22	7	34	34	126	85	3	35	20	57	863(28.97%)			
14	2				1		1	1	4			2		1	1	42			
	1								2	1						1	10		
	1															5		926(31.08%)	
																2			
																1			
	1															1			
																3			
																6			
																2			
																3			
		1														1		39(1.31%)	
	3	1														13			
	3				1		2	3	1							18			
																4			
																1		49(1.64%)	
																2			
																2			
																4			
																1			
	1		1	1	1		1		1	1	2				14	14(0.47%)			
																1			
																1	2(0.07%)		
	2	4							1	5	65	3		2	10	110(3.69%)			
	6	16	1	1		6		4	15			2		1	1	66			
	1															11			
																10			
		1							3	2						15			
	2	5				1			3								216(7.25%)		

番号	科名	種名	かー54					きー51					きー52					
			II 層	III 層	IV 層	石列 内	一括	I 層	II 層	III 包含	IV 石列北端	V 石列	VI 層内	II 上石板	III 石板	IV 石板	V 石列北端	VI 石列
44		シロイガレイシガイ																
45		テツボラ																
46		カスリレイシガイ																
47	カリイレヨフバイ	コオリイレヨフバイ					6											
48		イボヨフバイ																
49	エゾバイ	シマベッコウバイ		2									2					4
50		イトマキボラ	4	12	1				3	4		3		2	3	5	破片の数(1)	22
51		ヒメイトマキボラ																2
52	イトマキボラ	ナガイトマキボラ																
53		チトセボラ																
54		ツノマタモドキ																
55	オニコブシガイ	オニコブシガイ	1										1					3
56		コオニコブシガイ	3	9	2			1		4	3	6				4		15
57		ヒメチョウセンフデガイ																
58	フデガイ	チョウセンフデガイ																
59		ニシキノキバフデ																
60	マクラガイ	ムラサキシュドウマクラガイ																
61		クロザメモドキガイ																
62		マンボンクロザメガイ	1	1					2									2
63		カバミナシガイ																
64		サヤガタイモガイ																
65		ヤナギシボリガイ		1														
66		アカシマミニナシガイ			1								1					
67		サラサミニナシガイ																
68		クロミミニナシガイ																
69		ゴマフイモガイ	2											1				
70	イモガイ	マダライモガイ	1															
71		イボシマイボガイ																
72		ミカドミニナシガイ																1
73		タガヤサンミニナシガイ																
74		ヤナギシボリガイ(幼)											1					1
75		コモンイモガイ																1
76		アジロイモガイ																1
77		ニシキミニナシガイ																1
78		シロセイロイモガイ																1
79		クロフモドキガイ																
80		不明	不	明		1												
81		リュウキュウタケノコガイ																1
82	タケノコガイ	タケノコガイ							1									
83	降魔マイマイ	オキナワヤマタニシ		4					1			6						8
84	キセルガイ	ツヤキセルガイ																
85	巻貝不明																	
最小個体数			69	1663	59	(01)	1	5	25	44	7	1292	2	3	4	68	(02)	207

巻貝(全体最小個体数の中で9.63%を占める) ※注: ()内は破片の数量、枚/蓋

き - 53				き - 54				< - 51				< - 52				最少個体数 (比率) 科別最少個体数		
II	III	IV	一	II	III	IV	一	II	III	IV	長石	II	III	IV	長石			
層	層	層	括	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層			
2																2		
																1		
																1		
																6		
1																1		
																7(0.23%)		
																36(1.21%)		
2	19	18	3	2	1	1		4	7	48	5	9			21	199(6.68%) (1)		
1	3			1						1						8		
																210(7.05%)		
																0 (2)		
																2		
3	1							2		3		1	1	1	1	18		
1	14	18	3	1	8	1	2	5		60	1	7			3	171(5.74%)		
																1		
																0 (2)		
																0 (1)		
																2(0.03%)		
																2(0.07%)		
6	3							1	2		5	1			1	25		
											2					2		
											2					4		
2				1	1					2	2		1			9		
1	1				1					2					1	7		
											1	2				5		
																0 (1)		
																0 (2)		
																2(0.07%)		
1								1	1						4			
								1							2			
																80(2.69%)		
2																		
4								2	36						2	63		
																63(2.11%)		
1									1						2	2(0.07%)		
14	21(21)	34(31)	1	15	11	25	2	72	11	55	134	1506(1)	1221	8	104	27	1	221
																2,979(100%) (1)		
																2,979(100%)		

第7表 二枚貝出土一覧

番 号	科 名	種 名	かー54				きー51				きー52								
			II	III	IV	—	I	II	III	Ⅳ 包含	石 列	北 側	IV	II	上 石 巖	下 石 巖	III	IV	石 列
1	フネガイ	リュウキュウザルボウガイ	5	4	2		1		2		1	2		3		5			
2		エガイ																	
3	ウダイスガイ	クロチョウガガイ																	
4	ウミギクガイ	メンガイ									1	1	1						1
5	イタボガキガイ	オハグロガイ																	
6	シジミガイ	シナレシジミガイ																	
7		ツキガイ	86	300	207		8	65	70	1	1,415	4	1	109	1,740				
8	ツキガイ	ウラキツキガイ							1									5	
9		ヒメツキガイ												36			2	16	
10	カゴガイ	カゴガイ																	
11		シラナミガイ	1	5			1	1		1						2	6		
12	シャコガイ	シヤゴウガイ		1						3							1	2	
13		ヒレスチャコガイ																	
14		ヒメシチャコガイ											5				1	1	
15	ザルガイ	カワラガイ	17	60	42		3	14	12	1	371	2	1	26	787				
16		ザルガイ										6						2	
17		アラスジケマンガイ	25	218	265		20	24	3	266	2	7	34	467					
18		ホソスジイナミガイ	7	10			1	1		8				2	18				
19		ユウカケハマグリ			1								11					32	
20		スマレハマグリ	3	11	1			1			14					2	21		
21		ヌノメガイ		1															
22	マルスダレガイ	オイノカガミガイ	1	10								7					2		
23		オキシジミガイ										1						2	
24		アラヌノメガイ																	
25		サメザラガイ																	
26		リュウキュウアサリ																	
27		サツマアサリ																	
28		ハマグリ																	
29	マスオガイ	リュウキュウマスオガイ																	
30	ニッコウガイ	リュウキュウシラトリガイ	8	84	14		1	10			419			12	269				
31		ヒメニッコウガイ						1											
32	チドリマスオガイ	イソハマグリ																	
33	バカラガイ	リュウキュウバカラガイ							1			29			2	28			
34	二枚貝不明																		
		最 小 個 体 数		153	705	531	1	14	114	113	7	2,580	10	9	195	3,405	1		

二枚貝（全体最小個体数の中で90.37%を占める）

参考文献

- ① 黒住耐二「軟体動物遺存体」『古い地原貝塚』沖縄県教育委員会 1987年。
- ② 黒住耐二他「豊見城村の長嶺、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類」『豊見城村の遺跡』豊見城村教育委員会 1988年。
- ③ 白井洋平著『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星図書 1977年。
- ④ 吉良哲明著『原色日本貝類図鑑』保育社 1964年。

き - 53				き - 54				く - 51				く - 52				最少個体数 (比率)	科別最小個体数 (比率)	
II	III	IV	一	II	III	IV	石数上	I	II	III	長石	IV	II	III	IV	目だまり		
層	層	層	括	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層		
8	5				1		4		1	7	1	11	8	2	1	75	80(0.29%)	
3	2															5		
	1															1	1(-)	
1	2	2			1		2		2		2				1	17	17(0.06%)	
											1					1	1(-)	
											1					1	1(-)	
5	660	618		4	4	36	7	282	8	22	490	4,624	88	1,102	187	1,066	13,209(47.25%)	
																51	57	
																	13,384(47.88%)	
4	2				1		3					23		8		23	118	
												2				2	2(0.01%)	
7	5			1	2		1		1		11	3	2		4	54		
1									1		1		1		7	17		
2												1		1	1	4	87(0.31%)	
3						1									1	12		
2	114	363		1	2	14	19	97	1	10	140	2,109	26	91	25	751	5,101(18.25%)	
									1	3		2	2		2	24	5,125(18.34%)	
8	290	364		9	1	222	18	256	3	27	150	1,580	36	183		316	4,794(17.15%)	
23	23				2	6		32		17	2	262	5	7	2	23	451	
3	16						1				18		9		12	103		
1	7	12	*		4		5		2	6	80	4	6	2	20	202		
1						1								1	4			
2	2				1		2		2		19				48			
1	2					1					2				9	5,615(20.09%)		
															1			
															0	(1)		
1							1								1			
															1			
	1														1			
															2	2(0.01%)		
46	83				8		52		10	81	2,123	13	29	6	144	3,412(12.21%)		
															1	3,413(12.21%)		
															1			
	1														1	1(-)		
5	1						2			9	104		14	5	9	209	209(0.75%)	
										2		4		6	14	14(0.05%)		
17	1,186	1,505		1	14	11	296	44	743	12	92	894	1,104	187	1,458	227	2,446	
															27,952(100%)			
															11	27,952(100%)		

(2) 阿波根古島遺跡出土の脊椎動物

金子 浩昌

出土した脊椎動物遺存体種別表

脊椎動物門			
I	軟骨魚綱	目	
1.	サメ	目	
	科・属不	明	
2.	エイ	目	
	科・属不	明	
II	硬骨魚綱	目	
1.	ダツ	目	
	科・属不	明	
2.	スズキ	目	
	ベラ	科	
	コブダ	イ	
	ブダ	イ	
	科・種不	明	
3.	フグ	目	
	ハリセンボン	科	
	属・種不	明	
III	爬虫綱	目	
1.	カメ	目	
	ウミガメ	科	
	属・種不	明	
IV	鳥類綱	目	
1.	キジ	目	
	キジ	科	
	ニワトクリ		
2.	ツル	目	
	クイナ	科	
	属・種不	明	
V	哺乳綱	目	
1.	食肉	目	
	イヌ	科	
	イヌ	科	
	ネコ	科	
	ネコ	科	
2.	海牛	目	
	ジュゴン	科	
	ジュゴン	科	
3.	奇蹄	目	
	ウマ	科	
	ウマ	科	
4.	偶蹄	目	
	ノシシ	科	
	ブタ	科	
	ウシ	科	
	ヤギ	科	
	ウ	ギ	

Phylum VERTEBRATA
I Class Chondrichthyes
1. Order Lamniformes
Fam. et gen.indet.
2. Order Rajiformes
Fam. et sp. indet.
II Class Osteichthyes
1. Order Beloniformes
Fam. et gen. indet.
2. Order Perciformes
Family Labridae
<i>Semicossyphus reticulatus</i>
<i>Scaidae</i>
Fam. et sp. indet.
3. Family Order Tetraodontiformes
Family Diodontiae
Gen. et sp. indet.
III Class Reptilia
1. Order Chelonia
Family Chelonidae
Gen. et sp. indet.
IV Class Aves
1. Order Calliformes
Family Phasianidae
<i>Gallus g. var. domestica</i>
2. Order Gruiformes
Family Rallidae
Gen. et sp. indet.
V Class Mammalia
1. Order Carnivora
Canidae
<i>Canis familiaris</i>
Felidae
<i>Felis catus</i>
2. Order Sirennia
Family Dugongidae
<i>Dugong dugong</i>
3. Order Perissodactyla
Family Equidae
<i>Equus caballus</i>
4. Order Aetioidactyla
Family Suidae
<i>Sus sp.</i>
Family Bovidae
<i>Capra hircus</i>
<i>Bos taurus</i>

阿波根古島遺跡からはウシ・ブタを中心とした大量の骨を出土したが、それらは13世紀後半～18世紀のものと考えられている。ただ、遺跡の在る場所はその後も何らか人々の生活と関わりがあったために、後世の攪乱もあり、出土した骨のすべてを時期的に明瞭にすることは難しかった。これは遺跡の性格からやむ得ぬことであったので、とりあえず調査時の層位に従ってそれらの骨の出土状況を述べることにする。また、その結果を表に示しておいた。

記述に当って、本遺跡の調査担当者である金城亀信氏に種々御教示をいただいた。また整理に協力された方々にも御礼を申上げたい。なお、本文中の計測はA.von.den Driesh (1976) によるものである。

脊椎動物遺体の概要

1. 魚類

魚骨の出土は種類、量ともに極めて少なかった。沖縄における遺跡としてはこれまでに見ない程に少なかったが、これは近世遺跡の特徴であるのかも知れない。

確認されたのは6種類、その他の標本の主要なものを（椎体など）統計しても18点で、個体数などを推測する程のものではなかった。おそらく魚の処理の仕方、食べ方にも違いが出て来たことによるものであろう。

2. 爬虫類

ウミガメ類の骨が断片も含めて、5片が検出されているのみである。

3. 鳥類

ニワトリ

1. <-53 第II層……右大腿骨片
2. <-48 第III層……左胫骨片
3. き-50 第III層……左大腿骨片
4. き-54 第III層集石…複合仙骨片

出土層位	セイエイ	アフロ	ハービツ	コラザイ	ブタ	サカナ	合計
表 例	1		—				2
か-53 肩甲				0.0			1
か-54 肩甲	2	0.10		0.0			4
か-54 背骨						1	1
か-55 背骨						1	1
か-56 背骨	1						1
か-57 背骨						1	1
か-58 背骨			—				1
か-59 不明						1	1
か-60 不明	2	1			0.0	0.0	5
合計	6	1	0.10	0	—	0	18

第9表 ウミガメ出土状況

出土層位	セイエイ	カ-54				カ-52				カ-52				カ-52				合計	
		上腕骨	背甲	胸骨	背甲	胸骨	背甲	胸骨	背甲	胸骨	背甲	胸骨	背甲	胸骨	背甲	胸骨	背甲	胸骨	
上腕骨		1	1	1							1								1
背甲		1	1	1							1								4
合計		1	1	1							1								5

5. き-51 第IV層……右尺骨（完存）、左上腕骨片、右大腿骨片
6. <-52 第IV層……右大腿骨
7. <-51 第IV層……左上腕骨、右大腿骨片

上記の標本のうち現在のレグホン種位のサイズをもつ標本（1, 2, 4, 6, 7）と、

その他の骨がこれよりも小さく、きしゃしな四肢骨があった。当時のニワトリの形質は標本の不充分さもあって良くわからっていない。今後の検討が必要である。

クイナ科の一種？

く-51 第IV層……右大腿骨片

近・遠位部を欠くので問題がのこる。パンと比べて骨体の腕曲がやや弱い。

4. 哺乳類

イヌ：胫骨が1点のみあった。

ネコ：幾つかの地点から18点が出土し、3個体分位の骨になる。本州の中・近世の遺跡からもネコが出土する。ネコの多いのは新しい時期の遺跡の特徴と思われる。

第10表 イヌ出土状況

部位	出土地点 層位		き-53 C-50		合計	
	左	右	左	右	左	右
中手・中足骨(蹠片)					(1)	(1)
趾骨			R	L	0	0
骨体			II	I	1	1
不			III	IV	0	0
合計			V	VI	1	1
			VI	VII	(1)	(1)

第11表 ネコ出土状況

部位	出土地点 層位		き-50 51		き-52 54		き-55 50		き-52 53		合計	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
上腕骨	R	I	I	I	I	I	I	I	I	I	3	3
	L											
	不			I			2		3		0	0
尺骨	R											1
	L											0
	不											0
中手骨	R											0
	L											0
	不						I		I			1

部位	出土地点 層位		き-50 51		き-52 54		き-55 50		き-52 53		合計	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
寛骨	R										1	1
	L										1	1
	不										0	0
大転骨	R						I				1	2
	L										1	1
	不										0	0
脛骨	R	I	I							I	I	3
	L											1
	不											0
合計	I	I	2	I	I	I	I	I	I	I	8	I
												17

ジュゴン：肋骨片が1点だけ検出されている。く-50 第II層 肋骨1点。

ウマ：最少個体数は5個体になるが、頭蓋は無く、上顎骨のみが歯から推定され、下顎骨も2個体分。四肢骨は指趾骨を除いて完存するものではなく、打ち割られている。

幾つかの計測値を示す。

上腕骨

B T : 59.74, 65.16, 67.08 BP : 68.55

膝蓋骨

G L : 58.65, 58.86

胫骨

B d : 64.35

S D : 41.69

※ 計測部とその名称は Driesch (1976) による。

第12表 ウシ、ウマ出土状況

出土場所 部位	骨種類	部位別個体数														合計																	
		か 55	か 54	6 55	3 47	3 48	3 49	3 50	3 51	3 52	3 53	3 54	3 59	3 49	3 50	3 51	3 52	3 53	3 50														
頭 頭 頭 頭 頭		1					2		1		1		1		1	1	1	1	1	8													
骨 骨 骨 骨 骨	骨(破片)	(1)	(2)	(5)	(1)	(2)	(1)	(1)	(3)	(2)	(3)	(3)	(1)	(5)	(1)	(2)	(5)	(2)	(3)	(1)	(1)	62											
椎 椎 椎 椎 椎	椎突起	2	1		3	5			1	1	1	2	4	5	1	1	1	1	1	1	4	50											
尾 尾 尾 尾 尾																1	1	7	1	1	1	2											
手 構・足 構	手	2		3		3	2	4	3	1	5	1	4	2	1	12	2	5	1	2	2	88											
合 計		2 (1)	1 (2)	2 (5)	4 (1)	0 (1)	0 (1)	6 (2)	7 (1)	6 (2)	3 (3)	1 (1)	0 (2)	6 (3)	1 (3)	14 (5)	7 (1)	11 (1)	2 (2)	0 (1)	3 (3)	2 (1)	13 (2)	4 (5)	14 (2)	1 (1)	13 (3)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	5 (1)	148 62

ブタ

イノシシ属の多くの骨が出土している。上腕骨遠位部が48個体分あり他の部位の倍位の数が出土している。この48点の遠位部で、5点のみが骨端を付け（骨化する）、他はすべて脱れていた。他の四肢骨も殆んど骨端骨の脱れる状態であった。

歯は四肢骨に比べて半分位の個体数を推定できる数しか残っていなかったが、咬耗は僅で、サイズは小さい。例えば九州の弥生時代に比定される具志原貝塚（資料整理中）のものと比べてその差は明らかである。

計測値を上腕骨の例のみ示す。

上腕骨

阿波根古島遺跡

具志原貝塚

$$\begin{aligned} \text{Bd} &: (26 \cdot 85 (\text{L})) (30 \cdot 31 (\text{L})) (38 \cdot 13 (\text{L})) (42 \cdot 07 (\text{L})) \\ \text{BT} &: (23 \cdot 53 (\text{L})) (26 \cdot 15 (\text{L})) (31 \cdot 07 (\text{L})) (33 \cdot 00 (\text{L})) \end{aligned}$$

これらの標本の年令の傾向を知ることは可能であった。別に表示した歯の部位による数、それらの咬耗度別の数量を示すグラフによってみると、乳臼歯をもつ個体とM₃が完出する個体が非常に少ないと、多くはM₁が完出し、M₂が萌出する直前もしくは直後と、それ以後の萌出が進んでいる時期になる。これは多くの個体が当才の秋から以降、次の年の夏から秋にかけて殺されたものであった。このような若い個体を多く食べているのは、これらの個体が家畜として飼われていたことを推定させる。この資料は沖縄でブタの飼育が普及していく過程を示すものと考えられる。

ウシ

ウシの骨はブタに次いで多く、多分その1/2位の数になるのではないかとみている。最少個体数25個体である。ウシの場合も上腕骨の遠位端の保存が最も多く、その大部分が骨端部の脱れた骨であった。歯牙をみると、乳歯とM₃がみられ、1才程度までの若い個体と、3才以上の個体のあることがわかる。ウシは当時既に飼育されていた役畜であるが、若い個体も食べられていた。しかし、かなりの数が役畜として飼育されていた

はずである。

標本の一部の計測値をあげておく。

上 腕 骨

BT : 71.30 (R), 78.90 (L)

桡 骨

BP : 71.46 (L), 77.65 (L)

Bd : 62.61 (R), 69.85 (R)

SD : 35.10 (L・細いもの)

中 手 骨

BP : 52.46 (L), 62.12 (R)

Bd : 54.56 (L), 59.40 (R)

胫 骨

BP : 88.16 (R)

Bd : (60.32 (R)), 66.95 (R)

SD : 34.12

中 足 骨

BP : (46.29 (L))

SD : (26.31 (L))

踵 骨

Bd : 49.40 (R), 54.13 (R)

GLI : 62.48 (L), 71.77 (L)

以上の計測によると、黒毛和種から中型の在来種位までの大きさのウシであったことが知られる。

ヤギ

III・IV層からヤギの骨が検出されている。最少個体数は3個体である。ブタ、ウシに比べて少ない。若し、これが確かな証拠とすれば、この頃ヤギの飼育がはじまるのであろうか。個体数の少ないので、まだ稀少の動物であったということなのであろう。しかし、ヤギの飼育をめぐる問題は今後の出土例の検討を経なければならぬと思っている。

ヒト

ヒト歯牙が2点得られている。

き-48第Ⅲ層1点、き-53第Ⅱ層1点。

収 東

本遺跡の動物骨は魚類が少なく、ウマ、ブタ、ウシを主とするものであった。ブタは、グスク遺跡からの出土遺跡中にも認められないわけではないが、まだよく確認するには至っていない。

本遺跡で知られたブタの大きさはリュウキュウイノシシとあまり変わらないが、リュウキュウイノシシとの関係は明らかではない。多分、大陸からの輸入が元になっている

第13表 ヤギ出土状況

部 位	出土 施 点												合 計
	き 48	き 49	き 50	き 51	き 52	き 53	き 54	き 55	き 56	き 57	き 58	き 59	
下 顎 骨	是												1
	不	是											0
上 顎 骨	是												1
	不	是											0
椎 骨	是												0
	不	是											0
大 腿 骨	是												1
	不	是											0
脛 骨	是												1
	不	是											0
中 手 骨	是												1
	不	是											0
中 足 骨	是												1
	不	是											0
尾 骨	是												1
	不	是											0
坐 骨	是												0
	不	是											0
合 計		1	1	1	1	1	3	1	2	2	1	1	16

のであろう。

ウマ、ウシも完存する骨はなく、食用に当てられたものである。個体数の多かったウシについてみると、若い個体が食用とされ、成獣は役畜として飼われた後に、何かの機会に食用とされることもあったと思われる。

阿波根古島の資料は沖縄本島の家畜史の上で重要な資料である。かなりの量になるものを短期間で、その全体を分類、整理したのもそのためである。しかし、これについて詳細をのべる余裕を今持たないので、いずれ機会をみて報告したいと考えている。

参考文献

西中川駿、古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究。昭和63年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書 1989. 3

第14表 ウマ出土状況

注：()→破片，| →幼獸，↑→♀♂，×→

第15表 ブタ出土状況

注：() → 破片，| | → 幼獸，♂ / ♀ → オス / メス

注：（ ）→破片，——→幼獸，♂／♀→オス／メス

出土地点 部位	層位 採 集	試 し 表																		
		か 34	か 52	か 53	か 54	か 55	か 40	か 43	か 45	か 46	か 48	か 49	か 50	か 51	か 52	か 53	か 54	か 55	か 56	か 57
尺 骨	尺 骨	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	近 位 部	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	遠 位 部	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
白 骨	白 骨	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	白 部 完 存	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	白 部 上 半	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	白 部 下 半	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
近 位 部	骨 端 は ず れ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
大 腕 骨	大 腕 骨	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	完 存 のみ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	骨 端 のみ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	骨 端 は ず れ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
近 位 部	近 位 部	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	骨 端 のみ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	骨 端 は ず れ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
睡 骨	睡 骨	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	完 存 のみ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	骨 端 のみ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	骨 端 は ず れ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
膝 盖 骨	膝 盖 骨	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	距 骨	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	距 骨	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
中 手・中 足 骨	中 手・中 足 骨	2	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	3	1	3	1	4	6	5	
基 節 骨	基 節 骨	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
骨 端 のみ(各部位)	骨 端 のみ(各部位)	2	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	5	1	1	
骨 片(長 骨)	骨 片(長 骨)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
合 計	合 計	33	1	0	1	7	12	31	9	1	3	1	1	34	33	18	0	17	15	1
	成 数	35	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(6)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(2)	(3)	(4)	(3)	(3)	(2)	(1)
	缺 故	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	動 慢	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	總	125	1	0	1	7	12	31	9	1	3	1	1	34	33	18	0	17	15	1
	缺 故	125	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(6)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(2)	(3)	(4)	(3)	(3)	(2)	(1)
	動 慢	125	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

第16表 ウシ出土状況

出土地点 層位		表 53	か 54	か 55	き 48	き 49	き 50	き 51	き 52	き 53	き 54	き 55
部 位		探 層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層
頭 頭	後 頭 類	R L					1			1		
	不								2			
	角	R L										
	骨	不			1			(1)	(1)		(1)	
頸 頚	側頭鼓室部	2	1		3	1						
	筋肉突起							1			1	
	下顎骨(破片)	R L							(1)		(1)	
	切歯骨	R L					1					1
骨 骨	不	R L										
	関節突起	L 不	1				1		1		1	1
	環 椎	1							1			1
	軸 椎		(1)									
椎 骨	胸 椎				1							
	腰 椎											
	椎体(破片)			(1)	(1)(4)			(1)	(1)(2)(1)(1)		(2)(1)	(1)
	仙 骨											1
助 骨		1						3				
肩 甲	完存	R L										1
	不											
	骨 体	R L	1		1				1			
	骨	不										
上 腕	関節窓部	R L	1		1					1	2	1
	不									2		1
	近位部	R L										
	位	骨端のみ (破片)	L 不				(1)					(1)
腕 骨	完存	R L							1			
	不											
	骨 体	R L	1	2		1	1		1	2		1
	位	不										
骨 部	遠位部	R L							1			
	骨	不										
	骨端のみ	R L	1	1								
	骨端のみ (破片)	L 不	5			(1)(1)		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)
骨 部	骨 端	R L	1		3	1	2	1	1	2		1
	はずれ	L 不	1							2		1

注: () → 破片。 | | → 幼獣。 ♂/♀ → オス/メス

出土地點		部位		表	か 53	か 54	か 55	あ 48	あ 49	さ 49	さ 50	さ 51	さ 52	さ 53	さ 54	さ 55	さ 56
		探	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋	筋
		近位部	R L											1	2		
		位	不 R L														
		位	骨端のみ 不 R L											1	1		
		部	骨端はずれ 不 R L														1
		骨	体 不 R L														1
		骨	遠位部 不 R L				1										
		位	骨端のみ 不 R L				1										
		部	骨端はずれ 不														
		近位部	R L				1							1	1		1
		完	存 不														
		骨	骨體 不											1	1	1	1
		中	近位部 不				1							1	1	1	1
		完	存 不														
		手	骨體 不														
		骨	遠位部 不	(4)	(2)			(1)	(1)	(2)						1	(3)(1)(2)
		対	完存 不	1	1		1	2	1	1				1	2	1	1
		骨	臼部(破片) 不	(1)			(1)(2)							(1)		(1)	
		大	近位部 骨端のみ 骨端はずれ 不														(1)
		位	R L														
		部	骨端部 不				1										
		骨	大転子部 不														
		關	完存 不				1										
		骨	骨體 不														
		脛	遠位部 骨端のみ 骨端はずれ 不														1
		位	R L				1										
		部	内側韌 不														
		骨	外側韌 不				1										

注: () → 破片。| | → 幼獣。♂/♀ → オス/メス

出土地点層位		表	か 53	か 54	か 55	き 48	き 49	き 50	き 51	き 52	き 53	き 54	き 55
部位		採	Ⅲ 層	Ⅲ 層	Ⅳ 層	Ⅲ 層	Ⅳ 層	Ⅲ 層	Ⅳ 層	Ⅲ 層	Ⅳ 層	Ⅲ 層	Ⅳ 層
近位部		R L		1		1		1		1		1	
脛部		R L											
骨端はずれ		R L	(1)			1 (2)	(1)			1		1 (1)	
骨全体		R L	(1) (1)							(1)		1 (1)	
骨端不		R L											
遠位部		R L		1		1		1		1			
骨端のみ		R L	1										
骨端はずれ		R L										1	
膝蓋骨		R L				1						1	
距骨		R L	2	2	1	1			1	2	1	1	
踵骨		R L	1			1			2	1	1	1	
近位部		R L	1			(1) 2	2		2		2	1	
中足		R L		2	1	1		1			2	1	
完存		R L								2			
骨全体		R L										1	
骨端不		R L		(1)		(1) (1)	(1)			(2)		(1)	
遠位部		R L	1			1				2		1	1
足根手根骨		R L	1			1			1		2	1	
基節骨		完存 骨端のみ	3	2	3		3	2	1	1	2	9	4 2
趾骨		R L	1	1		3	1			1	1	1	2 1
中節骨		R L				1 1			1	4		1 3	
骨端不		R L				(1)			(1)			(1) (1)	
末節骨		R L	1			4 2		1	1 1 4		2	1	2 1
合計		成数 散数	21 (5)	8 (1)	20 (1)	1 (1)	4 (5)	3 (5)	0 (2)	23 (3)	25 (4)	8 (9)	2 (1)
幼獣													
合計			III		III		III				III		

注：()→破片，| | →幼獣，♀／♂→オス／メス

第17表 ウマ歯牙出土状況

部 位 出土地点層位	上 頸 骨 R				上 頸 骨 L				下 頸 骨 R				下 頸 骨 L				切 歯 数 合 計																
	I ₁	I ₂	I ₃	C	I ₁	I ₂	I ₃	P ₁	I ₁	I ₂	I ₃	M ₁	I ₁	I ₂	I ₃	P ₁																	
表 両										2				1	1			2															
か 53	Ⅲ 層																	7															
か 54	Ⅲ 層																	1															
か 54	Ⅳ 層																	2															
き 48	Ⅲ 層																	1															
き 49	Ⅲ 層																	3															
き 50	Ⅲ 層																	5															
き 51	Ⅲ 層																	1															
き 52	Ⅲ 層																	2															
き 52	Ⅳ 層																	6															
き 53	Ⅲ 層																	6															
き 54	Ⅲ 層																	5															
き 54	Ⅳ 層																	1															
き 55	Ⅲ 層																	1															
く 48	Ⅲ 層																	1															
く 50	Ⅲ 層																	1															
く 51	Ⅲ 層																	15															
く 52	Ⅲ 層																	15															
く 53	Ⅲ 層																	1															
け 50	Ⅲ 層																	1															
け 50	Ⅳ 層																	1															
こ 49	Ⅲ 層																	2															
一 括	Ⅲ 層																	2															
貝石巖	Ⅲ 層																	4															
合 計		1	0	4	5	4	4	5	4	0	2	4	5	4	4	8	2	0	4	4	4	5	3	2	0	2	0	4	2	2	39	24	157

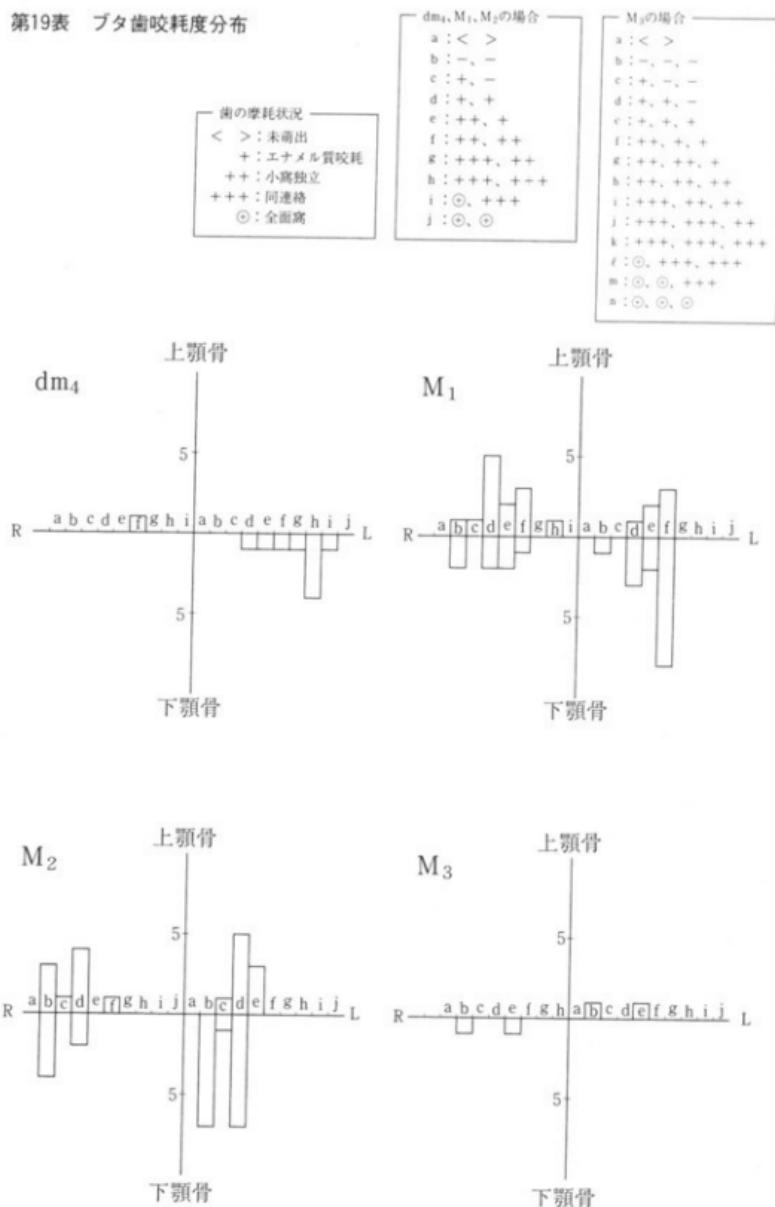
注：I→切歯、dm→乳歯、C→大歯、P→前臼歯。M→後臼歯。♂/♀→オス/メス。<>→未発見

第18表 ヤギ歯牙出土状況

部 位 出土地点層位	上 頸 骨 L								上 頸 骨 R								合 計	
	I ₁	I ₂	I ₃	C	m ₂	m ₃	m ₄	P ₁	I ₁	I ₂	I ₃	M ₁	I ₁	I ₂	I ₃	P ₁		
き 50	Ⅲ 層																	4

注：I→切歯、dm→乳歯、C→大歯、P→前臼歯、M→後臼歯

第19表 ブタ歯咬耗度分布



第20表 ブタ歯牙出土状況

出 生 層 位 置 記 号	部 位	上 頸 骨 R								上 頸 骨 L																							
		1	2	3	C	m2	3	4	P1	2	3	M1	2	3	1	2	3	C	m2	3	P1	2	3	M1	2	3							
表	採								1	1	1	3	4																				
か53	III層																								1								
か54	II層																																
	III層																																
き48	III層																																
	IV層																																
き49	III層																																
	IV層																																
き50	III層								1															1	2	1	2						
	IV層																								1								
き51	III層																									1							
	IV層																																
き52	III層																																
	IV層																																
き53	II層																																
	III層																																
	IV層																								1	1	2	1					
	不明																																
き54	II層																									1	1						
	III層																																
	IV層																																
き55	I層																												1				
く49	III層																																
く50	III層																												1				
	IV層																																
く51	II層																																
	III層																																
	IV層																												1	1	3		
く52	III層																																
	IV層																													1	1	1	
	集石																																
く53	I層																																
	II層																																
	III層																																
	IV層																																
こ49	II層																																
き57	I層																																
き58	I層																																
一括	IV層																																
	合 計	0	0	0	0	1/0	1/0	0	1	0	3	2	5(C)	18	15(D)	D	3	0	0	0/1	0	0	0	1	0	0	0	7(D)	7	11	3		

注：I→切歯、dm→乳歯、C→犬歯、P→前臼歯、M→後臼歯、♂/♀→オス/メス、

下顎骨 R					下顎骨 L					合計											
I	2	3	C		I	2	3	M ₁	2	3	I	2	3	M ₁	2	3	%未萌出	%	成歯数	過歯数	
1	2	3	C		1	2	3	M ₁	2	3	1	2	3	M ₁	2	3			0/0	15	
																	0	0/0	2		
																		0	0/0	2	
																		1		2	
																		1		10	
																		2		4	
																		(D)	(D)	1	
																		1	(D)	(D)	2
																		1	0/1	2	
																		0/1	0/1	3	
																		1	0/0	16	
																		(D)	2/2	16	
																		1		1	
																		1	0/1	5	
																		(D)	(D)	1	
																		1	0/0	1	
																		1	0/0	26	
																		(D)	4/3	1	
																		1		1	
																		1		1	
																		1		1	
																		1		11	
																		(D)	9	4	
																		1	0/0	1	
																		1	0/0	1	
																		(D)	1	5	
																		1	0/0	2	
																		1		1	
																		1		3	
																		1		3	
																		1		5	
																		1		1	
																		1		6	
																		1		2	
																		1		13	
																		2	31	5	
																		(D)	8	4	
																		1	0/0	12	
																		1	1	2	
																		1		1	
																		1		2	
																		1		5	
																		2		6	
																		2		2	
																		1/0		2	
																		1		1	
																		1		1	
																		0/0	14/7	223	
																		(D)	13/1	22	
																		総 数	245		

< >→未萌出

第21表 ウシ歯牙出土状況

番号 出土地点	部 位	上顎						下顎						上顎									
		1	2	3	C	1	2	3	4	M	1	2	3	C	1	2	3	M	1	2	3		
表 標		1	2	3	c	m2	3	4			1	2	3	c	m2	3	4		1	2			
Aトレンチ	表 標	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
か 53	II 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
か 54	IV 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
か 55	II 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
き 48	II 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
き 49	I 墓 II 墓 IV 墓 V 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1			
き 50	I 墓 II 墓 IV 墓 V 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
き 51	II 墓 IV 墓 V 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
き 52	N 墓 I-IV 墓 石巻上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3			
き 53	II 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2			
き 54	II 墓 石巻上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
く 49	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
く 50	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
く 51	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
く 52	II 墓 石巻上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
く 53	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
く 54	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
く 55	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
く 56	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
け 50	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
け 51	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
こ 49	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
一 様	II 墓 百 墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
合 計		0	0	0	0	0	5	9	9	12	8	5		0	0	0	0	0	12	13	9	13	11

注: I→切歯、dm→乳歯、c→大歯、P→前臼歯、M→後臼歯、空／空→オス／メス、()→未崩出

T 頭 骨 R						T 頭 骨 L						切歯 歯片 R-L 不 合							
I_1	z_1	z_1	C	：	P_1	z_1	z_1	M_1	z_1	z_1	C	：	P_1	z_1	z_1	M_1	z_1	z_1	
I_1	z_1	z_1	c	m_2	z_1	z_1	4				c	m_2	z_1	z_1					
1	1															1	1	5	6
																			34
																			1
																			1
																			1
																			12
																			5
																			0
																			1
																			15
																			4
																			1
																			11
																			5
																			3
																			3
																			15
																			4
																			1
																			1
																			11
																			5
																			3
																			2
																			1
																			8
																			2
																			5
																			25
																			4
																			3
																			1
																			20
																			25
																			10
																			3
																			6
																			2
																			1
																			1
																			8
																			2
																			5
																			2
																			1
																			9
																			3
																			1
																			2
																			1
																			2
																			1
																			2
																			1
																			2
																			4
																			4
																			4
																			4
																			4
																			4
																			4
																			349
0	0	0	0	0	5	10	5	10	11	3	0	0	0	0	0	3	4	6	326
9	3	4	5	0	5	10	5	10	11	3	0	0	0	5	0	3	4	6	23



第VII章 調査の成果

本遺跡はグスク時代から近世の集落遺跡である。遺構の性格は掘めなかつたが、斜面地で検出された点は当初、土留めや屋敷などの施設を考慮して調査を進めたが、性格が把握できなかつた。今後、類例遺構の発見に期待したいところである。

遺物の面ではグスク土器の鍋形Ⅱc類の出土例は我謝遺跡のみでしか検出されていない、この種土器は砂川元島遺跡で出土した鉄鍋の影響を受けて登場してきた土器とみられる。また、瓶形土器は我謝遺跡で報告されていて舶載陶磁器の影響を受けて模倣されたものである。また、碗形土器も舶載陶磁器を模倣していることが窺える。この例は稻福遺跡の土器の中にも見出せるが、舶載陶磁器のみの影響で登場したとは考えがたく、未発見である土師器や木器の碗が強く影響を与えるものと考えられる。

白磁のI類は12・13世紀に位置づけられる資料であり、伊原遺跡などで出土している。II類は、玉縁の白磁碗で13世紀後半から14世紀前半の遺跡で多く出土する。大里伊多慶名原遺跡・伊原遺跡などで出土する。青磁の櫛目割花文碗と皿の資料は、13世紀から14世紀前半頃に位置づけられる遺跡で集中する。櫛目割花文碗の出土例は少なく糸数城跡・稻福遺跡などで出土している。陶磁器での時期は13世紀後半から17・18世紀と幅が広い。

褐釉陶器の碗は県内では出土例がないため、今後の類似資料の発見に期待したいところである。

須恵器では釉がかかった例がみられ此れも類似がなく、今後の出土例等に期待したい。

三彩の人形の例は全国的に見ても出土例がなく、類似資料の発見に期待したいところである。その他に備前系の播鉢や高麗瓦などが得られている。

脊椎動物ではウシ、ウマ、ブタ、ヤギ等が出土し、特にウシ・ブタの骨が多く出土している。本遺跡のブタは若い個体だけが食べられ、家畜として飼われたことが推定されている。

貝類では、種の大半が遠浅の砂泥底に棲息するものを採集していることが判明した。この様な状況は伊良波西遺跡の立地や環境とほぼ近似する。

本遺跡は14・15世紀に置いては、近接する阿波根グスクの集落として位置付けられる。集落とグスクの関係にあったことが鎧の飾り金具等が物語っている。16世紀以降は現集落の古島として存在していることが近世の遺物で推定できる。(金城亀信、照屋 孝、長嶺 均、島袋 洋)

付録 人工遺物集計表

第22表 ゲスク系土器(口・頸部)と移入土器出土状況

器種 分類 層序	鍋 形								壺 形				鉢形		瓶 碗		器種 不明						移入 土 器 計
	I				II				a	b	頭	a	b	頭	a	b	鍋	壺	鉢	甕	不 明		
	a	b	c	d	e	a	b	c															
表 採			1		3	①			1		1	3					1	2			2	14.①	
I																							
II	①	1	1			1	1	1										1	1			7.①	
III		3	1	2			3		3	1		1	1	2		3	1	8	3	32			
IV		1	5	1			1		2	1				1		1	6	1	20				
V																							
石敷遺構		1	1																			2	
集石遺構						1																1	
石列遺構												1										1	
合 計	①	1	11	4	6	①	1	6	1	1	9	1	1	1	3	4	3	1	2	16	4	77.②	
		22.①				7.①		2			9	2				29							

※ ○印滑石混入土器

第24表 青磁碗口縁部・胴部出土一覧表

器種 分類 出土 層位	青 磁 碗 口 縁 部												青 磁 碗 胸 部 計	合 計	比 率			
	I 類	II 類	III 類	IV 類			V 類			VI 類	VII 類	VIII 類						
				IVa 類	IVb 類	Va 類	Vb 類	Vc 類	VIIa 類	VIIb 類	VIIa 類	VIIb 類	VIIc 類	VId 類				
表 採				1		1	2		1		3	7	2	9	60	86	6.6 %	
1 層				1	1		2		3	2	2	12	2	6	101	142	10.9 %	
2 層				2	1		1	6		7	1	16	1	8	107	150	11.5 %	
3 層	1	1	1	2	2	1	4	14	1	11	4	8	35	6	46	374	511	39.3 %
4 層	1	1	7	7		3	4		12		9	45	7	25	251	372	28.6 %	
5 層						1	1	1		1	1		1		1	1		0.07%
6 層						1	1	1		1	1		1		8	14		1.07%
石敷遺構															6	6		0.46%
石積遺構															2	2		0.15%
石列遺構			1											1	12	14		1.07%
合 計	1	2	3	12	12	2	10	29	1	35	7	23	116	18	95	922	1298	=100%
比 率	0.07	0.15	0.23	1.84	3.15	0.07	3.23						19.4	71.0	=100%			

第23表 グスク系土器（底部・胴部）出土状況

種類 層序	I		II		III		IV	V	不明		葉	胴	合計		
	a類	b類	a類	b類	a類	b類			II b (?)	III IV	不明				
表 採	1		1		1						5	1	353.②	356.②	
I									3				442.①	451.①	
II			4		2	1	1	2					260.①	270.①	
III	3		2.①	7			1			1	1	2	1,482.⑨	1,499.⑩	
IV	3		2	3	①		1			1	1		912.④	923.⑤	
V													22	22	
石敷遺構		1												1	
集石遺構															
石列遺構															
合 計	7	1	5.①	14	1.①	2		3	1	5	2	6	4	3,471.⑯	3,522.⑯
	8		19.①		3.①					13					

注。○印は滑石混入土器

第25表 青磁碗底部出土一覧表

分類 出土層位	A	B	C	D	合	比
	タイ ブ	タ イ ブ	タ イ ブ	タ イ ブ	計	率
表 採	6		4	2	12	6.5%
1 層	4	1	5	1	11	5.9
2 層	9	3	9	4	25	13.5
3 層	22	11	17	7	57	30.9
4 層	33	8	24	5	70	38.0
5 層						
6 層		1	3		4	2.1
石敷遺構			2		2	1.0
石積遺構						
石列遺構	2	1			3	1.6
合 計	76	25	64	19	184	≈100
比 率	41.3	13.5	34.7	10.3	≈100%	

第26表 タイ陶器出土状況

部位	蓋か身	底 部	合 計
	III	1	4
合 計	3	1	4

第27表 緑釉水注出土状況

タイ ブ 層序	仙	長	鶴	鶴	底	胴	合
	蓋	瓶	瓶	壺	蓋	部	部
表 採	1					2	3
I							
II	1					1	1
III		1	1			1	3
IV	3	1	1			2	7
石積遺構						1	1
合 計	5	1	1	1	1	7	17

第28表 青磁皿・皿底部・角杯・盤・瓶・壺出土一覧表

種類 分類 出土層位	青 磁 皿								皿 角 柄口緣部	盤 盤 底 脇 部	蓋 計	合 比		
	I	II	III	IV	V	VI	VII	類						
	類	類	類	類	類	類	類	Vla Vlb Vlc						
表 採	1	1	1		2				1	1	2	2	1	12 7.4
1 層		2		1						1		1	1	7 4.3
2 層		2		3	1				2	2	1	3	1	15 9.3
3 層		8	1	1	4			2 3 2	8	9	1	1	2	3 5
4 層	1	8	1	12	1			2 1 2	1	6	5	10	1 3 9 3	1 67 41.6
5 層														
6 層		1								1	1			3 1.8
石敷遺構		2										1		3 1.8
石積遺構														
石列遺構			1								1	1	1	4 2.4
合 計	2	1	25	1	2	22	1	1	4	4	5	3	18	17 1 2 20 2 6 19 3 1 1 161 ≈100
比 率	1.2	0.6	15.5	0.6	1.2	13.6	0.6	0.6	2.4	2.4	3.1	1.8	11.1	10.5 0.6 1.2 12.4 1.2 3.7 11.8 1.8 0.6 0.6 ≈100

第29表 白磁碗・口縁部・底部出土一覧表

種類 分類 出土層位	口 縁 部												底 部						脇 部 片	合 計	比
	I	II	III	IV	V	VI	類	Vla	Vlb	Vlc	不	I	II	III	IV	類	V	VI	VII	不	
	類	類	類	類	類	類	類				類	明	類	類	Na	Nb	類	類	類	明	
表 採	2	1		1		1	3													20 28 11.2	
1 層				2	2				4					1						34 43 17.2	
2 層					1	1		1	9				1	1			1	1		21 37 14.8	
3 層				2	4	1	3	2	4			1	1	1		4		1	49	73 29.3	
4 層	1	2		1	1		4			3	1	1	2	1	2	3	1	2	43	68 27.3	
5 層																					
6 層																					
石敷遺構																					
石積遺構																					
石列遺構																					
合 計	1	4		4	8	5	3	8	20		3	2	3	5	1	2	8	2	3	167 249 ≈100	
比 率	0.4	1.6		1.6	3.2	2.0	1.2	3.2	8.0		1.2	0.8	1.2	2.0	0.4	0.8	3.2	0.8	1.2	67.0 ≈100	

第30表 白磁皿・口縁部・底部・壺・瓶・青白磁碗一覧表

出土層位 分類	種類			白磁皿			壺	瓶	青白磁碗	器種不明	合計	比率%						
	口縁部			底部														
	I類	II類	III類	部	部	部												
表採				3	2			1		1	7	11						
1層	1			2	3			1			7	11						
2層				1	3						4	6						
3層	2	3	10	10	1	1		1	1	1	29	44						
4層		1	5	8	1					1	16	24						
5層																		
6層																		
石敷遺構																		
石積遺構																		
石列遺構		1	1	1							3	4						
合計	3	5	22	27	2	3		1	3	66	66	100						
比率	4.5	7.5	33.3	40.9	3.0	4.5		1.5	4.5	66	66	100						

第31表 褐釉陶器出土状況

層序 分類	壺 形										鉢	碗	その他	底部	胴	合計							
	I					II			III														
	A		B		A	B	a	b	c														
	a	b	a	b						形	形	他	I	II	III	類	部						
表採			1													39	40						
I				1								1	1			85	88						
II										2					1	74	77						
III	1							1	1	1	①				2	284	290①						
IV		1	1		1	1					1		3	1	314	323							
V													1	6	7								
石敷遺構															6	6							
集石遺構															2	2							
石列遺構						1		1							6	8							
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	1	2	①	1	3	5	816	841①					
				3		2		2		6				8									

第32表 染付出土状況

層序	器種	A 群				B 群				C 群										
		碗形		皿形		碗形		皿形		小杯		a		b		c				
	分類	口 緣 部	底 部	口 緣 部	底 部	胸 部	口 緣 部	底 部	口 緣 部	底 部	碗形		碗形		碗形		皿形			
											口 緣 部	底 部	胸 部	口 緣 部	底 部	胸 部	口 緣 部	底 部		
表 採				1-(1)	2-(1)				1				4	3	2	4	1	4	1	
I					1	(1)							1	3		2	1	10	1	1
II	1	1	(2)	1	(1)	4							5	5	1	3	3	7	1	
III	2	3	2-(1)	(5)	(7)	1	1		1				8	5	3	12	3	20	3	
IV	2	4	1-(1)	2-(4)	(1)	1	1		1	1	5	8	5	1	11	4	10			
V																				
VI			1																	
石敷遺構																				
石積み遺構																				
石列遺構																	4			1
合 計	5	8	5-(5)	6-00	00	6	2	1	2	1	23	24	11	1	36	12	51	7	1	
			13	11-29				8	3			58			49		58			1
				24-29				12							251					

第33表 須恵器出土状況

層序	部位	口綠部	胸 部		底部	合計
			有文	無文		
			1	1		2
表 採			1	1		2
I						
II	2		4	1	7	
III	1	5	4	2	12	
IV		2	7	6	15	
V						
VI			1		1	
石敷遺構				2		2
合 計	3	8	19	9	39	

第34表 三彩水注出土状況

層序	タイプ	人 型		合 計
		II	III	
II		1		1
III		2		2
IV		1		1
合 計		4		4

第35表 瓦質土器

層序	器種	壺	鉢	擂	火	底	胸	合 計
		形	形	鉢	鉢	部	部	
表 採								5 5
I							1 2	3
II						2		2 4
III					2			7 9
IV	1	1				1	13	16
合 計	1	1	2	2	2	29	37	

器種 の 碗形 胴部	D 群												A・B群不明				A～D群不明				合 計	
	小杯			碗 形			瓶			腰折皿		鉢 形		皿 形		壺 形		碗 形		壺 形		
	口	底	胴	口	底	胴	底	底	部	底	部	底	部	口	縁	部	縁	部	口	縁	部	縁
4	2	1	1		1	1												31	18	2	17	101・(2)
11	3	1		1		2											1	20	9	18	86・(1)	
11	1	1	1		5	2											1	26	14	2	21	117・(3)
27	6	1	1		3	3	1									1	3	47	33	3	45	238・13
8	5				6	1		1	2	1						1	29	26	28	1	166・(6)	
																	2				3	
																	1	1	1	1	10	
61	17	4	3	1	16	9		1	1	2	2	2	2	4	156	1	100	8	130	I	721・29	
				24		26									160			238				
																34		161		239		

注 () 内の点数は基筒皿

第36表 陶質土器出土状況

器種 層序	土鍋			火舍			急須			手水鉢	香炉	底部			脚台	脚台	脚底 (?)	脚部	合計
	口 縁 ・ 把手	蓋	a	b	c	口縁 ・ 把手 ・ 注口	蓋	底	部			糸 切り ベタ 底	高 台	脚 台					
表 採						1	2			1				2				464	470
I		2	2				1							1				629	634
II	2	2	1					1	1									559	565
III				1	1									1	1	1		310	315
IV														1				103	104
石敷遺構			1															7	8
集石遺構																		4	4
石列遺構	1				1													22	24
合 計	3	2	5	1	2	3	1	1		1	1	4	1	1			2,098	2,124	
		5			8			5				6							

第37表 琥珀釉出土状況

層序	時期	16世紀	17世紀	合計
	壺胴部	瓶(?)高台	小杯	
表 採	1		1	2
I				
II	1			1
III				
IV	1	1		2
合 計	3	1	1	5

第40表 瓦出土表

層位	種別	高麗系瓦	灰色無文瓦	赤瓦	計
	I	—	—	3217	
II	—	—	—	10	10
III	1	1	2	2	4
IV	1	2	3	3	6
計	2	3	64	69	

※ カッコ内の数字は試掘トレンチ出土などの層位不明品

第38表 唐津産陶器

層位	数
第 II 層	2
第 III 层	4
第 IV 层	4
合 計	10

第39表 現代陶器(口縁・底部を含む)

層位	数
表 採	4
第 1 層	9
第 2 层	8
第 3 层	1
第 4 层	1
第 IV 层石列内	1
石垣立割	3
合 計	27

第41表 石器

層序	器種	石磨	石砥	磨面・ 砥面の 資料	用塗不 明	チャート 片	合 計
		斧	石	皿	石		
表 採		1			2	1	4
I							
II			1			2	1 4
III		1	1	1	3	3	1 1 11
IV			2		4	3	1 10
石數 遺構						1	1
合 計		1	5	1	7	11	2 3 30

第42表 撥鉢出土表

層別 位	口 緑 部					胴 部	底 部	計
	I類	II類	III類	IV類	V類			
I	—	2(8)	—	1(1)	—	3(5)	8849	8(7) 168
II	—	14	3	3	—	3	68	8 99
III	2	22	—	3	—	6	102	14 149
IV	2	3	—	1	1	2	62	6 77
V	—	—	—	—	—	—	1	— 1
石數	—	—	—	—	—	1	—	— 1
石列	—	1	1	—	—	—	1	4 6
計	4	50	4	9	1	20	367	47 502

※ カッコ内の数字は試掘トレンチ出土などの層位不明品

第43表 錫治関係遺物出土表

層序	種別	羽	口	鉄	漆	計
		I	—	2(1)	—	3
II	—	—	—	9	—	9
III	2	—	—	28	—	30
IV	—	—	—	21	—	21
計	2	—	—	61	—	63

※ カッコ内の数字は試掘トレンチ出土などの層位不明品

第44表 青銅製カンザシ出土表

I	層	(1)
II	層	3
III	層	6
IV	層	1
	計	11

※ カッコ内の数字は試掘トレンチ出土などの層位不明品

第45表 キセル出土表

層位	種別	石	製	土	製	陶質土器製		陶	製	磁器製	青銅製	計
		釣	バ イ 円 柱	一 内 筒 型	圓	釣	パイプ型		バ イ 円 筒	一 内 筒 型	バ イ 円 筒	
		鐘	八 角 形	形	型	鐘	八 角 筒 形	型	一 内 筒 型	一 内 筒 型	一 内 筒 型	
I	型	—	(1)	—	—	1	—	—	1	2	2(1)	8
II	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
III	1	—	—	—	—	—	3	—	—	—	1	5
IV	1	—	2	—	—	2	—	—	—	—	—	5
計	2	1	2	1	—	5	1	—	2	4	18	—

※ カッコ内の数字は試掘トレンチ出土などの層位不明品

第46表 鉄製品出土表

層位	種別	鎖の金具	銛	角	釘	用途不明品				計
						刀子状	鐵状	棒状	板状	
I	—	—	—	1	—	—	—	2	3(2)	8
II	—	1	—	—	—	—	—	—	3	4
III	1	—	3	—	—	—	—	2	8	14
IV	—	—	1	1	1	1	1	1	5	9
計	1	1	5	1	1	1	1	5	21	35

※ カッコ内の数字は試掘トレンチ出土などの層位不明品

第47表 円盤状製品出土表

層序	種別	中世須惠器	擂鉢	褐釉陶器	無釉陶器	計
I	(1)	7(3)	1	22	34	
II	—	1	2	6	9	
III	—	4	—	6	10	
IV	—	—	—	—	—	
石列	—	—	—	1	1	
計		1	15	3	35	54

※ カッコ内の数字は試掘トレンチ出土などの層位
不明品

第49表 阿波根古島遺跡の遺物組成

- ① 須恵器・唐津・現代陶器
- ② 石器・土製品・
骨製品・鉄製品
- ③ 瓦

- ④ 鋳治関係
- ⑤ 円盤状製品
- ⑥ カンザシ・キセル

第48表 沖縄産陶器

層序	種類	無釉	施釉		合計
			湧田系	壺屋系	
表採		254	42	96	392
I		643	72	211	926
II		460	54	119	633
III		934	58	80	1,072
IV		642	28	51	721
V		7			7
石敷遺構		24		2	26
石積遺構		1			1
石列遺構		51	4	4	59
合計		3,017	258	563	3,838

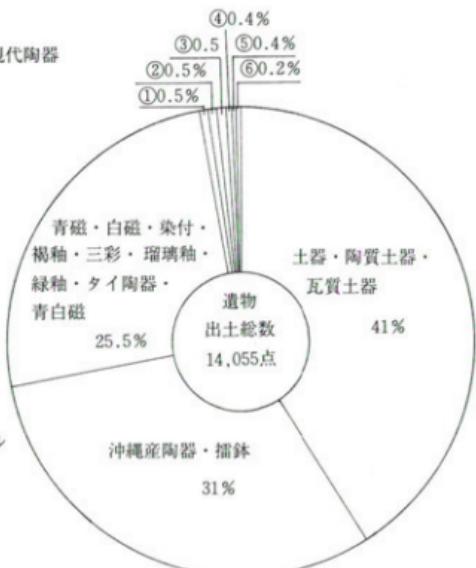
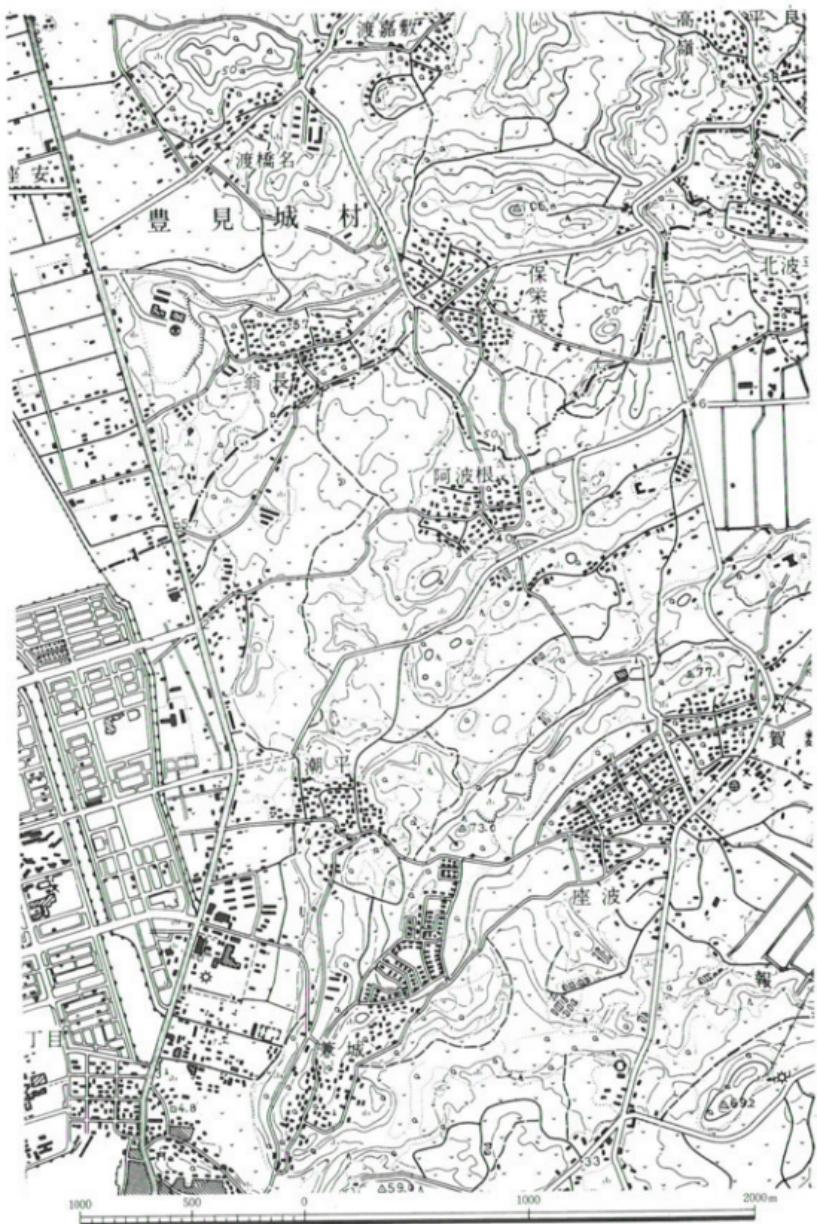


図 版



第52図 阿波根古島遺跡一帯の地形



PL. 5 阿波根古島遺跡一帯の空中写真（1984年撮影）

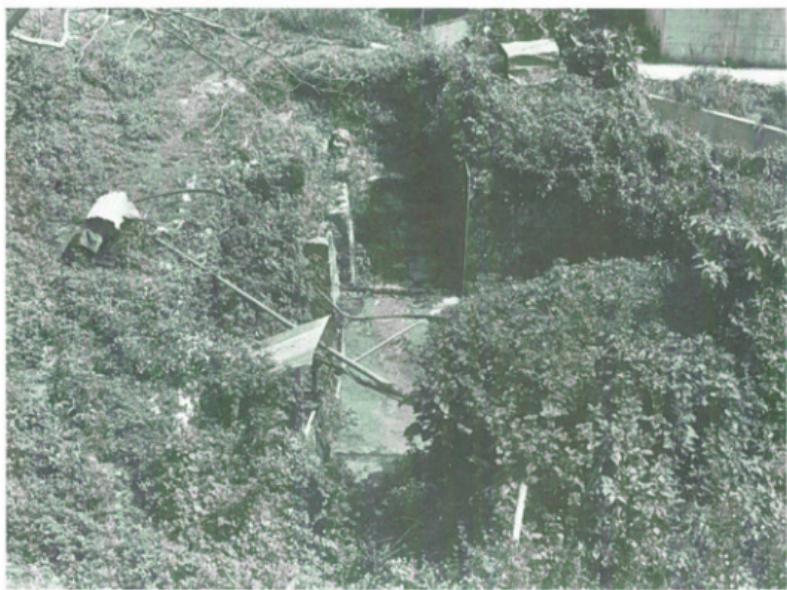


PL. 6 上：遺跡遠景
下：遺跡近景

右上：南側（糸瀬市瀬平の採石場より撮影）
右下：西側（同市西崎のアパートより撮影）

PL. 7 阿波根集落と遺跡の遠景
左上：東側（東風平町小城より撮影）
左下：北側（豊見城村保栄茂グスクより撮影）

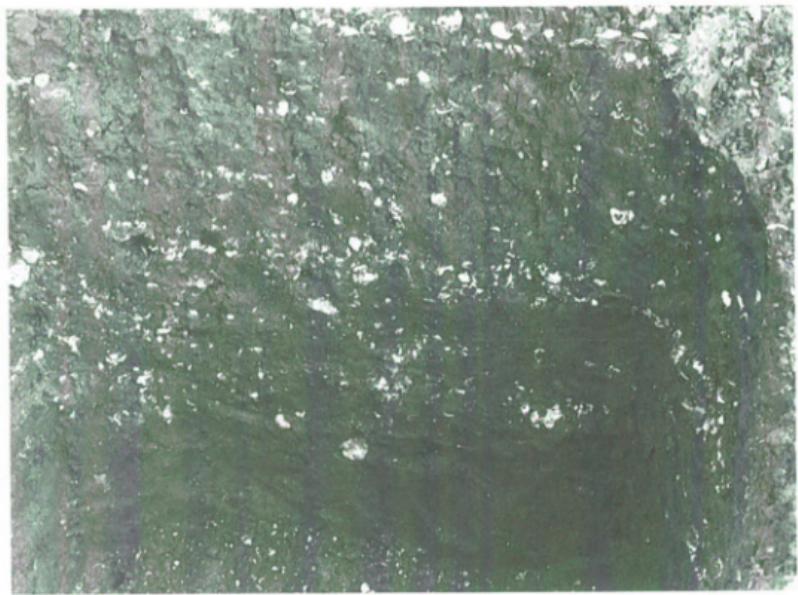




PL. 8 上：阿波根グスク内にある拝所
下：ムラガー（別名：ウブガー・平田ガー）



PL. 9 上：層序（北壁全景）
下：層序（北壁近景）



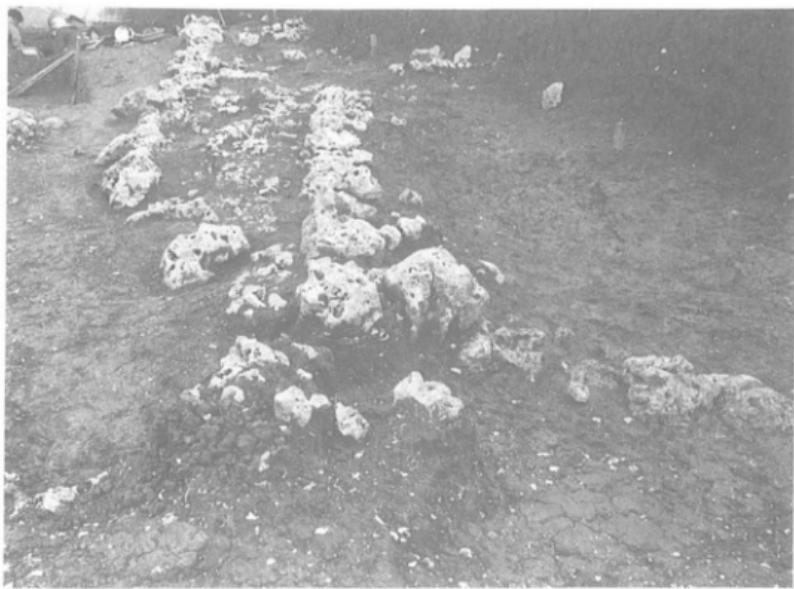
PL. 10 上：層序（北壁の一部で検出された貝層）
下：層序（貝層堆積状況）



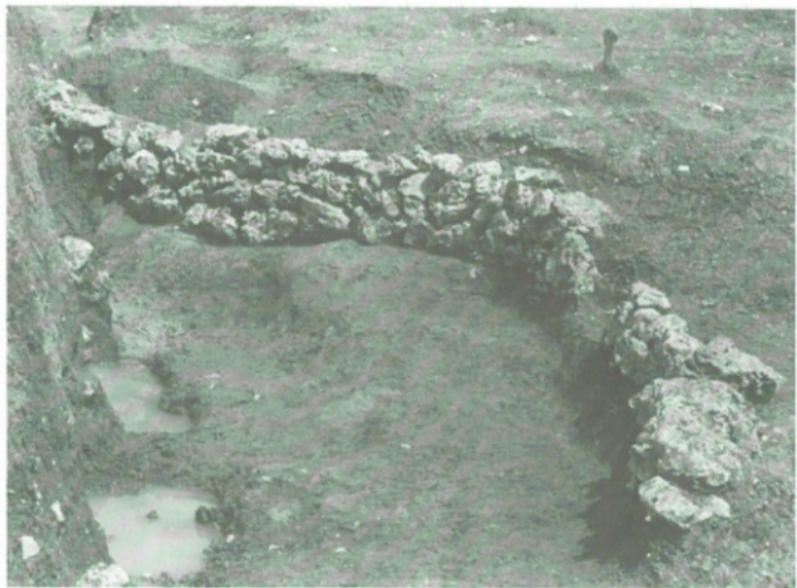
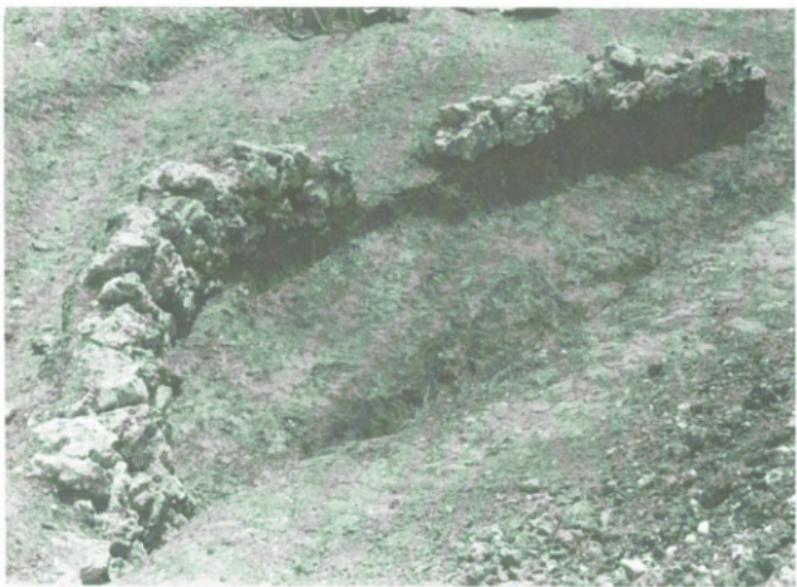
PL. 11 上：石列遺構（北側）
下：（東側）



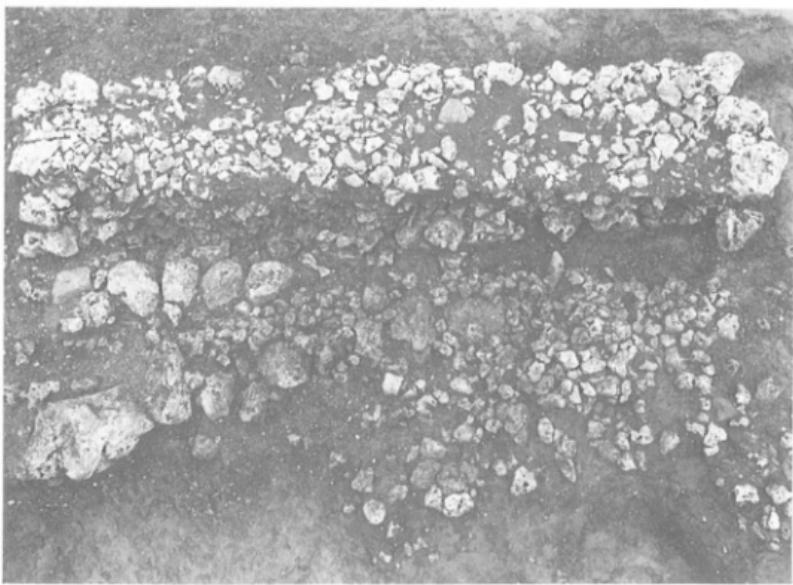
PL. 12 上：石列と方形状石敷
下：同上の断面



PL. 13 上：石列遺構の切り合い（平面）
下： 同 上 （側面）



PL. 14 上：石列遺構（平面）
下：同 上（側面）



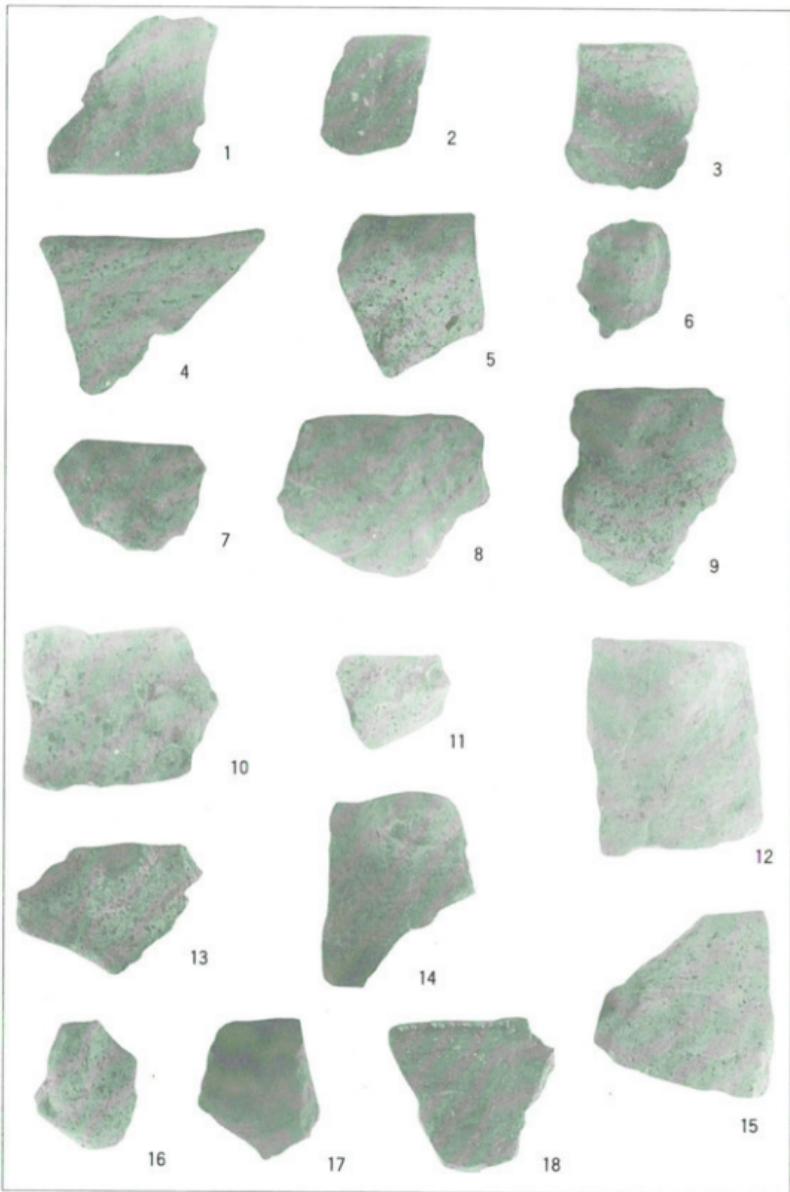
PL. 15 上：方形状石敷
下：同上断面



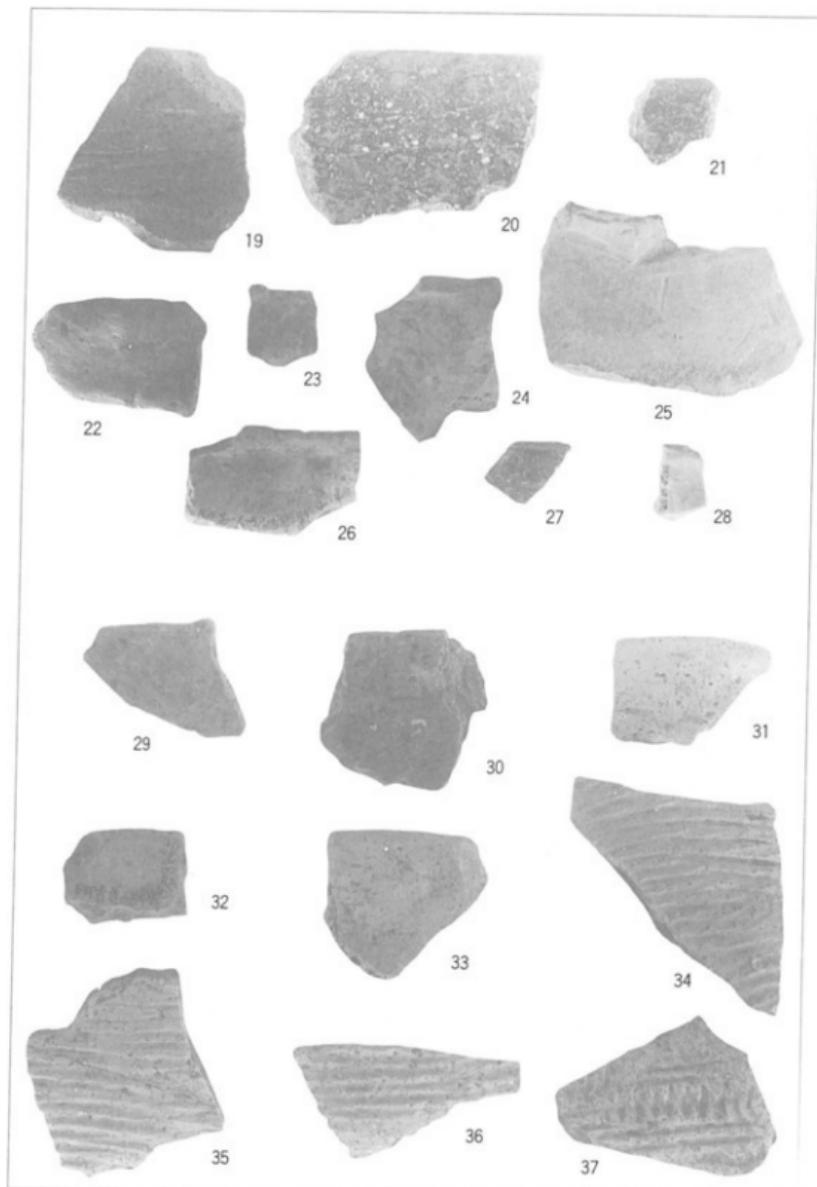
PL. 16 上：ウシ下顎骨検出状況
下：石器検出状況



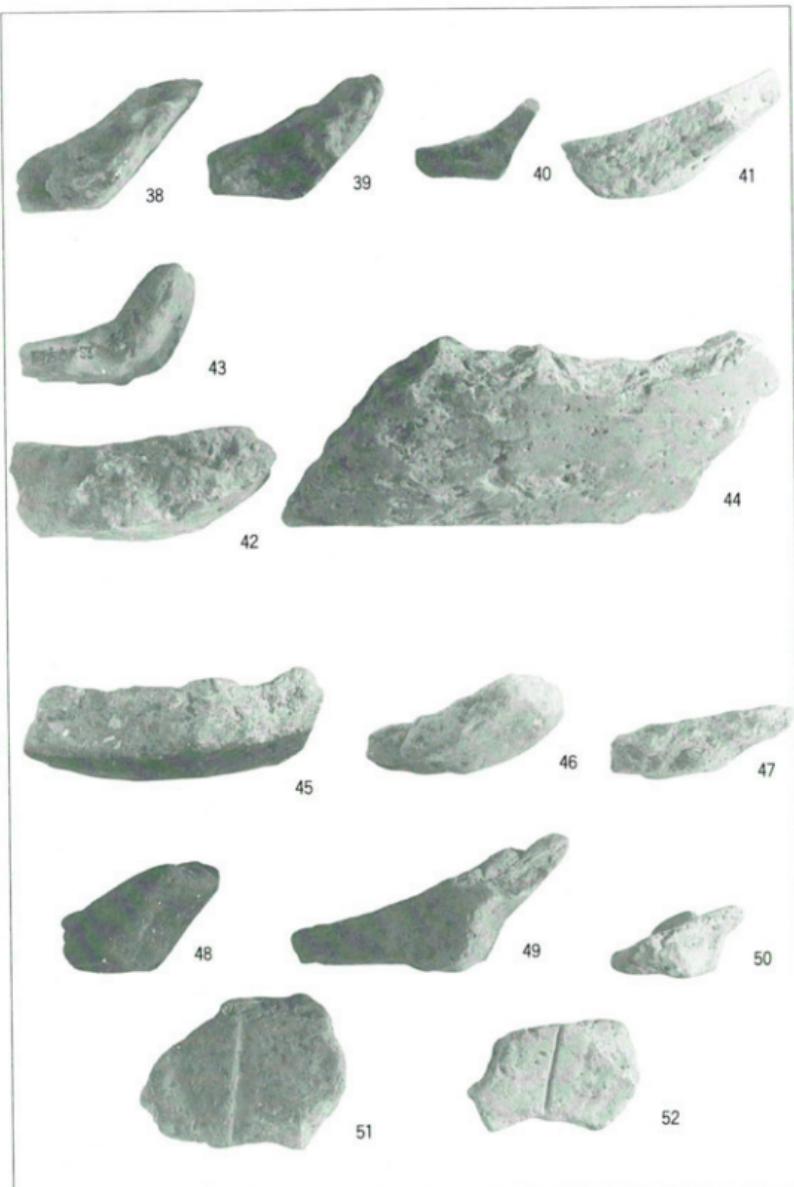
PL. 17 上：造構撮影前の清掃
下：石列造構の実測風景



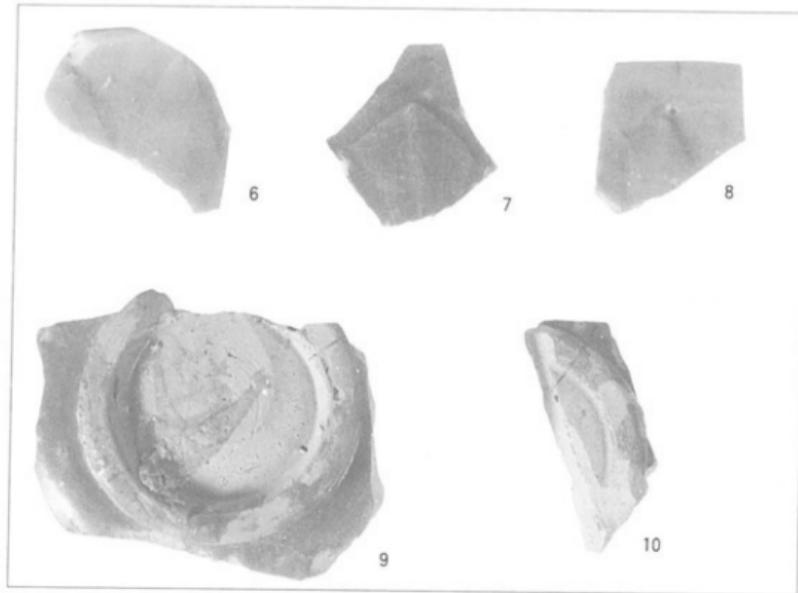
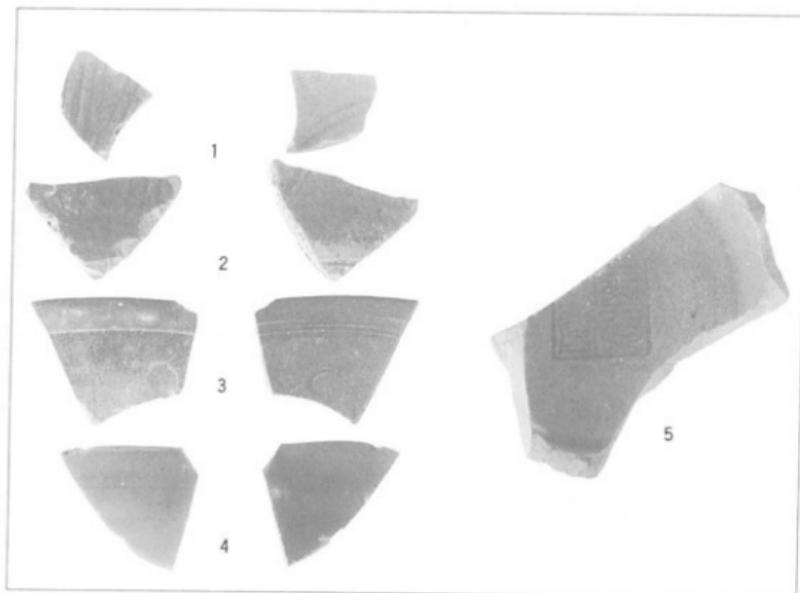
PL. 18 土器（後期系土器 1、グスク系土器；鍋形 I a 類 2、鍋形 I b 類 3、
鍋形 I c 類 4~12、鍋形 I d 類 13~15、鍋形 I e 類 16~17、鍋形 II a 類 18）



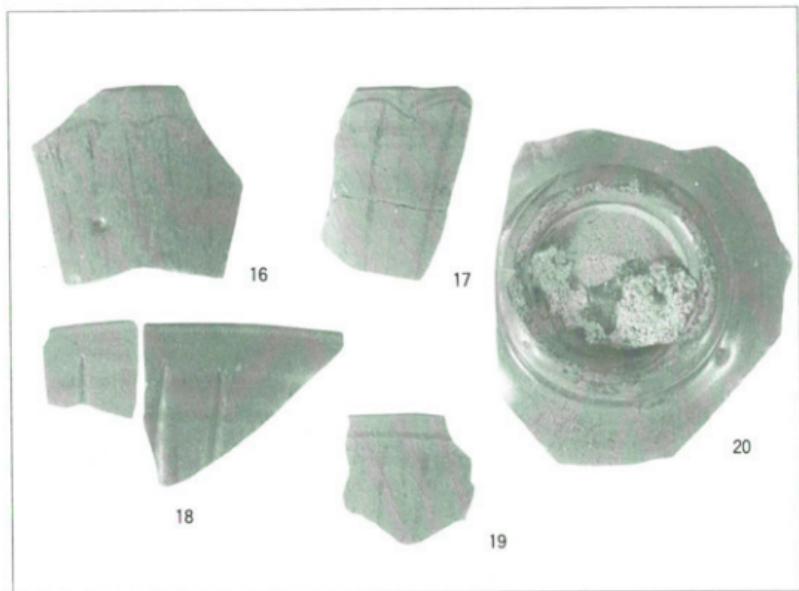
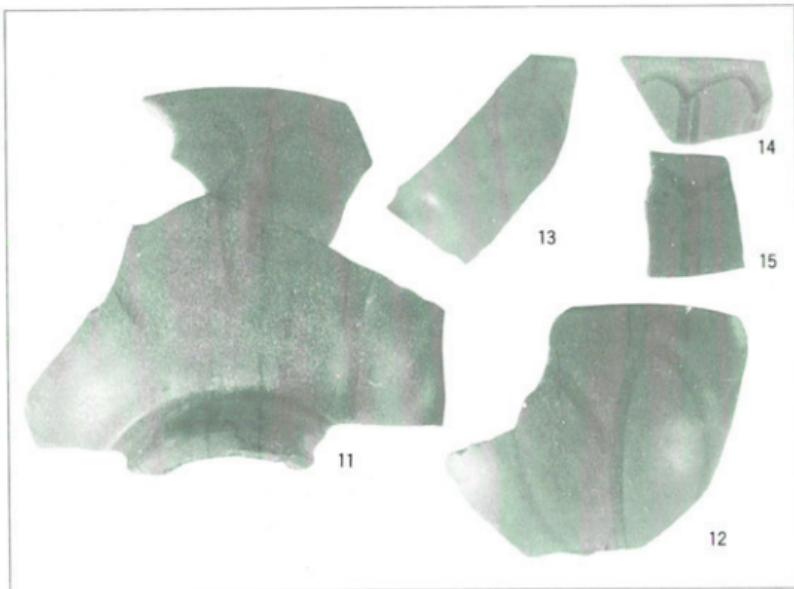
PL. 19 土器(銚形IIb類19、銚形IIc類20・21、壺形a類22、壺形b類23、壺形頭部破片24・25、鉢形a類26、鉢形b類27、瓶形28、碗形29、銚形IIc類か銚形Ic類30、壺形か鉢形31、鉢形か壺形32、甕形か壺形33、移入系土器34~37)



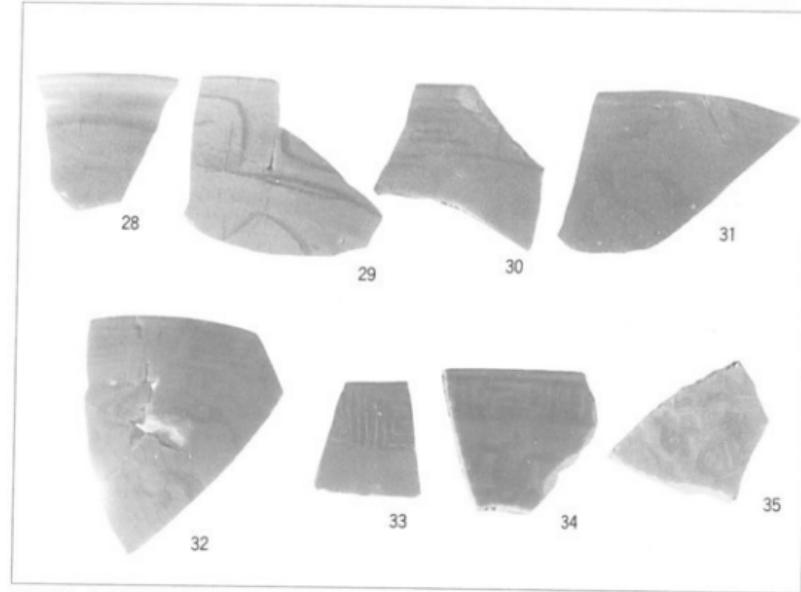
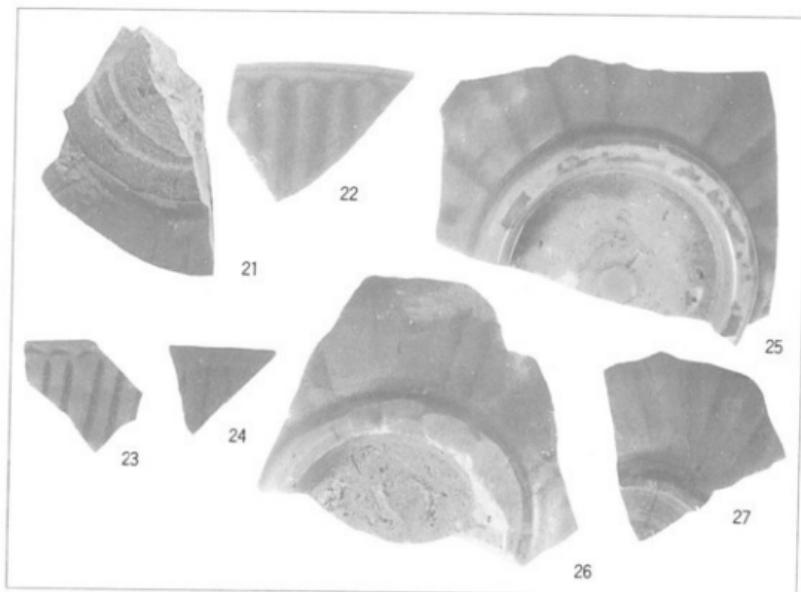
PL. 20 土器底部 (I a類38~40、I b類41、II a類42·43、II b類44~46、
III a類47、III b類48、IV類49、V類50、葉痕資料51·52)



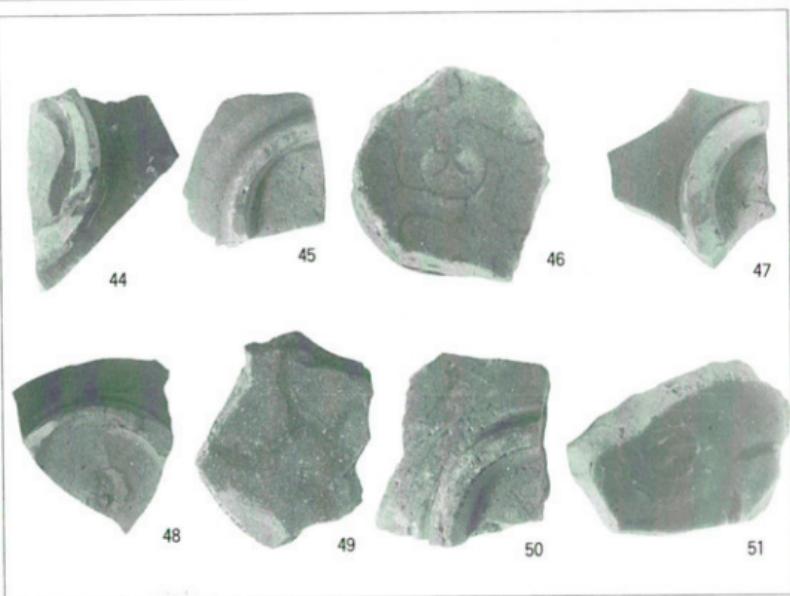
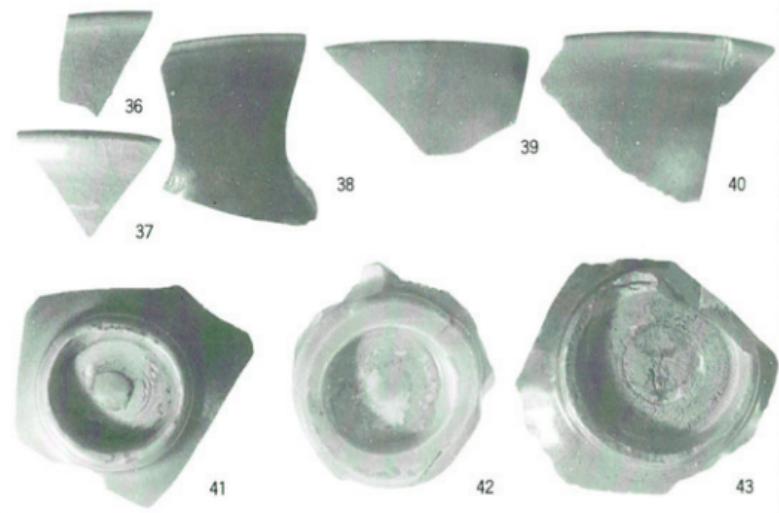
PL. 21 上：青磁碗（I類1、II類2~5）
下：青磁碗（III類6~10）



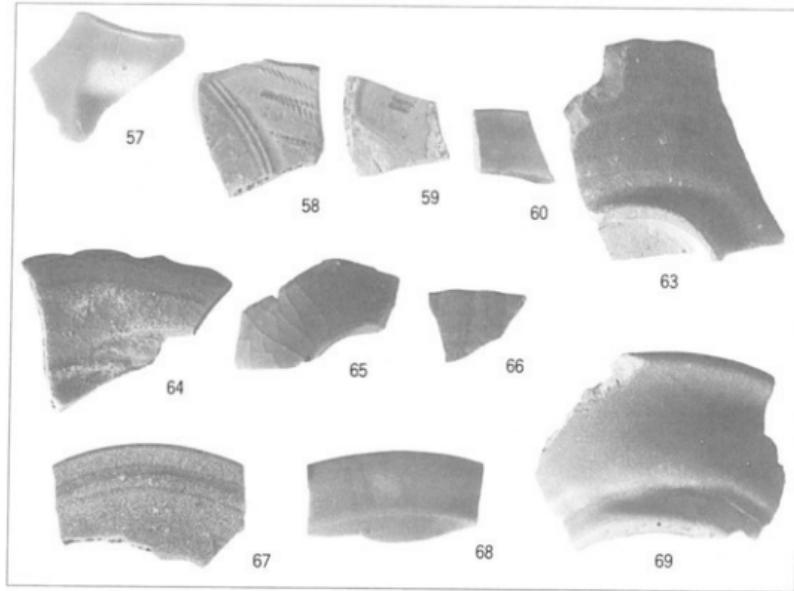
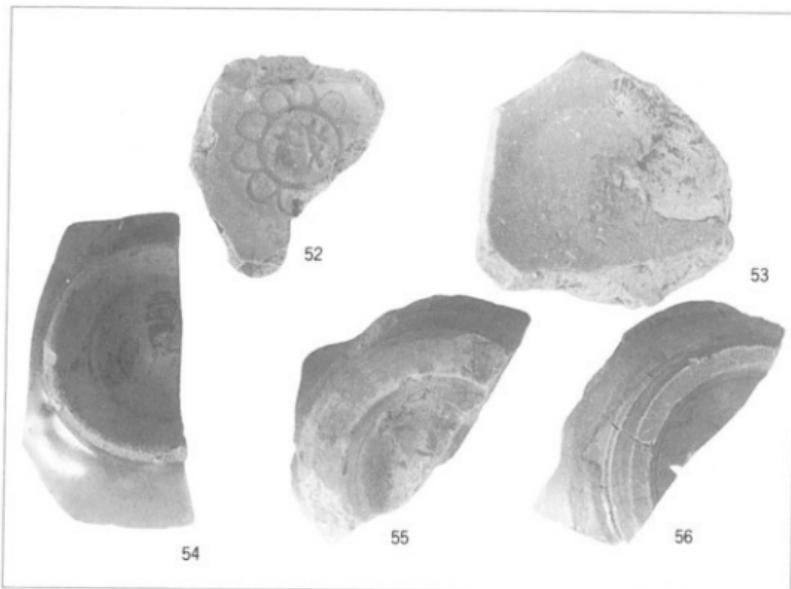
PL. 22 上：青磁碗（IVa類11・12、IVb類13～15）
下：青磁碗（V a類16・17、V b類18～20）



PL. 23 上：青磁碗（Vb類21、Vc類22~24）、青磁碗底部（25~27）
下：青磁碗（VI類28、VIIa類29~31、VIIb類32~34）
青磁碗腕部35

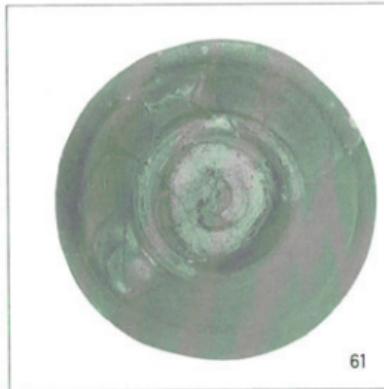
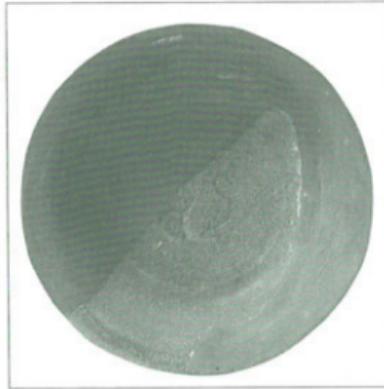


PL. 24 上：青磁碗（Ⅶa類36、Ⅶb類37、Ⅶc類38・39、Ⅶd類40）、青磁碗底部（A類41・42、B類43）
下：青磁碗底部（B類44・45、C類46～51）

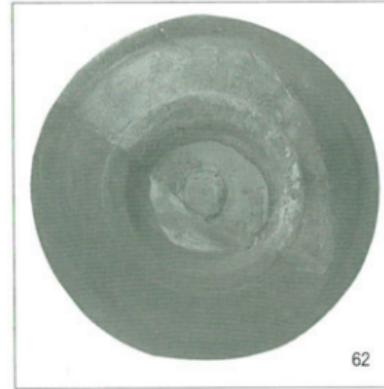


PL. 25 上：青磁碗底部 (C類52~54、D類55~56)

下：青磁碗角杯57、青磁皿 (I類58~59、II類60、V類63~64、VI類65~66、Ⅶa類67、Ⅶb類68、Ⅶc類69)

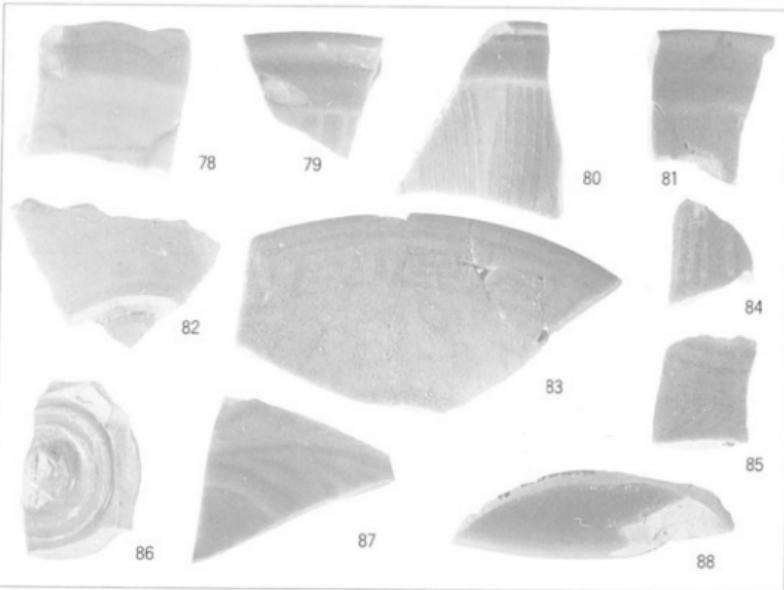
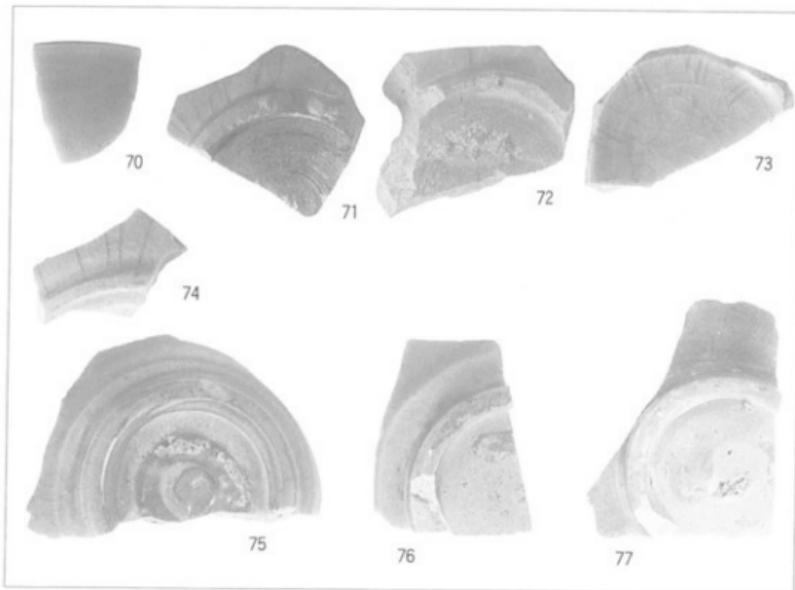


61

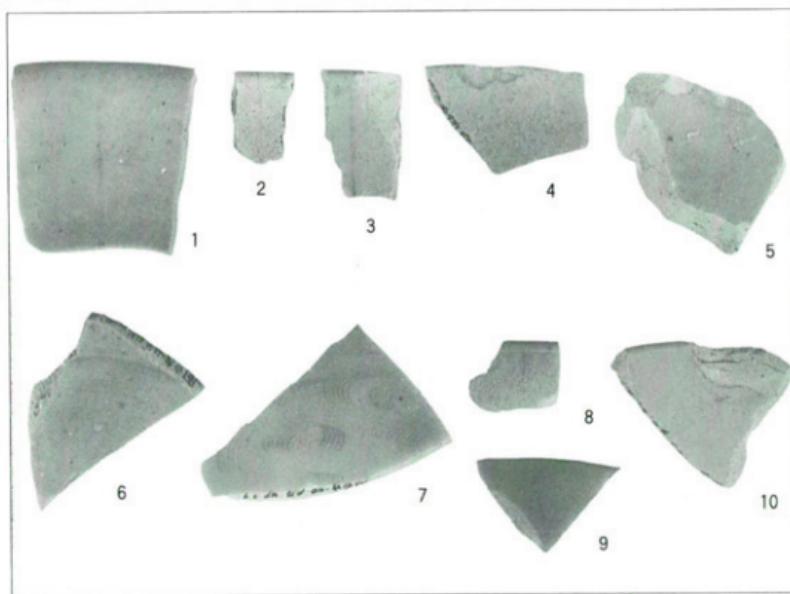
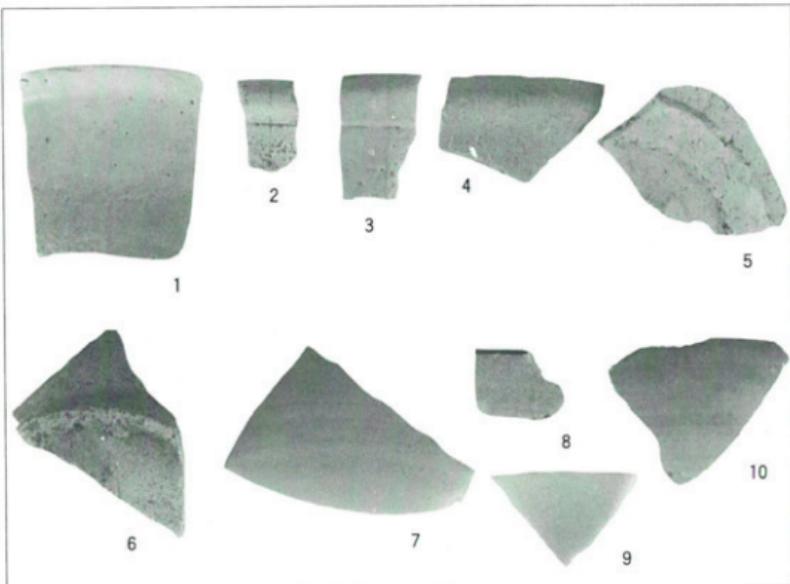


62

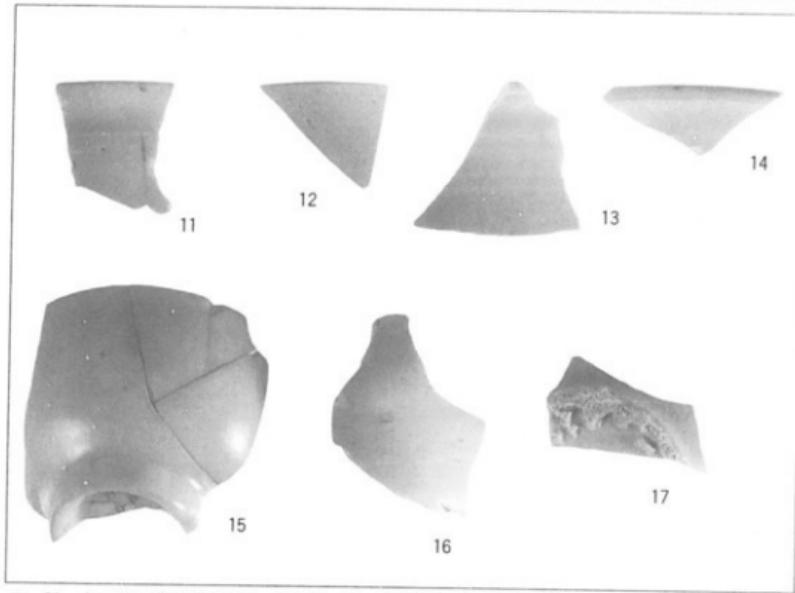
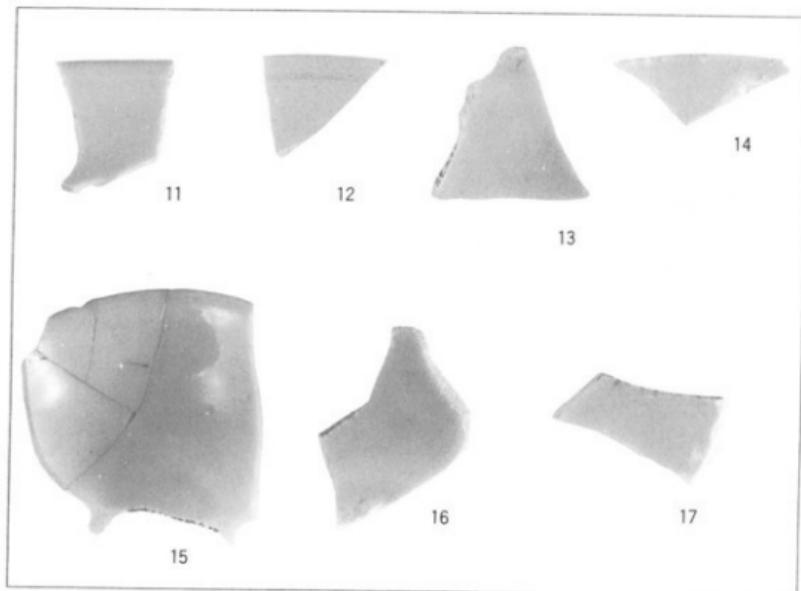
PL. 26 青磁皿 (III類61、IV類62)



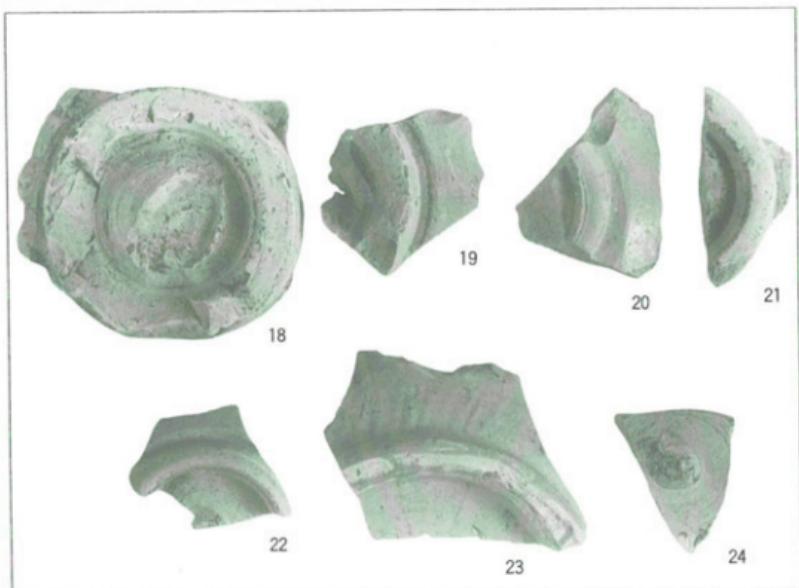
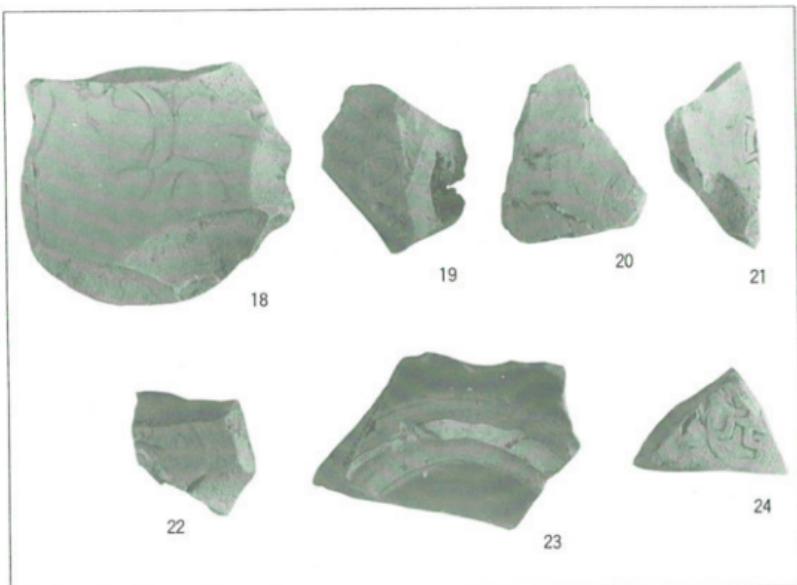
PL. 27 上：青磁皿（Ⅳ類70）青磁皿底部（Ⅰ類71~74、Ⅱ類75~76、Ⅲ類77）
下：青磁盤（Ⅰ類78、Ⅱ類79~81、Ⅲ類83）青磁盤底部82、青磁瓶84~86、青磁壺87~88



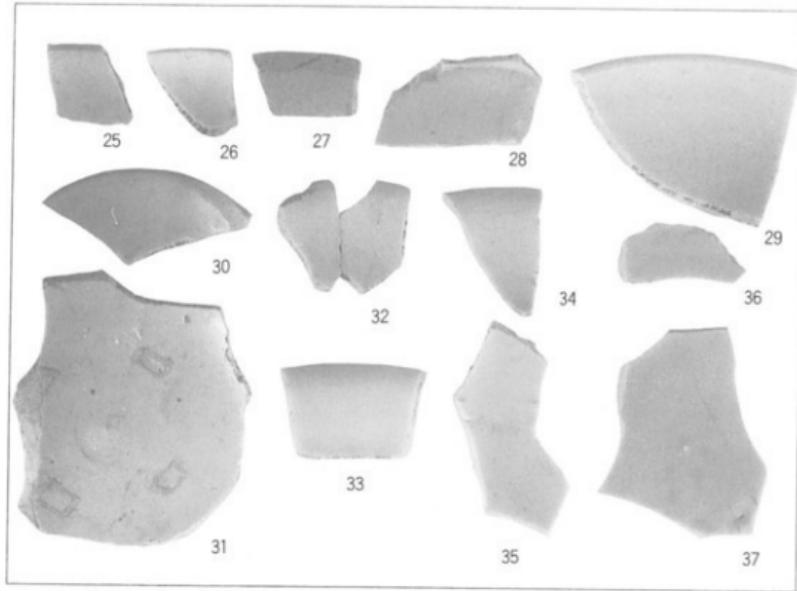
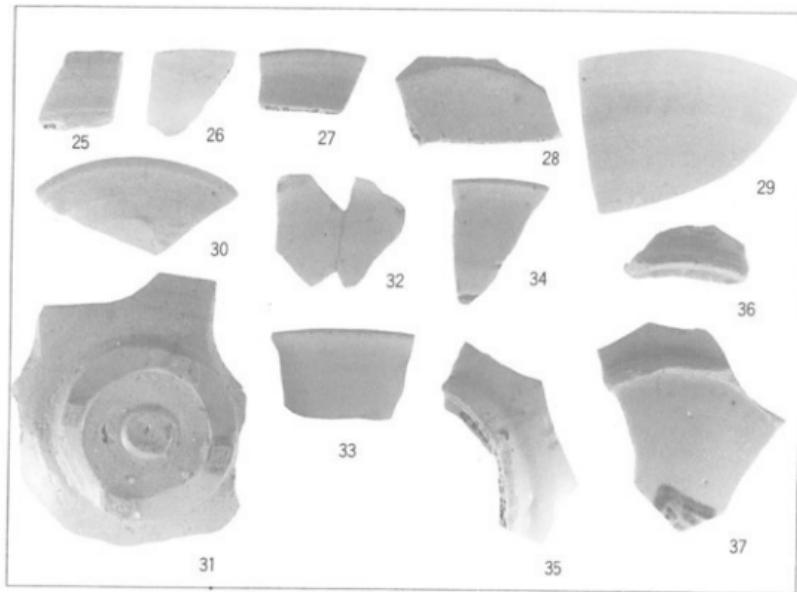
PL. 28 上・下：白磁碗（I類1、II類2～6、III類7、IV類8、V類9・10）



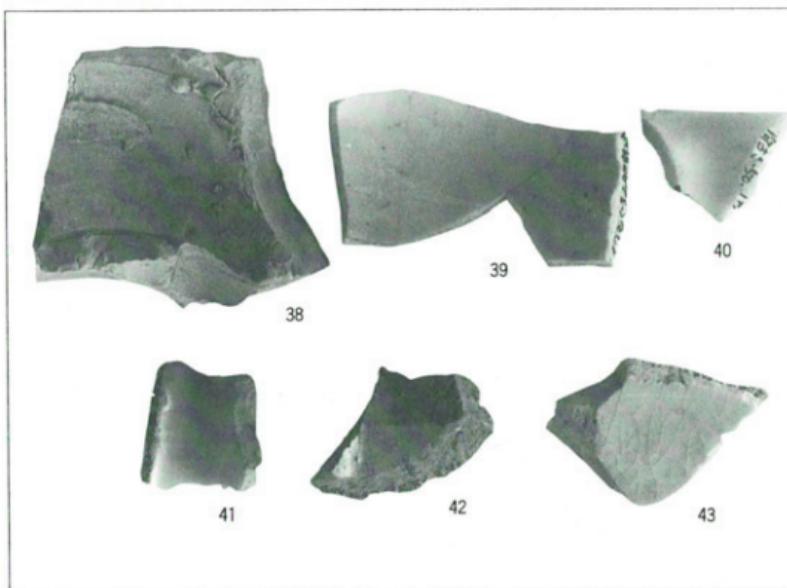
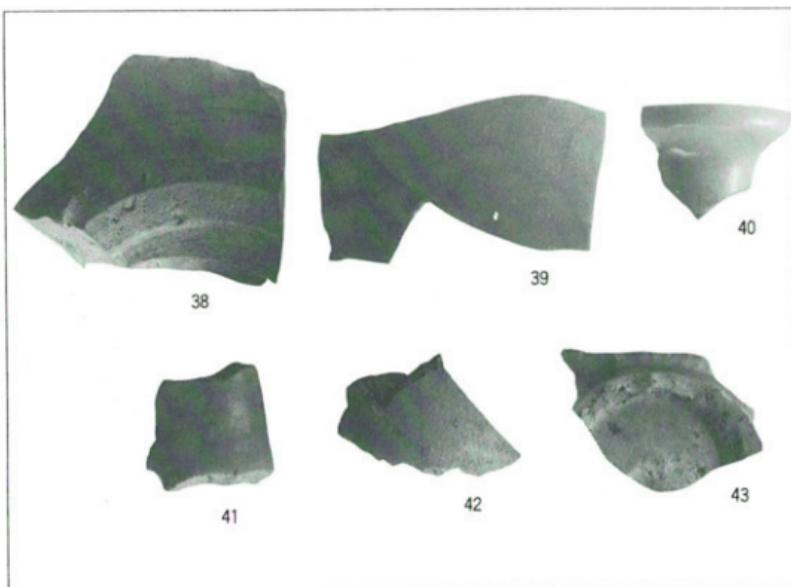
PL. 29 上・下：白磁碗口緣部（VI類11～14、VII類15・16）白磁碗底部（I類17）



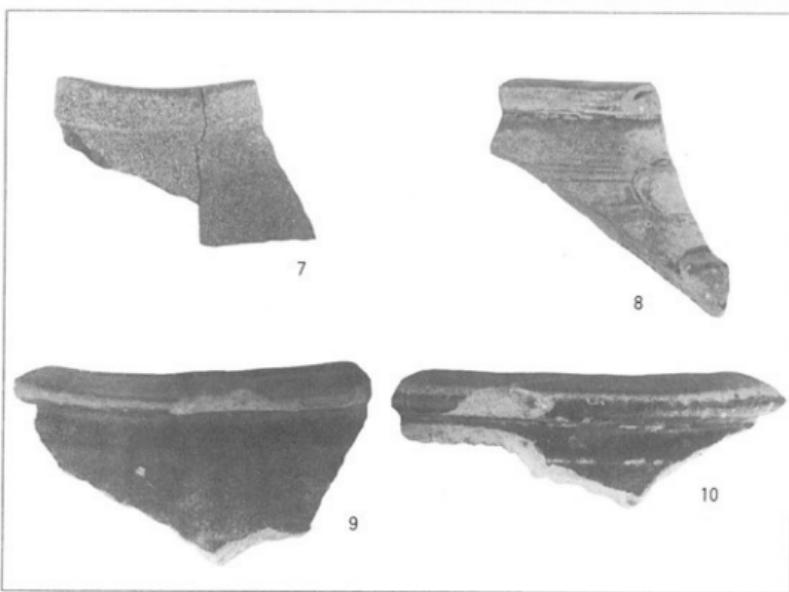
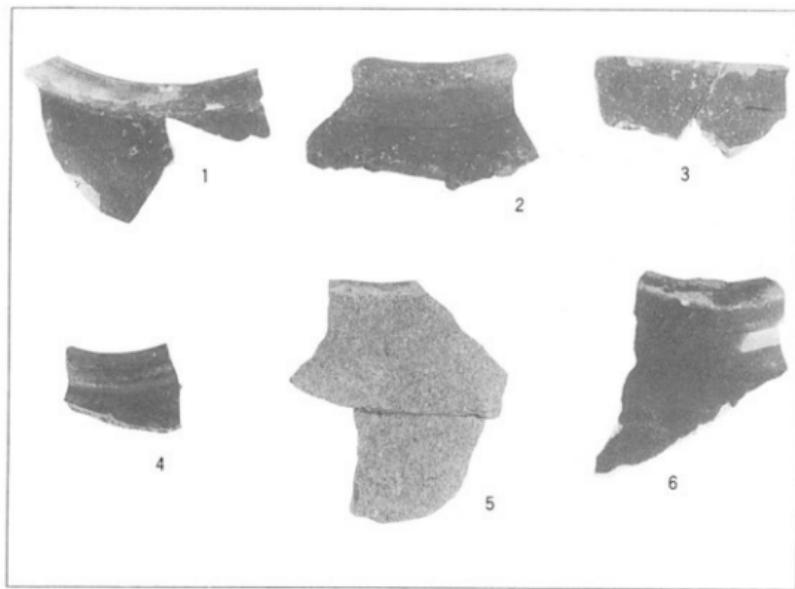
PL. 30 上・下：白磁碗底部（II類18、III類19、IV類20・21、V類22、VI類23、VII類24）



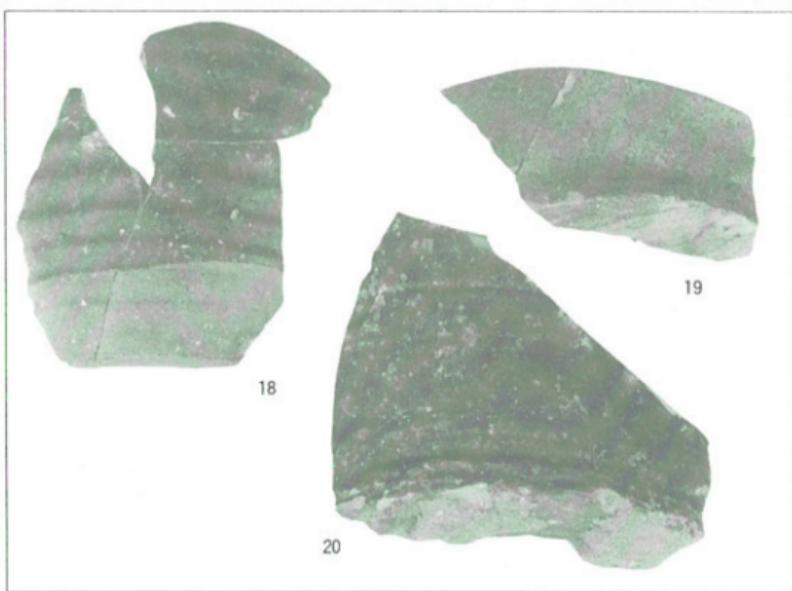
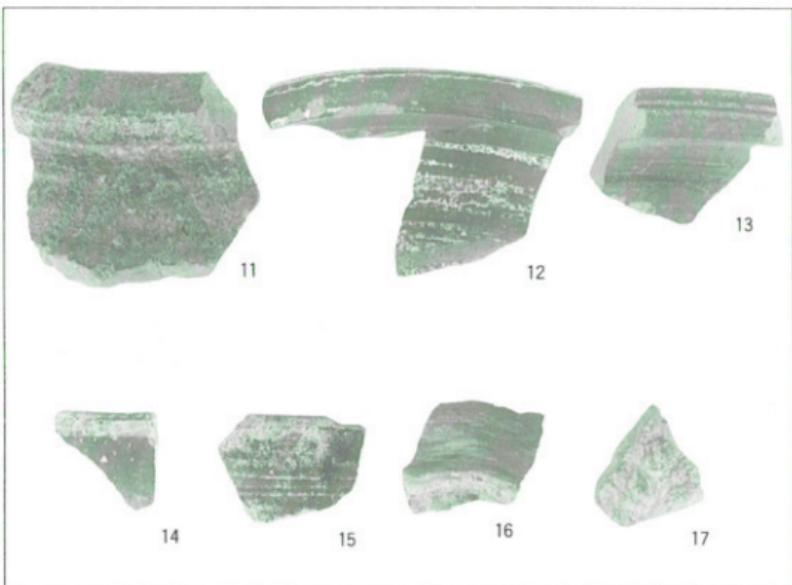
PL. 31 上・下：白磁皿口縁部（I類25～28、II類29～31、III類32～34）
白磁皿底部35～37



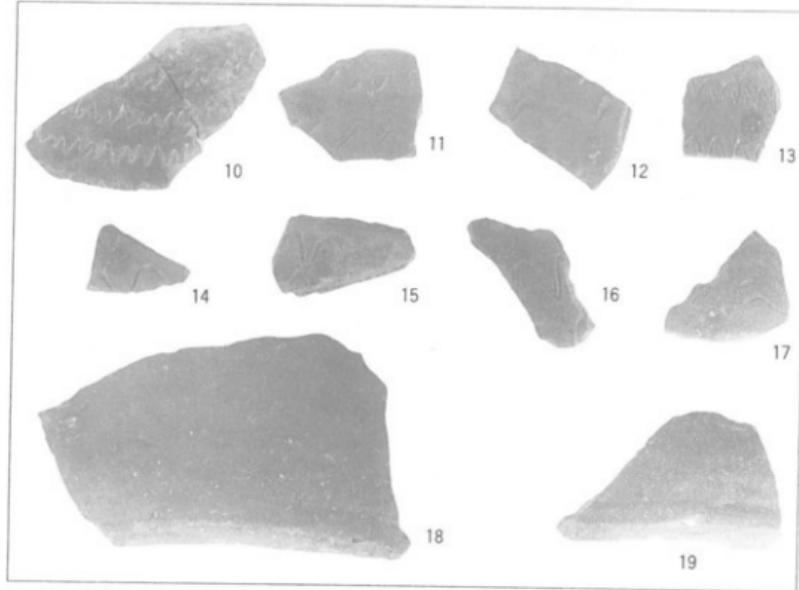
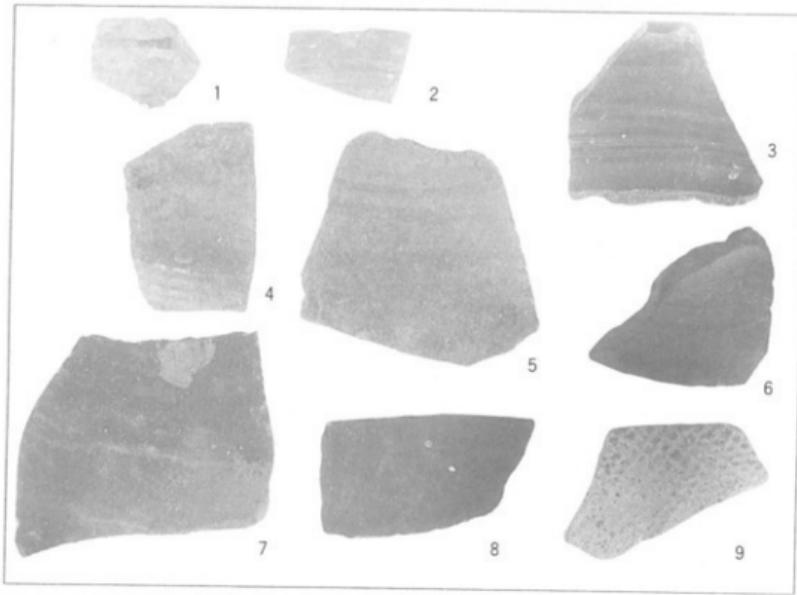
PL. 32 上・下：白磁壺38・39、白磁瓶40～42、青白磁碗43



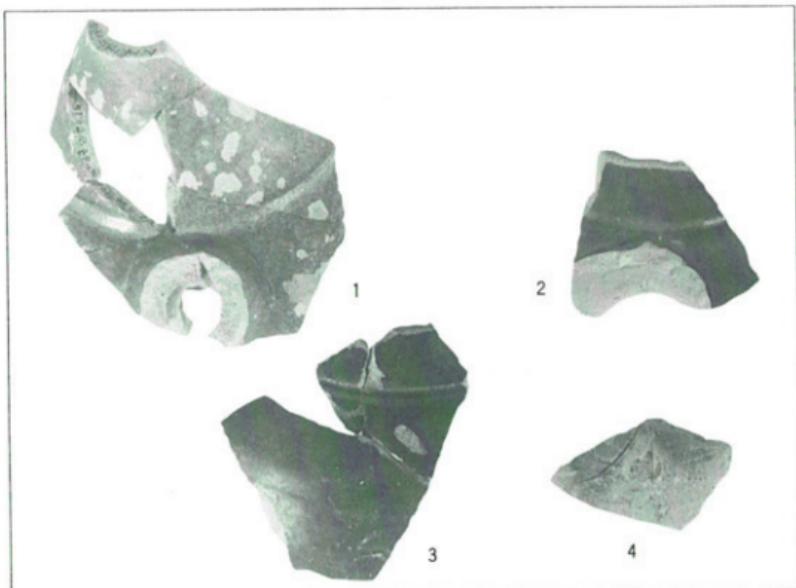
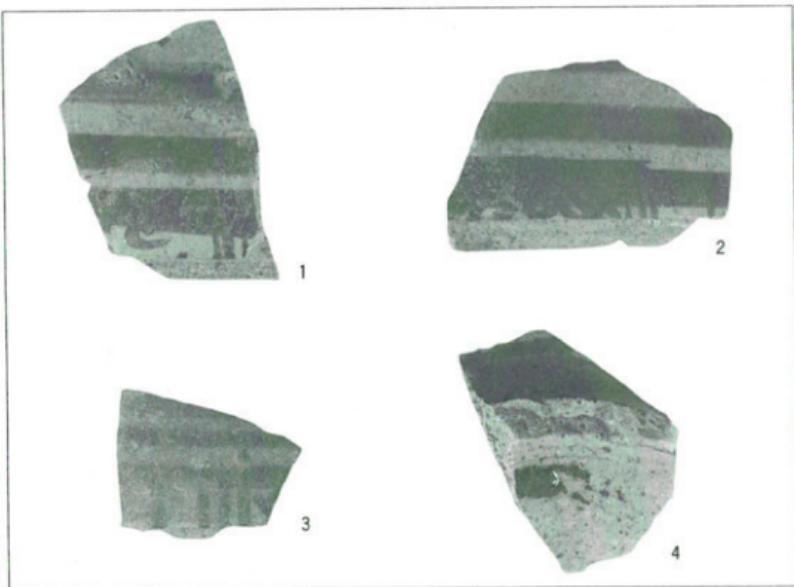
PL. 33 棕釉陶器 (I類 1~4、II類 5·6、III類 7~10)



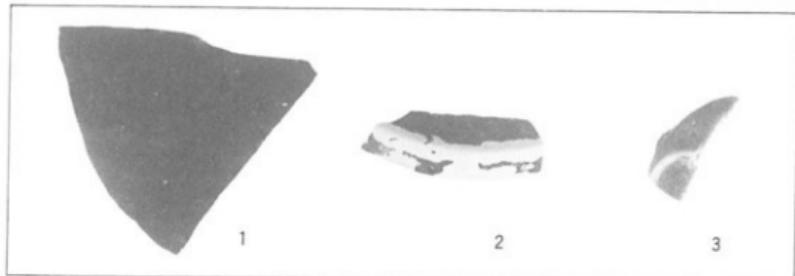
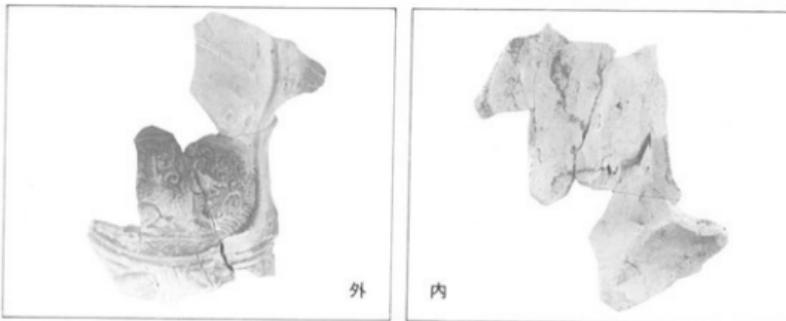
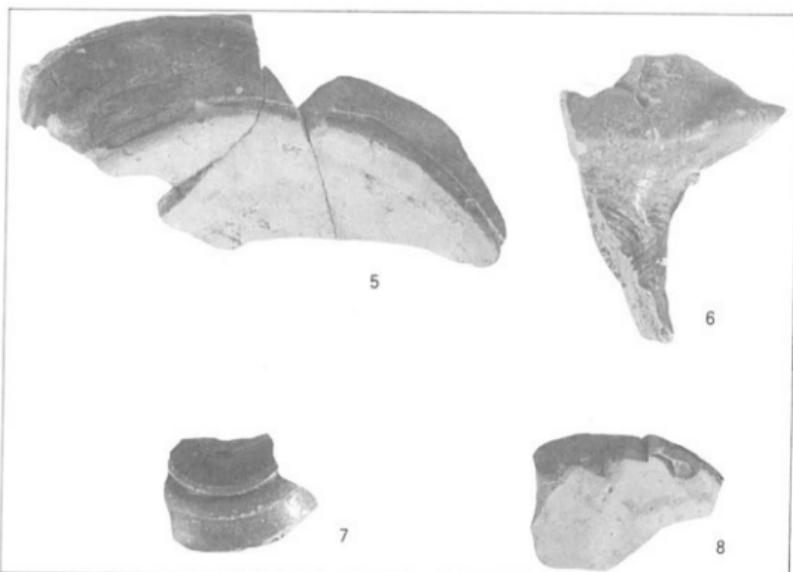
PL. 34 織軸陶器 (III類11~13、碗形14~16、その他17、I類底部18、II、III類底部19・20)



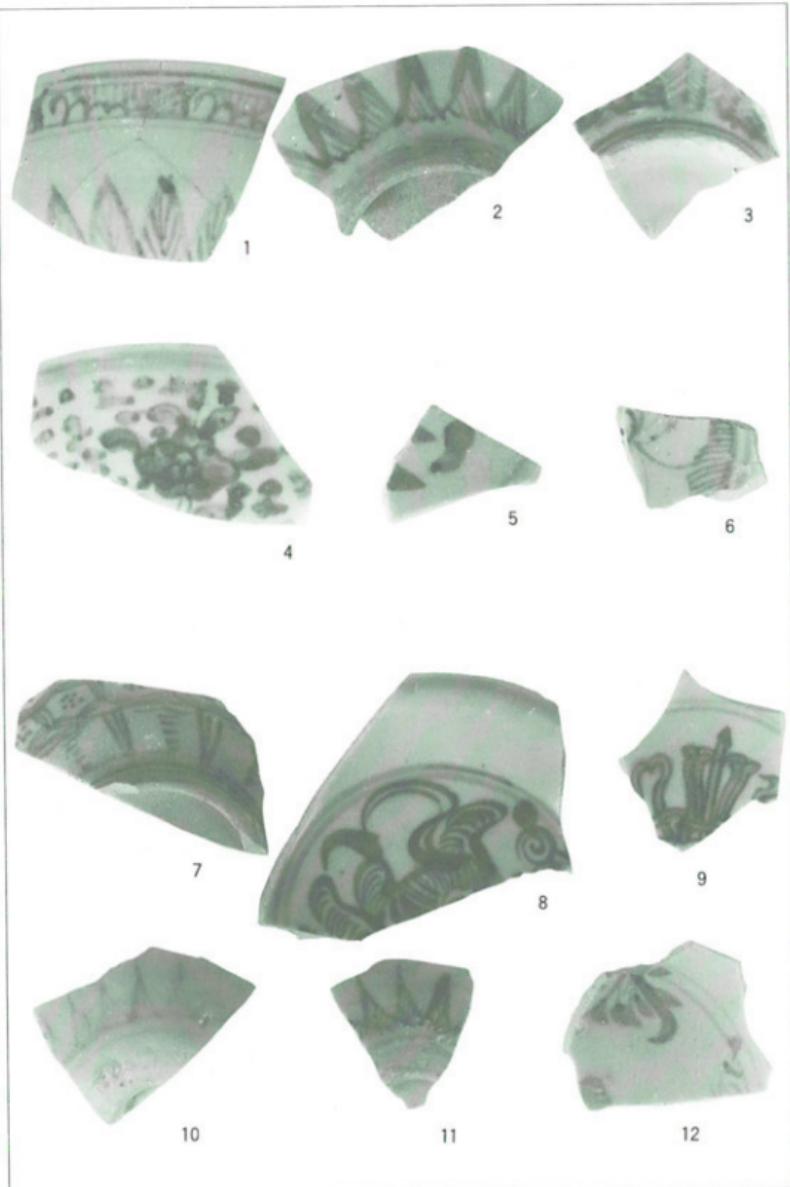
PL. 35 須恵器（口縁 1～3、頸・胴部 4～6、胴部 7～17、底部 18・19）



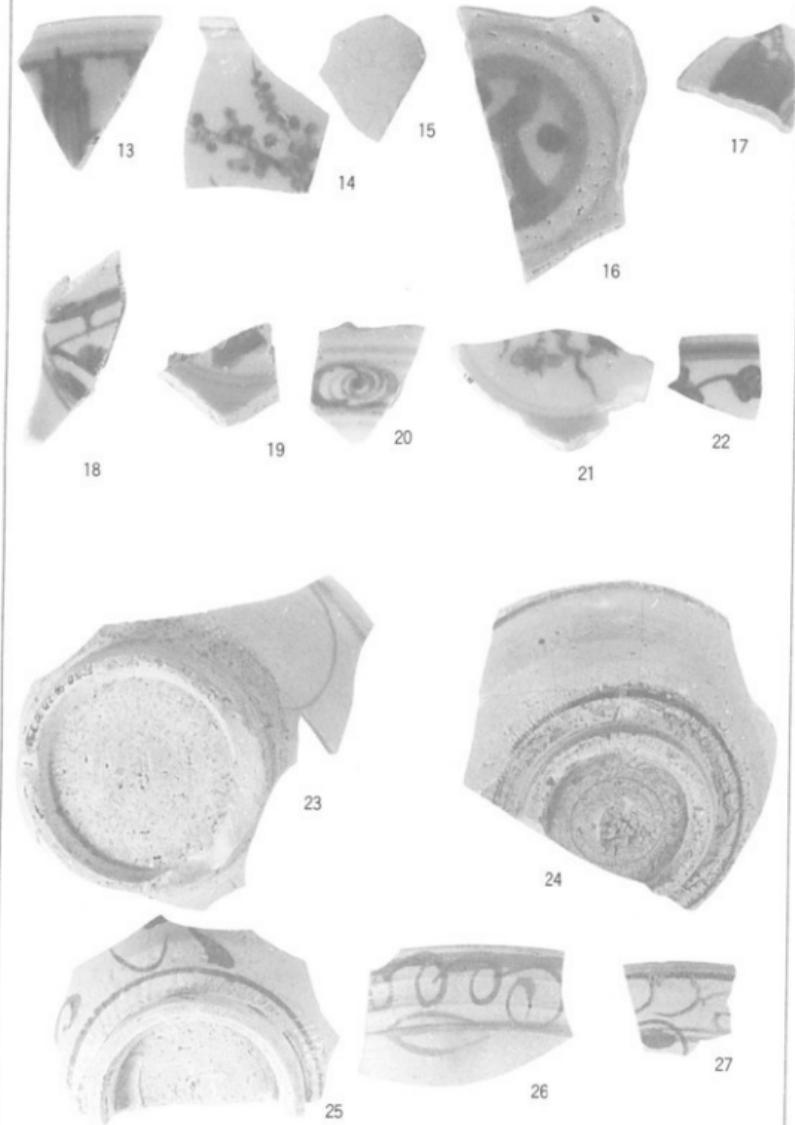
PL. 36 上：タイ陶器（袋物の蓋か身 1～3、底部 4）
下：緑釉水注（仙蓋瓶形 1～3、長胴丸壺形 4）



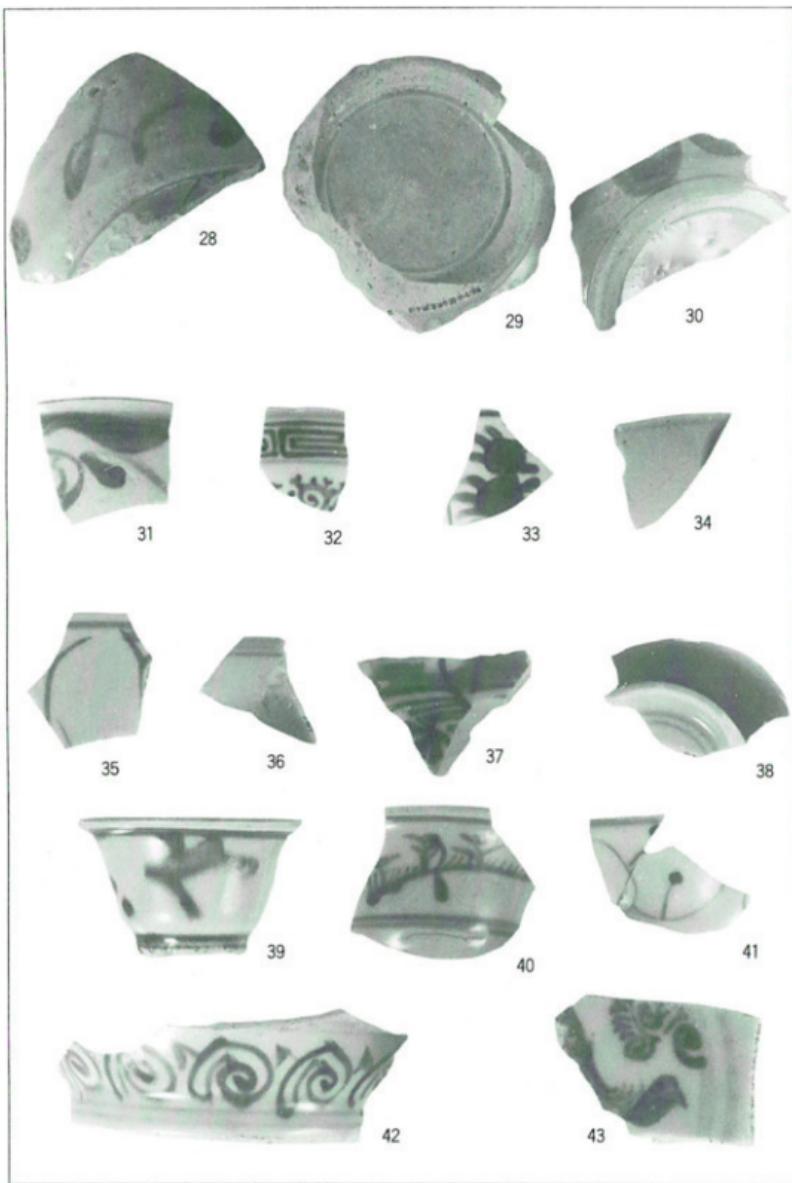
PL. 37 上：綠釉水注（鶴形 5、鶴形 6、蓋 7、底部 8）
中：三彩水注（人形）下：瑠璃釉（壺胴部 1、高台片 2、小杯 3）



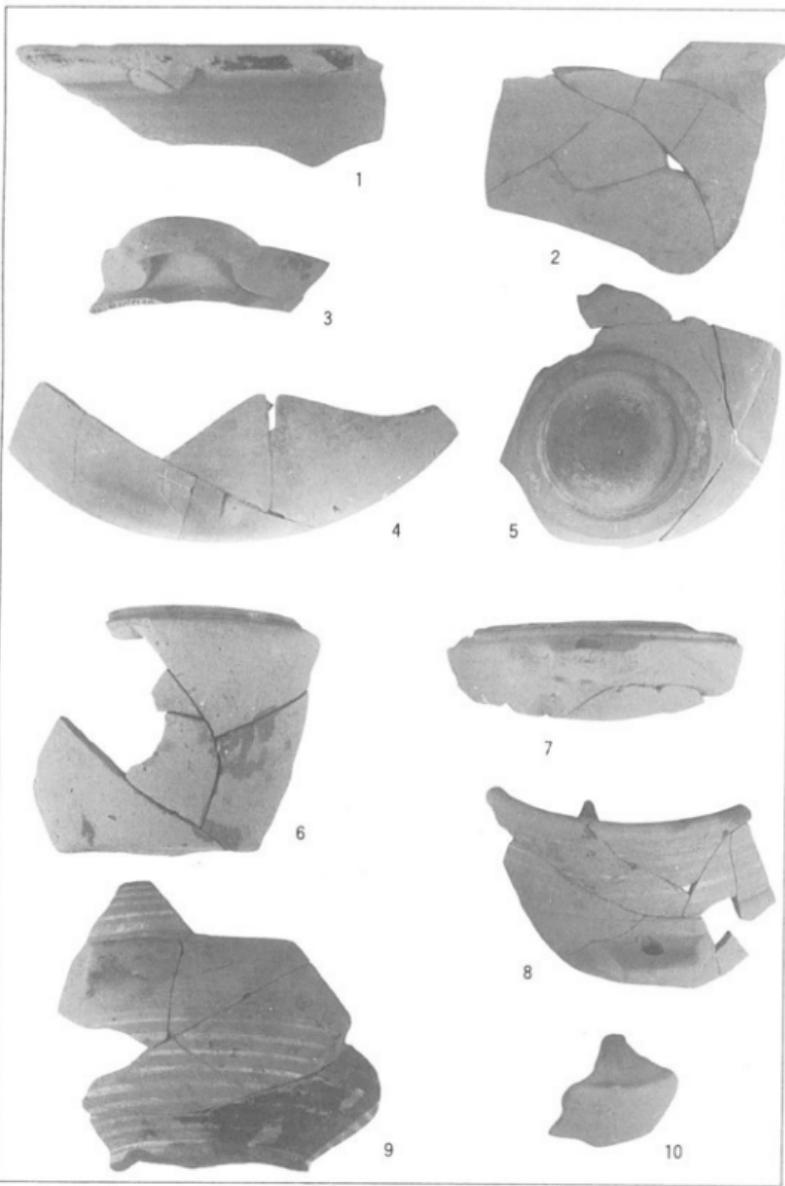
PL. 38 染付 (A群 1~12)



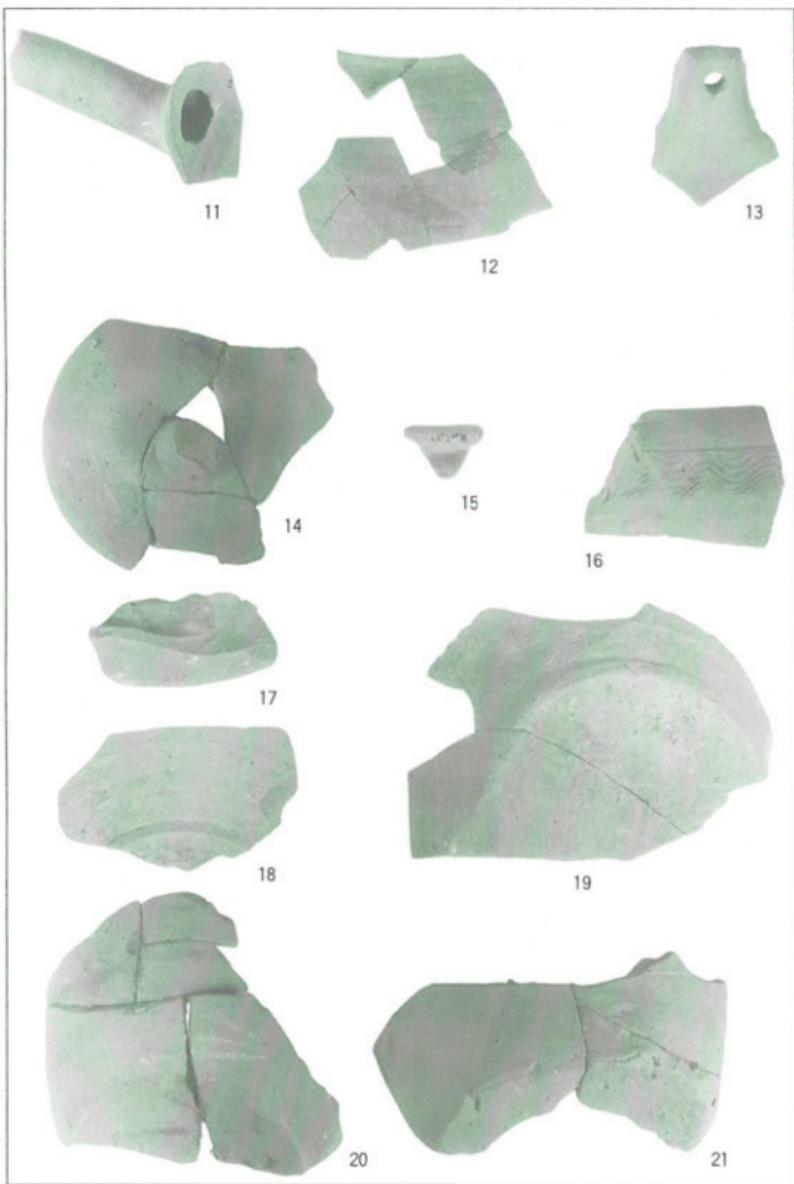
PL. 39 染付 (B群13~22、C群23~27)



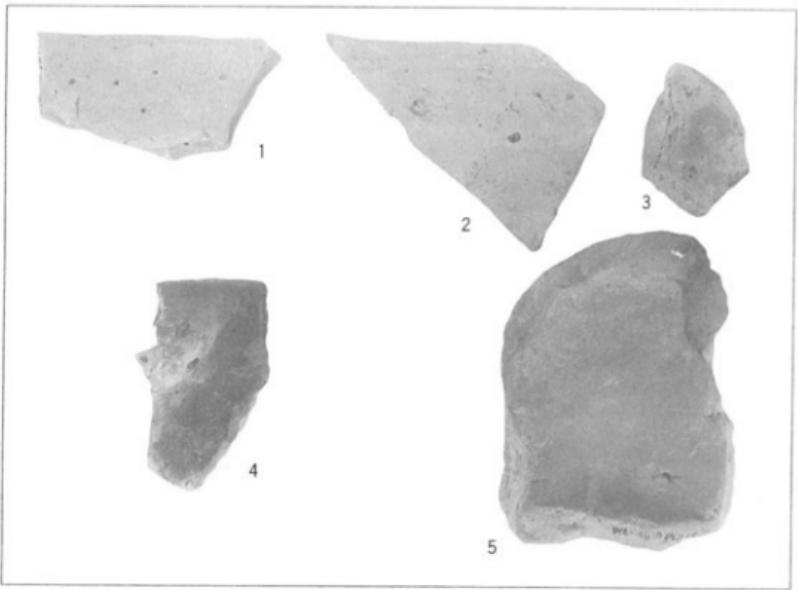
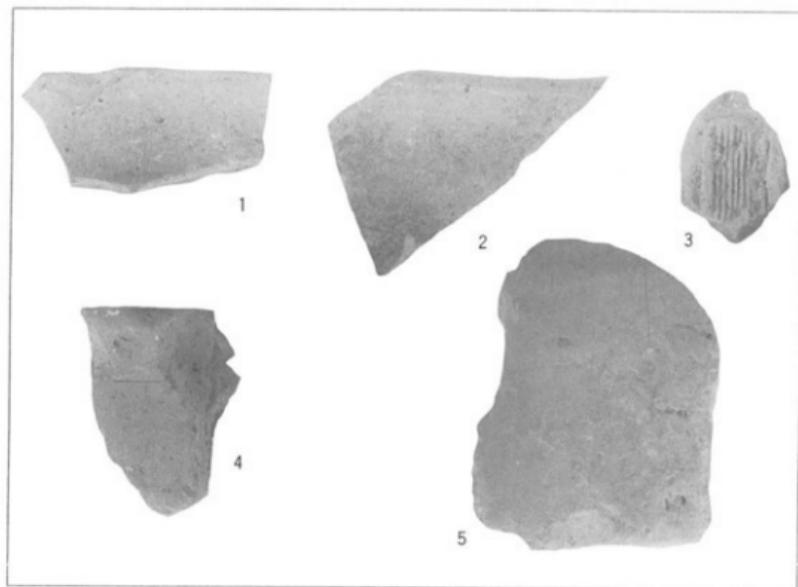
PL. 40 染付 (B群20、C群28~41、D群42・43)



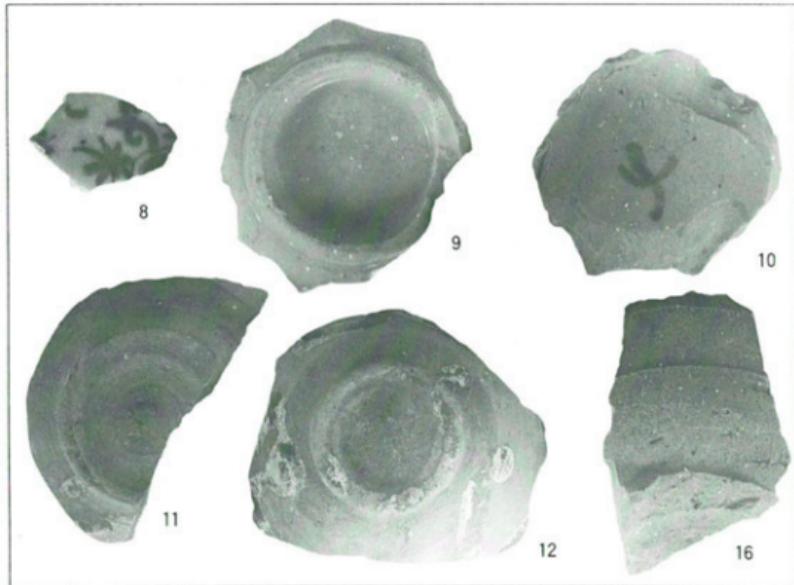
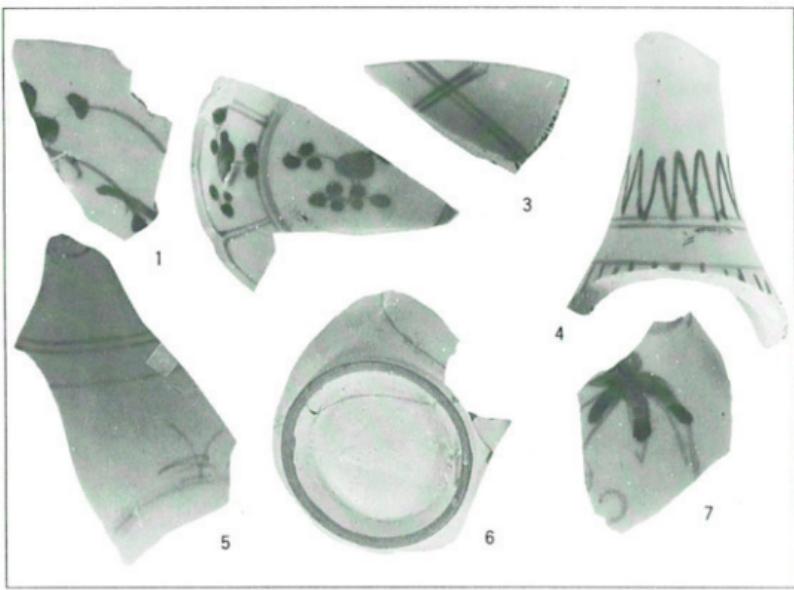
PL. 41 陶質土器 (鍋形 1~5、火舍 a 類 6・7、火舍 b 類 8、火舍 c 類 9・10)



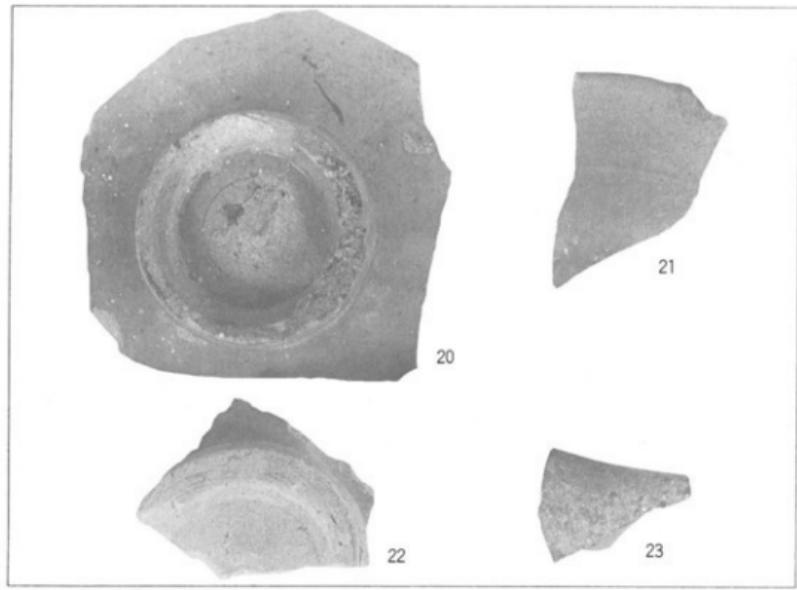
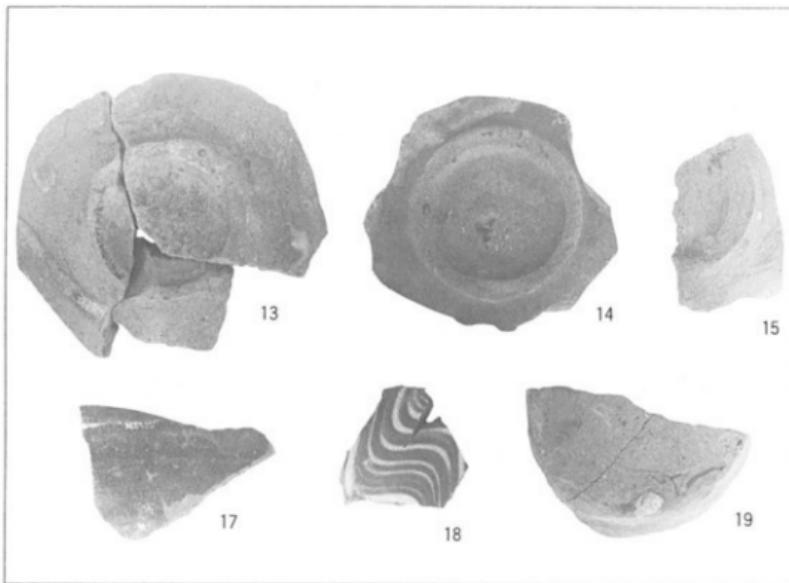
PL.42 陶質土器（急須11~15、手水鉢16、底部17~21）



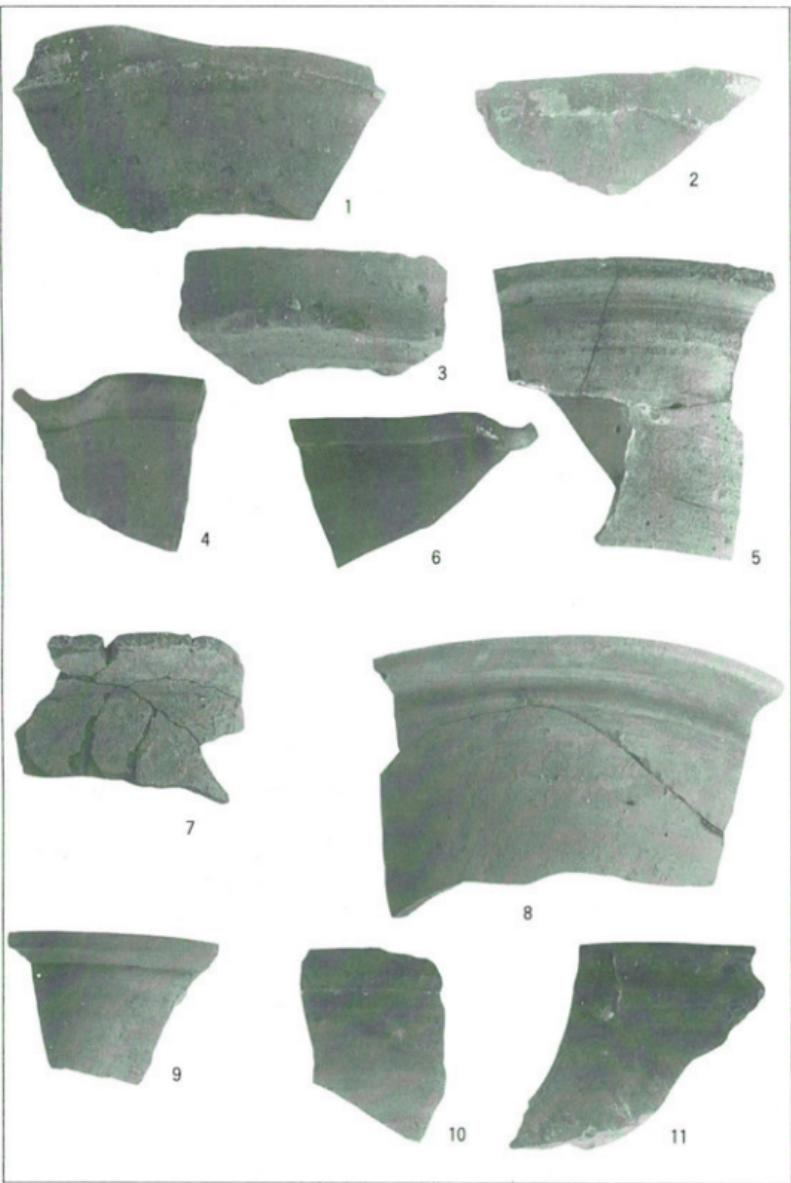
PL. 43 瓦質土器 上：外面（壺形1、鉢形2、擂鉢3、火鉢4、底部5）
下：内面（同上）



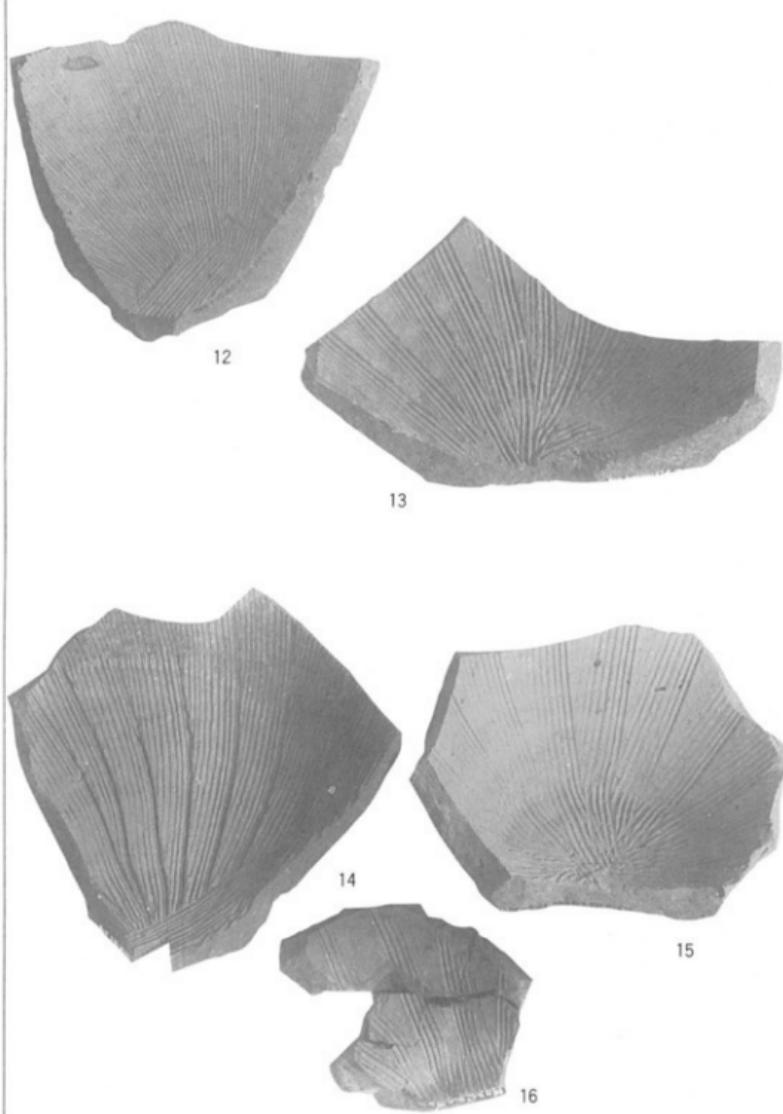
PL. 44 本土産陶器 上：伊万里焼系（1～7）
下：伊万里焼系（8～10）唐津焼系（11・12・16）



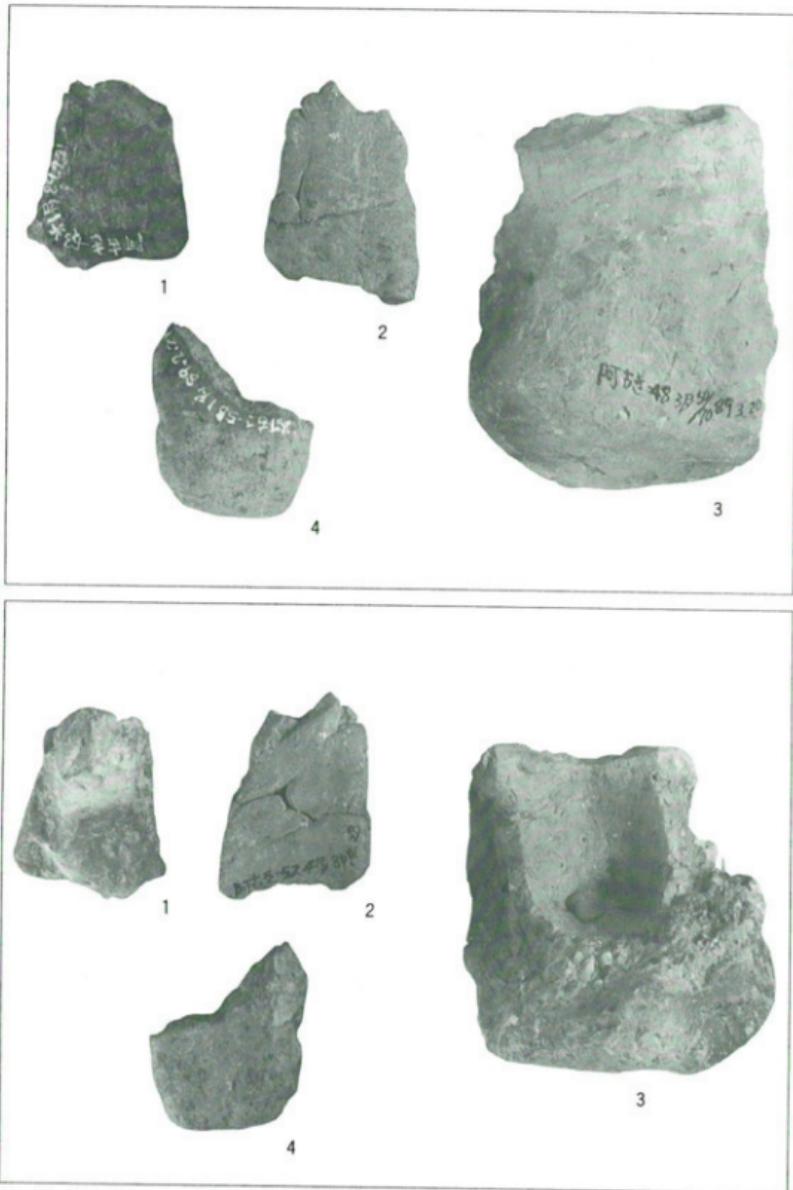
PL. 45 本土産陶器 上：唐津焼系（13～15、17～19）
下：内野山窯（20～23）



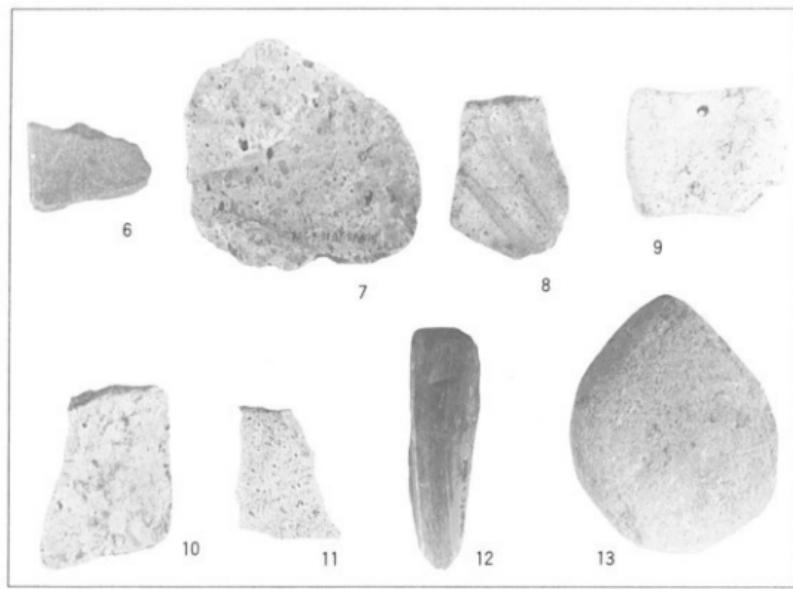
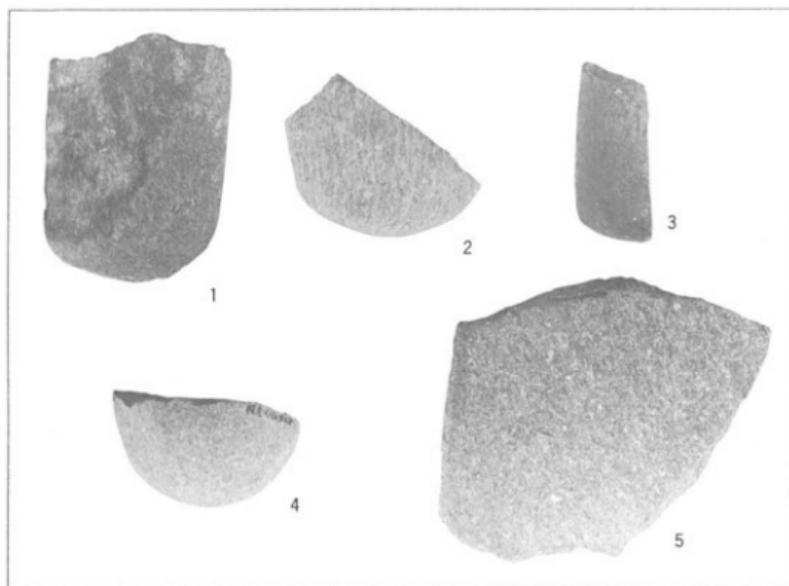
PL. 46 掣鉢 (I類1~3、II類4・5、III類6~8、IV類9・10、V類11)



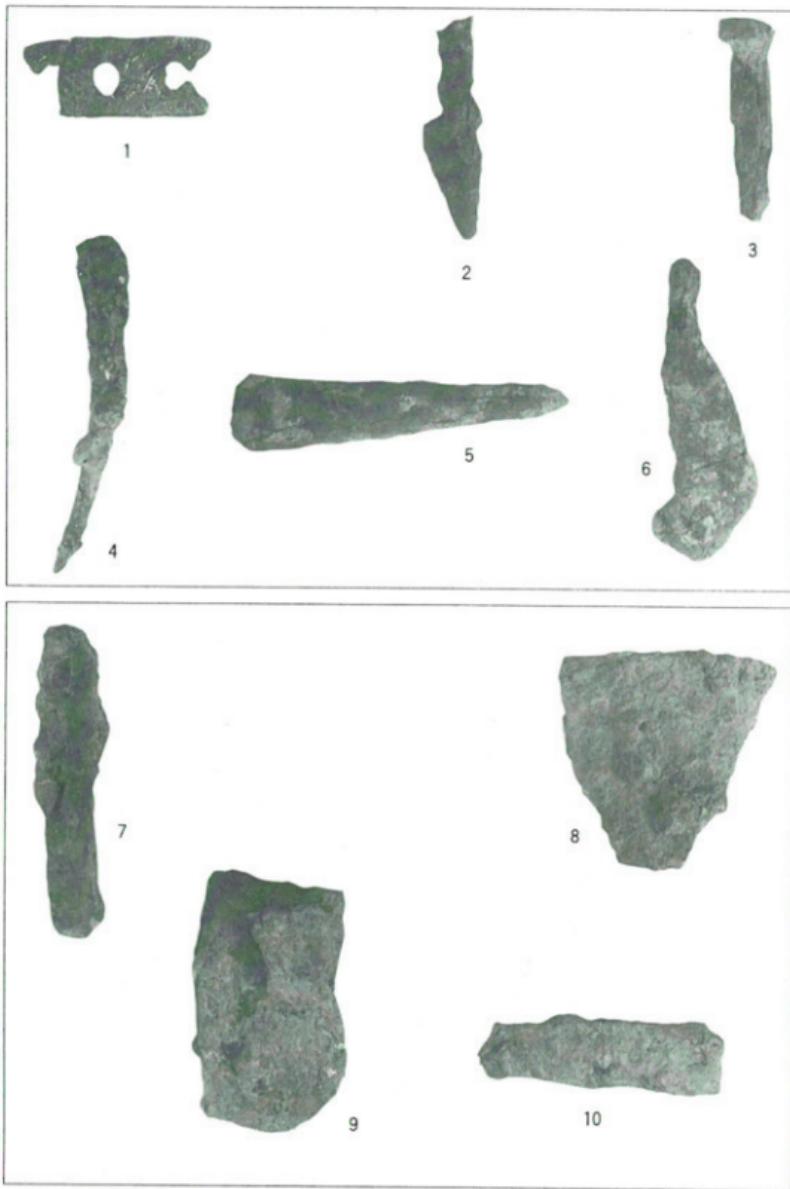
PL. 47 插鉢底部12-16



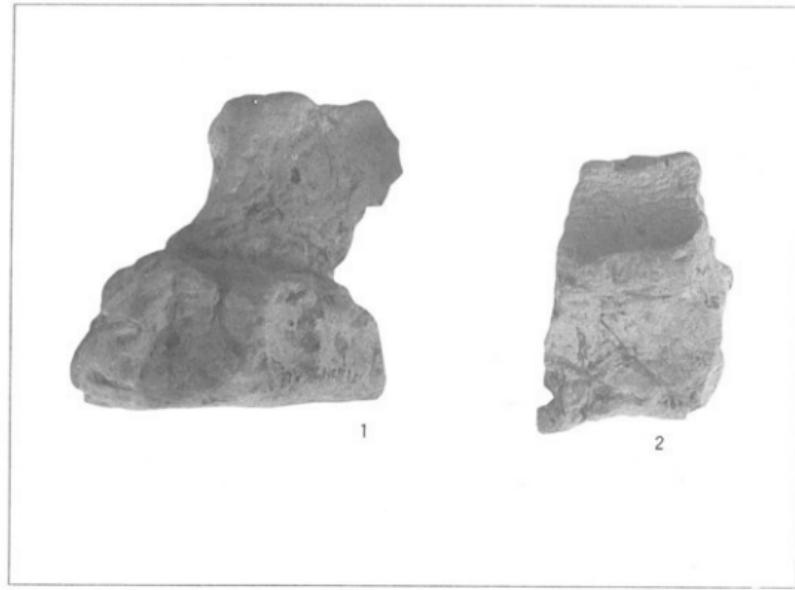
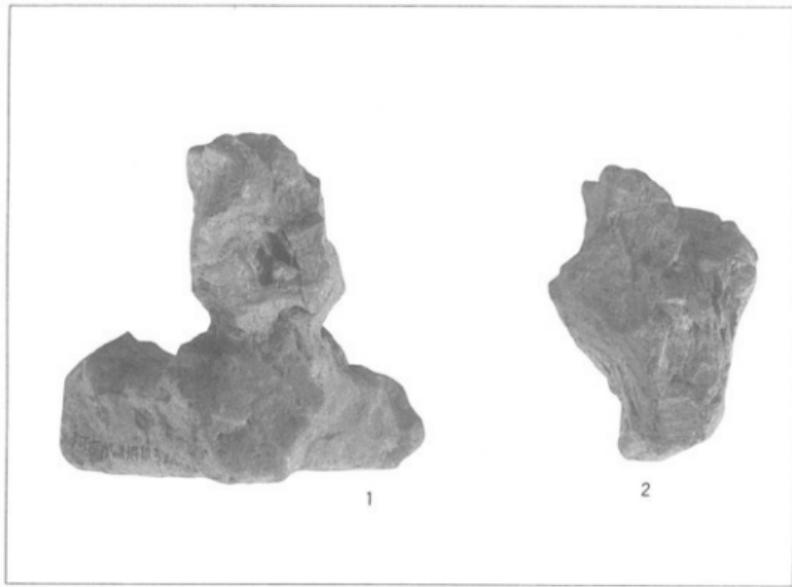
PL. 48 土製品 1 ~ 3、その他（製品かどうか判別できない資料）4



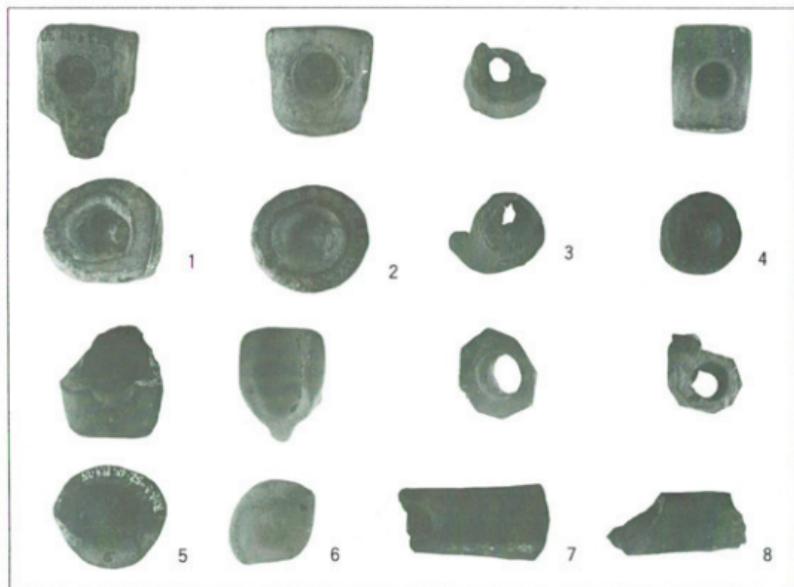
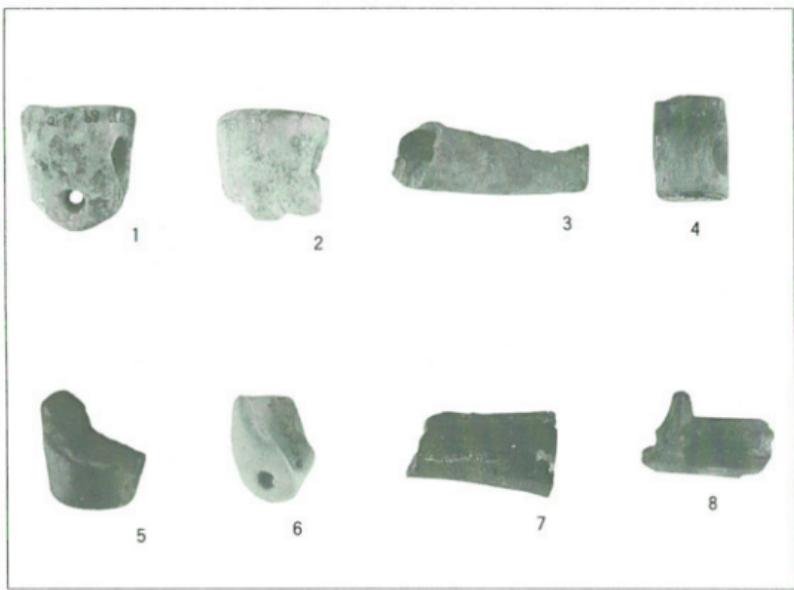
PL. 49 石器 石斧 1、磨石 2 ~ 4、石皿 5、砥石 6 ~ 11、用途不明 12 ~ 13



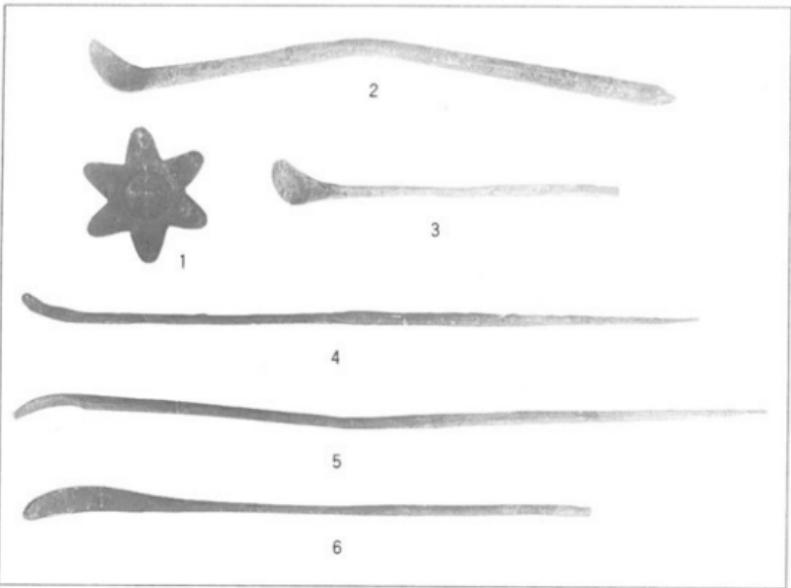
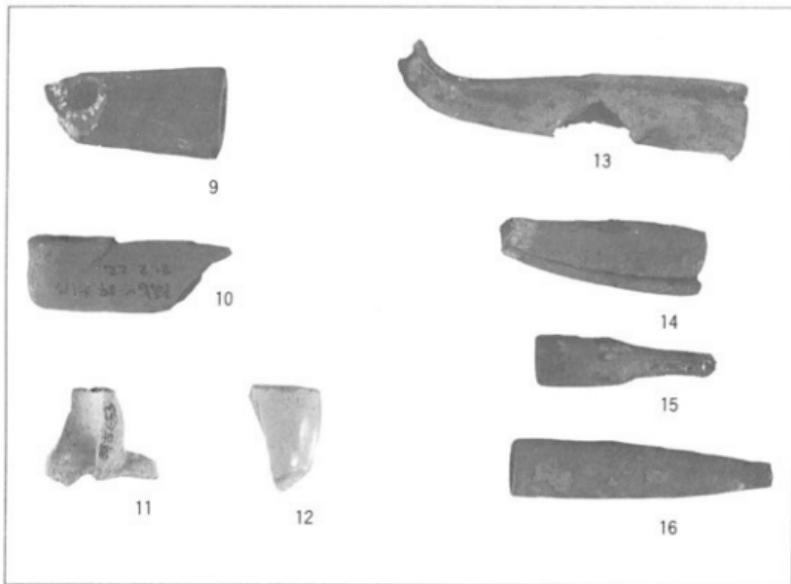
PL. 50 鉄製品 (鎧の飾り金具 1、鈸 2、角釘 3・4、用途不明 5~10)



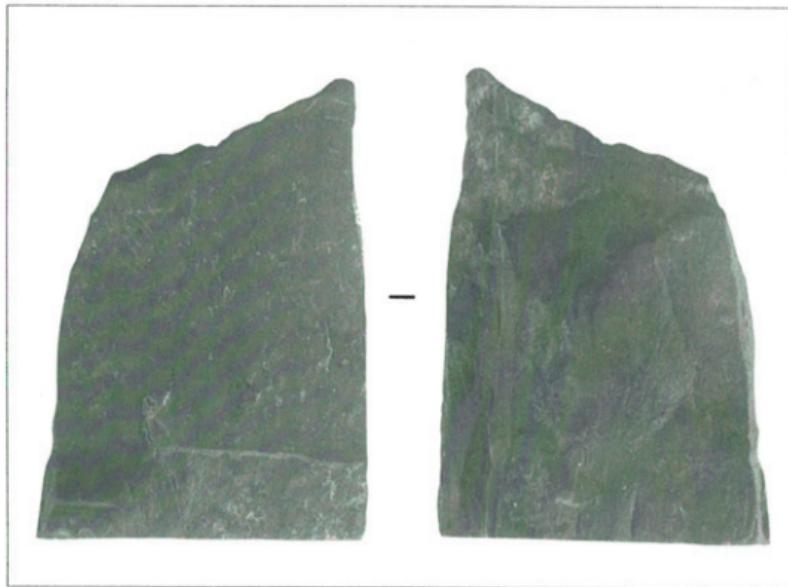
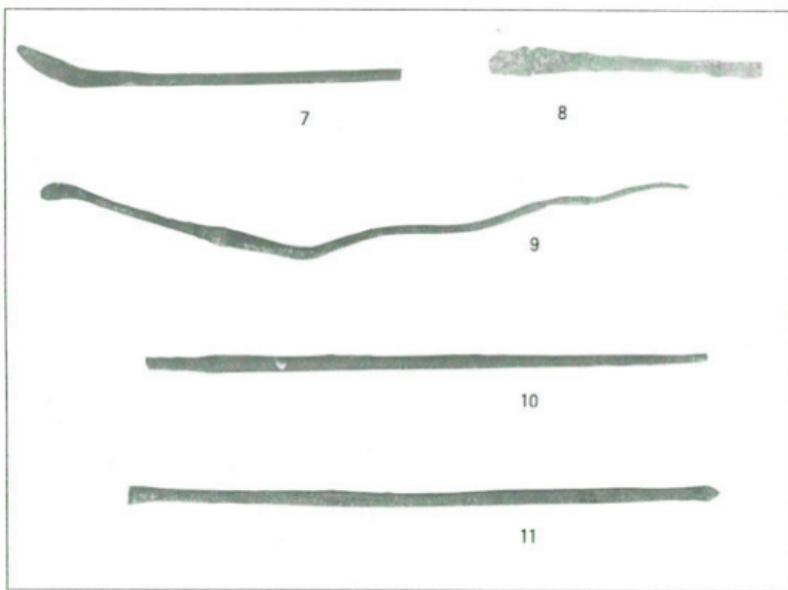
PL. 51 羽口 上：正面（1・2）
下：側面（1・2）



PL. 52 キセル 上：側面（石製1・2、土製3、陶質土製4～6、陶製7・8）
下：羅字接続面と火皿面（同 上）



PL. 53 キセル
カンザシ 上：(陶製 9・10、磁器製11・12、青銅製13～16)
下：(青銅製1～6)



PL. 54 カンザシ 上：青銅製(7～11)
硯 下：底部表面（左）、裏面（右）



1



2



3



4



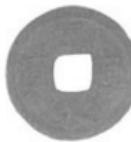
5



6



7



8



9



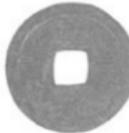
10



11



12



13



14



15



16



17



18

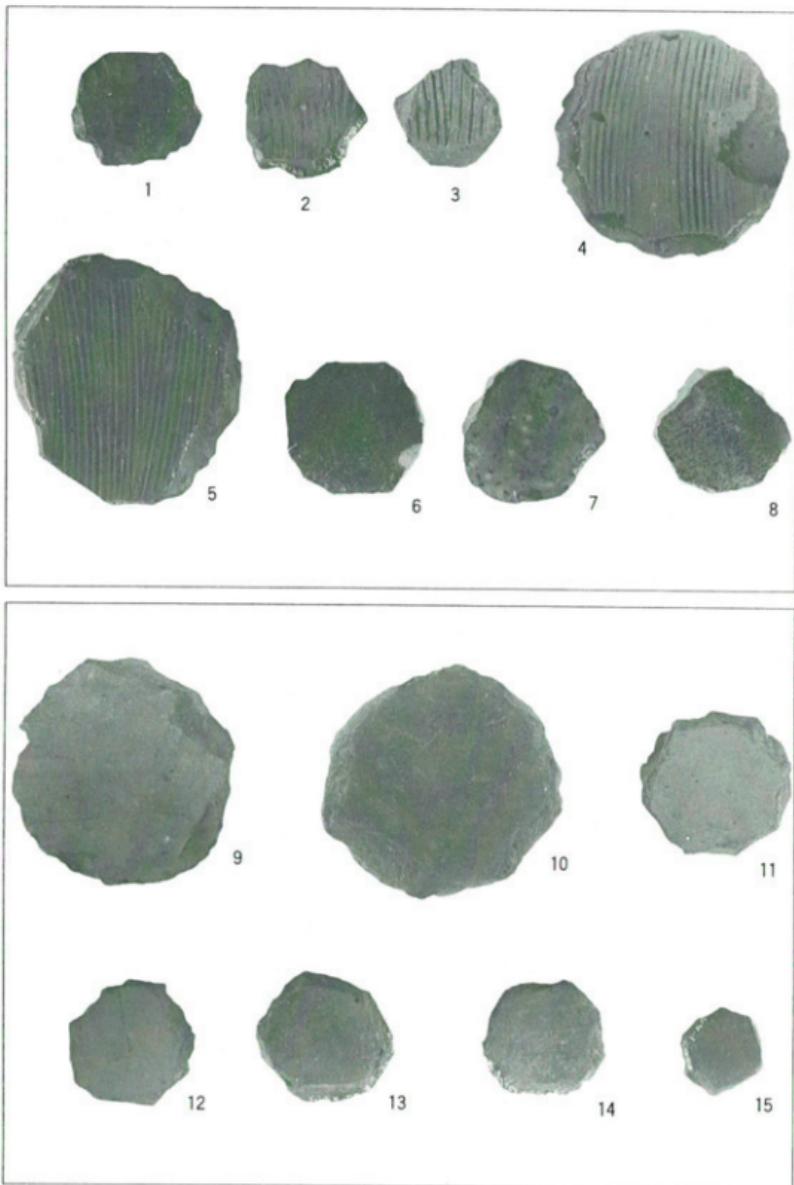


19



20

PL. 55 錢貨 1 ~ 20



PL. 56 円盤状製品（須恵器 1、播鉢 2～5、褐釉陶器 6～8、沖縄産無釉陶器 9～15）



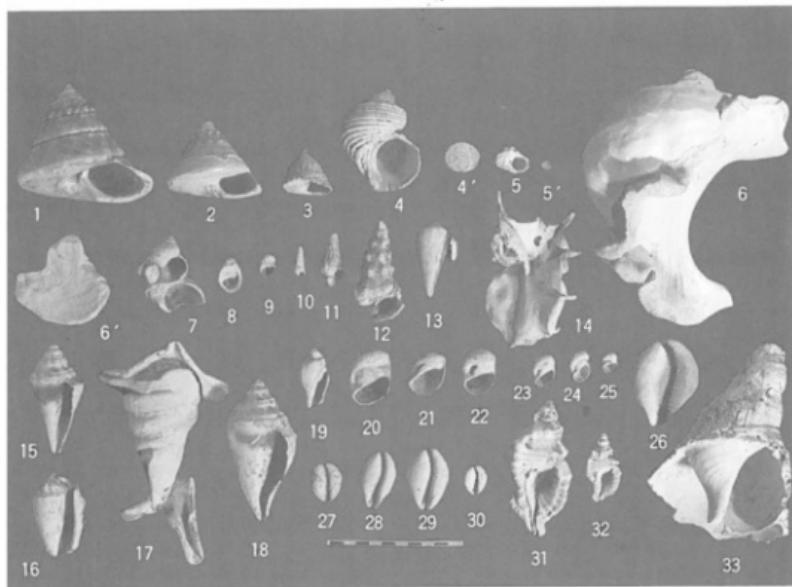
PL. 57 発掘調査終了後の状況（上：東側、下：西側）

上

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 1 サラサバティ | 2 ギンタカハマ | 3 ニシキウズガイ |
| 4 チョウセンサザエ | 4' チョウセンサザエのふた | 5 カンギク |
| 5' カンギクのふた | 6 ヤコウガイ | 6' ヤコウガイのふた |
| 7 リュウテン | 8 アマオブネガイ | 9 マルアオブネ |
| 10 イボウミニナ | 11 センニンガイ | 12 オニノツノガイ |
| 13 マガキガイ | 14 クモガイ | 15 クモガイ(幼) |
| 16 イボソデガイ | 17 スイジガイ | 18 ゴホウラ(幼) |
| 19 ネジマガキガイ | 20 トミガイ | 21 リスガイ |
| 22 シロヘソアキトミガイ | 23 ロウイロトミガイ | 24 キハダトミガイ |
| 25 ネコガイ | 26 ホシタカラガイ | 27 ハナマルユキガイ |
| 28 ホシキヌタガイ | 29 ホソヤクジマタカラガイ | 30 ハナビラタカラガイ |
| 31 フジッガイ | 32 ミツカドボラ | 33 ホラガイ |

下

- | | | |
|-----------------|---------------|---------------|
| 34 オキニシ | 35 ウズラガイ | 36 スクミウズラガイ |
| 37 ガンゼキボラ | 38 ツノレイシ | 39 シラクモガイ |
| 40 ツノテツレイシガイ | 41 アカイガレイシガイ | 42 シロイガレイシガイ |
| 43 テツボラ | 44 カスリレイシガイ | 45 ? |
| 46 コオリイレヨフバイ | 47 イボヨフバイ | 48 シマベッコウバイ |
| 49 イトマキボラ | 50 ヒメイトマキボラ | 51 チトセボラ |
| 53 ? | 54 オニコブシガイ | 55 コオニコブシガイ |
| 56 ヒメチョウセンフデガイ | 57 チョウセンフデガイ | 58 ニシキノキバフデ |
| 59 ? | 60 ジュドウマクラガイ | 61 クロザメモドキガイ |
| 62 アンポンクロゼメガイ | 63 カバミナシガイ | 64 サヤガタイモガイ |
| 65 ヤナギシボリガイ | 66 アカシマミナシガイ | 67 サラサミナシガイ |
| 68 クロミナシガイ | 69 ゴマフイモガイ | 70 マダライモガイ |
| 71 イボシマイモガイ | 72 ミカドミナシガイ | 73 タガヤサンミナシガイ |
| 74 ヤナギシボリガイ(幼) | 75 コモンイモガイ | 76 アジロイモガイ |
| 77 ニシキミナシガイ | 78 シロセイロンイモガイ | 79 クロフモドキガイ |
| 80 リュウキュウタケノコガイ | 81 タケノコガイ | 82 オキナワヤマタニシ |
| 83 ツヤキセルガイ | | |



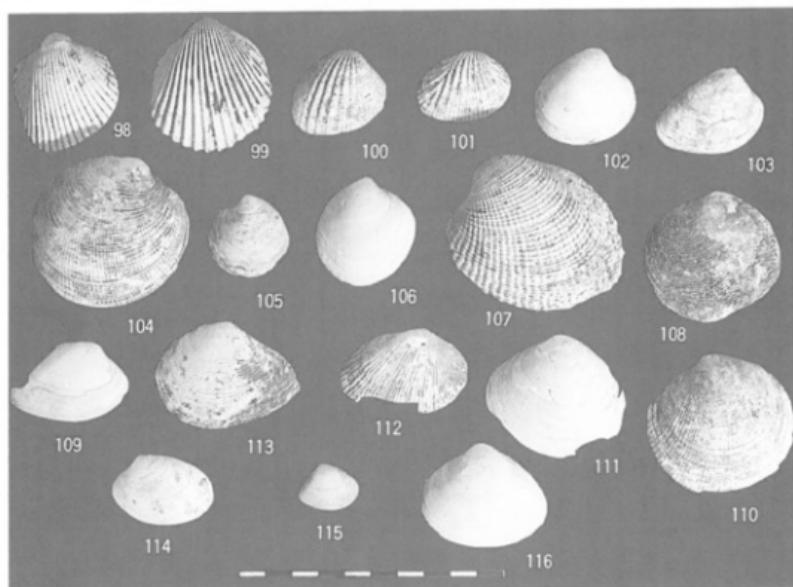
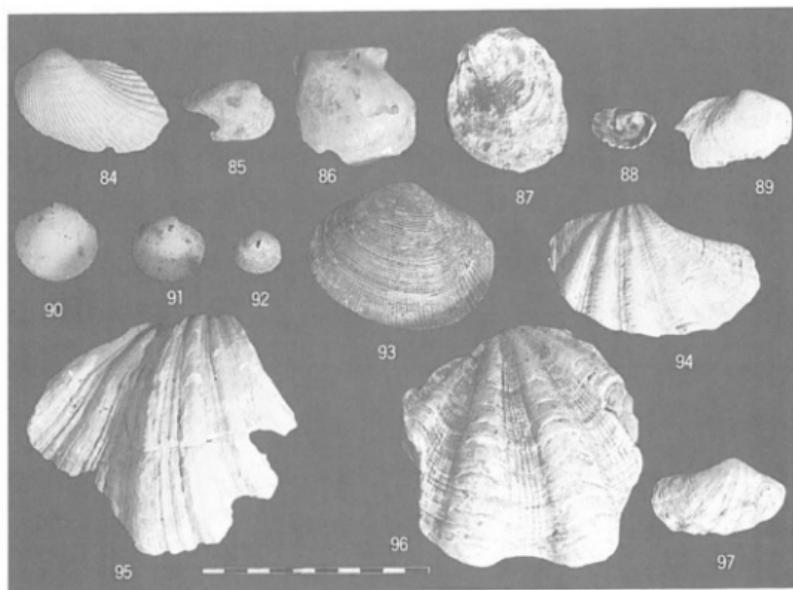
PL. 58 貝類

上

84	リュウキュウザルボウガイ	85	エガイ	86	クロチョウガイ
87	メンガイ	88	オハグロガキ	89	シナレシジミガイ
91	ツキガイ	91	ウラキツキガイ	92	ヒメニッコウガイ
93	カゴガイ	94	シラナミガイ	95	シャゴウガイ
96	ヒレシャコガイ	97	ヒメシャコガイ		

下

98	カワラガイ	99	ザルガイ	100	アラスジケマンガイ
101	ホソスジイナミガイ	102	ユウカゲハマグリ	103	スダレハマグリ
104	ヌノメガイ	105	オイノカガミガイ	106	オキシジミガイ
107	アラヌノメガイ	108	サメザラガイ	109	リュウキュウアサリ
110	サツマアサリ	111	ハマグリ	112	リュウキュウマスオガイ
113	リュウキュウシラトリガイ	114	ヒメニッコウガイ	115	イソハマグリ
116	リュウキュウバカガイ				



PL. 59 貝類

PL. 60

ネコ

1 ~ 3 右上腕骨 4 左尺骨 5 右胫骨

ジュゴン

6 椎体 7 肋骨

ウミガメ

8 ~ 12 背甲・縁甲

サメ

13 ~ 16 椎骨

コブダイ

17 下咽頭骨

ハリセンボン

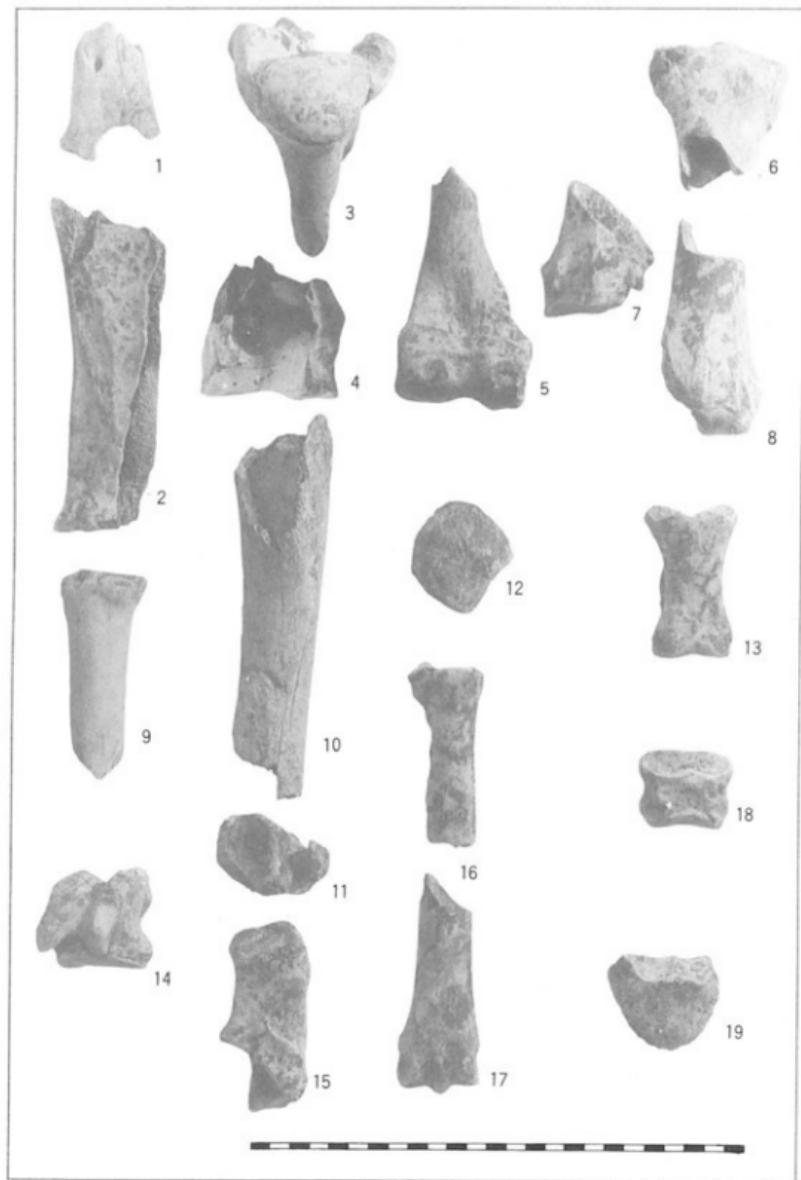
18 齒骨



PL. 60 ネコ、ジュゴン、ウミガメ、サメ、コブダイ、ハリセンボン

PL. 61 ウ マ

- | | | |
|-----------------|--------------|-------------------|
| 1 下頸骨片 R | 2 肩甲骨 R | 3 上腕橈骨 R 近骨端部(裏面) |
| 4 上腕 R 遠骨端部 | 5 上腕 L | 6 橈骨 R 近骨端部 |
| 7 桡 R 遠位部 | 8 橈骨 R 遠位部 | 9 R 近位部 |
| 10 胫骨 R | 11 胫骨 R 遠位骨端 | 12 膝蓋骨 L |
| 13 基節骨 | 14 距骨 L | 15 跖骨 R |
| 16 中足骨近位部 Pro R | 17 中足骨遠位部 | 18 中節骨 |
| 19 未節骨 | | |



PL. 61 ウマ

ブタ

1・2 上顎骨 R 3~6 下顎骨 R

ヤギ

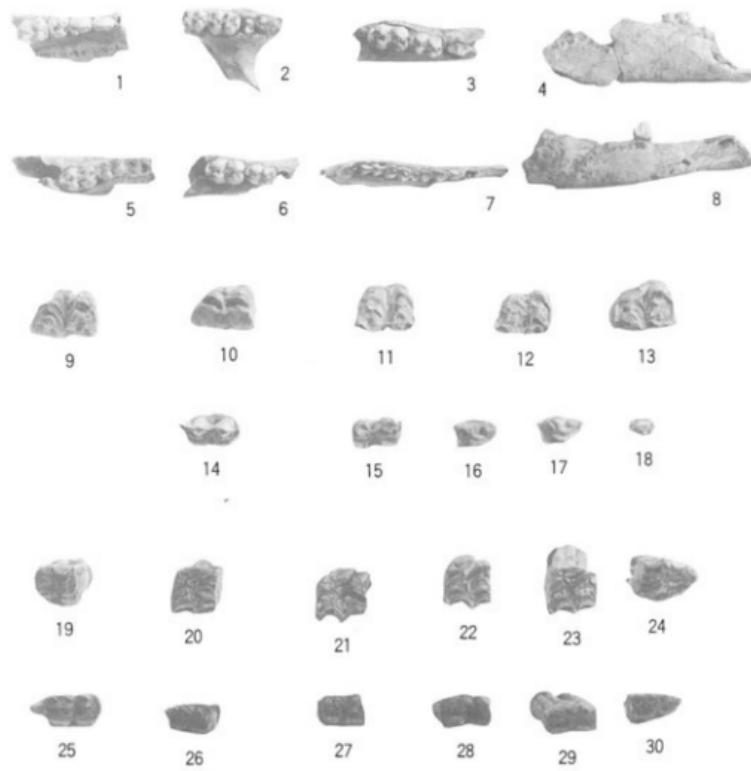
7 下顎骨 R

ウシ

8 下顎骨 R	9 上顎歯 L M ³	10 上顎歯 L M ²
11 上顎歯 L M ¹	12 上顎歯 L M ¹	13 上顎歯 L M ²
14 下顎歯 R M ₂	15 下顎歯 R M ₁	16 下顎歯 R P ₃
17 下顎歯 R P ₃	18 下顎歯 R P ₂	

ウマ

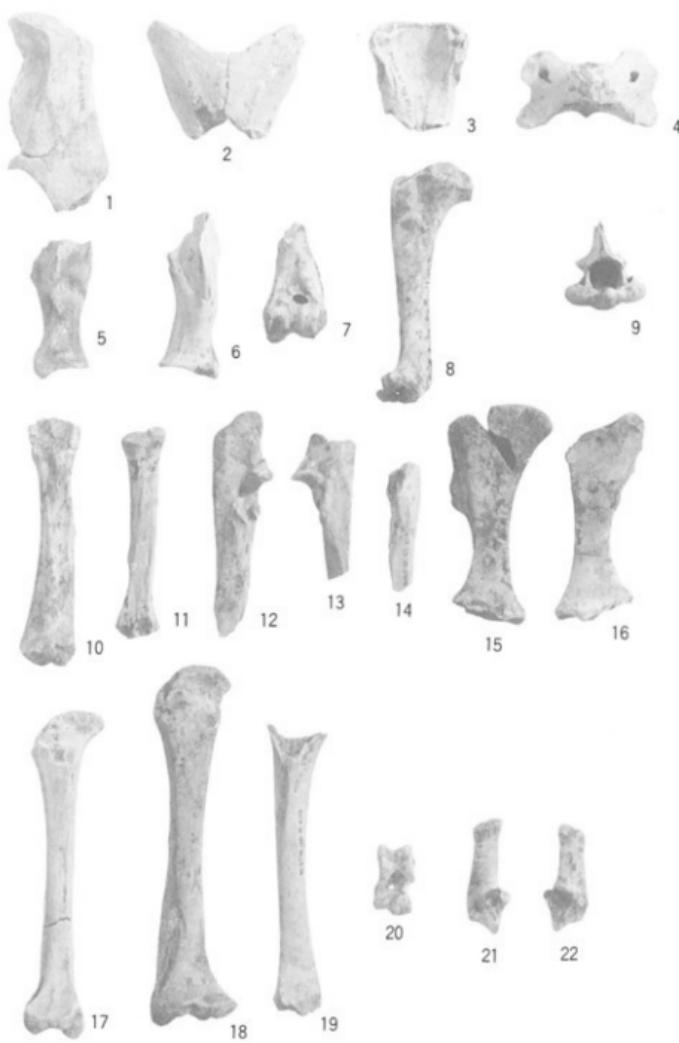
19 上顎歯 L M ³	20 上顎歯 L M ²	21 上顎歯 L M ¹
22 上顎歯 R P ⁴	23 上顎歯 R P ³	24 上顎歯 R P ²
25 下顎歯 R M ₃	26 下顎歯 R M ₂	27 下顎歯 R M ₁
28 下顎歯 R P ₄	29 下顎歯 R P ₃	30 下顎歯 R P ₂



PL. 62 ブタ、ヤギ、ウシ、ウマ顎骨と臼歯

PL. 63 ブタ

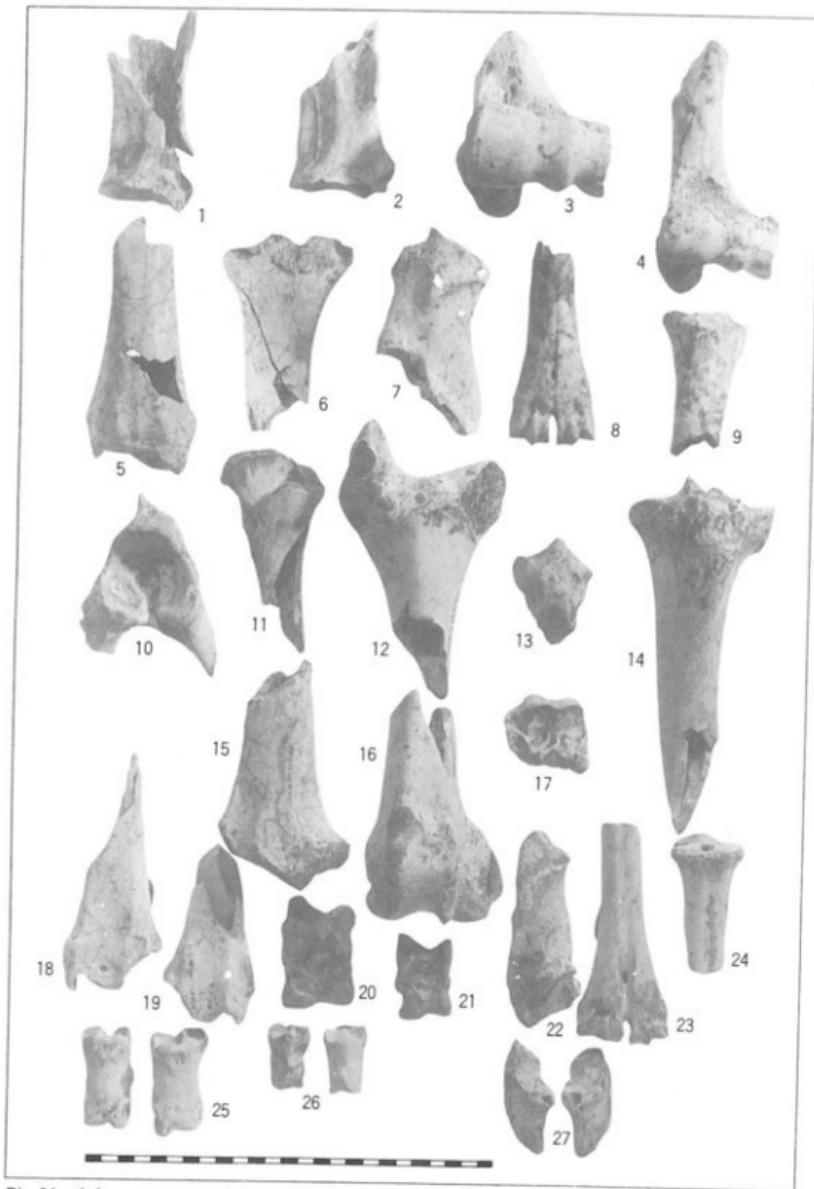
- | | | |
|----------------|-------------|---------|
| 1 頭頂 R | 2 側頭 R・L | 3 後頭鱗 |
| 4 環椎 | 5 肩甲骨 L | 6 肩甲骨 R |
| 7 上腕骨 L 遠位部 | 8 上腕骨 R 内側面 | 9 軸椎 |
| 10 桡骨 R 後面後面 | 11 桡骨 L 後面 | 12 尺骨 R |
| 13・14 尺骨 L | 15 寬骨 L | 16 寬骨 R |
| 17・18 大腿骨 L 後面 | 19 胫骨 L | 20 距骨 L |
| 21 跗骨 L | 22 跗骨 R | |



PL. 63 ブタ

PL. 64 ウ シ

- | | | |
|-------------|------------------|-----------------|
| 1 肩甲骨 R | 2 肩甲骨 R | 3 上腕骨 L |
| 4 上腕骨 L | 5 桡 R 遠位部 | 6 桡骨 L 近位部 |
| 7 尺骨 R | 8 中手骨 L | 9 中手骨 L 近位部 |
| 10 寽骨 L | 11 大腿骨 L | 12 大腿骨 R |
| 13 膝蓋骨 R | 14 胫骨 L 近位部 | 15 大腿骨 L 遠位部骨端欠 |
| 16 大腿骨遠位部 | 17 足根骨 L C + 4 | 18 胫骨 L 遠位部 |
| 19 胫骨 R 遠位部 | 20, 21 距骨 R (2点) | 22 跗骨 L |
| 23 中足骨 L | 24 中足骨 L | 25 基節骨 (2点) |
| 26 中節骨 (2点) | 27 末節骨 (2点) | |



PL. 64 ウシ

沖縄県文化財調査報告書 第96集

阿波根古島遺跡
(—那覇・糸満線道路改良工事に伴う
緊急発掘調査報告—)

発行年 1990年3月31日
編 集 沖縄県教育府文化課
発 行 沖縄県教育委員会
〒900 那覇市泉崎1丁目2-2
TEL 0988-66-2731
印 刷 株式会社 近代美術
〒901-03 糸満市西崎町4-9-3
TEL (0989)2-4113(代表)
